京都府遺跡調査概報

第 24 冊

1. 国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡
   (1) 有明古墳群・横穴群
   (2) 桃山古墳群
   (3) 宮の森古墳群
   (4) ゲンギョウの山古墳群
2. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡
   (1) 平山東城館跡
   (2) 平山城館跡
   (3) 野崎古墳群
3. 京奈バイパス関係遺跡
   (1) 久保田遺跡
   (2) 南稲八妻城跡
   (3) 西平川原館跡
4. 西小田古墳群

1987

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが，京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施するようになって，はやくも６年が過ぎようとしています。私達は，常により精密な調査を心がけ，より正確な記録を作成し，これらを後世に伝えるため，日夜努力しているつもりであります。そして，その手段の一つとして，「京都府遺跡調査概報」を年度毎に刊行しているほかに，「京都府埋蔵文化財情報」や，「京都府遺跡調査報告書」を刊行しています。

昭和61年度においては，当調査研究センターでは41か所の発掘調査を実施しましたが，本書では，そのうち11か所の遺跡の調査概要を報告します。そして，他の遺跡の調査については，さらに数冊の冊子にまとめています。本書を含めて，これらが関係各位の参考に供され，斯学向上の一助となれば幸いです。

本書に掲載した各調査の実施にあたりましては，発掘調査を委託された事業関係者をはじめ，京都府教育委員会・各市町教育委員会等の関係諸機関の御協力を受けただけでなく，酷暑・極寒の中でも多くの方がたが熱心に作業等に従事していただきましたことを明記して，これらの方がたに厚くお礼申し上げます。

昭 和 62 年 3 月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

理 事 長　福　山　敏　男

凡　　例

1.　本冊に収めた概要は

　1.　国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡　　2.　近畿自動車道舞鶴線関係遺跡

　3.　京奈バイパス関係遺跡　　4.　西小田古墳群

を対象としたものである。

2.　各遺跡の所在地，調査期間，経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺　跡　名	所　在　地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 国営農地開発事業（丹後東部地区）関係遺跡			農林水産省近畿農政局	増田　孝彦 三好　博喜
(1)有明古墳群・横穴群	中郡大宮町三坂小字有明	昭和60. 11. 18 ～ 昭和61.　3. 23		
(2)桃山古墳群	中郡峰山町内記小字桃山	昭和60. 11. 27 ～ 昭和61.　3. 24		
(3)宮の森古墳群	竹野郡弥栄町鳥取小字宮の森	昭和61.　4. 24 ～ 昭和61.　7. 19		
(4)ゲンギョウの山古墳群	竹野郡弥栄町鳥取小字涼堂	昭和61.　6.　4 ～ 昭和61. 10.　2		
2. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡			日本道路公団大阪建設局	小山　雅人 藤原　敏晃
(1)平山東城館跡	綾部市七百石町	昭和61.　9. 17 ～ 昭和62.　3. 20		
(2)平山城館跡	綾部市七百石町	昭和61. 11.　1 ～ 昭和62.　3. 20		
(3)野崎遺跡	綾部市高槻町野崎41～45	昭和61. 11. 28 ～ 昭和62.　3. 24		
3. 京奈バイパス関係遺跡			日本道路公団大阪建設局	黒坪　一樹
(1)久保田遺跡	綴喜郡田辺町大住字久保田	昭和61. 11.　7 ～ 昭和62.　2.　6		
(2)南稲八妻城跡	相楽郡精華町南稲八妻	昭和61.　8.　2 ～ 昭和62.　3. 19		
(3)西平川原館跡	田辺町三山木字西平川原	昭和61.　7.　7 ～ 昭和61.　7. 12		
4. 西小田古墳群	竹野郡弥栄町国久 竹野郡丹後町西小田	昭和61. 11. 20 ～ 昭和62.　1. 22	京都府土木建築部	三好　博喜

3.　本冊の編集には，調査課企画資料担当が当った。

目　　次

1.　国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要…… 1

2.　近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和61年度発掘調査概要……81

3.　京奈バイパス関係遺跡昭和61年度発掘調査概要…… 107

4.　西小田古墳群発掘調査概要…… 117

挿図・付表目次

国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡…… 1
付 表 1　国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表…… 1

(1)　有明古墳群・横穴群

第 1 図　調査地周辺遺跡分布図…… 3
第 2 図　2・3号墳地形図…… 4
第 3 図　3号墳主体部実測図…… 5
第 4 図　3号墳出土遺物実測図(1)…… 6
第 5 図　3号墳出土遺物実測図(2)…… 6
第 6 図　有明横穴群地形図…… 8
第 7 図　1号横穴実測図…… 9
第 8 図　1号横穴人骨出土状況……10
第 9 図　2号横穴実測図……11
第 10 図　3号横穴実測図・遺物出土状況実測図……12
第 11 図　出土遺物実測図(1)……13
第 12 図　出土遺物実測図(2)……14
第 13 図　出土遺物実測図(3)……14
第 14 図　出土遺物実測図(4)……15
第 15 図　出土遺物実測図(5)……16
第 16 図　出土遺物実測図(6)……17
第 17 図　出土遺物実測図(7)……18
第 18 図　出土遺物実測図(8)……18
第 19 図　出土遺物実測図(9)……19

(2)　桃 山 古 墳 群

第 20 図　周辺主要遺跡地図……22
第 21 図　桃山古墳群構成図……23
第 22 図　桃山古墳群地形図……24
第 23 図　1号墳第1主体部実測図……25
第 24 図　1号墳第2主体部実測図……26

第 25 図　2 号墳主体部実測図……27
第 26 図　1 号墳第 1 主体部内出土遺物(須恵器)……27
第 27 図　直　刀……28
第 28 図　1 号墳第 1 主体部内出土遺物(鉄製品)……29
第 29 図　1 号墳第 1 主体部内出土遺物(玉類)……30
第 30 図　1 号墳第 2 主体部内出土遺物……31
第 31 図　1 号墳墳丘出土遺物(須恵器・鉄製品)……31
第 32 図　2 号墳盛土内出土遺物……33
第 33 図　2 号墳出土遺物……33

(3)　宮の森古墳群

第 34 図　周辺古墳分布図……36
第 35 図　宮の森丘陵古墳分布図……37
第 36 図　1・2 号墳地形図……38
第 37 図　1 号墳第 1 主体部実測図……39
第 38 図　1 号墳第 2 主体部実測図……40
第 39 図　2 号墳第 1 主体部実測図……41
第 40 図　2 号墳第 2 主体部実測図……42
第 41 図　3・4 号墳地形図……43
第 42 図　3 号墳第 1 主体部実測図……44
第 43 図　3 号墳第 2 主体部実測図……45
第 44 図　3 号墳第 3 主体部実測図……46
第 45 図　3 号墳第 4 主体部実測図……47
第 46 図　4 号墳主体部実測図……48
第 47 図　出土遺物実測図(1)……49
第 48 図　出土遺物実測図(2)……50
第 49 図　出土遺物実測図(3)……50

(4)　ゲンギョウの山古墳群

第 50 図　ゲンギョウの山古墳群地形図……53
第 51 図　ゲンギョウの山古墳群構成図……55
第 52 図　1 号墳横穴式石室平面図……56
第 53 図　1 号墳横穴式石室実測図……57
第 54 図　1 号墳縦断面図……58

第 55 図　2号墳主体部実測図……58
第 56 図　3号墳第1主体部実測図……59
第 57 図　3号墳第2主体部実測図……59
第 58 図　4号墳主体部実測図……59
第 59 図　5号墳主体部実測図……60
第 60 図　6号墳第1主体部および第2主体部実測図……61
第 61 図　7号墳第1主体部および第2主体部実測図……62
第 62 図　8号墳第1主体部実測図……63
第 63 図　8号墳第2主体部実測図……64
第 64 図　火葬墓群実測図……64
第 65 図　1号土器棺墓実測図……65
第 66 図　2号土器棺墓実測図……66
第 67 図　出土遺物(土師器その1)……67
第 68 図　出土遺物(土師器その2)……68
第 69 図　1号土器棺墓使用土師器……69
第 70 図　2号土器棺墓主容器……70
第 71 図　直　刀……70
第 72 図　出土遺物(鉄製品)……71
第 73 図　出土遺物(玉類・金環)……71
第 74 図　出土遺物(砥石)……72
付 表 2　有明1号横穴出土の熟年女性脳頭蓋計測値，示数……77
付 表 3　有明1号横穴出土の下顎骨計測値，示数……77
付 表 4　有明1号横穴出土の上肢骨計測値，示数……78
付 表 5　有明1号横穴出土の下肢骨計測値，示数……78

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡

第 75 図　周辺遺跡分布図……83

(1)　平山東城館跡

第 76 図　平山城館跡・平山東城館跡周辺地形測量図……87
第 77 図　平山東城館跡地形測量平面実測図……89
第 78 図　土坑SK09実測図 ……90
第 79 図　平山東城館跡出土遺物実測図……91

(2) 平山城館跡

第 80 図　平山城館跡地形測量図……95
第 81 図　平山城館跡検出遺構平面図……97
第 82 図　平山城館跡出土遺物実測図……98

(3) 野崎古墳群

第 83 図　野崎古墳群実測図…… 101

京奈バイパス関係遺跡

(1) 久保田遺跡

第 84 図　調査地周辺遺跡分布図…… 108
第 85 図　土層断面柱状図…… 109
第 86 図　遺構検出状況…… 110

(2) 南稲八妻城跡

第 87 図　調査地位置図…… 111
第 88 図　A地点トレンチ配置図…… 112
第 89 図　B地点トレンチ配置図…… 113

(3) 西平川原館跡

第 90 図　調査地位置図…… 114
第 91 図　踏査中風景…… 115
第 92 図　羽釜片出土状況…… 115

西小田古墳群

第 93 図　周辺遺跡分布図…… 118
第 94 図　西小田古墳群構成図…… 119
第 95 図　4・5号墳地形図…… 120
第 96 図　遺構配置図…… 121
第 97 図　4号墳主体部実測図…… 122
第 98 図　5号墳主体部および周辺遺構実測図…… 123
第 99 図　土器棺墓実測図…… 124
第 100 図　4・5号墳主体部内出土遺物…… 126
第 101 図　土器溜りSX01出土遺物 …… 127
第 102 図　土器棺使用土器…… 128

第103図　土坑SK02出土遺物 …… 129
第104図　土器溜りSX03出土遺物 …… 129
第105図　調査地内出土遺物(その1)…… 130
第106図　調査地内出土遺物(その2)…… 130

図 版 目 次

国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡

(1) 有明古墳群・横穴群

図版第1　(1)有明古墳群・横穴群調査前全景(西から)
　　(2)3号墳主体部全景(北西から)
図版第2　(1)横穴群全景(南東から)
　　(2)1号横穴人骨出土状況(南東から)
図版第3　(1)1号横穴部分(南から)　(2)2号横穴部分(南東から)
図版第4　(1)3号横穴全景(南東から)　(2)横穴斜面全景(南から)
図版第5　出土遺物(1)
図版第6　出土遺物(2)
図版第7　出土遺物(3)

(2) 桃 山 古 墳 群

図版第8　(1)調査地全景(東から)　(2)1号墳第1主体部(南から)
図版第9　(1)1号墳第2主体部(南から)　(2)2号墳主体部(南から)
図版第10　(1)調査地遠景(西から)　(2)1号墳出土遺物(轡・玉類)
図版第11　1号墳第1主体部内出土遺物(須恵器)
図版第12　1号墳第1主体部内出土遺物(鉄製品)
図版第13　(1)1号墳第2主体部出土遺物
　　(2)1号墳第2主体部および2号墳主体部内出土遺物
図版第14　1号墳墳丘出土遺物

(3) 宮の森古墳群

図版第15　(1)1・2号墳調査前全景(西から)
　　(2)1・2号墳主体部全景(南西から)
図版第16　(1)2号墳第1主体部全景(北西から)
　　(2)2号墳第2主体部全景(北西から)
図版第17　(1)3・4号墳調査前全景(西から)
　　(2)3・4号墳主体部全景(北西から)
図版第18　(1)3号墳第1・2主体部全景(南西から)
　　(2)3号墳第3・4主体部全景(南西から)

図版第19　(1) 4 号墳主体部遺物出土状況(南から)
(2) 4 号墳主体部全景(南から)
図版第20　出土遺物(1)
図版第21　出土遺物(2)
図版第22　出土遺物(3)
(4)　ゲンギョウの山古墳群
図版第23　調査地全景
図版第24　(1)調査地全景(南から)　(2) 1 号墳石室全景(南から)
図版第25　(1)火葬墓群(北から)　(2) 2 号墳主体部(東から)
(3) 3 号墳第 1 主体部(西から)　(4) 3 号墳第 2 主体部(南から)
図版第26　(1) 4 号墳主体部(南から)　(2) 5 号墳主体部(東から)
(3) 6 号墳第 1 ・ 2 主体部(東から)　(4) 7 号墳第 1 ・ 2 主体部(南から)
図版第27　(1) 8 号墳第 1 主体部(東から)　(2) 8 号墳第 2 主体部(東から)
(3) 1 号土器棺墓　(4) 2 号土器棺墓
図版第28　出土遺物(土師器)
図版第29　(1)主体部内出土遺物(鉄製品)　(2)主体部内出土遺物(鉄製品ほか)
図版第30　(1)出土遺物(玉類・砥石)　(2) 1 号土器棺
(3) 2 号土器棺

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡

(1)　平山東城館跡
図版第31　(1)調査前風景(南から)　(2)調査地全景(西から)
図版第32　(1)出土遺物(土師器)　(2)出土遺物(陶器・磁器等)
(2)　平山城館跡
図版第33　調査地全景(航空写真)
図版第34　(1)出土遺物(磁器類)　(2)出土遺物(陶器・石製品等)
(3)　野崎古墳群
図版第35　野崎古墳群航空写真(上が北)
図版第36　(1)野崎 1 ～ 4 号墳(右が北)　(2)野崎 5 ～ 6 号墳(右が北)

京奈バイパス関係遺跡

(1)　久保田遺跡
図版第37　(1)加工木材検出状況(Bトレンチ)

(2)軒平瓦検出状況(Cトレンチ)
図版第38　(1)久保田遺跡全景(東から)
(2)溝状遺構検出状況(B地点，西から)

(2)南稲八妻城跡

図版第39　(1)Aトレンチ掘削風景(A地点，南から)
(2)Bトレンチ掘削風景(A地点，東から)

西小田古墳群

図版第40　(1)調査地遠景(南東から)　(2)調査地遠景(東から)
図版第41　(1)調査前全景(西から)　(2)調査後全景(西から)
図版第42　(1)4号墳主体部検出状況(西から)
(2)4号墳主体部(西から)
図版第43　(1)5号墳主体部および周辺遺構検出状況(北から)
(2)5号墳主体部および周辺遺構(北から)
図版第44　(1)鏡出土状況(西から)　(2)土器棺墓(東から)
図版第45　(1)2号墳全景(東から)　(2)土器溜りSX01付近(東から)
図版第46　出土遺物(その1)
図版第47　出土遺物(その2)

1. 国営農地開発事業（丹後東部地区）関係遺跡 昭和60・61年度発掘調査概要

はじめに

本概要報告は，国営農地開発事業「丹後東部地区」の開発実施に伴い，昭和60・61年度中に発掘調査した京都府中郡大宮町有明古墳群・横穴群，中郡峰山町桃山古墳群，竹野郡弥栄町宮の森古墳群およびゲンギョウの山古墳群の発掘調査概要である。

調査は，近畿農政局丹後開拓事務所の依頼を受けて，（財）京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した。現地調査には，当調査研究センター調査課主任調査員長谷川達・小山雅人，同調査員増田孝彦・三好博喜があたった。

本概要報告の執筆は，「有明古墳群・横穴群」および「宮の森古墳群」を主として増田が担当し，「桃山古墳群」および「ゲンギョウの山古墳群」を三好が担当した。なお，有明古墳群・横穴群，桃山古墳群，宮の森古墳群の「位置と環境」については，鵜島三寿（立命館大学院生）が担当した。また，有明横穴群出土の人骨を岡山理科大学教授池田次郎氏に鑑定・分析いただき，結果を本概要報告に収録した。

調査期間中，地元有志の方々や学生諸氏には，作業員および補助員として作業に従事していただいた。(注1) また，調査にあたっては，大宮町教育委員会・峰山町教育委員会・弥栄町教育委員会をはじめとする関係諸機関の御協力を得ることができ，現地においても多くの方々の御協力と御指導とを賜わった。改めて感謝の意を表わしたい。

（増田孝彦）

表1　国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査期間	担当者
1	有明古墳群 横穴群	京都府中郡大宮町 三坂小字有明	昭和60年11月18日 ～昭和61年3月23日	主任調査員　長谷川　達 調査員　増田　孝彦
2	桃山古墳群	京都府中郡峰山町 内記小字高山	昭和60年11月27日 ～昭和61年3月24日	主任調査員　長谷川　達 調査員　三好　博喜
3	宮の森古墳群	京都府竹野郡弥栄町 鳥取小字宮の森	昭和61年4月24日 ～昭和61年7月19日	主任調査員　長谷川　達 小山　雅人 調査員　増田　孝彦
4	ゲンギョウの山 古墳群	京都府竹野郡弥栄町 鳥取小字涼堂	昭和61年4月14日 ～昭和61年10月2日	主任調査員　長谷川　達 小山　雅人 調査員　三好　博喜

(1)　有明古墳群・横穴群

1　位置と環境

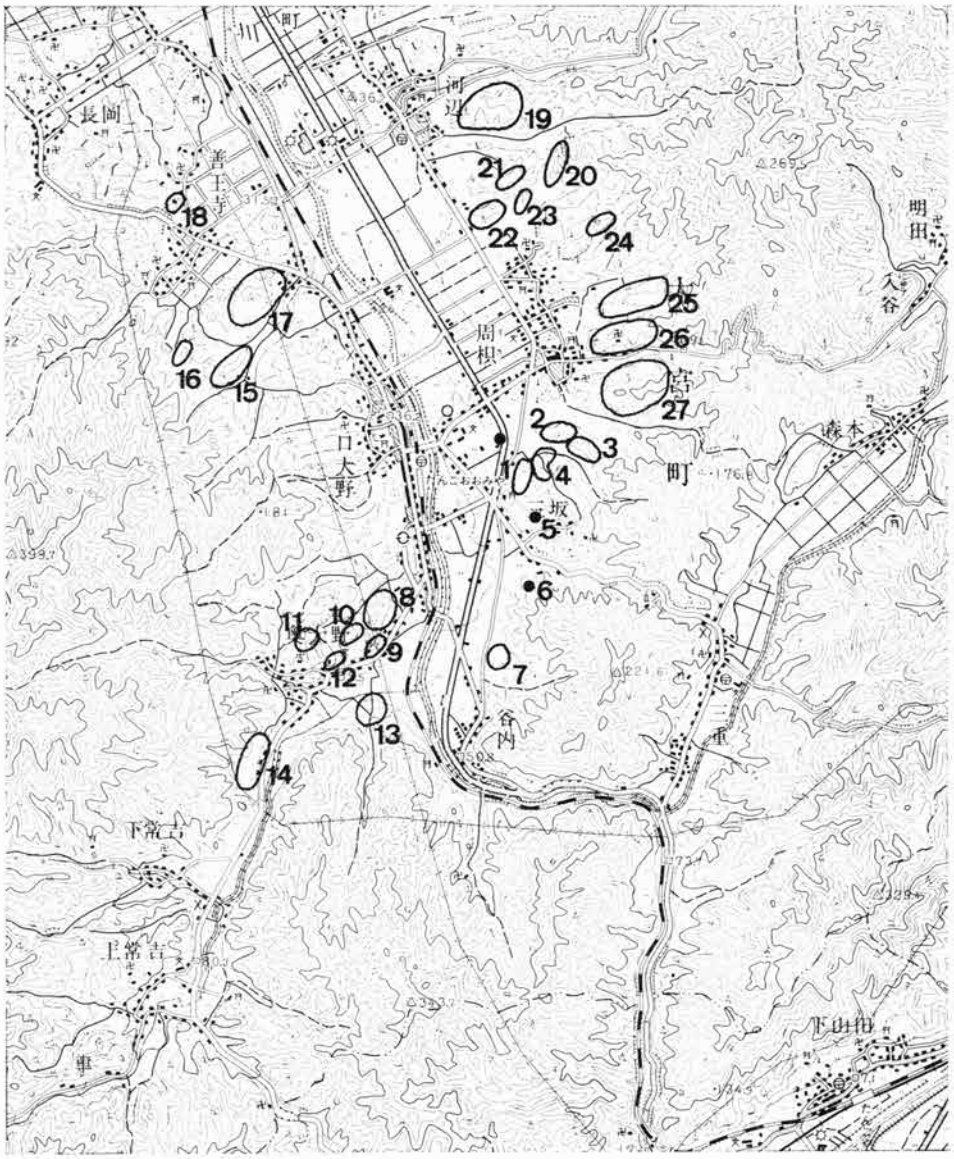
有明古墳群・横穴群は，京都府中郡大宮町字三坂小字有明に所在する。大宮町は京都府の北端，日本海に向ってのびる丹後半島の基部中央にあたる。高尾山(620m)と鼓ケ岳(569m)に源を発する竹野川は，大宮町から峰山町・弥栄町・丹後町を通り沖積地を形成しながら日本海に流れ込んでいる。この竹野川右岸の南北にのびる低丘陵の稜部に有明古墳群が，東側斜面裾部に横穴群がそれぞれ立地している。

有明古墳群・横穴群周辺の歴史的環境を概観すると，竹野川と常吉川の合流点から南西500mの奥大野地区の扇状地に裏陰遺跡(注2)がある。ここでは，縄文時代から平安時代までの集落跡が見つかり，弥生時代後期の竪穴式住居跡は直径6～8mを測る大きなものも発見されており，断続的に6,000年ほど続いた集落跡として貴重な資料を提供している。対岸には丹後地方最大級の古墳時代後期の巨石を用いた横穴式石室をもつ新戸古墳(注3)がある。この古墳は大きさだけでなく，石棚を設けていることでも注目される。竹野川を少し遡ると，国道312号線から東方に見える丘陵先端部に大谷古墳がある。この古墳は，昭和61年度に大宮町教育委員会により調査が行われた。組合式石棺を内部主体とする直径20mの円墳で，鏡・玉・剣等が出土し，築造時期は古墳時代中期前葉(5世紀前半)と推定されている。

竹野川左岸には，口大野の丘陵上には，弥生時代末期～奈良・平安時代にかけての集落跡と思われる管外遺跡，同丘陵上には，横穴式石室を内部主体とする円墳と前方後円墳と見られる十二社山古墳群，十二社奥古墳がある。また，旧178号線が府道二箇・善王寺線とに分岐する付近の西側丘陵上には小池古墳群(注4)がある。この古墳群は，5世紀の木棺直葬墓群，同時期の土坑墓群，弥生時代の方形台状墓という性格の異なる遺構群が確認された。

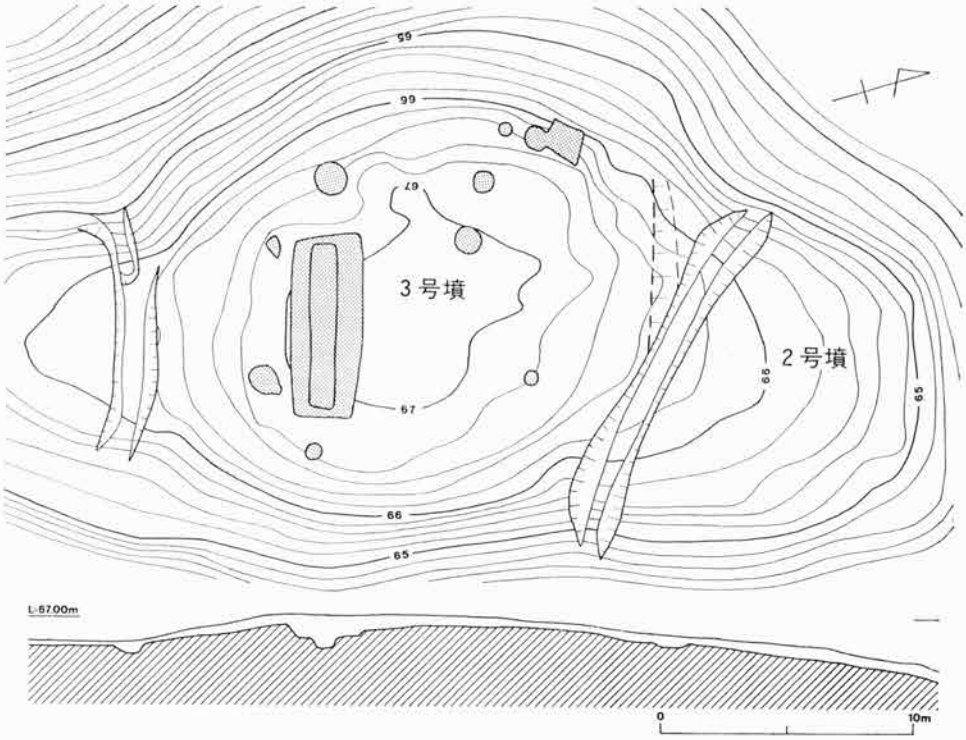
竹野川右岸の周枳には，大宮町の町名の由来となった大宮売神社がある。ここは弥生時代後期の遺跡であるとともに，その境内からは多量の石製模造品の出土が知られ，祭祀遺跡として注目されている。本古墳・横穴群周辺では，北東方200mの丘陵上に，弥生時代後期の台状墓や古墳時代後期の古墳を検出した帯城古墳群(注5)，その南側の斜面裾部には，7世紀中葉を中心とする大田鼻横穴群が存在する。この横穴群は，昭和60・61年度に京都府教育委員会により調査が行われ，計30基の横穴が確認され，多量の人骨，須恵器・土師器が出土した。中でも28号横穴からは，墨書のある土師器が3点出土している。また，有明横穴群の東側に広がる狭小な谷部には，弥生時代後期の土器が散布する黒山遺跡も存在する。このように，有明横穴群・古墳群の周辺は，遺跡の密集地となっている。

(鵜島三寿)



第1図　調査地周辺遺跡分布図　(1/50,000)

1. 有明古墳群・横穴群　2. 帯城墳墓群　3. 大田鼻横穴群　4. 里山遺跡
5. 家の谷古墳　6. 大谷古墳　7. 谷内遺跡　8. 宮の森古墳群
9. 若宮古墳群　10. 黒田古墳群　11. 平太郎古墳群　12. 新戸古墳群
13. 裏陰遺跡　14. 正垣遺跡　15. 清漬古墳群　16. 池田古墳群
17. 小池古墳群　18. 本レ古墳群　19. 松田古墳群　20. 小中田古墳群
21. 近江谷古墳群　22. 今市古墳群　23. 堀古墳群　24. 河辺内古墳群
25. 外尾古墳群　26. 幾坂古墳群　27. 左坂古墳群

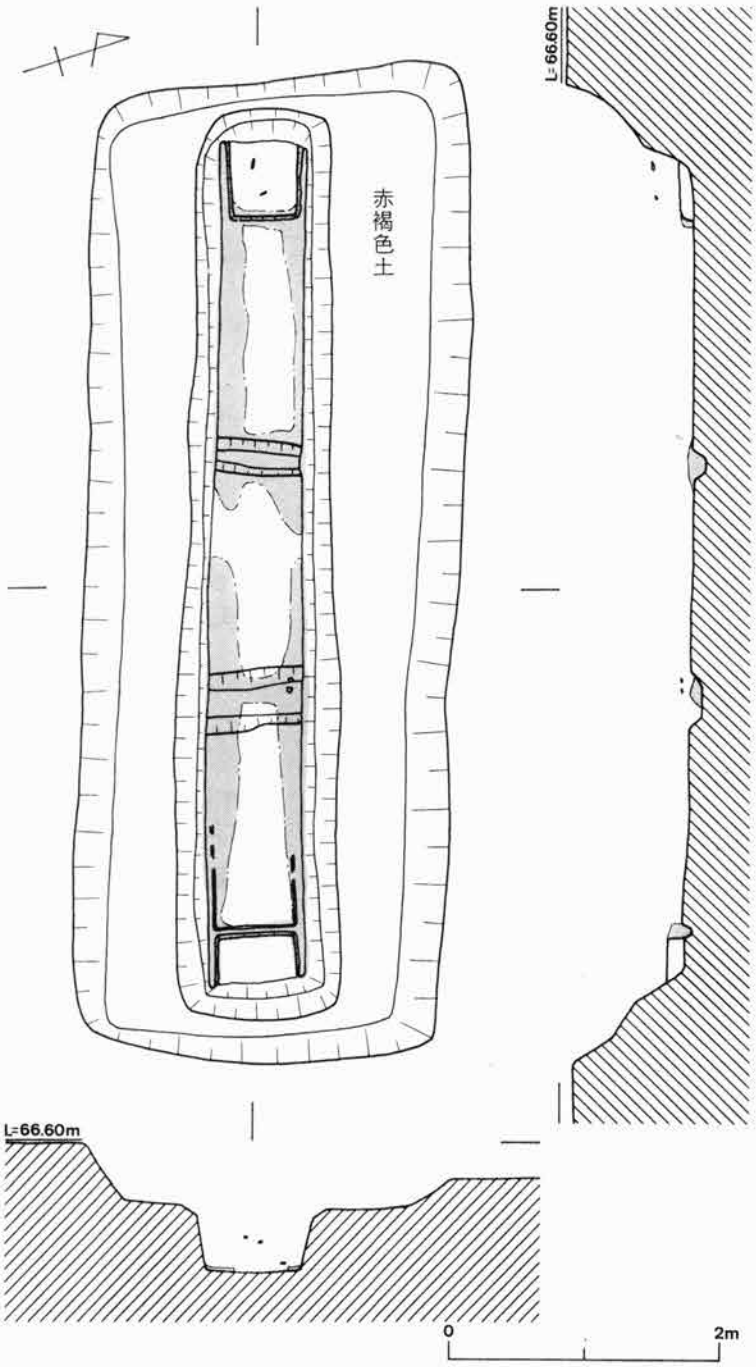


第2図　2・3号墳地形図

2　調査経過

有明古墳群は，竹野川に並行して南北にのびる低丘陵に立地するが，分布調査等では，尾根先端に位置する1基の古墳の存在しか知られていなかった。しかし三坂団地造成に伴い団地内を縦貫する道路が建設されることになり，尾根掘削部分を京都府教育委員会が試掘調査を行い墓坑の存在を確認したあと，当調査研究センターが引き継ぎ調査を行ったものである。周辺の地形測量を行った結果，試掘調査で確認されたもの以外に，尾根先端側にもう1基古墳が存在することが明らかとなった。そのため，分布調査で確認されているものを1号墳とし，順に南に向い2号墳，試掘調査で確認されたものを3号墳とした。

有明横穴群については，有明古墳群調査中に検土杖により新たにその存在を確認したもので，道路建設の際，切土した法面に横穴が一部かかるため，有明古墳群の調査と並行して行った。横穴は3号墳の東側，丘陵裾部分で検出したもので，北端より1号・2号・3号横穴と命名した。調査地南端では，3号横穴に隣接する4号横穴の墓前域の一部も検出した。また，横穴周辺の地形測量を行った際に，検土杖による探査を行った所，明らかに土質の差が認められた場所が4号横穴よりも南側に4か所存在することが判明した。また，これらとは別に，現在沈砂池が造られている部分には，過去に農道が造られた際に一部削



第3図　3号墳主体部実測図

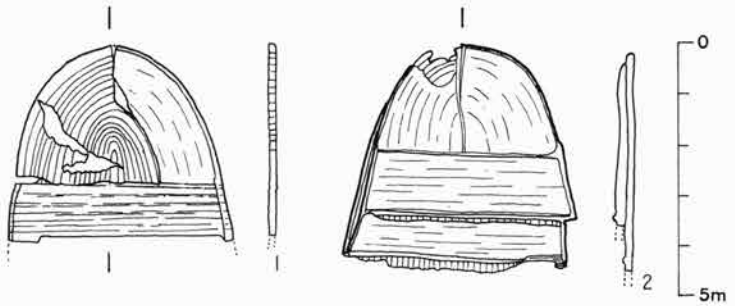
られた横穴（有明5号横穴）も存在する。

本概報では，横穴各部の名称について，埋葬の中心となる空間を玄室，玄室前面の空間を墓前域，その境を閉塞部と呼称することとした。

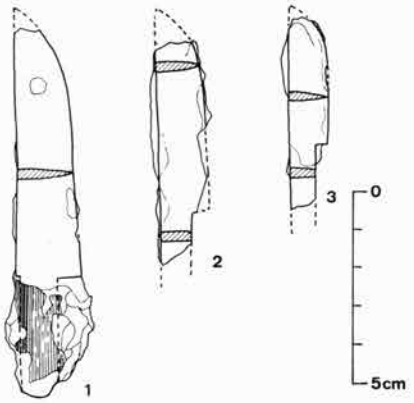
調査は，古墳・横穴の埋葬施設を検出するとともに，それぞれの築造方法を解明し，また周辺遺構の有無を確認することを主な目的とし，墳丘・横穴およびその周辺も含めて掘削を行った。なお有明1・3号横穴からは人骨が出土し，この分析・鑑定については，岡山理科大学の池田次郎教授に依頼し，玉稿をいただいた。付載として掲載させていただいた。

現地調査は，昭和60年11月18日より団地造成用の測量杭を基準として，20cm 間隔の等

高線で50分の1の地形測量図の作成を行った。掘削作業は11月20日より開始し，すべての墳丘表土を除去したのち，埋葬施設の検出作業に入った。その結果，2号墳では埋葬施設は確認されなかったが，3号墳では，木棺直葬の主体部1か所と炭の混った土坑10か所を検出した。



第4図　3号墳出土遺物実測図 (1)



第5図　3号墳出土遺物実測図 (2)

横穴群は12月24日に，地形測量(100分の1，等高線50cm)を行った後，掘削に着手したが，堆積土が多い所では1m以上に及ぶことや，横穴前面が畑地として盛土が施されていることから，表土掘削には重機を導入した。重機掘削で地山確認を行った後，人力による精査を行った。その結果，3基の横穴と，丘陵裾部において1基の竪穴式住居跡を検出した。作図・写真撮影作業はその都度行ったが，冬期の調査であることから，積雪に見舞われ昭和61年1月21日から2月16日まで現地調査を中断し，3月23日にはすべての現地調査を終了した。

3　調査概要

①有明2号墳(第2図)　墳丘は，尾根稜部を削り出し方形台を成形するが，墳丘はその大半が流失し，東・西斜面における堆積が著しい。2号墳は，3号墳と尾根に直列して並ばず，3号墳に比してやや東側に傾く。そのため，尾根高位側に設けられた溝も尾根に直交していない。3号墳より後に築造されたようで，溝が3号墳の墳丘の一部を削平している。墳丘規模は，古墳の約1/3が造成予定地外となるため，推定規模となるが，東・西基底部は傾斜変換点により，南側は溝で求めると，長辺約13m×短辺12m，溝幅約1.5m，の方形墳となり，西側からの高さは1.2mを測る。埋葬施設は検出されなかったが，墳丘盛土中より金環1が出土している。

②有明3号墳(第2図)　墳丘は，2号墳同様尾根稜部を削り出し方形台を意識し成形を行ったようであるが，尾根両側面がやや膨らんでいる。墳丘基底部は，西側は削り出し面

が平坦化しているため明瞭に区別されるが，東側では65.80m等高線付近においてわずかではあるが，傾斜変換点が認められた。墳丘南側には，尾根に直交する幅1.8m・深さ0.3mの溝をもち，西側斜面ではさらにもう一段掘り下げられていた。北側にも溝が設けられていたと思われる痕跡が一部認められたが，2号墳の溝により墳丘が削られており，その規模は不明である。これらのことから推定される規模は，長辺約20m×短辺17m，西側からの高さ1.3mの古墳が復元される。

埋葬施設(第3図)は，墳頂部中央よりやや南側で1か所確認した。主軸を尾根に直交する二段掘形を有する木棺墓である。墓坑は地山削平面より穿ち，隅丸長方形を呈する。掘形の規模は，長さ7.2m×幅2.8mを測る長大なもので，木棺部分の掘形も長さ6.4m×幅1.1m・深さ0.5mとかなり大きな規模を誇る。木棺は，組合式木棺が使用されていたと推定され，両木口部分を灰褐色粘土を混ぜた土により固定していた。また，木口板・側板等は淡赤褐色に土色が変化しており，その痕跡を見ることができた。東側小口付近では，側板用の浅い溝状の掘り込みも一部検出した。木棺の規模は，長さ5.2m×幅0.7m，検出面からの深さ0.94mで，棺幅は東側がやや広くなっている。底面は，ほぼ水平面を保つが，木棺部分を3分するかのように，等間隔で2か所の凹んだ部分が認められた。この部分は，幅約30cm・深さ9cmで木が存在していたようで，赤褐色に土色が変化していた。

出土した遺物は，棺内中央部よりやや東側で竪櫛3(第4図)，西側木口部分で刀子3(第5図1・2・3)が出土した。

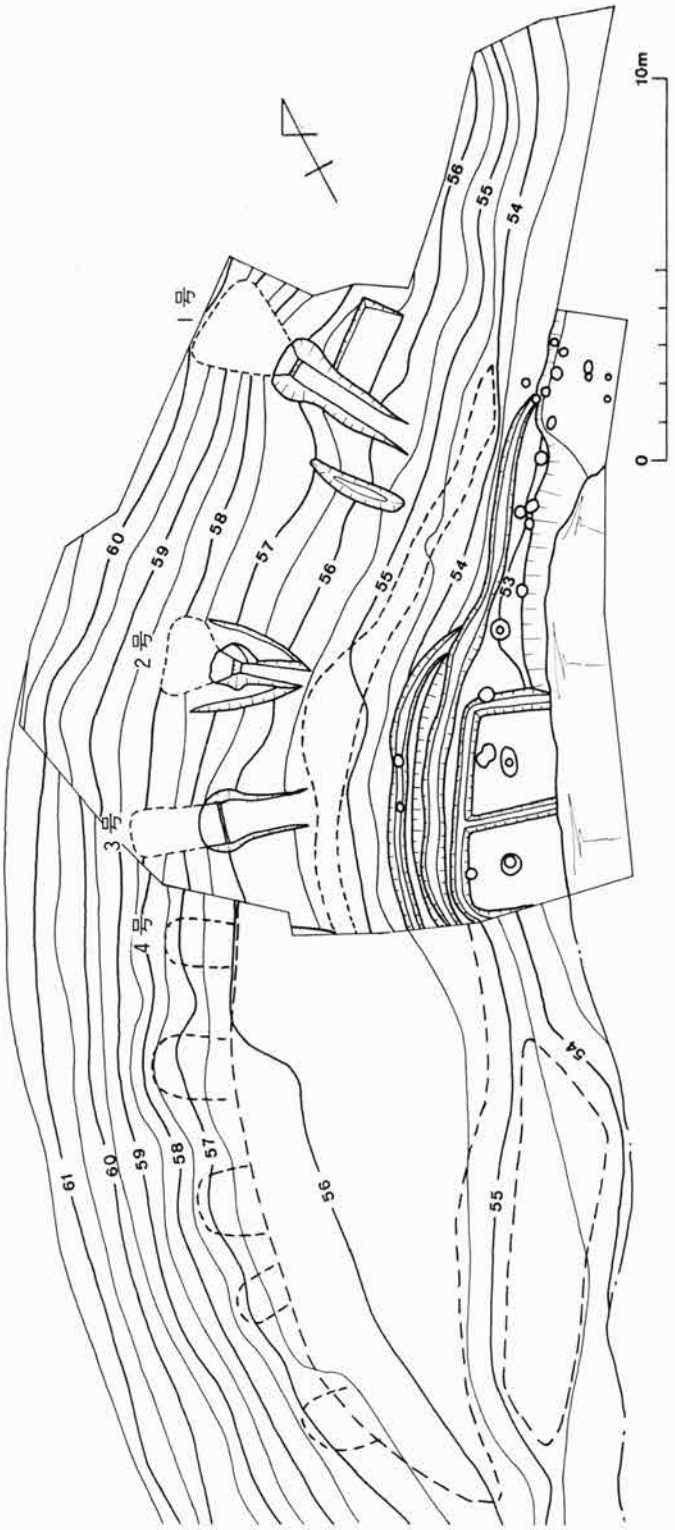
その他，墳頂部には直径5～8cm程度の花崗岩の礫を詰め，底面に炭の広がる浅い土坑1か所，炭混りの埋土をもつ直径40cm程度の浅い土坑3か所，直径0.6～1.3m・深さ1～1.8mを測る炭混りの埋土をもつ土坑6か所を検出した。いずれも円形を呈する土坑であるが，遺物は出土せず，時期・性格等は不明である。

③有明1号横穴(第6・7図)　調査地北端に位置し，玄室床面の標高は56.0mと他の2基の横穴よりも高所にある。玄室の主軸はN-32°-Wである。玄室平面形は，奥壁隅が丸い台形状を呈する。玄室長2.7m・奥壁幅2.65mを測る。玄室幅は奥壁部がもっとも広く，幅0.7mの閉塞部まで徐々に狭くなっていく。天井部は，奥壁から南東側へ2.1m残存しているが，崩落が著しく残存する部分での高さ1.14mを測る。閉塞部は8cmの段差が設けられ，玄室に向って右側の上方には，長さ60cmで幅14cmの溝状の切り込みがみられる。この部分の下方には，0.2m×0.1mの浅い凹みが両側壁にとりつく。墓前域は，閉塞部下段より幅0.6mでほぼ直線的にのびる狭長な墓道状を呈し，4mを確認した。この墓道中央付近の北西側には，長さ2m×幅1.2mの平坦なテラス状の削り出し部分が設けられている。

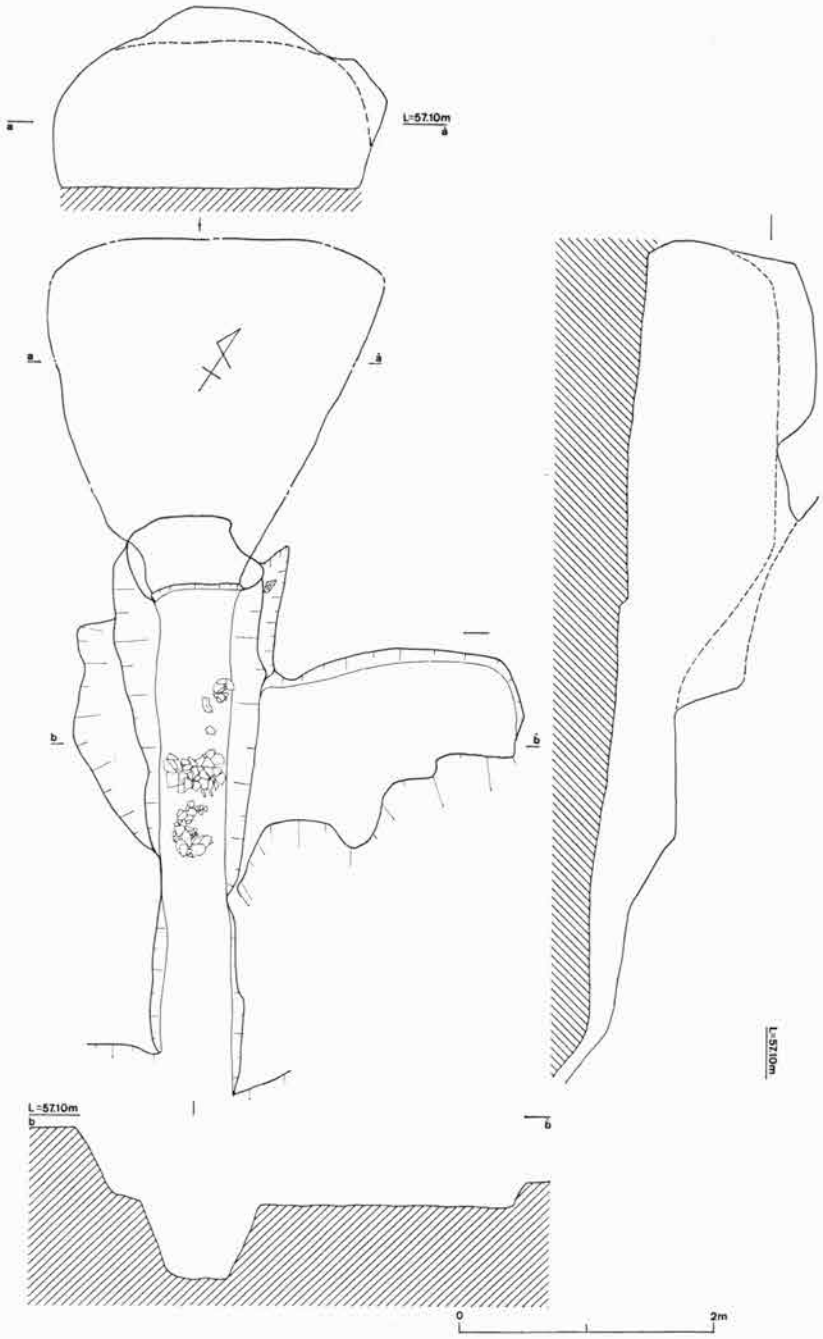
遺物は，横穴埋土が炭混りの黒褐色土であり，玄室奥壁付近・墓道全体にまで及び，

各々床面より15cm上にまで天井部崩落土とともにその堆積が認められた。この黒褐色土の埋土からは，カマド片・フイゴ片・鉄滓・少量の須恵器・土師器片（第11図10・13）が出土した。玄室床面中央より奥壁寄りでは，寄せ集められたような状態で多量の人骨が出土した（第8図）。人骨とともに出土した須恵器類（第11図3～9）や土師器類は，破損しているものや，人骨の下から出るなど分散しており，完形品はわずか4点のみであった。墓道からの遺物出土場所は限られており，平坦なテラス状の削り出し部分付近に認められており，大半が土師器甕であり，須恵器は杯身片が3点出土した。

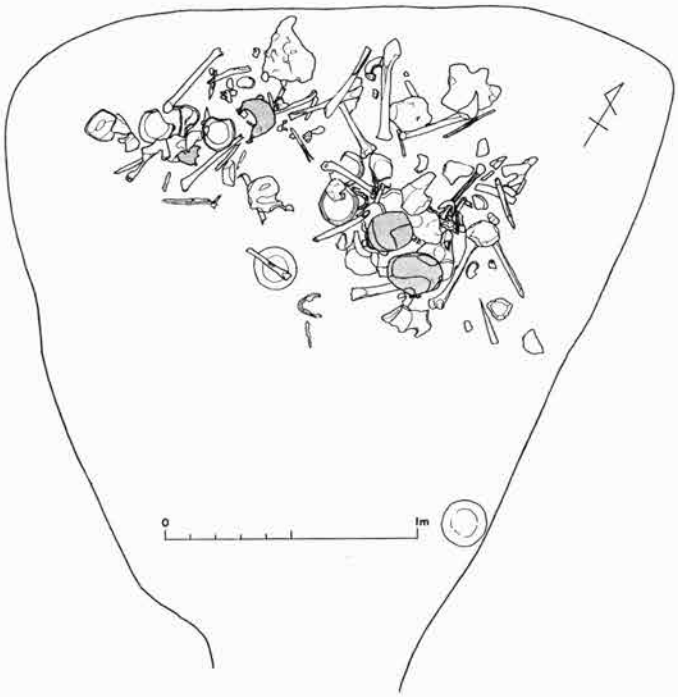
④有明2号横穴（第9図）1号横穴の



第6図　有明横穴群地形図



第7図　1 号 横 穴 実 測 図



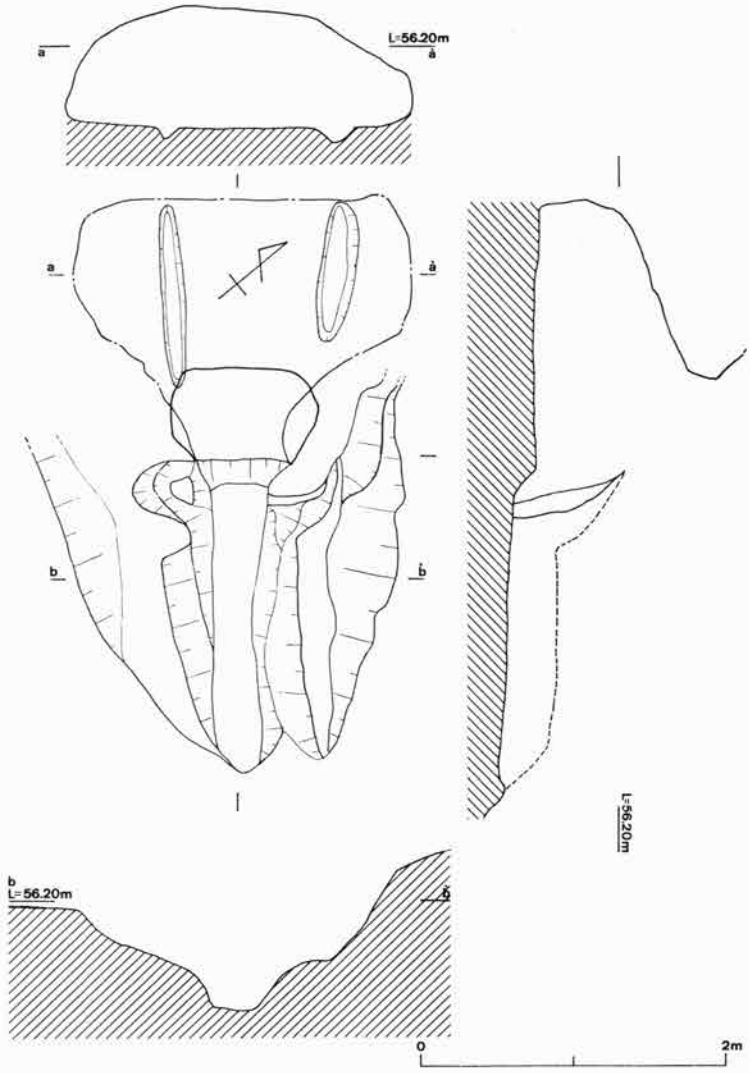
第8図　1号横穴人骨出土状況

南西側6mに位置し，玄室床面の標高は55.6m，玄室主軸はN-52°-Wである。玄室平面形は，奥壁隅が丸い台形を呈するが，玄門から奥壁に向って右側35cm程は急に広がらず，やや直線的にのびてから広がる。玄室長は1.70m・奥壁幅2.0m。天井部は崩落が著しく，奥壁より玄門側50cmのところで高さ0.8mを測る。閉塞部は幅0.6mで，14cmの段差が設けられ，左右両側壁には幅12cmで高さ74cmまで立ち上がる掘り込みが存在する。墓前域は，下段から0.36mでのびる狭長な墓道が1.9mある。この墓道両側には幅20～30cm，長さ1.5mの平坦部が存在する。玄室床面には，墓道と平行する幅約20cm・長さ0.9～1.2m・深さ0.1mの凹みが2か所認められた。

遺物は，1号横穴同様，その埋土が炭混りの黒褐色土であり，その堆積状況は1号横穴と同じである。黒褐色土の埋土からは，少量のカマド，須恵器（第12図21・22），土師器（第12図23）が出土した。玄室内床面からは，破砕されて小片分散した土師器杯身3個体（第12図18～20）が出土した。墓道上からは，まったく遺物は出土していない。

⑤有明3号横穴（第10図）　2号横穴の南西側3mに位置し，玄室床面の標高は55.34m，玄室主軸はN-71°-Wである。玄室平面形は，奥壁隅が丸い長方形を呈する。玄室長2.5m・奥壁幅1.24mを測り，玄室幅に対して玄室長が長くなっている。玄室幅は，奥壁部がもっとも広く，幅0.9mの閉塞部まで徐々に狭くなっていく。天井部は，ほとんど崩落もなく良好な残存状況を示しており，高さ0.86mを測る。閉塞部は6cmの段差が設けられ，左右側壁には幅12～14cmで高さ66cmまで立ち上がる掘り込みがみられる。墓前域は，閉塞部下段より幅70mでほぼ直線的にのびる狭長な墓道状を呈し，2.2mを確認した。

遺物は1・2号横穴同様炭混りの黒褐色土が堆積しており，この埋土中より少量の須恵



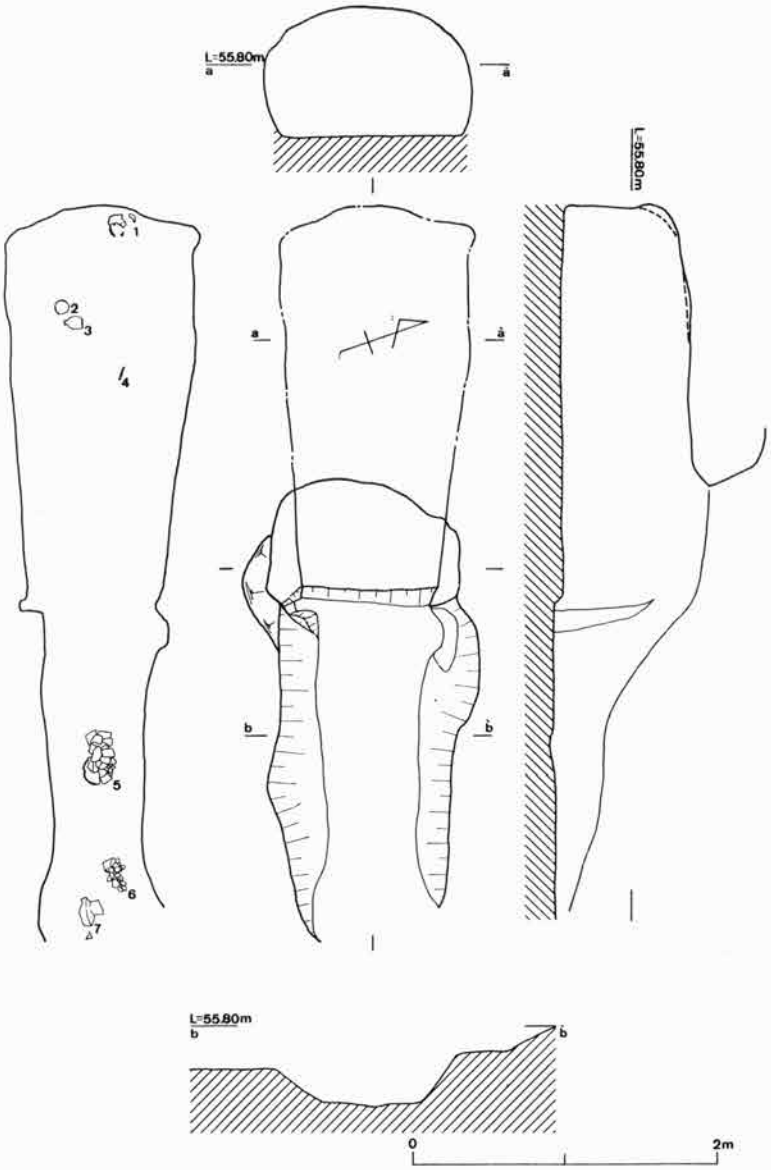
第9図　2号横穴実測図

器(第13図24・25)，土師器カマド片・鉄滓が出土した。玄室内床面からは，奥壁中央より頭蓋骨，中央からやや奥壁寄りで椀・瓶(第13図26・27)がセットで出土した。墓前域の墓道中からは比較的多量の土師器類が出土したが，ほとんど破砕され細片化していた。図化できたものは，土師器甕，須恵器平瓶（第13図28・29）のみである。

⑥有明4号横穴(第6図)　墓前域の墓道状にのびる肩部分のみ調査の対象となったもので，炭混りの黒褐色土を除去しただけで，墓道全体の調査は行っていない。出土遺物として須恵器大形甕(第14図)がある。

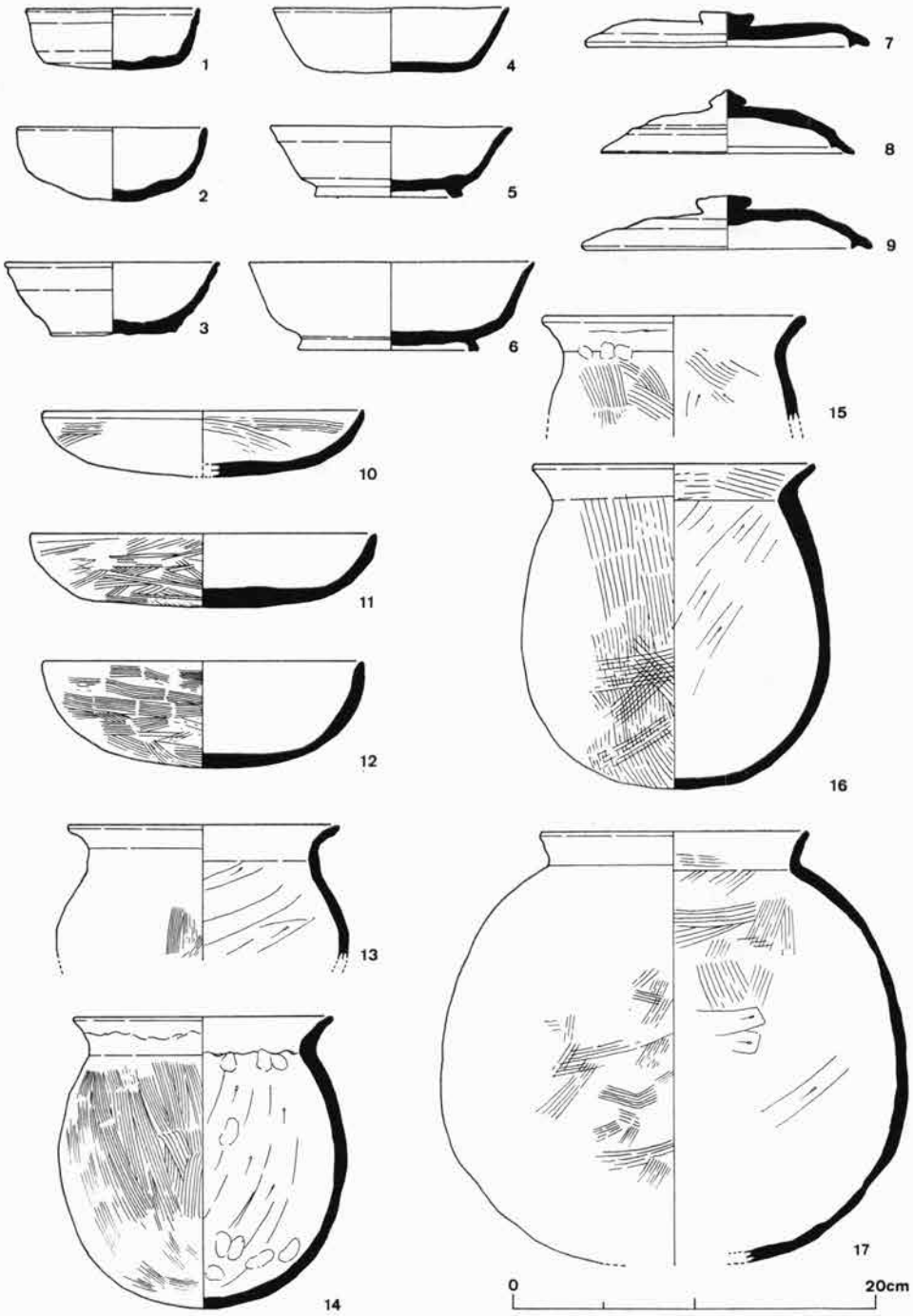
⑦横穴前面・斜面の調査(第6図)

各横穴の前面は過去には畑地として利用されていたようで，横穴周辺では各所にその痕跡が認められた。その耕作土を除去したところ，横穴内に堆積していた炭混りの黒褐色土が見られ，この黒褐色土を除去すると地山面となっている。この黒褐色土から地山面に至る間には，本来横穴に埋葬されていたであろうと思われる破砕された須恵器，土師器片が多量に出土するとともに，カマド片・フイゴ羽口・鉄滓等も出土した。

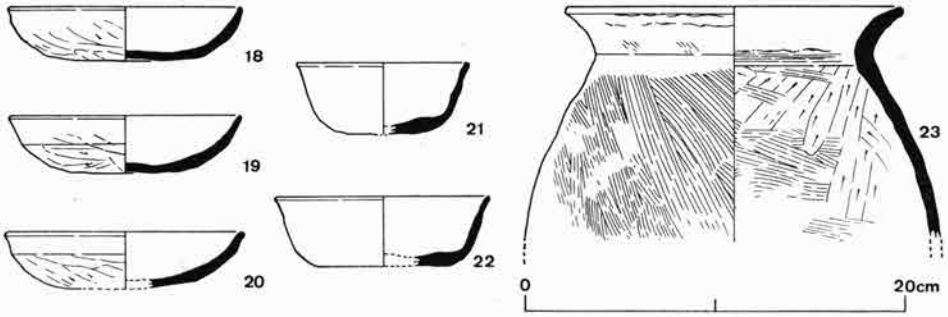


第10図　　3号横穴実測図・遺物出土状況実測図
1. 人骨　2. 杯　3. 瓶　4. 刀子　5. 土師器甕　6. 土師器甕　7. 平瓶

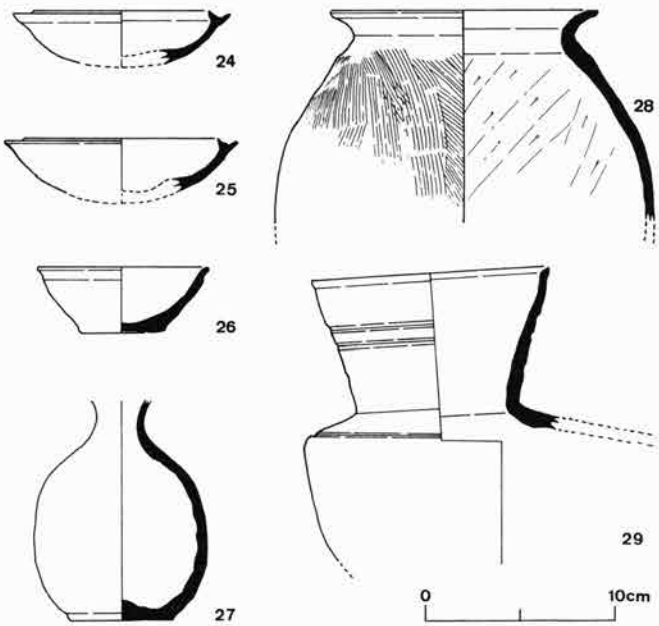
この堆積土を除去した結果，横穴前面には，各横穴に続くと思われる幅70cmの道状平坦部が設けられていた。さらにこの平坦部から，下方にのびる斜面に黒褐色土の堆積がみられるため掘り下げを行ったところ，斜面に幅50cm程の溝が2段にわたり設けられていた。斜面が平坦化したところでは，竪穴式住居跡1，柱穴18か所を検出した。斜面で検出した上段の溝は途中で切れてしまい下段の溝につながっている。下段の溝は住居掘形のす



第11図　出土遺物実測図 (1)



第12図　出土遺物実測図 (2)



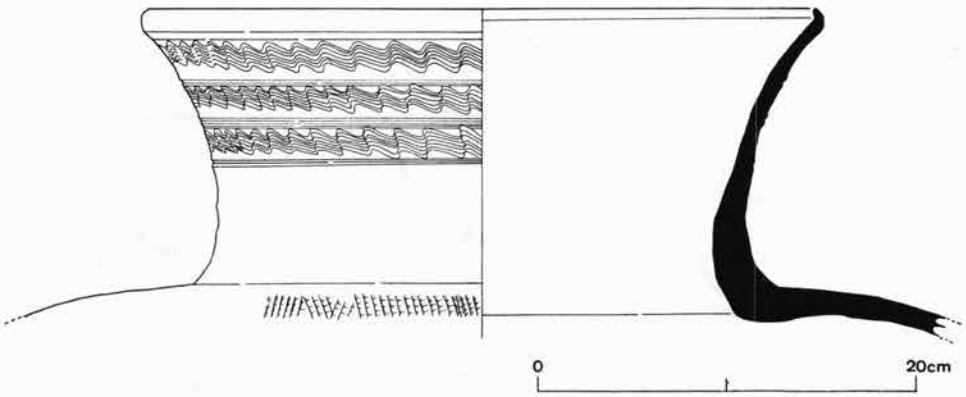
第13図　出土遺物実測図 (3)

ぐ西側に取りつくものであるが，調査地の北西端で終っている。いずれも，南から北西に向って流れるもので調査中でも湧水が著しい場合は，排水溝の役目を果していた。

竪穴式住居跡は，団地造成に伴いその1/2を削られていたが，本来1辺6m・深さ50cmの規模を有していたと思われる。住居内は，排水溝がめぐらされており，さらに住居内中央で住居を2分するような溝も検出された。住居に伴うと思われる柱穴は2か所確認できた。

18か所検出した柱穴についても，方向性，規模もまちまちであり，つながりが認められず，一部類似するものもみられたが，調査地東側が造成により削られていることからその性格を明らかにすることはできなかった。

この斜面部分に堆積した土砂は，耕作土面より住居床面まで2.8mあるが，横穴埋土でみられた炭混り黒褐色土が床面近くまで交互に堆積しており，小片化した須恵器・土師器が多量に出土し，カマド片，鉄滓等も出土した。特筆されるのは，横穴内より出土したカマドおよび須恵器片が，この斜面部分から出土したものと接合できる点である。このこと



第14図　出土遺物実測図 (4)

は，1号横穴で出土した人骨は骨の位置が正位置になくバラバラであり，2号横穴では遺物がほとんど皆無に近い。3号横穴では，頭蓋骨しか残っていないことや，後の再利用の痕跡を示す杯や瓶が出土していることから，炭混りの黒褐色土が堆積する以前に，横穴を再利用するために玄室内が整理されたと考えられる。

なお，竪穴式住居跡，柱穴の時期については，床面・柱穴内とも，遺物が出土しなかったため不明である。

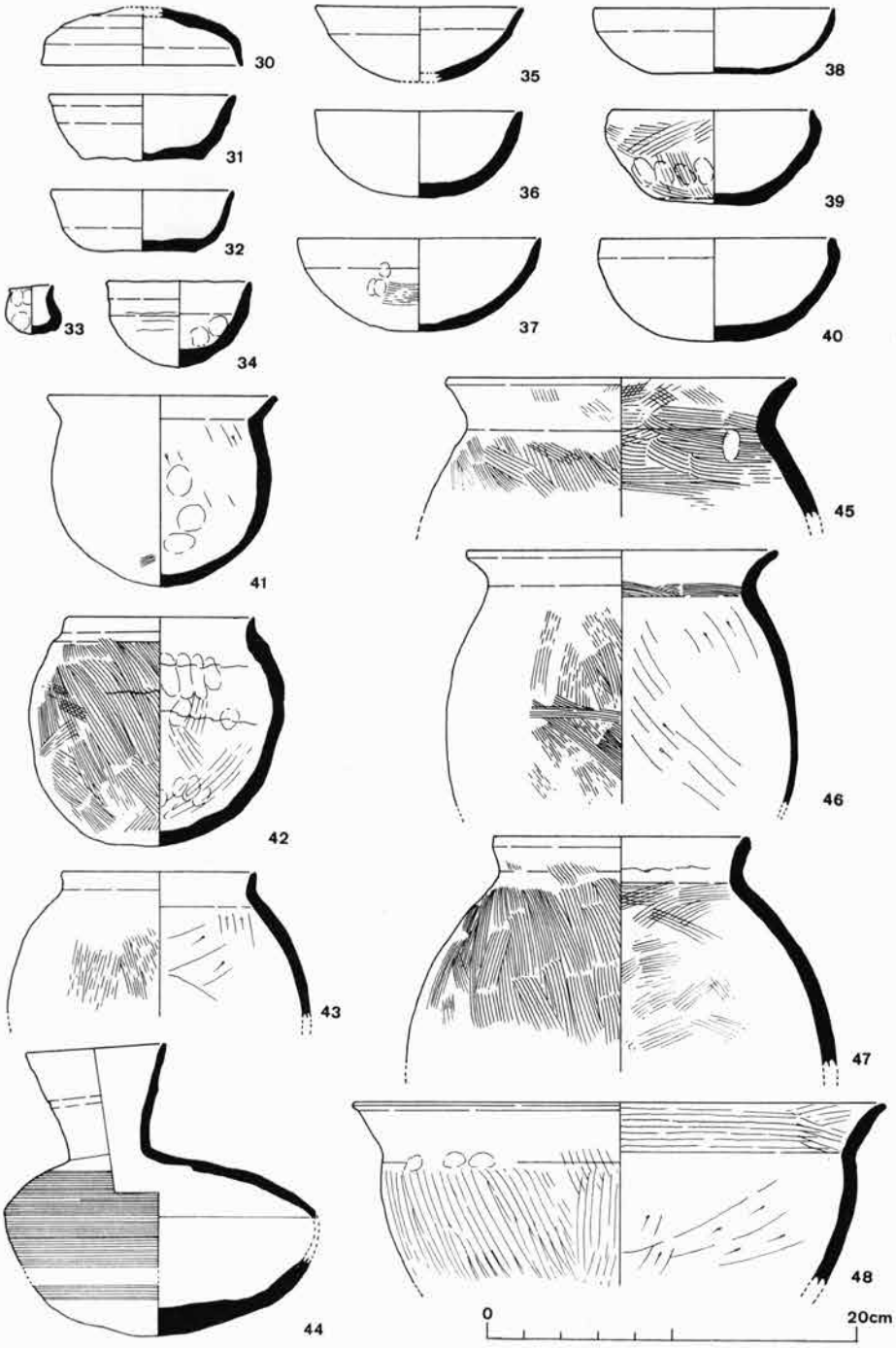
4　出土遺物

有明古墳群から出土した遺物には，竪櫛・刀子・鉄鏃などがあり，いずれも副葬品として被葬者とともに埋葬されたものと思われる。

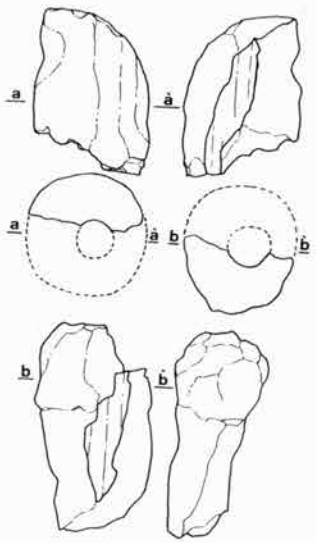
竪櫛(第4図)(図版第5：12)　3枚出土しているが，2枚は重なり合っている。いずれも歯部は腐朽し残存しない。頭部は「U」字形にまげ，その残存長は3.4～4.1cm・最大幅4～4.6cmを測る。竹串をならべ緊縛された部分は幅1.1～1.4cmである。いずれも黒漆が全面に塗られている。一部表面の剝離した部分を見ると竹串は18本使用されているようで，重なり合った残り2枚もそれ前後と思われる。

刀子(第5図1・2・3)(図版第5：3・4)　1・2は，木口部分より出土したもので，1は切先の一部を欠失しているが，現存長9.7cmである。刃部の幅は関の部分で最大となり1.7cmを測る。関は棟側が0.1cm切り込んでいるのに対し，刃側は0.6cm切り込んでいる。関の部分から柄の木質が付着しているが原形をとどめていない。2は，切先刃部の一部，茎の半分以上が欠失しており，現存長は5.9cmである。関は刃側に認められる。3は，棺内底面より出土したもので，切先・刃部の一部と茎の半分程を欠失しており，現存長5cmの小型の刀子である。関は刃側に3mm切り込んでいる。

横穴内より出土した遺物は，量的には少ない。大半の遺物は玄室内，墓道面から出土し



第15図　出土遺物実測図 (5)



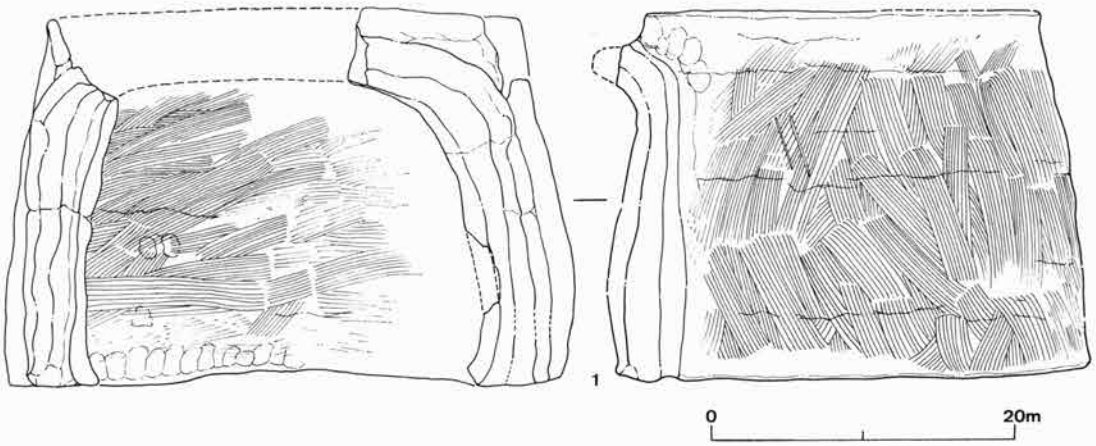
第16図　出土遺物実測図 (6)

たが，一部は横穴の埋土である炭混り黒褐色土中からも出土している。1号横穴玄室内でみられるように，これらの遺物については，散乱あるいはかたづけられたような状態であるため，土器類の一括性はない。またこのことを裏付けるように，横穴前面の斜面には，掻きだされた遺物が包含層として堆積していた。

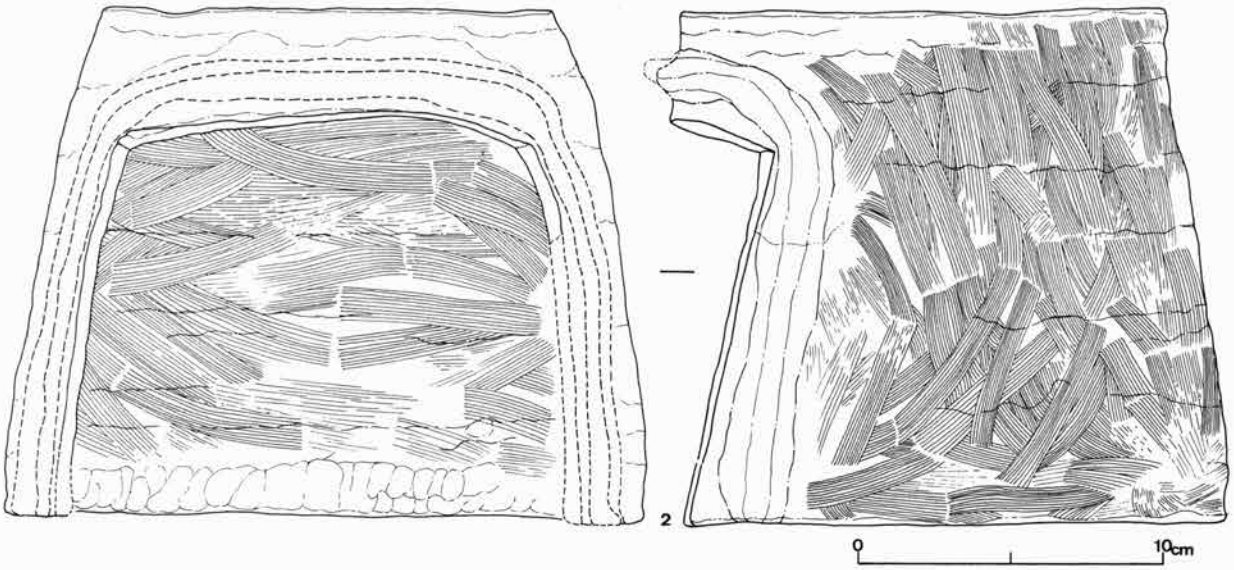
1号横穴出土遺物(第11図・図版第5•6：5•7～12)　出土した遺物には須恵器杯身(1～6)・杯蓋(7～9)，土師器杯(10～12)・甕(13～17)がある。このうち3～9・12・15は玄室内，1・2・11・16・17は墓道，10・13は横穴埋土中より出土した。2は半扁球状の底部をもつ。3は椀でヘラ切り痕が残り，口縁端部に1条の凹みがみられる。5・6は平底で，口縁と底部の境より内側に「ハ」字形に広がる低い高台をもつ。杯蓋(7～9)は，擬宝珠つまみがつき内面のかえりは短い。土師器杯身(10～12)は，平底に近いもので，浅いもの (10・11) と深いもの (12) があり，内外面ともハケメ調整するもの(10)，外面はハケメが残るが内面はなで消されているもの(11・12)がある。10は口径17.8cm・器高3.6cm,12は口径17.8cm・器高6cm。甕(13～17)は「く」字形に外反する口縁部がつき端部は丸い。やや胴長の体部をもつもの(16)，球形の体部をもち全体的にずんぐりした感のあるもの(14)がある。いずれも外面には，ハケメが施されているが，頸部から底部まで全面に施すもの(14～16)と，底部・頸部付近はなで消され中位のみ残るもの(13・17)がある。14は，口縁端部付近に接合痕が残り指押さえがみられる。内面は箆削りが施されるもの(13・14)，箆削り後ハケメ調整されるもの(15～17)がある。

2号横穴出土遺物(第12図・図版第6：13～17)　出土した遺物は，土師器杯身(18～20)，須恵器杯身(21・22)，甕(23)があり，18～20は玄室内，21～23は横穴埋土中より出土した。18～20はいずれも平底に近いもので，外面は幅1cm程の単位ヘラ削りが施される。口径12.1～12.5cm•器高2.9～3.0cmとほぼ同じ大きさである。21•22は破片である。23は「く」字形に外反する口縁部がつき端部は丸い。体部外面に斜め方向のハケメを施し，口縁端部付近には接合痕が残る。内面はヘラ削り後頸部付近は横方向のハケメ調整。

3号横穴出土遺物(第13図)　杯身(24・25)・椀(26)・瓶(27)・甕(28)・平瓶(29)があり，26・27は玄室内，28・29は墓道，24・25は横穴埋土中より出土した。24・25は半扁球状の体部に短く内傾するたちあがりをもつ口縁がつく。受部は外上方にのびる。24は口径9.2

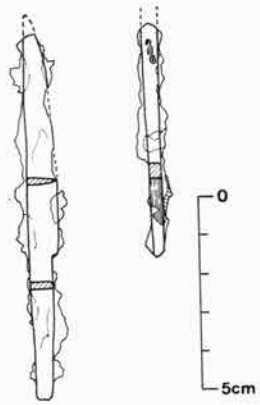


第17図　出土遺物実測図 (7)



第18図　出土遺物実測図 (8)

cm，25は12.4cm。26・27はセットで出土したもので，26は底部に回転糸切り痕がそのまま残されている。体部は丸味をもって外反ぎみに立ち上がり，ロクロ目が明瞭に認められる。27は，底部に回転糸切り痕がそのまま残り，胴部に丸味をもって立ちあがり，上半で徐々にすぼまり頸部に至る。頸部はラッパ状に開くが，口縁部は欠損する。底径5.5cm・胴部最大径9.1cm。灰釉と思われよく焼け締まり，淡灰色を呈する。28は2号横穴出土(23)の甕とよく似ており，体部外面は斜め方向のハケメ，内面はヘラ削り調整。29は体部の大半を欠失する。口径12.4cm，口縁部に2条，肩部に1条の沈線がある。



第19図　出土遺物実測図(9)

4号横穴出土遺物(第14図)　炭混り黒褐色土中より出土した大型の甕で，口径35.4cm，口縁中位より上に3条の凹線があり，凹線に区画される形で，7本を単位とする波状文が3か所施される。頸部付近断面は肥厚している。体部外面は平行の叩き目，内面は同心円の当て具痕が残る。

横穴前面包含層出土遺物(第15・16・17・18図，図版第7：17～23)　包含層より出土した遺物は多量にあるが，図化できたものは少量で須恵器杯蓋・杯身・平瓶，土師器椀・杯・壺・甕・フイゴ羽口・カマドである。

杯蓋(30)は，天井部は丸味をもち口径10.9cm・器高3.1cm。杯身(31・32)は平底をなす。35・36・37・39・40は椀であり，いずれも丸底を呈し深い。口縁端部が内傾するもの(39・40)がある。内外面ともなで調整のもの(35・36・40)，外面はハケメ，内面はなで調整のもの(37・39)があり，口径11～13.2cm・器高4～5.7cm。38は杯で平底をなし，器壁は薄い。壺(42・43)はいずれも口縁端部を上方につまみあげるが，42はその割合が小さい。42は口径10.3cm・器高12.3cm，43は口径10.6cm。壺・甕とも外面は頸部以下に斜め方向のハケメを施す。内面はヘラ削りのみのもの(43)と，ヘラ削り後ハケメを施すもの(42・45～47)がある。48は頸部はあまり屈曲せず，広い口縁部を有するもので端部は丸い。外面は頸部以下を粗いハケメ，内面は口縁部のみ粗いハケメで以下はヘラ削り調整。44は平瓶で，タマゴ形の体部を有し器高は復元高約16cm・口縁部径7.6cmで，肩部上位より体部下位にかけてカキ目が残る。

ミニチュア土器(33・34)(図版第7：17・19)　全体に指おさえのみで作られ，その痕跡がよく残る。33は口径2.4cm・器高2.7cm，34は口径7.6cm・器高4.7cm。

フイゴ羽口(第16図)　2点あり一部1号横穴出土の破片と接合できた。ほぼ円柱状をなすと思われるが，両先端，器体の1/2を欠いている。中央部に約2cm程度の孔を穿っていたと思われる。器壁は約2.4cm，先端付近は高熱を受け青灰色に焼け締っている。

カマド(第17・18図)　破片は多数あるが，各横穴出土のものと包含層出土のものが接合でき2点が復元できた。いずれも同様の形態をなし，内外面とも全面にわたり粗いハケメ調整が残り，内面底部には，連続した指圧痕が残る。全体に粘土紐積み上げ接合痕が良く残り，釜口は水平で端部は内傾する。焚口部分は強く切り込むもの(第18図)がある。焚口部全体にはそれをとり囲む形で庇が取り付けられている。第17図は器高24cm，第18図は器高33.5cmを計測する。

鉄製品(第19図)(図版第5：5・6)　いずれも3号横穴玄室内より出土したもので，1は刀子である。切先・刃部の一部を欠損するが現存長9.6cmである。刃部幅は全体に細く

関の部分で最大となり0.9cmを測る。関は刃部側のみ認められる。２は鉄鏃と思われる。鏃身を欠損する。現存長６cm，茎部に部分的に木質が付着。

５　ま　と　め

有明２・３号墳については，その出土遺物が少なく築造時期を明確にすることはできないが，溝の切り合い関係からすれば，３号墳は２号墳よりも先行する。また，東側丘陵において調査された帯城古墳群の調査結果や，立地・墳丘・主体部の規模・主体部に伴う遺物が乏しいことや他の例からすると，３号墳は４世紀末～５世紀前半にかけ築造されたものと考えられる。また，２号墳については，墓坑の存在は確認されなかったが本来，墓坑を掘らず，地山削平面に棺を安置し，その上に盛土していったとも考えられよう。

有明横穴群については，横穴内からの出土遺物が乏しいことから，横穴内の遺物だけでは，築造・追葬・再利用の時期を明らかにすることはできないが，横穴前面の斜面の包含層より出土している遺物と考え合わせると若干の見通しが可能である。

須恵器の型式からみて，最古の一群と考えられるものは，３号横穴より出土した杯身であり，陶邑古窯址群の型式編年と対応させると，中村編年[注6]のⅡ型式５段階にほぼ併行するものと考えられる。一方，もっとも新しいと考えられるのは，１号横穴より出土した杯身・杯蓋であり，中村編年のⅢ型式２段階に併行するものである。これらのことから，横穴群は６世紀末～７世紀初頭とした時期に築造され，７世紀中頃に追葬が行われたと思われる。また，土師器は今後検討していかなければならない問題を多く残すが，２号横穴出土杯身は７世紀後半段階のものとも考えられる。出土する遺物がもっとも少ない時期である。再利用として考えられるのは，３号横穴より出土した，椀・瓶，１号横穴の椀であり，10世紀前半[注7]と考えられる。

横穴については，各横穴とも天井部を除き，築造時の状況をよく残していたといえるが閉塞部については，基本的には段により玄室と墓前域が区画され，その左右両側壁には，段に対応するように，壁面を溝状に掘り込んで，板戸をはめ込んで閉塞したものと思われる。１号横穴には貫抜状の板戸をささえる凹みもみられた。また，１号横穴，墓道の北側に削り出して設けられた平坦な段からは若干の土器類も出土しており，墓前祭祀の状況を示すものと思われる。

横穴内およびその周辺から出土したカマド，フイゴ羽口，鉄滓や，２号横穴埋土からは，灯明皿の破片，前面の斜面からは，甑片も出土しており製鉄を行った工房跡がこの付近に存在する可能性がある。また，横穴がこの工房に伴い使用されたかどうかは疑問である。また住居についてもこれに伴うものなのか不明である。時期についても今後検討していかなければならない重要な課題である。この工房跡に関連する遺物は，３号横穴よりも南に25m，標高59m付近でもカマド片が採集でき，その散布は広範囲にわたっており周辺を開

発する際注意を要する。

有明横穴群は，谷一つ隔てた北東側丘陵の府下最大規模を誇る大田鼻横穴群(30基)と時期，構造等類似しており，一つの横穴群としてとらえる必要があろう。丹後地域では，峰山町下山横穴群・舟泉寺横穴群など数基の発掘調査例しかなく，その実態はあまり知られていない。今回の調査は，これらの数少ない調査例の中に重要な資料を提供しただけでなく，丹後の数少ない後期群集墳と横穴群の存在を考える上で重要な調査となった。

(増田孝彦)

(2) 桃山古墳群

1 位置と環境

桃山古墳群は，京都府中郡峰山町内記小字高山に所在する。桃山古墳群は，竹野川を挟む中郡の沖積地が狭まる付近の東側，竹野川からはやや奥まった低位丘陵上に位置している。この丘陵は，小原山系から西麓へ張り出してきた尾根の末端部にあたり，細長い半独立状の丘陵となっている。標高約55mを測る。周囲の平地との比高は，30m程度である。

丘陵の西側では明確な墳丘をもつ2基の古墳の存在が確認されていた。西端に位置する1号墳には，既掘による窪地があり，遺物の出土も伝えられている。

桃山古墳群は，竹野川が織りなす沖積地のうち，中郡地域に広がる沖積地の北端を限る丘陵上にある。この地域には，桃山古墳群をはじめとして，竹野川右岸の丘陵上にスクモ塚古墳群・名木山古墳群，竹野川左岸の丘陵上に湧田山古墳群・杉谷山古墳群・西谷山古墳群・八幡山古墳群などの古墳群が群在している。

桃山古墳群の北東側の丘陵上には，円墳や墳丘の不明瞭な台状墓からなるスクモ塚古墳群があり，一部発掘調査が行われている。(注8) 西側の台地上にある下上野遺跡は，広大な集落跡と推定されており，スクモ塚古墳群と一対をなす「村と墓」としてとらえられている。(注9)

南西側に続く丘陵上には，名木山古墳群がある。名木山古墳群は，前方後円墳と多数の円墳・台状墓からなる古墳群で，竹野川を挟んで対峙する位置にある湧田山古墳群とともに，竹野川流域の要衝を押さえる地点に立地している。なお，湧田山古墳群は，全長100mの前方後円墳を盟主墳として，大小の円墳からなる古墳群である。

湧田山古墳群の南西側の丘陵には，全長70mの前方後円墳を盟主墳とする西谷山古墳群をはじめとして，多数の古墳が存在している。また，カジヤ古墳(注10)の副葬品には畿内的な要素が強く認められるほか，桃谷1号墳(注11)では大陸的色彩の濃いガラス製の耳璫が出土した。

これらの古墳が望む沖積地は，古代丹波国の中心地とされる地域であり，古代国家成立前史における当該地域勢力の高揚を看取できよう。桃山古墳群がこの地に展開された古墳

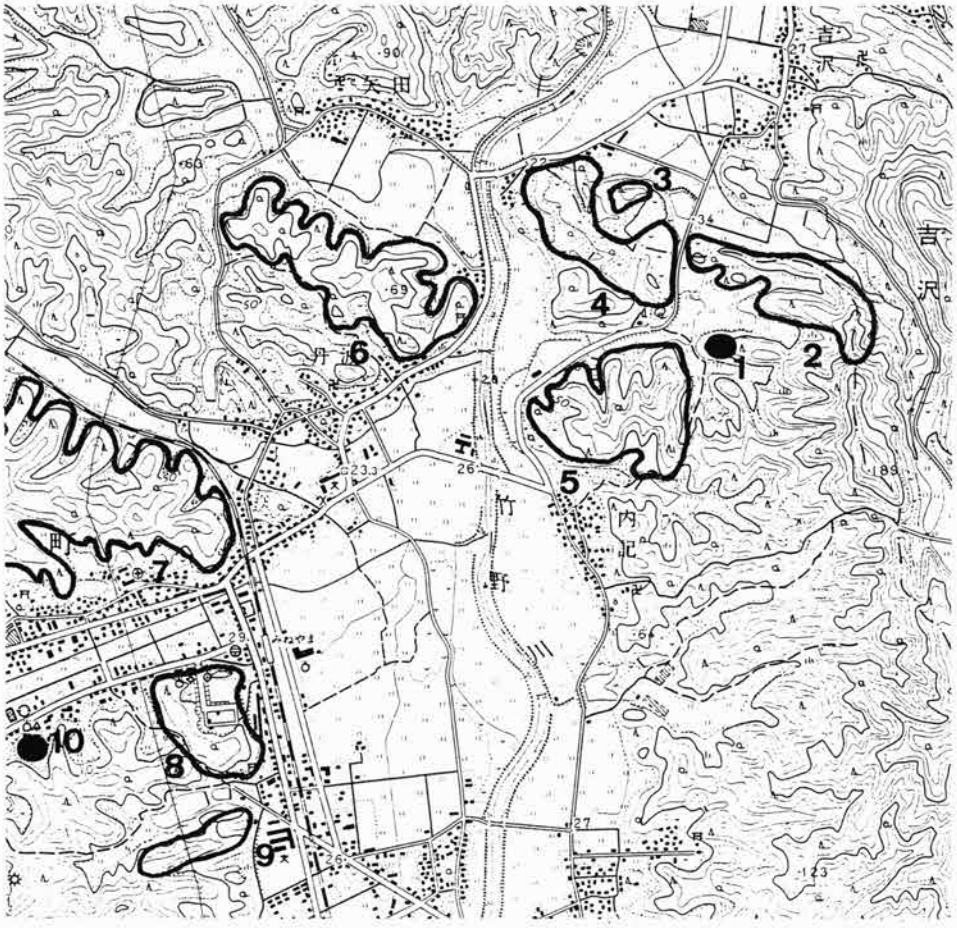
文化の一端を担うものであることはいうまでもない。後期古墳の発掘調査例の少ないこの地域において，桃山古墳群の調査成果は，重要な資料を提供し得たものといえよう。

（鵜島三寿）

2　調　査　経　過

調査は，２基の古墳の埋葬主体部を検出することとともに，古墳の築造方法を探ること，および周辺遺構の有無を確認することなどを主な目的として，墳丘とその周辺をも含めて掘削することとした。また，古墳群の東側に続く尾根上にも，遺構・遺物の確認を目的として試掘トレンチを設けた。このため，掘削面積は，830m²に及んだ。

現地調査は，昭和60年11月27日から30日までの期間で伐採作業を行うことから着手した。



第20図　周辺主要遺跡地図（1/25,000）

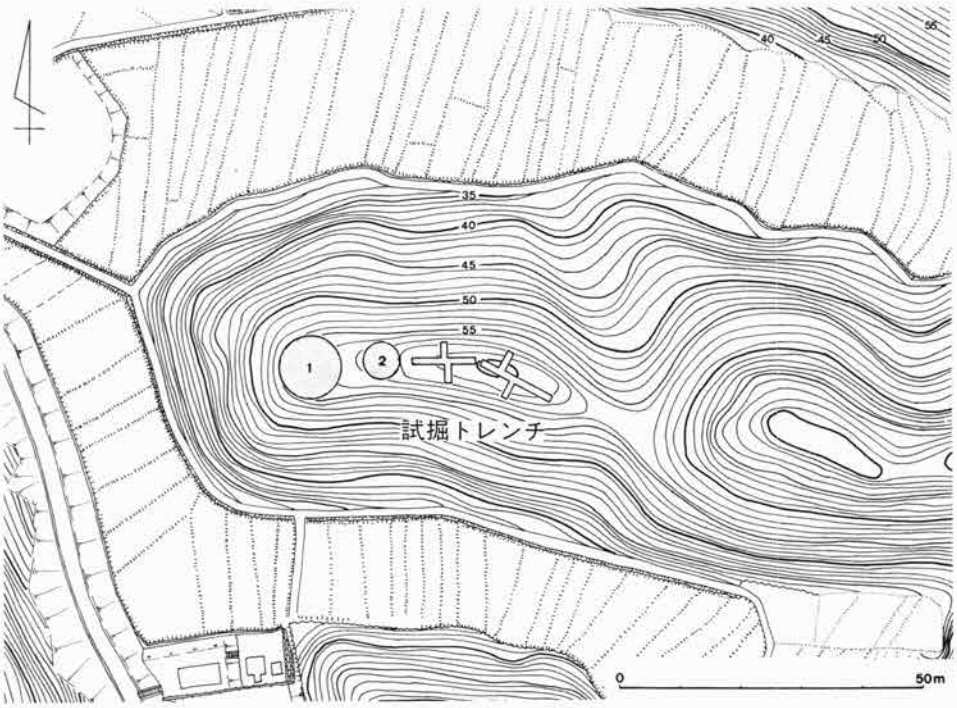
1. 桃山古墳群　2. スクモ塚古墳群　3. 上野古墳群　4. 下上野遺跡
5. 名木山古墳群　6. 湧田山古墳群　7. 杉谷山古墳群　8. 扇谷遺跡
9. 七尾古墳群　10. カジヤ古墳

次いで，12月２日から７日までの期間で地形測量を行った。地形測量は，開放トラバースによる測点からの平板測量である。掘削作業は，12月４日に資材の搬入を行い，９日から掘削を開始した。墳丘の掘削によって，１号墳および２号墳は，地山削り出しののち，盛土を行って構築した墳丘をもつことが判明した。埋葬の形態は，いずれも木棺直葬であった。実測作業および写真撮影はその都度行い，昭和61年３月24日には，すべての現地作業を終了した。なお，現地説明会は，昭和61年５月23日に行った。

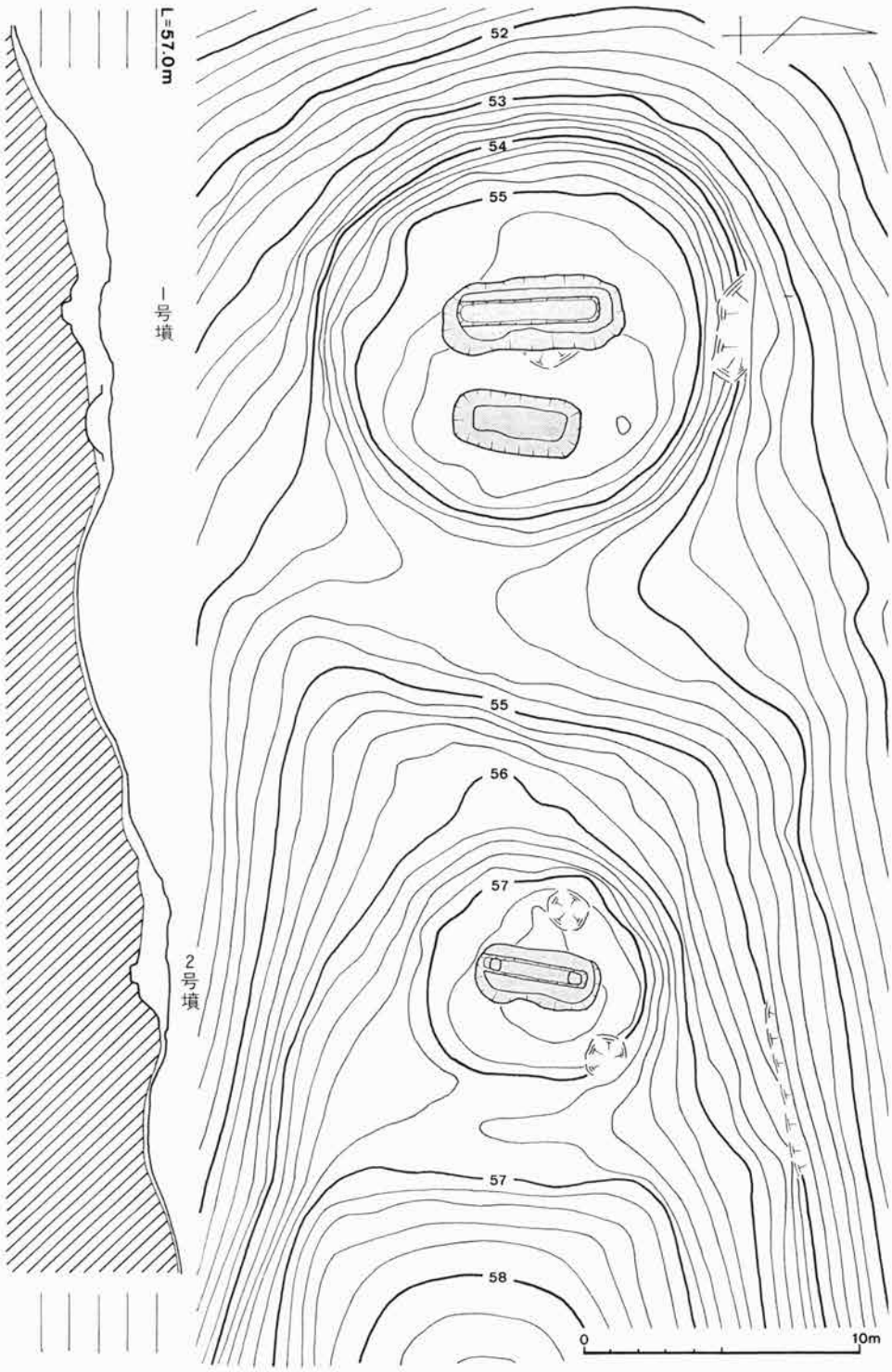
3　調　査　概　要

①**桃山１号墳**(第22～23図)　１号墳は，径19mの円墳である。高さは，高い所で３m，低い所でも１mを測り，明瞭な墳丘を有している。墳頂部には，径11m程度の平坦面をもつため，円錐台状を呈している。墳丘は，基底部が地山で，盛土は最も厚い西側で１m，最も薄い東側で0.3m認められた。また，２号墳との間に大きな掘削面が存在することから，１号墳の築造方法は，丘陵の稜線に直交する溝によって基底部を切り出したのち，盛土を行ったものと考えられる。地山層と盛土層との間には，炭化物混りの黒色土層が認められるため，古墳築造に際して，山焼きを行っている可能性がある。

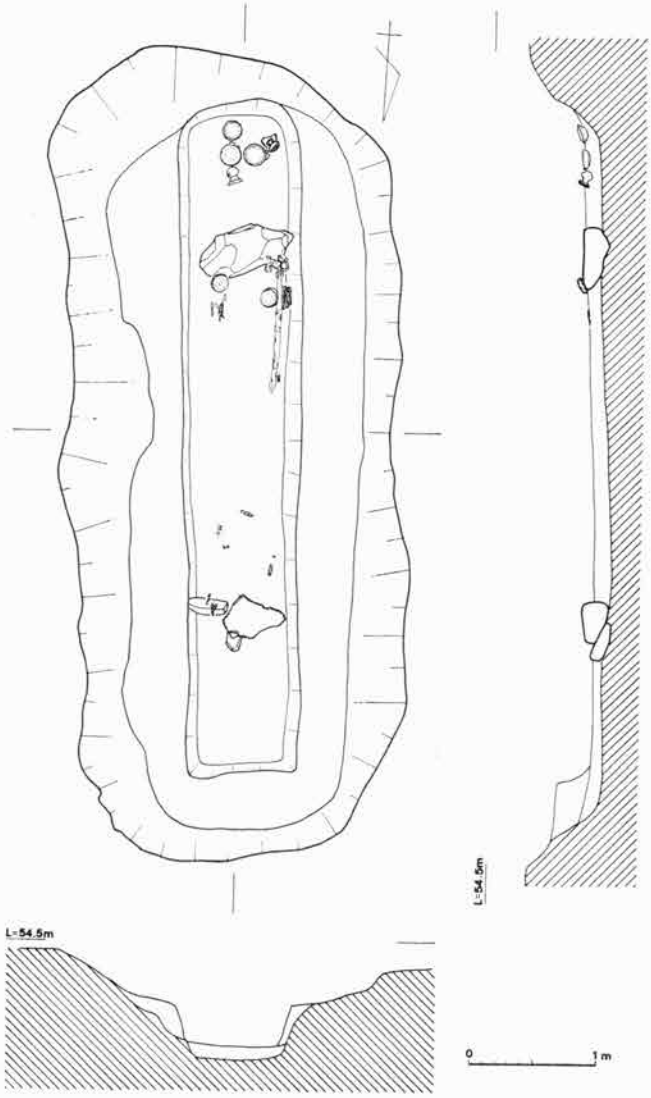
墳頂部掘削に際して，既掘坑周辺からは数多くの遺物が出土した(第31図２～14)。その内容は須恵器が主で，杯蓋２点・杯身３点・高杯２点・短頸壺２点・広口壺１点・甕１点



第21図　桃山古墳群構成図



第22図　桃山古墳群地形図



第23図　　1号墳第1主体部実測図

などのほか，甕や提瓶などの瓶類の破片がみられた。須恵器のほかには，土師器の甕1点，鉄製品では鉄鏃1点があった。これらの遺物は，既掘坑掘削に際して，掻き出されたものと思われる。この既掘坑は，径3.5m・深さ0.8mで，第1主体部の直上に位置していたものの，既掘による攪乱は，深さ1.5mの地点に安置されていた木棺部にまでは及んでいなかった。したがって，これらの遺物は，第1主体部の埋葬に際し，墓上で行われた葬送儀礼に用いられたものと考えられる。

埋葬主体部は，2基を検出した。いずれも木棺直葬の形態をとるものである。先行埋葬と考えられる第1主体部は，墳頂部のほぼ中央に位置している。後続埋葬と思われる第2主体部は，墳頂部の東側を占めている。

第1主体部(第23図)は，表土から約1m掘削した段階で墓坑を検出した。墓坑の規模は，長さ6.5m×幅4.5mを測る。主軸の方向は，N4°Wである。墓坑検出面から0.3m掘り下げたところで，木棺部を検出した。木棺部の規模は，長さ5.3m×幅0.9mで，深さは0.25m前後を測る。側板および木口部分では，微量ではあるが，赤色顔料を検出している。

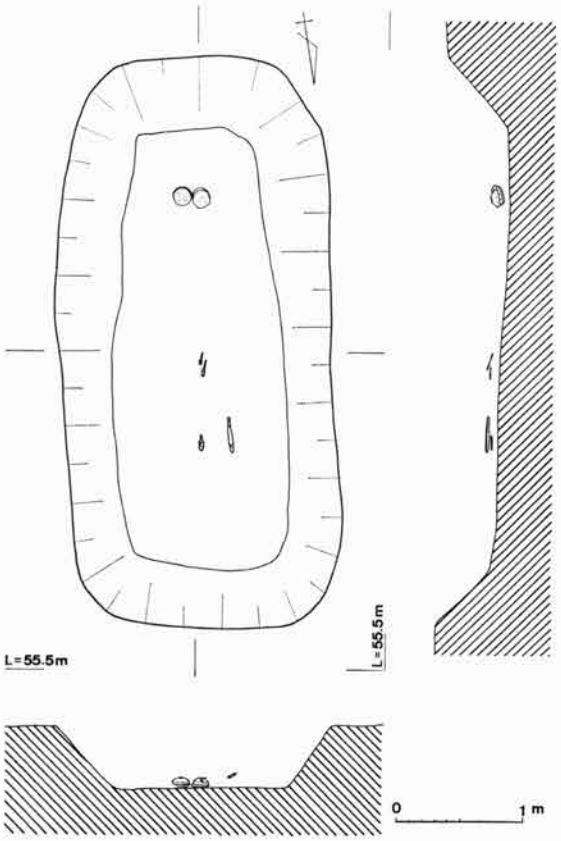
棺底部の北側および南側には比較的大きな川原石が置かれていた。南側のものは，扁平

な石が１石のみで，上面の高さは53.8mを測る。北側のものは，３石を組み合わせており，上面の高さを測ると53.75mとなる。石の上面の高さがほぼ水平に整えられていることから，これらの石は，棺台として置かれた可能性が強い。

木棺部出土遺物には，須恵器(杯蓋４点・杯身２点・高杯１点・瑞１点)，鉄製品（鉄刀１点・轡１点・鉄鏃30点・帯金具１点・刀子５点)，玉類(勾玉１点・管玉５点・ガラス玉２点・ガラス小玉76点)がある。これらの遺物は，木棺部南端と南側棺台付近および北側棺台石付近の大きく３地点に分かれて出土した。

木棺部南端には，杯蓋２点・杯身２点・高杯１点・瑞１点(第26図３～８)が置かれていた。高杯と瑞とは横位で出土したものの，埋葬時には正位であったものと思われる。杯身２点は正位，杯蓋１点は逆位で，杯蓋１点は破片になり，他の土器の下に敷かれていた。

南側棺台石付近には，杯身２点(第26図１・２)，鉄刀１点(第27図)，轡１点(第28図１)，帯金具(第28図２)，鉄鏃(第28図３～32)が置かれていた。鉄製品は，鉄鏃５点(第28図3～７)が鏃先を南向きにして西側に置かれていたほかは，東側にまとめられていた。東側の鉄鏃25点は，鏃先を南向きに折り重なるようにして出土した。この出土状態は，入れ物に入れられて埋納されたことを示すものと考えられ，実際0.5m北側の鉄刀切先付近には編物の残欠が認められた。鉄刀は，切先を北に向け，刃部を西側に向けていた。轡は鉄刀茎部の下，帯金具は鉄鏃の下から出土している。



第24図　１号墳第２主体部実測図

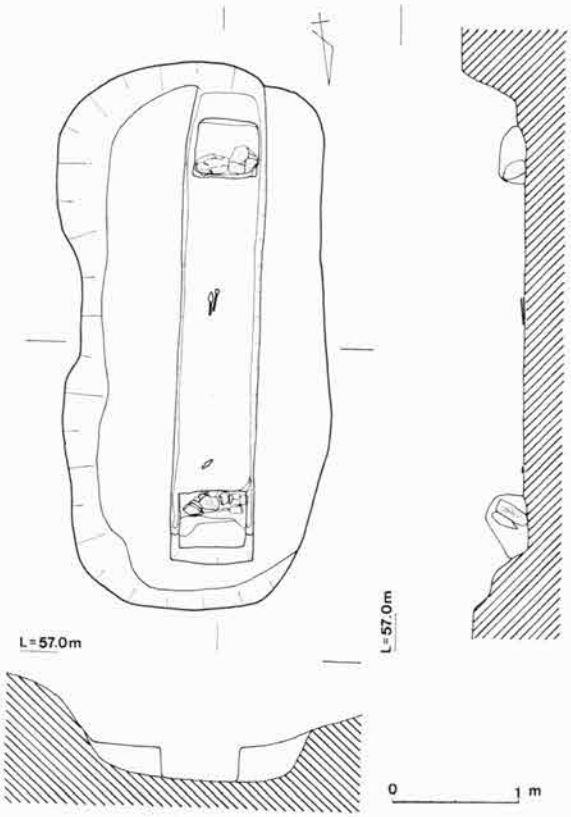
北側棺台石付近には，勾玉１点(第29図１)・管玉４点(第29図２～５)・ガラス玉２点(第29図６・７)・ガラス小玉76点(第29図８～83)・刀子５点(第28図33～36)が置かれていた。玉類は，管玉２点を除き，北側棺台石の南側西寄りにまとまっていた。刀子のうち３点は，東寄りの棺台石上から出土

している。

第2主体部(第24図)は，表土を排除した段階で墓坑を確認した。墓坑の規模は，長さ4.5m×幅2.2mを測る。主軸の方向は，N8°Eである。木棺部は，検出することができなかった。墓坑の深さは，0.6m程度である。

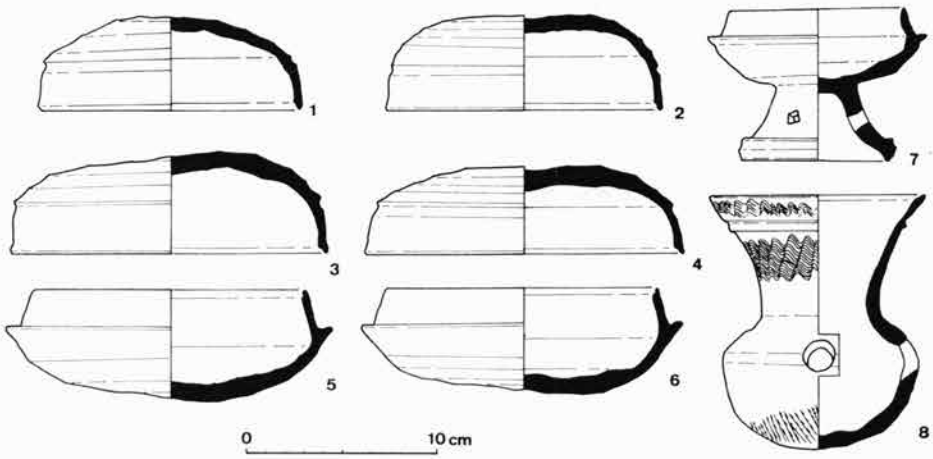
出土遺物(第30図)には，須恵器(杯蓋2点・杯身2点)・鉄製品(短刀1点・鉄鏃3点)がある。

墓坑の南側から出土した須恵器は，杯身2点を逆位で並置し，それぞれの杯身に杯蓋を正位で重ねるという置き方をしていた。鉄鏃は，墓坑の中央から北寄りにかけて3点出土し，それぞれの鏃先は，北向きに置かれていた。短刀は，墓坑の北寄り西側から出土したもので，切先を北向き，刃部を西側に向けていた。



第25図　2号墳主体部実測図

②**桃山2号墳**(第22・25図)　2号墳は，径11mの円墳である。高さは，高い所で1.5m，低い所でも0.8mを測る。墳頂部には，径10m程度の平坦面をもつため，円錐台状を呈し



第26図　1号墳第1主体部内出土遺物(須恵器)

ている。墳丘は，基底部が地山で，この上に盛土を行っている。盛土は，最も厚い西側で0.8m，最も薄い東側で0.1m認められた。また，東側の丘陵との間に掘削面が存在することから，2号墳の築造方法は，丘陵の稜線に直交する溝によって基底部を削り出したのち，盛土を行っているものと考えられる。地山層と盛土層との間には，炭化物混りの黒色土層が認められた。埋葬主体部は，1基を検出した。

第27図　直刀

2号墳の主体部(第25図)は，長さ4.4m×幅2.3mの墓坑をもつ。墓坑全体の輪郭を検出した時点で，木棺部をも検出することができた。主軸の方向は，N10°Eである。木棺部の規模は，長さ3.3m×幅0.6mで，深さは0.3mを測る。木棺部の両端には木口押さえの粘土塊が遺存しており，木棺が組合式の木棺であったことが予想される。この場合，木棺部の痕跡から木棺の規模を復原すると，側板の長さが約3.1m・厚さ5cm，木口板の長さが55cm程度になるものと考えられる。木口押さえの粘土塊は，数個の自然石を核として，これらの石を包み込むように白色粘土を詰め込んだものである。

木棺部内の出土遺物(第33図)には，鉄製品(刀子1点・鉄鏃2点)がある。刀子は，木棺部の北端から出土した。鉄鏃2点は，木棺部のほぼ中央から出土したもので，鏃先は，南側に向けられていた。なお，2号墳の墳丘盛土層のなかからは，須恵器の杯身1点(第32図)が出土している。

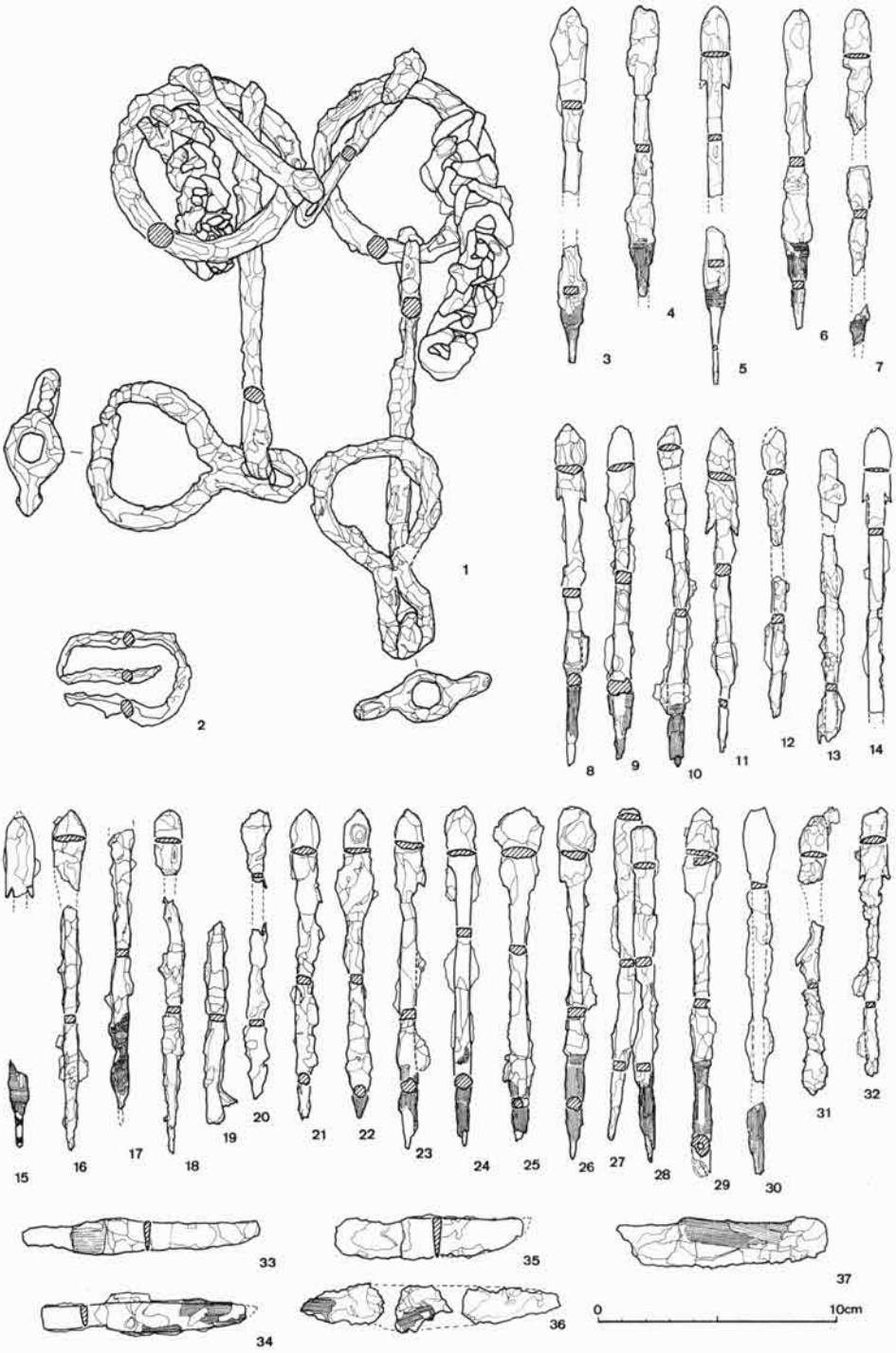
③試掘調査地区(第21図)　古墳群の東側の丘陵上には，長さ30m×幅10m程度の平坦面が認められた。この地区については，遺構・遺物の有無を確認するために，幅2mの試掘トレンチを設定した。掘削の結果，表土層直下で地山層となり，遺構・遺物は検出することができなかった。

4　出　土　遺　物

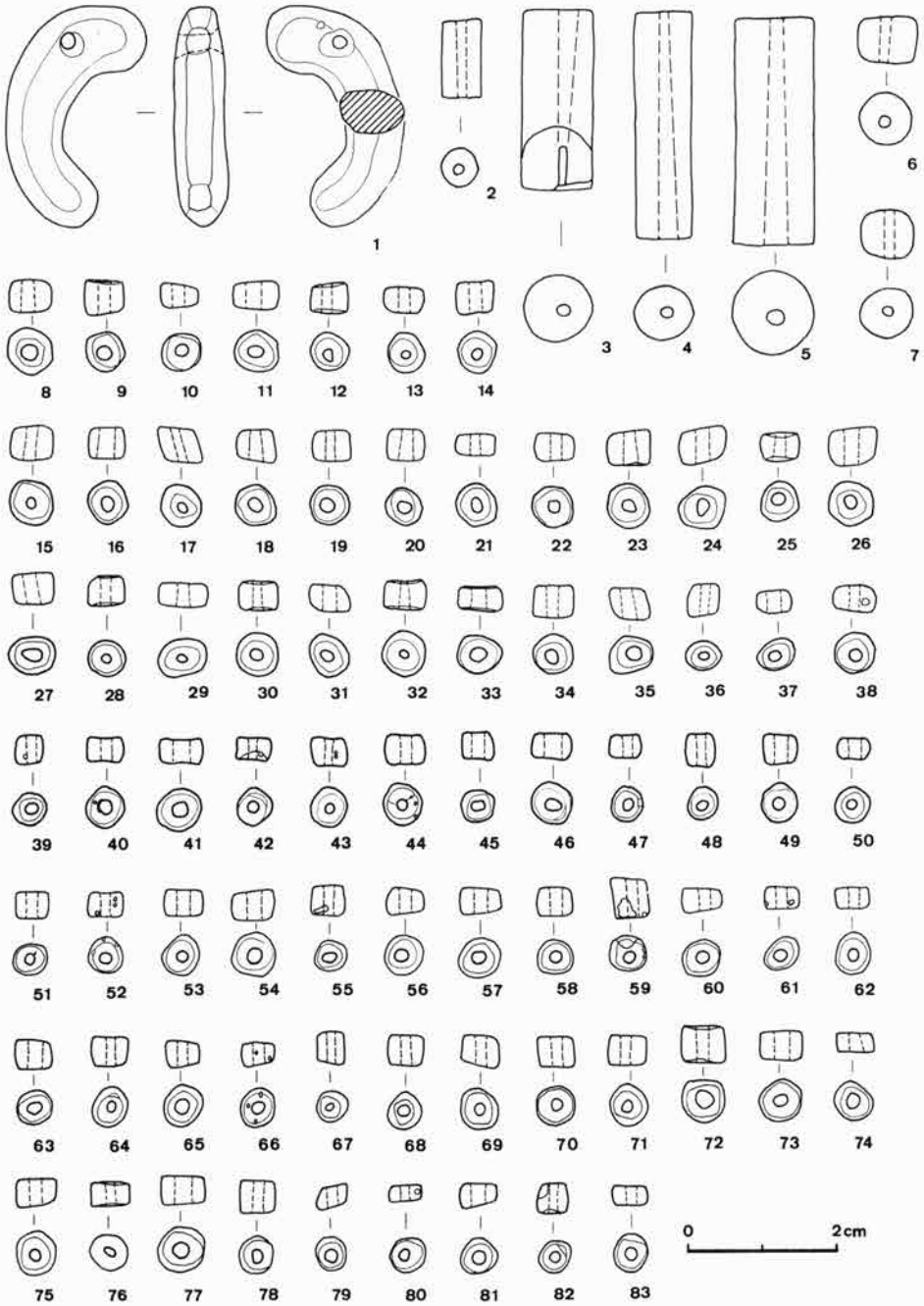
桃山古墳群から出土した遺物には，須恵器・土師器・鉄製品・玉類などがある。古墳群という遺跡の性格から考えて，いずれも埋葬主体部内の副葬品として，あるいは墓域内での葬送儀礼に際して供されたものと考えられる。

第1主体部内出土遺物(第26～29図)　第26図は，主体部内に埋納されていた須恵器である。1・2は，南側棺台石の北側で検出した杯蓋である。いずれも口径14cm程度・器高5cmを測る。稜は形骸化しており，口縁端部には段を残している。全体に丸く仕上げられている。1の内側中央部には，同心円の叩きがなされている。

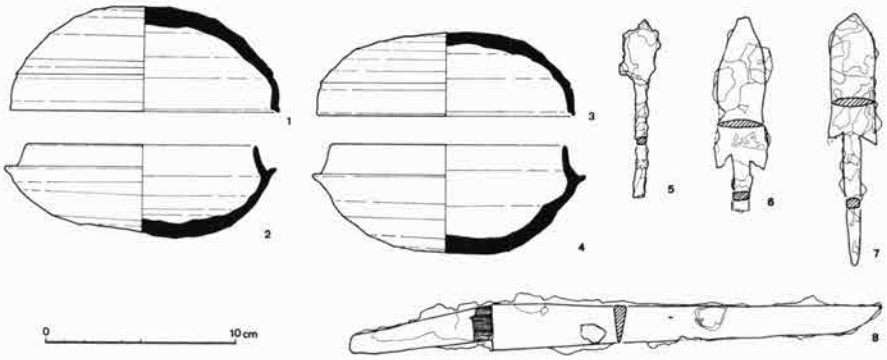
3～8は，南側木口部に埋納されていた須恵器の一群である。3～6は，やや軟質の焼きあがりのもので，胎土に砂粒を多く含み，口径がほぼ一致するこ



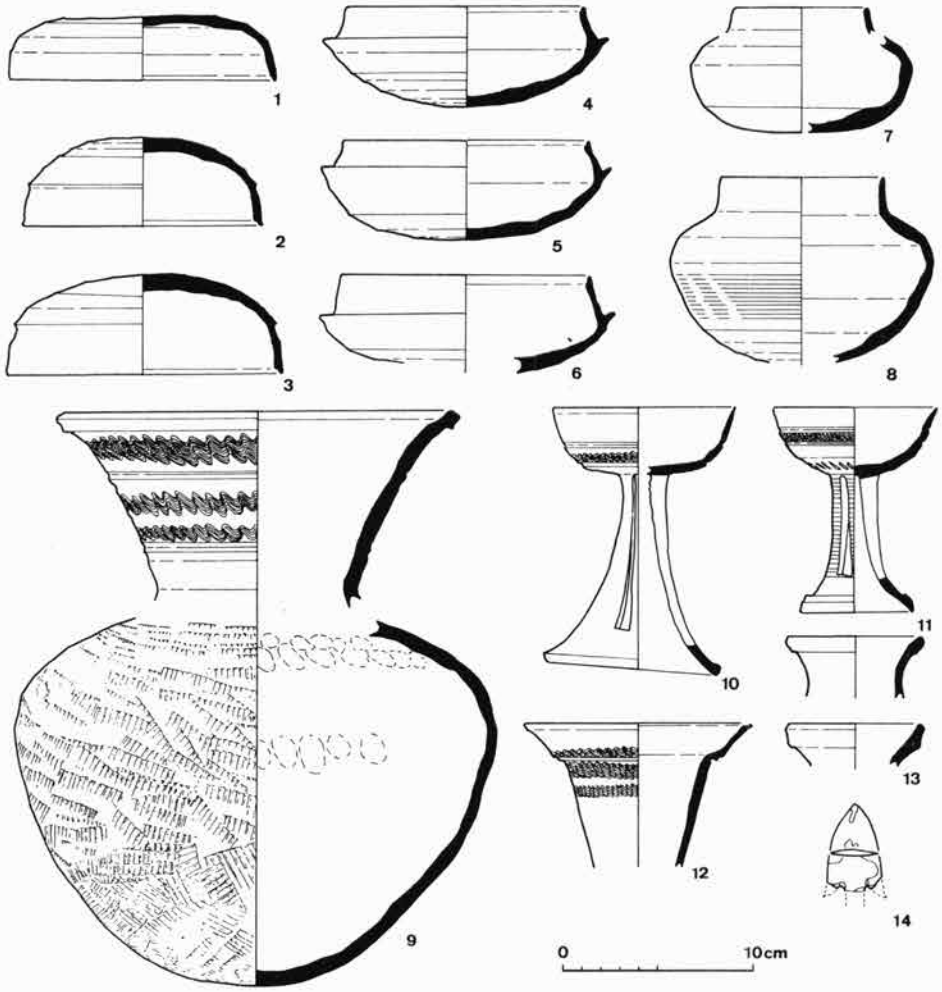
第28図　1号墳第1主体部内出土遺物（鉄製品）



第29図　　1号墳第1主体部内出土遺物（玉類）



第30図　　1号墳第2主体部内出土遺物（須恵器・鉄製品）



第31図　　1号墳墳丘出土遺物（須恵器・鉄製品）

となどから，同一の生産地で，同一時期に生産されたものと考えられる。3・4は杯蓋で，いずれも口径16.7cm・器高4～5cmを測る。稜は形骸化し，口縁端部には段を残している。天井部は，水平に近い弧状を呈している。5・6は杯身で，いずれも口径14.2cm・器高5.7cm程度を測る。立ち上がりは内傾し，口縁端部に段をもつ。受部は外上方へのび，端部は丸い。底部は平らである。7は，器高8cmを測る高杯である。杯部の口径は9.1cmを測り，脚部に方形透孔を3か所に設けている。8は，器高13.2cmを測る甕である。口径は11.3cmを測り，体部最大径10.2cmよりやや大きい程度である。円孔は，胴部が最大径をもつ位置に1か所ある。口頸部は，体部から緩やかに外反するもので，途中小さな段をもって口縁部と頸部とを区画している。口縁部および頸部には櫛描きによる波状文が施されている。底部は，叩きのあとナデ消されている。これら一群の須恵器は，中村浩氏の陶邑編年[(注12)]によるⅡ型式第3段階に比定できるものである。

第29図には，轡・留金具・鉄鏃・刀子などの鉄製品を掲載した。

1は，環状鏡板付の轡である。引手および銜は，それぞれ個別に鏡板に取り付けられている。鏡板は素環で，兵庫鎖を立聞としている。銜は二連式である。引手には引手壺がつく。2は，留金具で，馬蹄形に曲げた金属棒に，直線の刺金をおいたものである。

3～32は鉄鏃である。3～7の5本の一群と8～32の25本の一群とに分かれて出土した。錆化の進んだものが多く，細部の様子は不明である。形態的には柳葉形になるもので，逆刺のあるものとないものとに分かれるようである。全長は14cm程度で，茎長10cm程度のものが多い。また，矢柄の一部が遺存しているものも多い。

33～37は，刀子である。細部の分かるものは少ない。33は，鹿角装の刀子である。

第29図には玉類を一括した。1は，メノウ製の勾玉で，淡橙色を呈している。2～5は管玉で，2のみが小型で，白緑色を呈する石材を用いており，緑色凝灰岩製と思われる。3～5は，濃緑色を呈する石材を用いており，碧玉製と考えられる。6・7は，ガラス玉で，濃紺色を呈している。8～83は，ガラス小玉である。径5mm程度のもので，厚みは3～5mm程度のものが多い。濃紺色を呈するものが多く，淡青色を呈するものも5点認められる。

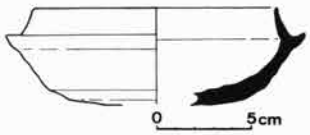
1号墳第2主体部内出土遺物(第30図)　1～4は，須恵器の杯である。1・2および3・4がそれぞれ重ねられた状態で出土した。杯蓋1・3は，それぞれ口径14.2cm・13.4cm，器高5.5cm・4.4cmを測る。いずれも稜は形骸化が著しく，口縁部の段も消失段階にある。天井部は丸みをおびている。杯身2・4は，口径がともに12cm程度で，器高はそれぞれ4.9cm・5.8cmを測る。立ち上がりは，一旦内傾したのち，やや屈曲して口縁部へ至る。口縁端部の段は消失している。受部は短く外上方へのび，端部は丸い。Ⅱ型式第2段階でも新

しい要素を含むものと考えられる。

5～7は鉄鏃である。5は錆化が著しく，細部は不明である。6・7は，平根式のもので，逆刺をもつ鉄鏃である。8は，全長29cm・刃渡21cmを測る短刀である。

1号墳墳丘出土遺物(第31図)　1は，1号墳墳丘の北東側裾部から出土した杯蓋である。稜は消失し，口縁端部には段が不明瞭にではあるが残されている。墳頂部出土の須恵器よりも一段階新しいものである。

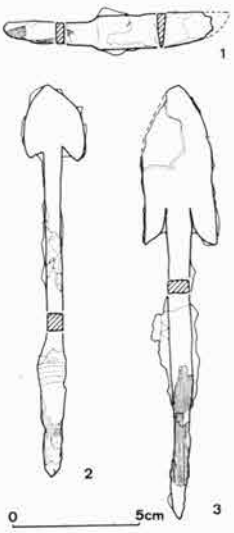
2～14は，1号墳の墳頂部にあけられた既掘坑周辺から出土した遺物である。2・3は杯蓋で，稜は形骸化してはいるものの，口縁端部には段を有している。4～6は杯身である。立ち上がりは，内傾しながら直線的にのび，口縁端部には段を有する。受部は，外上方へのび，端部は丸い。7・8は短頸壺である。9は広口壺で，口径20.4cm・器高約30cmを測る。体部外面には平行叩きが残り，内面は叩き痕をナデ消している。口縁部には3段にわたって櫛描きによる波状文がめぐらされている。10・11は，長脚一段透の高杯である。長方形の透孔は，3か所に設けられている。杯部外面には，櫛描きによる波状文を一段めぐらしている。11には，櫛歯による刺突文も加えられている。12は，甕の口頸部と思われる。頸部は，外上方へ直線的にのび，口縁下部に稜をもって口縁部へと続いている。口縁下部以下には，櫛描きによる波状文が3段程度認められる。13は，小壺類の口縁部であり，子持壺の存在した可能性も考えられる。14は鉄鏃である。なお，図示しえなかったが，土師器の壺が1点出土している。



第32図　2号墳盛土内出土遺物

墳頂部から出土した須恵器類は，ほぼⅡ型式第2段階に位置づけられるもので，第1主体部の埋葬にあたり，墓坑上で行われた葬送儀礼に供された遺物であるものと思われる。

2号墳墳丘盛土内出土遺物(第32図)　第32図は，2号墳の盛土内から出土した須恵器で，2号墳の築造時期を推定できる唯一の資料である。立ち上がりは，やや外反ぎみにのびるもので，端部は鋭い。受部はやや内傾してのび，端部は鋭い。底部は平らである。Ⅱ型式第3段階に比定できるものと考えられる。



第33図　2号墳出土遺物

2号墳主体部内出土遺物(第33図)　2号墳の主体部内からは，鉄製品のみが出土した。1は刀子である。全長9cm程度で，茎長3.7cmを測る。2・3は鉄鏃である。2は，三角形式に逆刺をもつ有茎鏃で，全長15.5cm・茎長13cmを測る。3は，平根式に逆刺をもつ有茎鏃で，全長17cm・茎長12cmを測る。

5 まとめ

桃山古墳群の調査により，木棺直葬による埋葬主体部3基を確認することができた。古墳群の築造時期は，出土遺物などから6世紀中頃ということが知られた。築造の順序は，1号墳が造営されるとともに第1主体部が構築され，あまり時期をおかずに第2主体部が造られたものと考えられる。2号墳は，1号墳第2主体部との間に一型式の型式差が認められることから，1号墳の埋葬が終わったのち，改めて造営された古墳であるといえよう。したがって，1号墳第1主体部→1号墳第2主体部→2号墳主体部という埋葬順序が与えられ，埋葬の期間も，四半世紀内におさまるきわめて短い期間に行われたものと思われる。

また，木棺部の構造でみると，それぞれの主体部で特徴があり，木棺自体の構造にも影響を与えているものと考えられる。1号墳第1主体部では，木棺押さえには特別な施設は認められないものの，棺台になると思われる石が墓坑内の木棺相当部の両側に認められた。1号墳第2主体部では，墓坑を確認したものの木棺部を検出することができなかったことから，特別な木棺押さえの施設はなかったものと考えられる。2号墳の主体部では，木棺の木口押さえの施設として，礫を混入した粘土塊を用いていた。丹後地域では，木棺の木口押さえの施設として，礫を用いる例は，弥栄町坂野4号墳(注13)，宮津市柿ノ木2号墳(注14)，峰山町カジヤ古墳(注15)，大宮町帯城3号墳(注16)などで確認されてはいるものの，礫を粘土で被覆している例は知られていない。

副葬品の内容をみると，1号墳第1主体部（須恵器8点＋直刀＋鉄鏃＋刀子＋轡＋留金具＋玉類など）→1号墳第2主体部（須恵器4点＋短刀＋鉄鏃）→2号墳主体部（鉄鏃＋刀子）というように，新しくなるにつれて副葬品の要素が大幅に欠落し，内容も貧弱となっていくことが読み取れる。この現象を桃山古墳群を造営した集団が，6世紀中頃を中心とした四半世紀のうちに，急激に没落していったものと理解すべきであろうか。6世紀後半期には竹野川左岸に，斬新な埋葬施設である横穴式石室を内蔵した桃谷1号墳(注17)が出現する。横穴式石室の導入が畿内勢力との紐帯のなかで生まれたことは想像に難くない。丹後における横穴式石室の導入期前のこの時期に，在地集団間での優劣が際立っていったとも考えられる。

横穴式石室導入の契機を理解するためには，6世紀中葉を中心とした木棺直葬墳のあり方を充分理解しておく必要があるものと思われる。

（三好博喜）

(3) 宮の森古墳群

1 位置と環境

宮の森古墳群とゲンギョウの山古墳群の所在する弥栄町は，丹後半島のほぼ中央部にあたる。両古墳群は町内を縦貫する竹野川左岸の鳥取地区北西方の丘陵上に位置している。

宮の森古墳群は，竹野郡弥栄町鳥取小字宮の森に，ゲンギョウの山古墳群は，同鳥取小字涼堂に所在する。両古墳群とも標高55～70m付近の尾根稜部に築造され，周囲の水田面との比高差20～30mを測り，この2つの古墳群は谷を隔てて向い合っている。

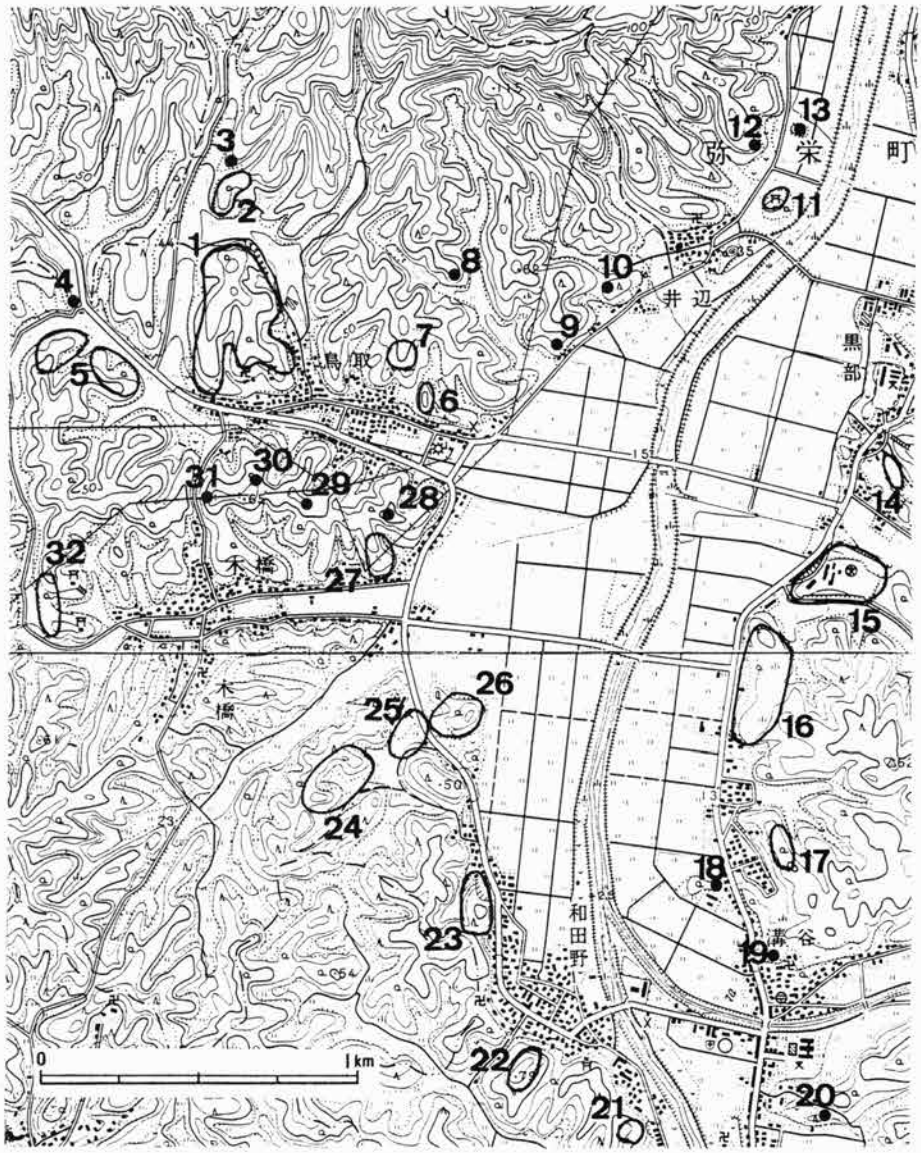
両古墳群周辺の歴史的環境を概観すると，弥生時代の代表的な遺跡として，竹野川右岸に奈具遺跡(注18)及び近接する奈具岡遺跡(注19)がある。前者は中期を中心とする集落遺跡，後者は後期を中心とする集落と墳墓からなる遺跡である。この奈具岡遺跡から竹野川を挟む北東約1kmの丘陵先端部には坂野丘遺跡(注20)がある。坂野丘遺跡は，多量の玉類を出土し注目された遺跡で，ガラス製勾玉6個・ガラス製小玉約500個・碧玉製管玉326個が報告されている。

古墳時代に入ると，奈具丘遺跡の北方2km余り，竹野川に向ってのびる丘陵端部に全長105mを測る黒部銚子山古墳が所在する。弥栄町の中心部，溝谷地区の南側の府道網野岩滝線沿いにはいもじや古墳，その対岸には，前方後円墳・円墳からなる太田古墳群(注21)がある。円墳の太田2号墳はその概要が明らかになっているが，周囲に円筒埴輪をめぐらしており，副葬品として多数の玉類，鉄器が出土している。また，本古墳群の南約300mの網野に向う街道沿いには，直径30mのニゴレ古墳(注22)がある。この古墳からは，鉄剣・短甲・形象埴輪等が発見されている。宮の森・ゲンギョウの山古墳群付近では，横穴式石室を内部主体とする石穴古墳群，鳥取地区東部では，大将軍古墳群・愛宕山古墳群・黒国古墳・谷奥古墳群などが確認されている。このように，今回の調査地付近は，多くの古墳が存在する密集地帯を形成している所でもある。 (鵜島三寿)

2 調査経過

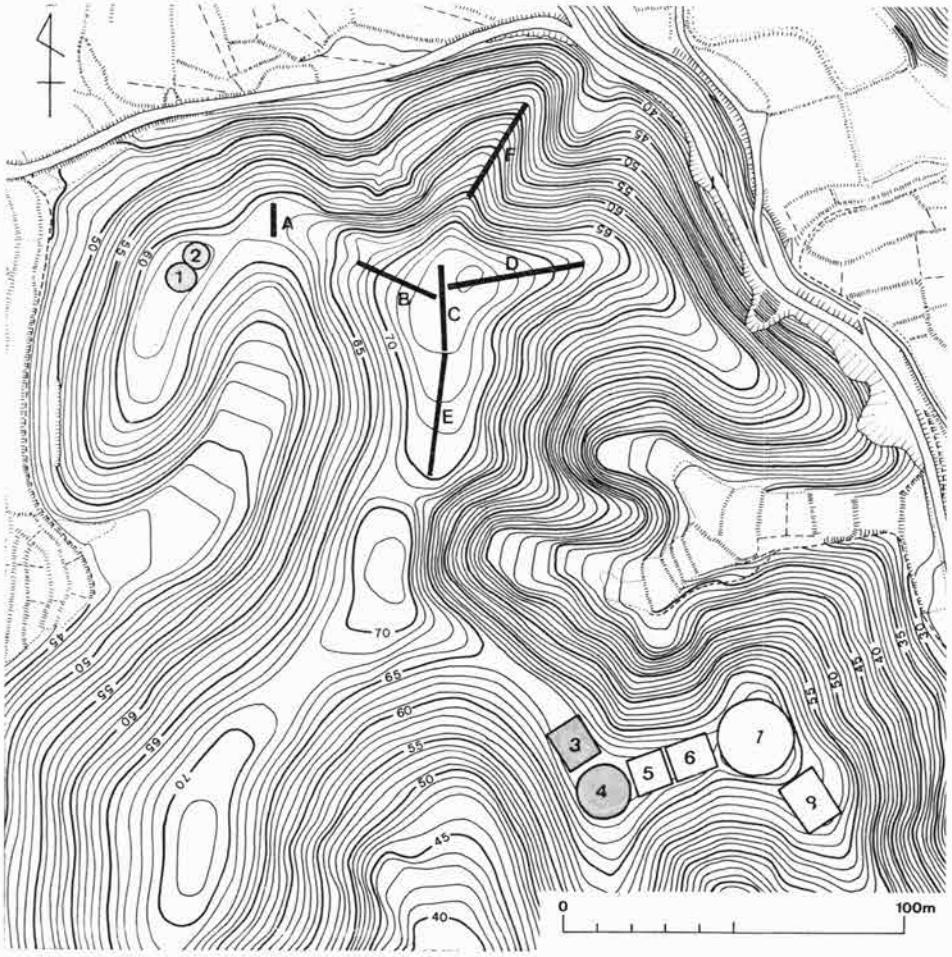
宮の森古墳群は，鳥取地区北西側に広がる低丘陵に立地しており，丘陵は稜部面積が比較的広い，樹枝状にのびる尾根より形成されている。尾根中位までは，戦中・戦後の開墾がよく残っており，各所にその痕跡をみることができた。古墳は，このような尾根稜部・頂部を利用して築造されており，宮の森丘陵上では，木棺直葬系と思われる古墳7基(第35図)が分布調査等でその存在が明らかとなっている。

調査の対象となったのは，宮の森丘陵最北西端のゲンギョウの山古墳群と谷一つ隔てて向い合う1・2号墳，丘陵中央部に位置し，近接して5基の古墳が連珠状に築かれている尾根高位側に位置する3号墳の計3基であったが，地形測量の結果，3号墳の北西側にも



第34図　周辺古墳分布図 (1/50,000)

1. 宮の森古墳群	2. ゲンギョウの山古墳群	3. 石穴古墳	4. ニゴレ古墳群
5. 鳥取古墳群	6. 大将軍古墳群	7. 愛宕山古墳群	8. 黒奥古墳群
9. 桑田古墳群	10. 小宮谷古墳群	11. 穂曽長古墳群	12. 稲荷古墳
13. 国原古墳群	14. 新谷古墳群	15. 奈具遺跡	16. 奈具岡遺跡
17. 久原古墳群	18. 丸山古墳	19. 竜淵古墳	20. いもじや古墳群
21. 古天皇古墳	22. 愛宕山古墳群	23. 寺谷古墳群	24. オテンジ古墳群
25. 坂野遺跡	26. 坂野丘遺跡	27. 堤谷古墳群	28. 赤井谷古墳
29. 留主田古墳	30. 黒国古墳	31. 谷奥古墳群	32. 奥ノ院古墳群

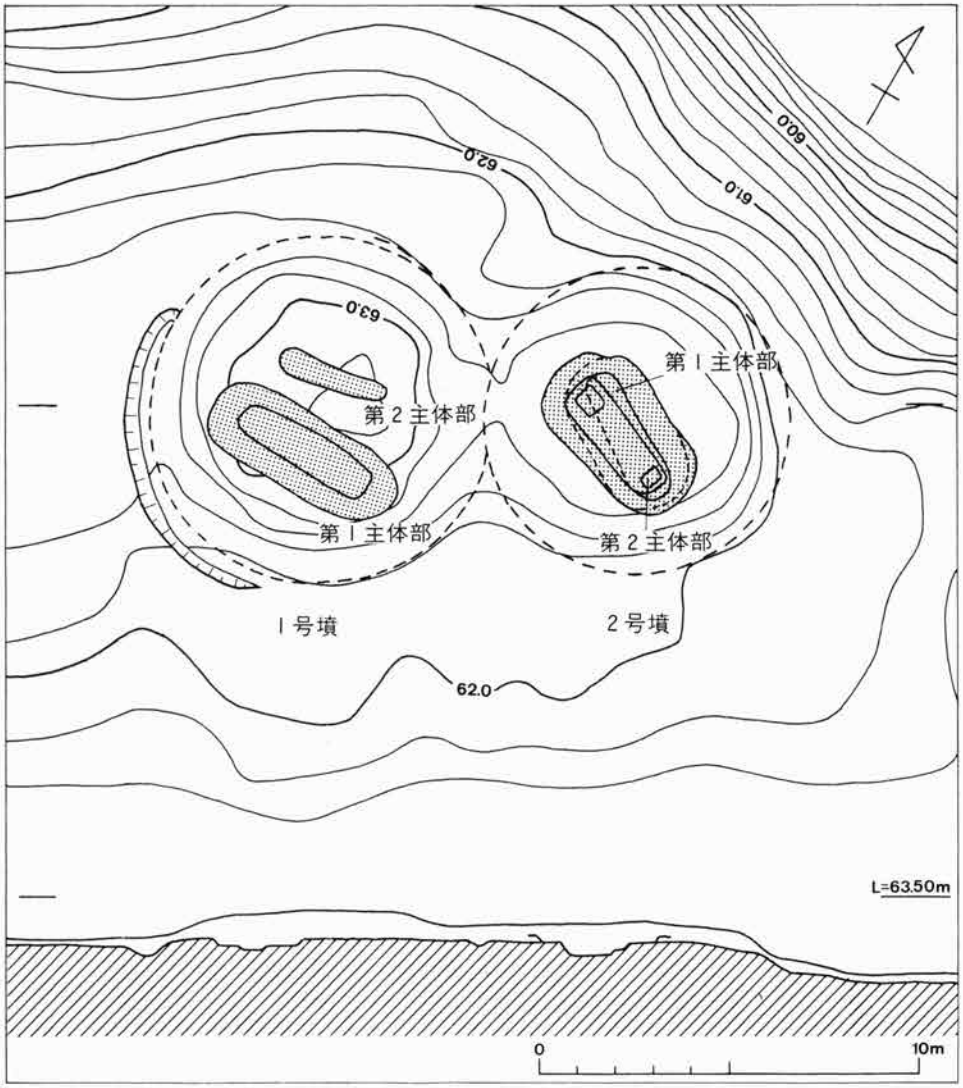


第35図　宮の森丘陵古墳分布図

もう一基古墳が存在しており，これを3号墳とし，3号墳としたものを4号墳とした。これにより，調査対象となったのは，1～4号墳までの4基であり，丘陵全体の古墳数は8基となった。また，2号墳の東側や，2号墳から3号墳にかけての稜部や，張り出した小支尾根上には，階段状地形，古墳状を呈する不自然な地形が各所に認められたため，試掘対象地として古墳の調査と並行して実施することとした。

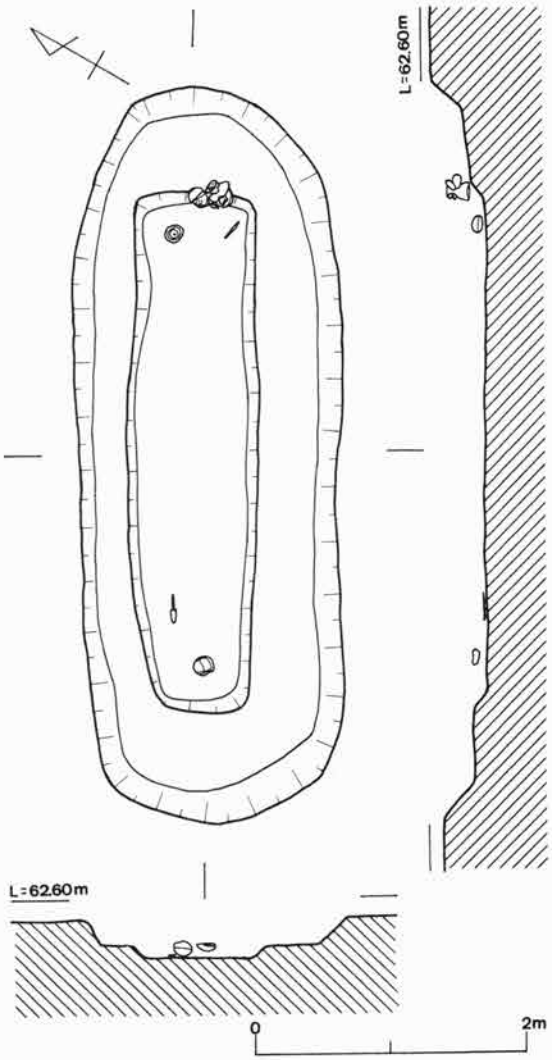
調査は，古墳の埋葬施設を検出するとともに，その築造方法を明らかにし，周辺の遺構の有無を確認することを主な目的として，古墳周辺も掘削を行った。試掘対象地の掘削も行ったため調査面積は1,000m²にも及んだ。

現地調査は，昭和61年4月24日より団地造成用測量杭を基準として，1・2号墳の地形測量図（1/50，20cm等高線）の作成を行った。3・4号墳・試掘対象地は，伐採の終了を



第36図　1・2号墳地形図

待って5月18日より開始した。掘削作業は5月28日より開始し，すべての表土を除去した後，埋葬施設の検出作業に入った。その結果，1号墳では2か所，2号墳では，ほぼ同一場所に重なり合った主体部2か所，3号墳では4か所の主体部を検出した。4号墳は，墳丘のほぼ1/2が造成用地外となるため，一部しか掘削できなかったが，1か所の主体部を検出した。作図・写真撮影作業はその都度行い，7月19日には発掘器材すべての撤収を行い，調査を終了した。なお，現地説明会は7月12日に予定をしていたが，大雨により中止したため，一部の関係者のみ行った。



第37図　　1号墳第1主体部実測図

3 調 査 概 要

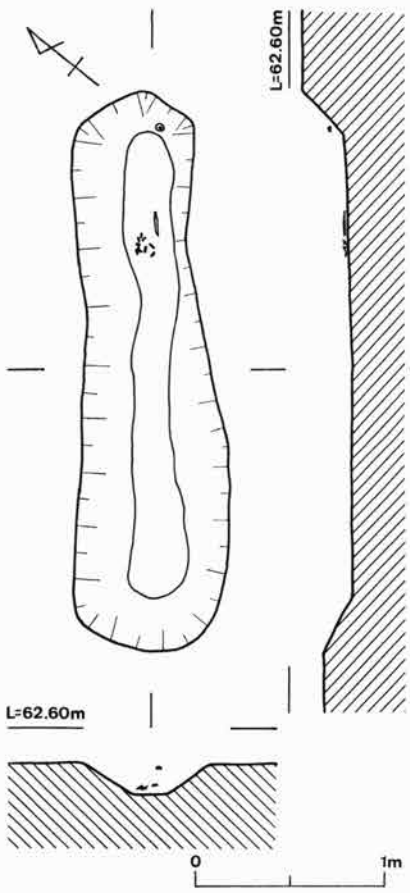
①宮の森1号墳(第36図)　丘陵最北西端の尾根稜部面積の広い平坦部に築造されており，2号墳と近接して築造されているため，墳丘の一部が重なり合っている。1・2号墳とも墳丘高がほとんどないため，量感に欠ける。

墳丘は，自然地形の起伏を最大限に利用し，墳丘基底部を削り出し円形台を成形する。削り出し後の尾根稜部平坦面は，墳丘部分を除き南東側は完全に平坦化するが，北西側はやや自然地形が残る。また南西側には，外部施設として墳丘を1/3周する尾根と区画する溝が設けられている。溝は幅0.7m・深さ0.25mで，側壁は「U」字形をなす。溝は北から南に向って流れるように設けられており，調査中に降雨に見舞われても滞水することはなかった。2号墳と接する南西側は，2号墳築造の際に1号墳の墳丘を一部削っている。調査の結果，1号墳は，直径9m，南東側からの高さ13mの規模を有することが判明した。

埋葬施設は，墳頂部中央で大・小2か所の墓坑を検出した。また，木棺を安置してから盛土が施されており，盛土は約0.8mを認めた。

第1主体部(第37図)　墳頂部中央より南東側で検出したもので，その主軸をほぼ東西方向にとる木棺墓である。墓坑は，地山削平面より穿ち，二段掘形を有する。掘形の規模は，長さ5.5m×幅2.0mで隅丸長方形を呈する。木棺部分の掘形は，長さ3.9m×幅0.9m，検出面からの深さ0.4mで，棺底面は水平面を保つ。組合式木棺の使用が考えられる。

遺物は，木棺部掘形東側上面より土師器高杯3(第47図13～15)，棺内底面東端より須恵



第38図　　1号墳第2主体部実測図

器杯身・杯蓋(第47図1・2)がかぶさった状態で1組，刀子1(第48図2)が，またその西側からは土師器坩1(第47図11)，切先を西側に向けた鉄鏃1(第48図1)も出土した。遺物等から頭位は，東と考えられる。

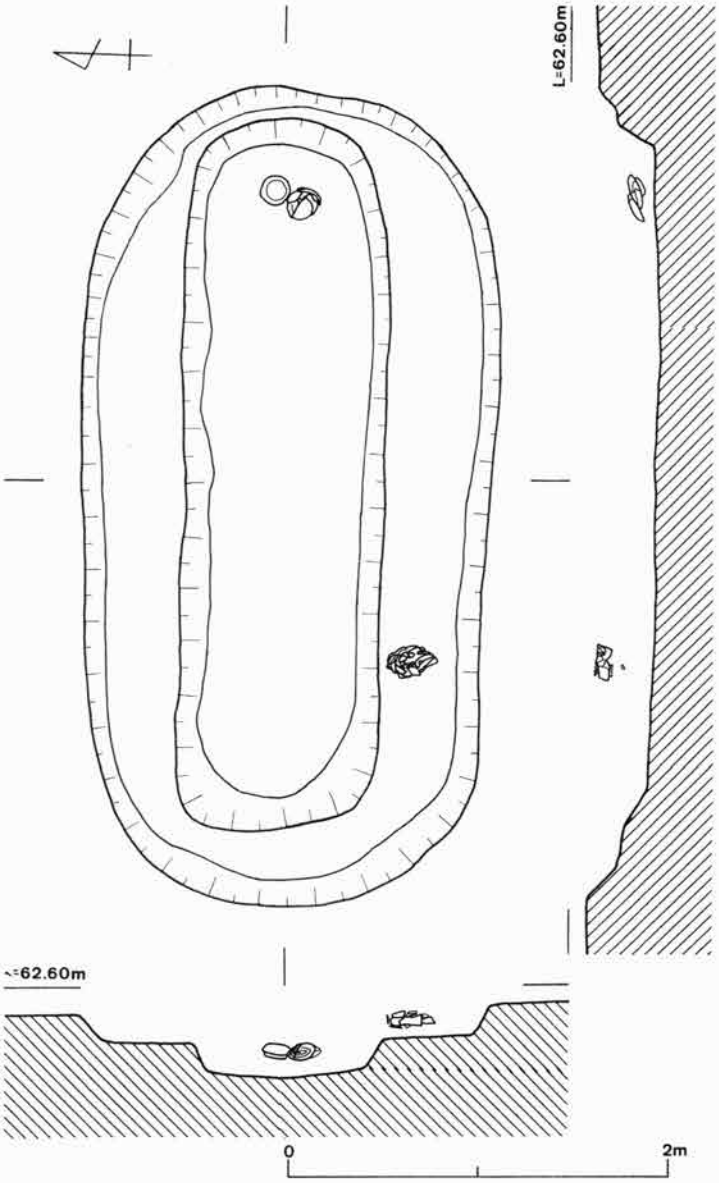
第2主体部(第38図)　墳丘中央部分で検出した素掘りの土坑であり，その主軸は第1主体部と平行する。土坑は，地山削平面より穿ち，掘形・底面ともやや不整形な隅丸長方形を呈する。掘形の規模は，長さ2.94m・南西側幅0.8m・北東側幅0.65m・深さ0.2mを測る。側壁は「⊔」字形をなし底面は，やや南西下がりである。

副葬品として，墓坑中央よりやや北東寄りの底面より碧玉製管玉9(第49図1～9)，刀子1(第48図3)，北東端からは，滑石製紡錘車1(第49図10)が出土した。

木棺痕跡は認められなかったが，規模の割には墳丘中央部に位置している点から，第1主体部に伴う副葬品のみを埋葬した副室的な土坑とも考えられる。

また，第2主体部の北側に広がる空間は，精査を行ったが埋葬施設は存在しなかった。後の被葬者のためにあけられた空間とも想像される。

②宮の森2号墳(第36図)　1号墳同様，自然地形の起伏を最大限に利用し，円形台を成形する。基底部の1/3は，急崖な自然地形の中に入るが残り2/3は1号墳と接する部分と削り出した際の平坦面となっている。墳丘の一部が，急崖な自然地形の中に入るという地形的な制約の中で造営を行ったため，2号墳は1号墳の墳丘の一部を削っている。この1号墳と基底部が重複する北側には，2号墳築造の際にできたと思われる浅い溝状に凹んだ古墳を取り巻く痕跡も残っていた。自然地形に入る部分を除き，その基底部は明瞭に区別できたが，自然地形に入る部分については，削り出した際にできた傾斜変換点によりそれが認められた。盛土は，削平面に一度盛土し，墓坑を穿ちさらに盛土をしており，全体で約0.45mの盛土を確認した。これらのことから，2号墳は直径8m，南東側からの高さ1mの墳丘をもつことが明らかとなった。

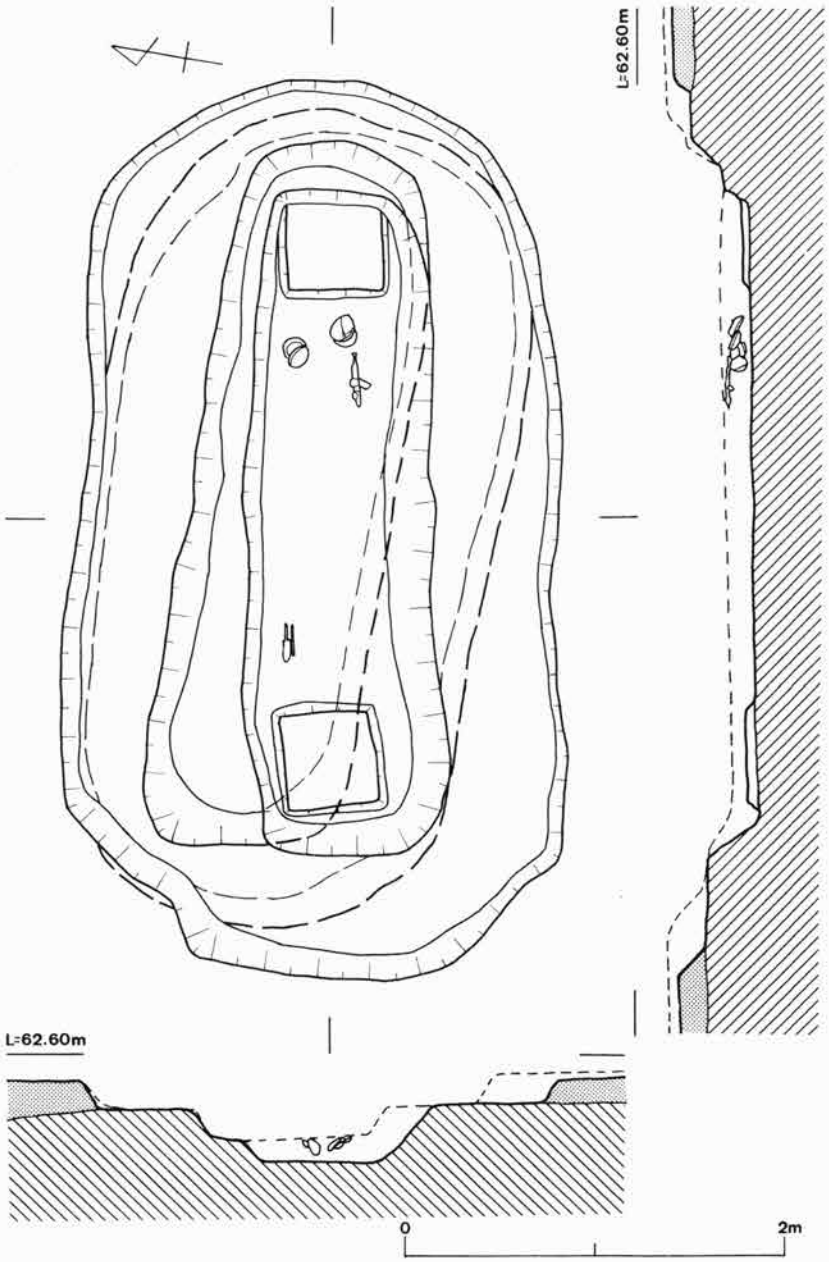


第39図　2号墳第1主体部実測図

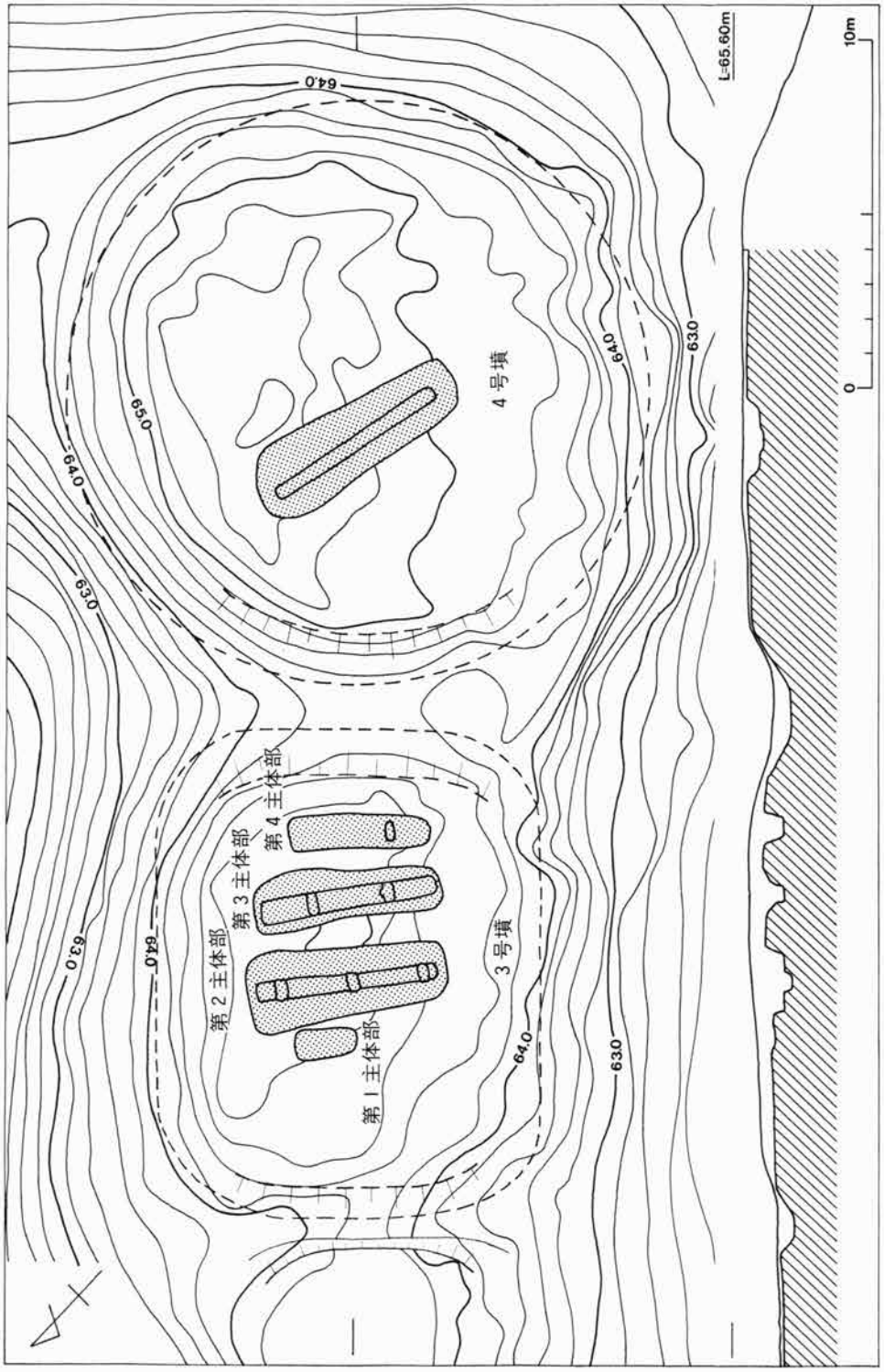
埋葬施設は，墳丘中央部でほぼ同位置に重なり合った墓坑2か所を検出した。後のものを第1主体部，先のものを第2主体部とした。

第1主体部（第39図）表土下－25cmの浅い所で検出したもので，その主軸がほぼ東西方向の墓坑は，盛土面より穿ち，二段掘形を有する。木棺部掘形は，地山面より掘り込まれている。掘形は，長さ4.3m×幅2.2mを測り隅丸長方形を呈する。木棺部は，長さ3.7m×幅0.9m，検出面からの深さ0.38mを測る。木棺部側壁は「⊔」字形をなす。底面は水平面を保つが，約1/2が地山面で残りが第2主体部棺内埋土となっている。木口穴等は存在しなかったが，組合式木棺の使用が考えられる。

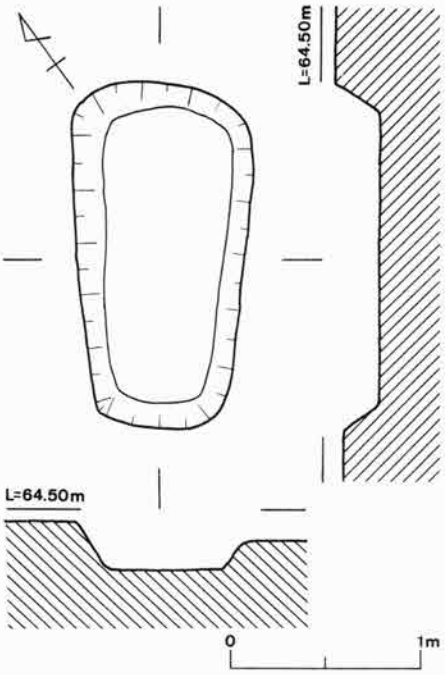
遺物は，掘形埋土上面より，焼成の悪い須恵器甕（第47図6）1個体分が，破砕された状態で出土した。棺内からは，東端底面より須恵器杯身・杯蓋がかぶさった状態で1組（第47図3・4）と，杯身（第47図5）のみが並べられた状態で出土した。これらのことから考



第40図　2号墳第2主体部実測図



第41図　3・4号墳地形図



第42図　　3号墳第1主体部実測図

えて，頭位は東と思われる。

第2主体部(第40図)　主軸をほぼ東西方向に置く木棺墓である。切り合い関係を有するため掘形北辺と，木棺部の北・東辺を欠くが，隅丸長方形を呈し，二段掘形を有する。墓坑は，盛土面より穿ち，復元規模は長さ4.7m×幅2.4mで，木棺部は長さ3.5m×幅1.1m，検出面からの深さ45cmを測る。側壁は「⊔」字形をなし，底面は水平面を保つ。木棺は，両木口部分を青灰色粘土を混ぜ硬くしまった土を58cm×50cm～60cm，厚さ5cmにわたり置いて木口を固定させていた。

内部からは，東側木口付近より杯身，杯蓋がかぶさった状態で2組(第47図7～10)並べられ，その横には，刀1(第48図6)が切先を西に向け置かれていた。西側木口付近では，切先を西に向ける鉄鏃2(第48図4・5)が出土した。

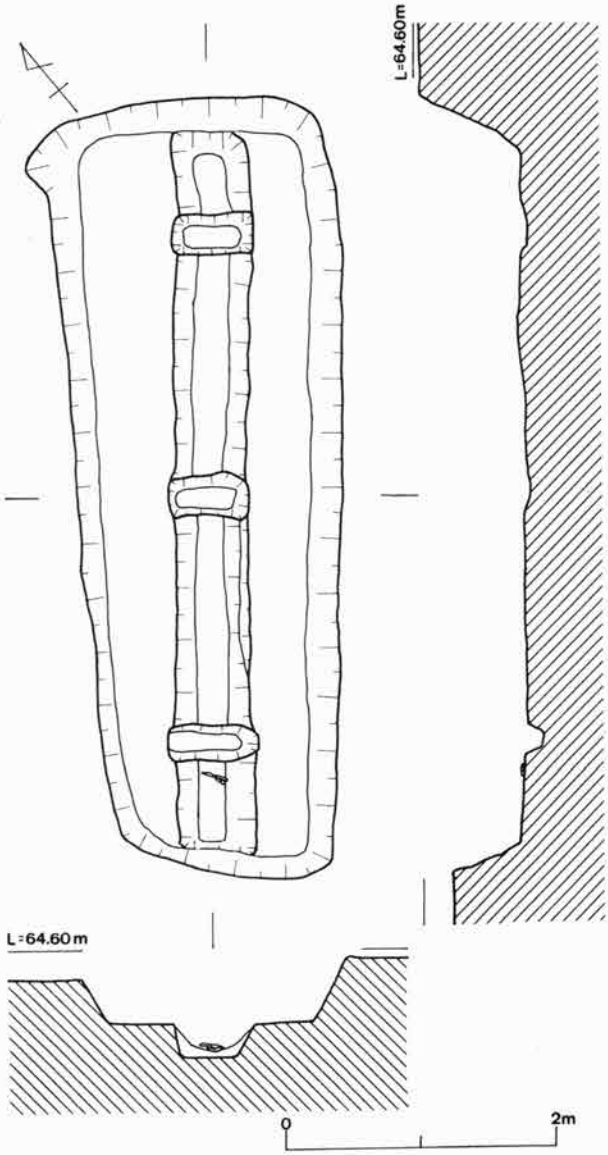
③宮の森3号墳(第41図)　尾根筋に6基の古墳が連珠状に築かれている部分の高位側，基点となる位置にある。墳丘は，自然地形を削り出し方形台を成形する。墳丘基底部は，尾根両側面については，削り出し面と自然地形の傾斜変換点によりそれを求めることができ，尾根高位側には，外部施設として尾根と分断する直線的な溝が設けられている。溝は中央付近のみ遺存状態が良好で，斜面側にはほとんど残っていない。中央付近での溝幅1.9m・深さ0.5mを測る。4号墳との間にも，削り出した際にできた溝により区画される。盛土は，墳頂部中央で約0.8mを確認した。

これらのことより墳丘規模を求めると長辺14m×短辺11m，高さ1.2mとなる。

埋葬施設は，墳丘頂部に平行して並ぶ4か所の墓坑を検出した。北西端より第1主体部，順に南東に向い第2・3・4主体部とした。

第1主体部(第42図)　主軸を尾根に直交する素掘りの土坑墓である。土坑は地山削平面より穿ち，長辺1.8m×短辺0.9m，検出面からの深さ0.26mを呈し，隅丸長方形をなす。木棺痕跡は確認できず規模の点からも，木棺は使用されなかった可能性が強い。遺物は出土しなかった。

第2主体部(第43図)　3号墳の中央部に位置する二段掘形を有する木棺墓である。主軸

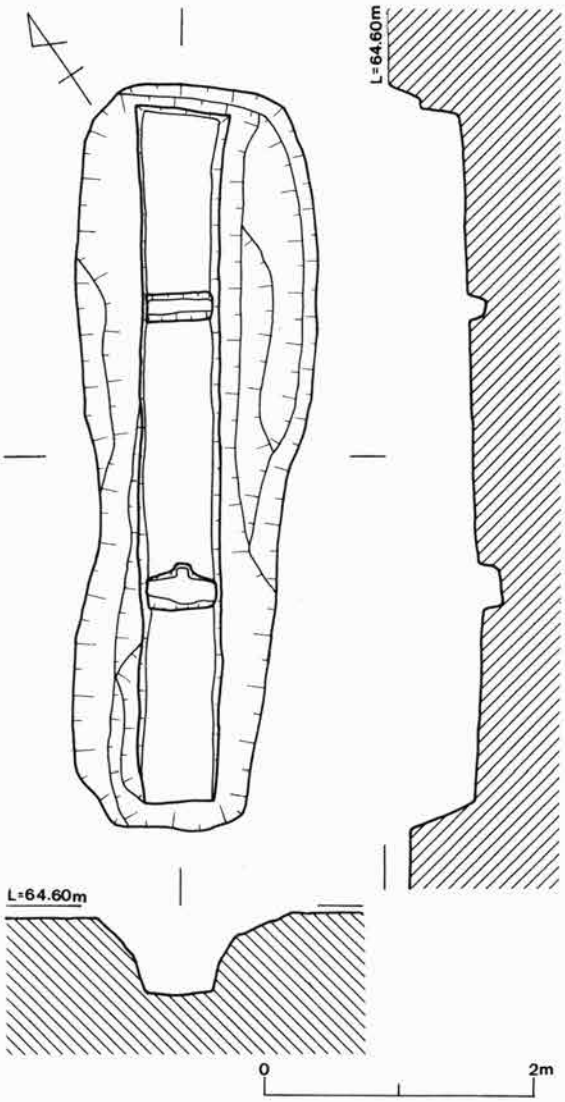


第43図　3号墳第2主体部実測図

は尾根に直交する。墓坑は，隅丸長方形を呈し，地山削平面より穿ち，長辺5.76m×短辺2.0m，木棺部分掘形は，長辺5.5m×短辺0.56m，検出面からの深さ0.76mを測る。側壁は「⊔」字形をなし，底面は水平面を保つ。木棺部分は，棺を2分割するかのように，木棺部分掘形検出面より幅約30cmの木口穴状掘り込み3か所を検出した。組合式木棺と推定される。

遺物は，南西側木口状掘り込み部分より，釘1・鉇2・鎌状鉄器1（第48図）が出土した。

第3主体部（第44図）　第2主体部のすぐ南東側に位置する二段掘形状を呈する木棺墓である。主軸は，尾根に直交する。墓坑は，地山削平面より穿ち，北東側がやや膨むいびつな隅丸長方形を呈し，長辺5.5m×短辺1.6m，木棺部分掘形は，長辺5.1m×短辺0.6m，検出面からの深さ0.64mを測る。墓坑掘形検出面から，木棺部掘形まではその範囲がはっきりせず，だらだらとした掘形となっている。木棺部側壁は「⊔」字形を成し，底面はやや南東下がりの傾斜をもつ。木棺部底面には，幅約20cm・深さ約14cmの掘り込み2か所が認められ，3等分するかのようになっている。この3等分された部分の空間は，中央部分が，両端の空間に比して約50cm広くなっており，この部分が遺体安置部分と考えられる。形状から組合式木棺が推定される。遺物は出土しなかった。

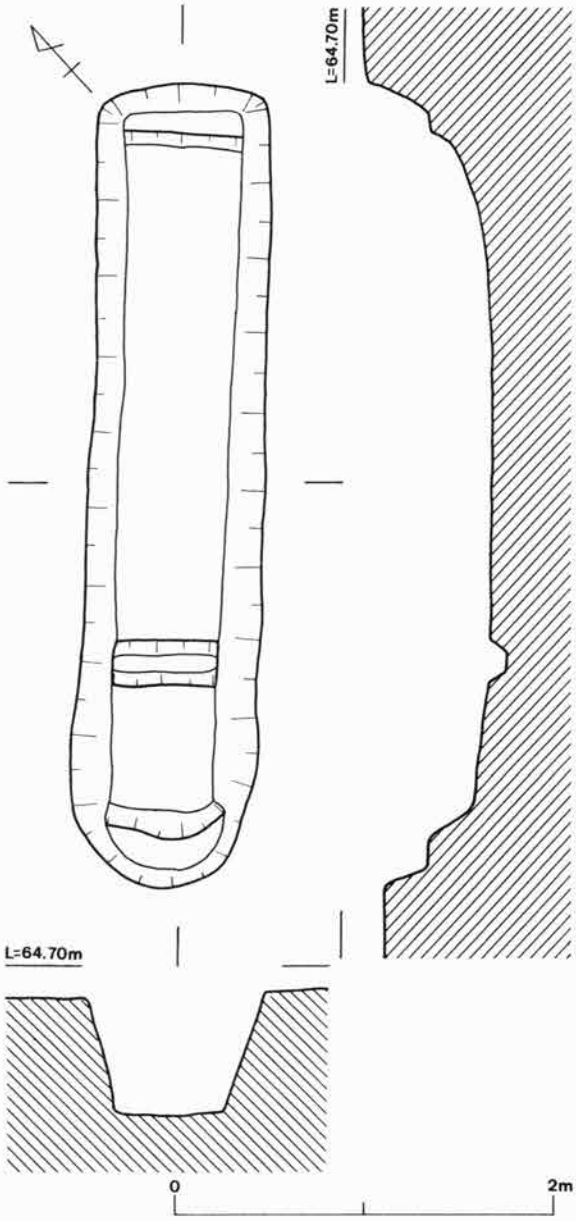


第44図　　3号墳第3主体部実測図

第4主体部(第45図)　墳丘頂部南東端に位置する素掘りの木棺墓である。主軸は尾根に直交する。墓坑は，地山削平面より穿つ隅丸長方形を呈し，長辺4.22m×短辺0.94m，深さ0.64mを測る。側壁は「⊔」字形をなすが，南東壁側はやや外に開きぎみである。底面は，南西側2/3は水平面であるが，北東側1/3はやや上方にそりあがっている。また，底面南西側には幅23cm・深さ10cmの掘り込みも認められた。北東・南西側掘形中位には12～16cmの段がつき二段掘形状を呈している。組合式木棺が推定される。遺物は出土しなかった。第1主体部北西側に広がる空間は精査を行ったが，埋葬施設は検出されなかった。

④宮の森4号墳(第41図)　3号墳の南西側に位置し，東側は連珠状に古墳が築造されていく尾根最高所，階段状地形を呈する起点となるところであり，またゆるやかな傾斜でさらに南へとのびていく尾根もあり，尾根が3方向に分かれる分岐点でもある。農地造成予定範囲が本古墳を北東側から南西側にかけて二分する形になるため，造成予定地内のみ調査対象としたため，全体像については不明な点が多い。地形測量は，造成予定地外部分については，立木の間をぬって行ったため，古墳周囲が未測量である。

墳丘は，自然地形の起伏を最大限に利用して円形台を成形する。北側基底部は，急崖な自然地形の中に入るが，西側は削り出した際に幅30cmの平坦部ができている。3号墳との間には，削り出した際に出来た尾根に直交する溝がみられるが，3号墳に伴うものか，

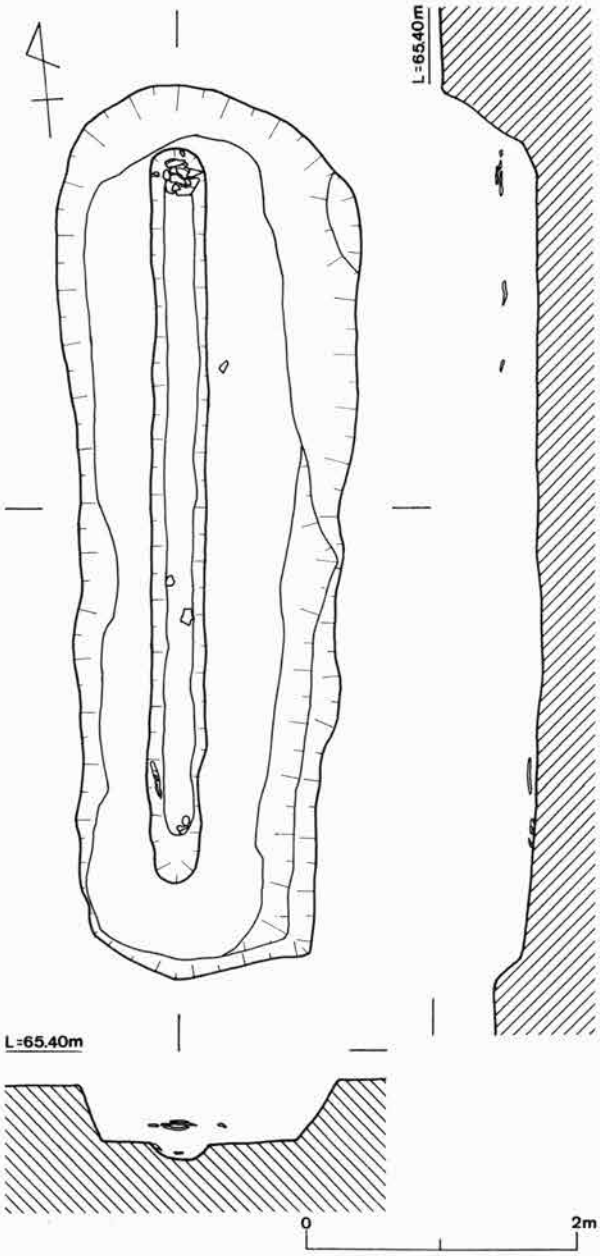


第45図　3号墳第4主体部実測図

4号墳の溝なのかは不明である。また，西側については，未調査のため区画については不明である。墳頂部削り出し面が，南西下がりとなっているため，墳丘盛土もそれに従い流失したようで，墳頂部中央より南西側ではその痕跡が認められた。もっともよく残存する部分で盛土は20cmを確認した。これらのことから，3号墳は直径16～17m・高さ1.8mの墳丘規模が推定される。

埋葬施設は，墳丘頂部中央付近からやや西側寄りに長大な墓坑1か所，造成予定境界付近で，中央墓坑の南側に主軸を東西方向に置く墓坑の一部1か所を確認した。境界付近で検出したものは，墓坑内に，造成用基準コンクリート杭があり墓坑自体も造成で破壊されないことから，調査は行わなかった。

主体部(第46図)は，復元墳丘頂部中央よりやや西寄りで検出した。二段掘形を有する木棺墓である。主軸は南側に延びる尾根に平行し，ほぼ南北方向に置く。墓坑は，地山削平面より穿ち，北側がやや膨む隅丸長方形をなしている。墓坑掘形は，長辺6.6m×短辺2m，木棺部分掘形は，長辺5.42m×短辺0.42m，墓坑掘形検出面からの深さ約0.7mを測る。前述したように，墳頂部削平面が南西下がりとなっているため，掘形から底面までは，北側では0.7m，南側では0.2mと南側がかなり浅くなっている。このことは，木棺部分掘形をみても同様で，北側では0.12m・南側ではそれをほとんど認め



第46図　　4号墳主体部実測図

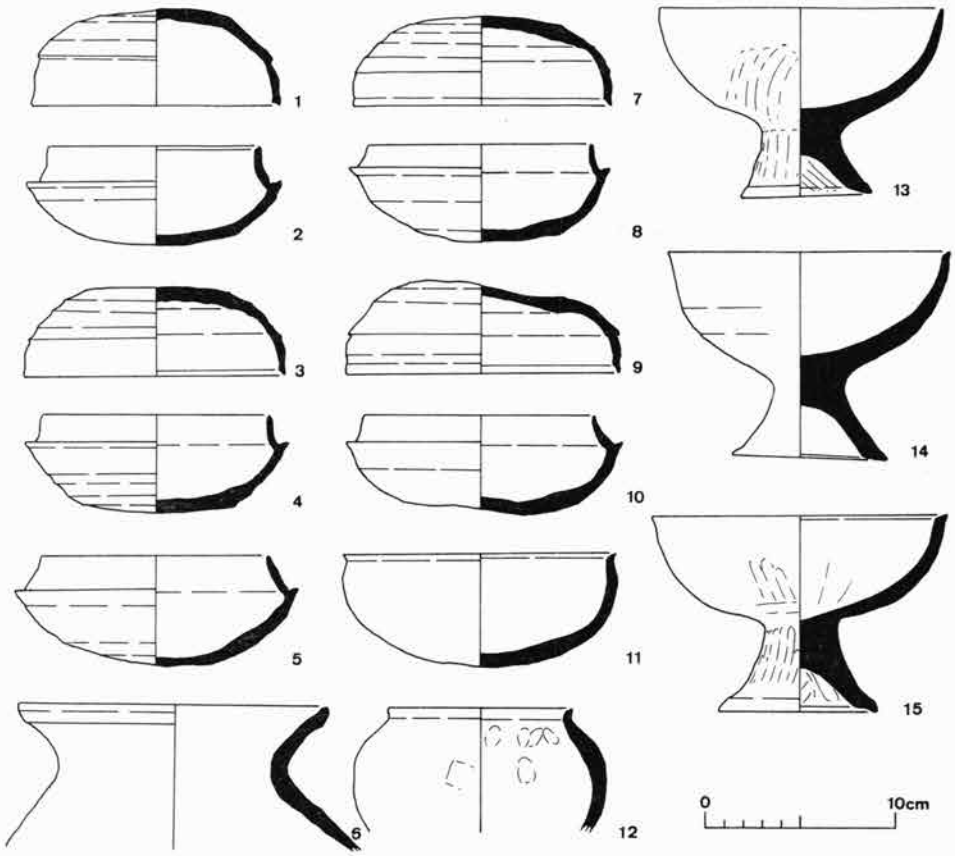
ないほど浅くなっている。木棺部側壁は「U」字形をなし，底面は水平面を保つ。形状から割竹形木棺と推定される。

遺物は，木棺部掘形検出面北端より，土師器甕胴部片が一括して出土したが，復元・図化できるものではなかった。棺内からは，南端近くより切先を北に向ける鉄剣1（第48図11）が出土した。その他，棺内底面からは，花崗岩の小礫（拳大）が5個ほど認められた。

⑤試掘調査（第35図）　試掘調査は，古墳隆起・階段状を呈する不自然な地形が各所にみられたため，古墳の調査と平行して実施した。

調査は不自然な地形を呈する部分に，尾根に平行，直交する形で6か所の試掘トレンチ（A～F）を設定した。その結果，5段にわたる階段状を呈していたAトレンチ，2～3段の階段状を呈していたB・C・E・Fトレンチとも，開墾により畑地とされた痕跡と判明した。開墾された時期は不明であるが，Dトレンチの表土中より寛永通寶1枚が出土した。一方，直径9m，周囲3/4を溝状の凹みが取り巻き，高さ1mあまりの古墳とみられた部分は，トレンチ（A）を入れた所すぐ地山面となり，自然地形であることが判明した。

このように，トレンチとも古墳の存在を示すような遺物・遺構等はまったく検出されな



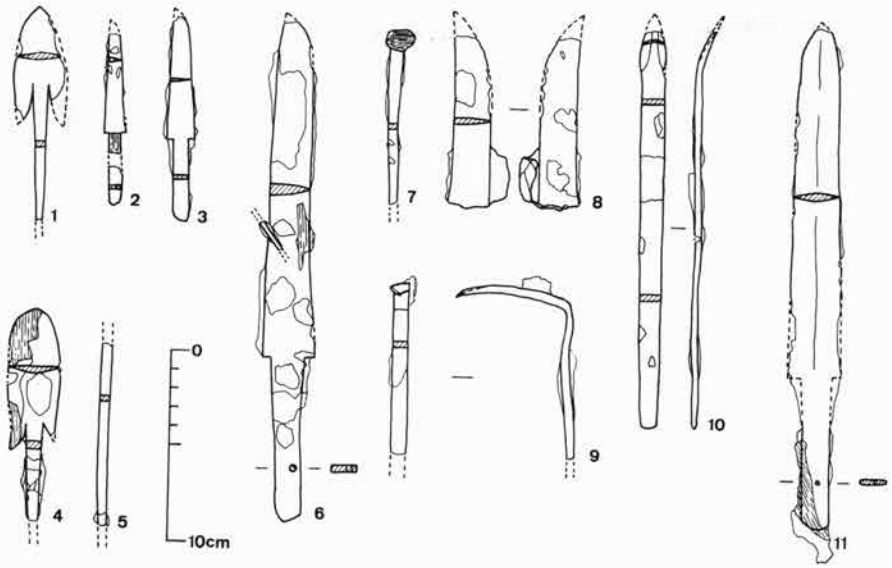
第47図　出土遺物実測図 (1)

かった。

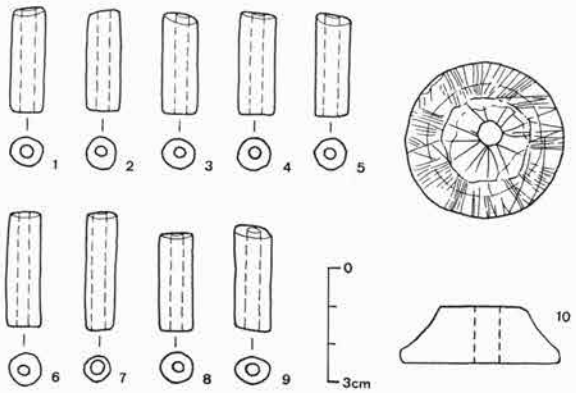
4 出土遺物

土器類(第47図1～15，図版第20：1～9，21：10～14，22：1～11)　1・2(図版第1・2)は，1号墳第1主体部より重なった状態で出土したものである。焼成も重ねた状態で行われたようで，切り離した痕跡が残る。1は，口径13.2cm・器高5cm，天井部と口縁部の境には形骸化した稜をもつ。口縁部内側に明瞭な段を有し，天井部は丸味を帯び高い。外面天井部1/2は回転ヘラ削り，他は回転なで調整。2は，口径11.2cm・器高5.2cm，内傾し屈曲して立ち上がる口縁部をもち端部内面には段をもつ。底部外面1/2は回転ヘラ削り，他は回転なで調整。

3～5(図版第20：3～5)は，2号墳第1主体部，7～10(図版第20：6～9)は，2号墳第2主体部から出土したもので，3・4と7・8，9・10は重なった状態で出土しておりセットである。杯蓋(3・7・9)は，口径13.6～14.4cm，器高4.5～4.8cmを測る。稜が



第48図　出土遺物実測図 (2)



第49図　出土遺物実測図 (3)

残るもの (9) と稜がほとんどなくなるもの(3・7)がある。口縁端部内面には段を有する。天井部外面1/2～1/3は回転ヘラ削り，他は回転なで調整。杯身は，口径11. 8～12. 4cmを測り，内傾したのち立ち上がり端部を丸くおさめるもの(4・8)，立ち上がりが内傾し端部が丸いもの(5・10)がある。受部は外上方にのび端部は尖る。底部は深く丸いもの(4・5・8)がある。6は，2号墳第1主体部検出面で出土した須恵器甕で，「く」字形に屈曲する頸部から外上方にのび，口縁部で少し屈曲したのち外上方にのび端部は丸くおさめる。内外面とも磨滅が著しい。

11・13～15(図版第21：11～14)は，1号墳第1主体部より出土した土師器で，11は口径14. 4cm・器高5. 8cm。大きく内湾し，「く」字形に屈曲し，外上方にのびる口縁部をもち端部は尖る。内外面とも磨滅が著しい。13～15は，11の杯に似ており，大きな杯部に口径の小さい脚部がつく。杯部は13のみ口縁端部内面に段を有さず丸くおさめる。外面はヘラ削り，内面は磨滅している。脚部は「ハ」字形に広がり，脚柱部は太く短い。端部は内面に段をもつ。13・14はヘラ削りが残る。12は，1・2号墳の間より出土したもので坩と思

われるが，口縁端部の形状は11によく似るが器壁が厚い。口径10.6cmを測る。

鉄製品(第48図)(図版第22)　1～3は1号墳より出土し，1・2は第1主体部，3は第2主体部より出土したものである。1は，平根式の鏃で鏃身・逆刺・茎の一部を欠失する。現存長11.2cm。2は，切先・茎の一部を欠失するが，全長10cm程のものと思われる。刃部の幅は関の部分で最大になり1.2cmを測る。関は両側とも直角に切り込む。柄の木質が付着するが原形をとどめていない。径3mmの目釘穴が見られる。3は，切先を欠失し，現存長10.6cmである。2同様，関部分で刃部の幅は最大となる。

4～6は，2号墳第2主体部より出土したもので，4は平根式の鏃で，逆刺・茎の一部を欠失する。現存長11.2cm。鏃身と茎の一部に木質が付着。5は鏃と思われるが，茎部分のみである。6は刀で断面はやや膨らむ二等辺三角形を呈する。現存長26.2cm，刃部に木質の付着がみられる。棟側には径2mm・現存長1.8cmの針状の鉄器も付着する。径4mmの目釘穴がみられる。

7～10は，3号墳第2主体部より出土したもので，7は釘と思われ，先端を欠失するが，現存長9.2cm，頭部はほぼ円形をなす。8は鎌と思われるが，刃部が内湾せず外反している。切先の一部を欠き，もと部はわずかに折れ曲がっている。現存長9cm。9・10は鉋で，9は中央付近で直角に折れ曲がり，基部を欠く。刃部は三角形状をなし裏がくぼむ。刃部長2cm。10は現存長21cm，刃部は三角形状をなし裏がくぼむ。刃部長2.2cm。

11は剣で，4号墳より出土した。刃部の一部を欠損する。関は錆化が著しいが，両側を直角に切り込むようである。茎部には木質部が認められるが，柄の木質とは別のものと思われる。刃部断面は菱形をなすが，部分的にしか稜は認められない。径2mmの目釘穴が認められた。

玉類(第49図1～9)(図版第21：10)　1号墳第2主体部より9点出土した。緑色凝灰岩製で直径0.7～0.9cm，長さ約2.6～3.1cmを測る。

紡錘車(第49図10)(図版第21：10)　1号墳第2主体部より出土したもので，滑石製である。頂部径約2.3cm・底部径4.1cm・高さ1.5cm，中央に径6mmの孔を穿つ。底面は，中央の孔から放射状にのびる不規則な線刻が6本みられる。側面は，鋭利な線刻がみられるが規則性がない。一部鋸歯文状を呈する部分もある。

5　ま　と　め

宮の森古墳群では，4基の古墳を調査し，9か所の埋葬施設を検出した。1号墳出土の須恵器は，陶邑古窯址群の型式編年と対応させれば，中村編年(注23)のⅡ型式1段階に相当するが，やや古い要素をもつ。2号墳はⅡ型式の2段階に相当するがやや新しい要素をもつものもある。並行関係からすれば6世紀前半，6世紀中頃に築造されたものと思われ，2号

墳第１主体部は，Ⅱ型式２段階の新しい要素をもつものとなる。

３・４号墳については，その時期を明確にする遺物が認められなかったが，立地・墳丘・主体部の規模，主体部に伴う遺物が乏しいことや，他の例などからして４世紀末～５世紀前半に築造されたものと考えられよう。

検出した埋葬施設は，築造時期により形状・規模に多少の差異が認められる。４号墳と３号墳第１主体部・１号墳第２主体部を除く主体部は，いずれも組合式木棺が使用されていたと思われるが，１・２号墳では，木口部分の固定がなされているものといないもの，３・４号墳では，長大な墓坑という点では共通性が認められる。また，遺物の出土状況についても共通性があり，主体部の枕となる位置には須恵器杯身・杯蓋をセットで配置し，さらにその横には鉄器を置き，足もとには鉄器を配する点があげられる。いずれも複数の主体部を有するものであり，家族単位の集団墓的性格を帯びるものと思われる。

墳丘の築造方法にしても，地山成形により基底部・墳丘を造り出し，若干の盛土を施すという，一貫してほとんど変化のない築造方法を行っている。

鳥取地区周辺は，古墳の密集地帯を形成しているが，今までにほとんど発掘調査例がなく，多くの古墳の存在が知られながらも実態がよくつかめていないところであった。宮の森古墳群の発掘調査は，当地域の古墳文化の理解を深めるための貴重な資料を提供した。

（増田孝彦）

(4)　ゲンギョウの山古墳群

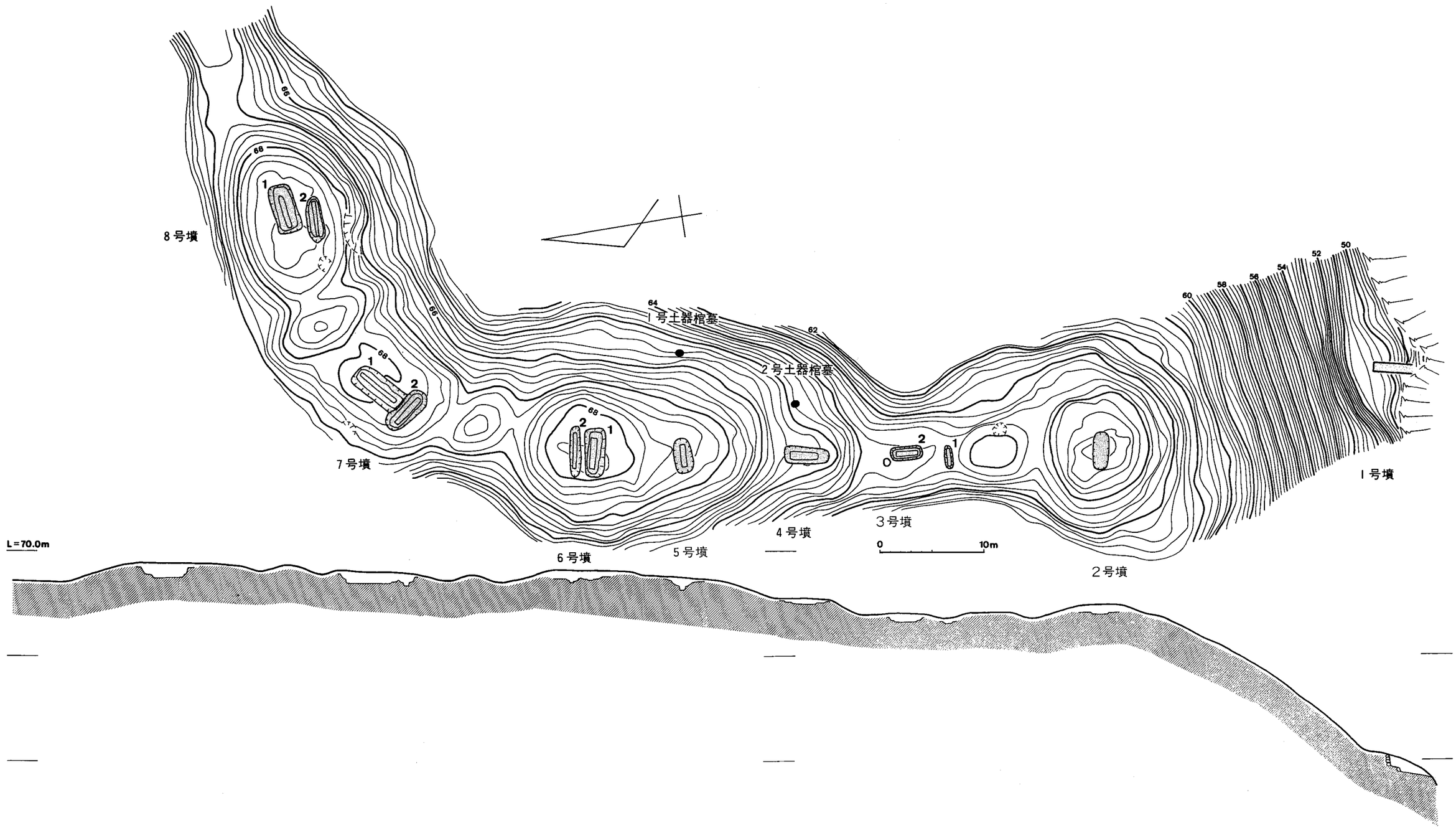
1　調　査　経　過

ゲンギョウの山古墳群では，当初，横穴式石室墳１基を含む５基の古墳の存在が知られていたが，その後の調査により，10基程度からなる古墳群であることが分かってきた。古墳群のうち，今回は，８基についての発掘調査を実施した。

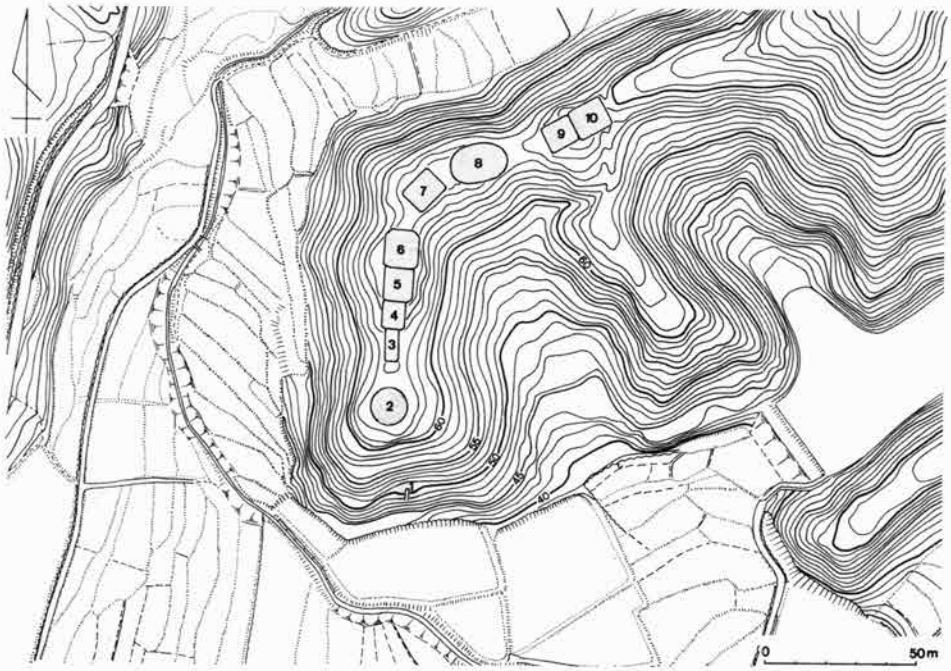
なお，昭和47年度版『京都府遺跡地図』では，横穴式石室墳に「安田古墳」の名称が与えられているが，ゲンギョウの山古墳群と同じ丘陵に存在することから，「ゲンギョウの山１号墳」としてゲンギョウの山古墳群に一括し，今回，古墳名称の整理を行った。

調査は，それぞれの古墳の埋葬主体部を検出することとともに，古墳の築造方法を探ること，および周辺遺構の有無を確認することなどを主な目的として，墳丘およびその周辺をも含めて掘削することとした。このため，掘削面積は，約2,200m^{2}に及ぶ。

現地調査は，昭和60年度事業として伐採作業を行ったのち，昭和61年度事業として昭和61年６月４日から27日まで地形測量を行った。地形測量は，開放トラバースによる測点からの平板測量である。掘削作業は，６月９日に資材を搬入し，10日から作業を開始した。



第50図　ゲンギョウの山古墳群地形図



第51図　ゲンギョウの山古墳群構成図

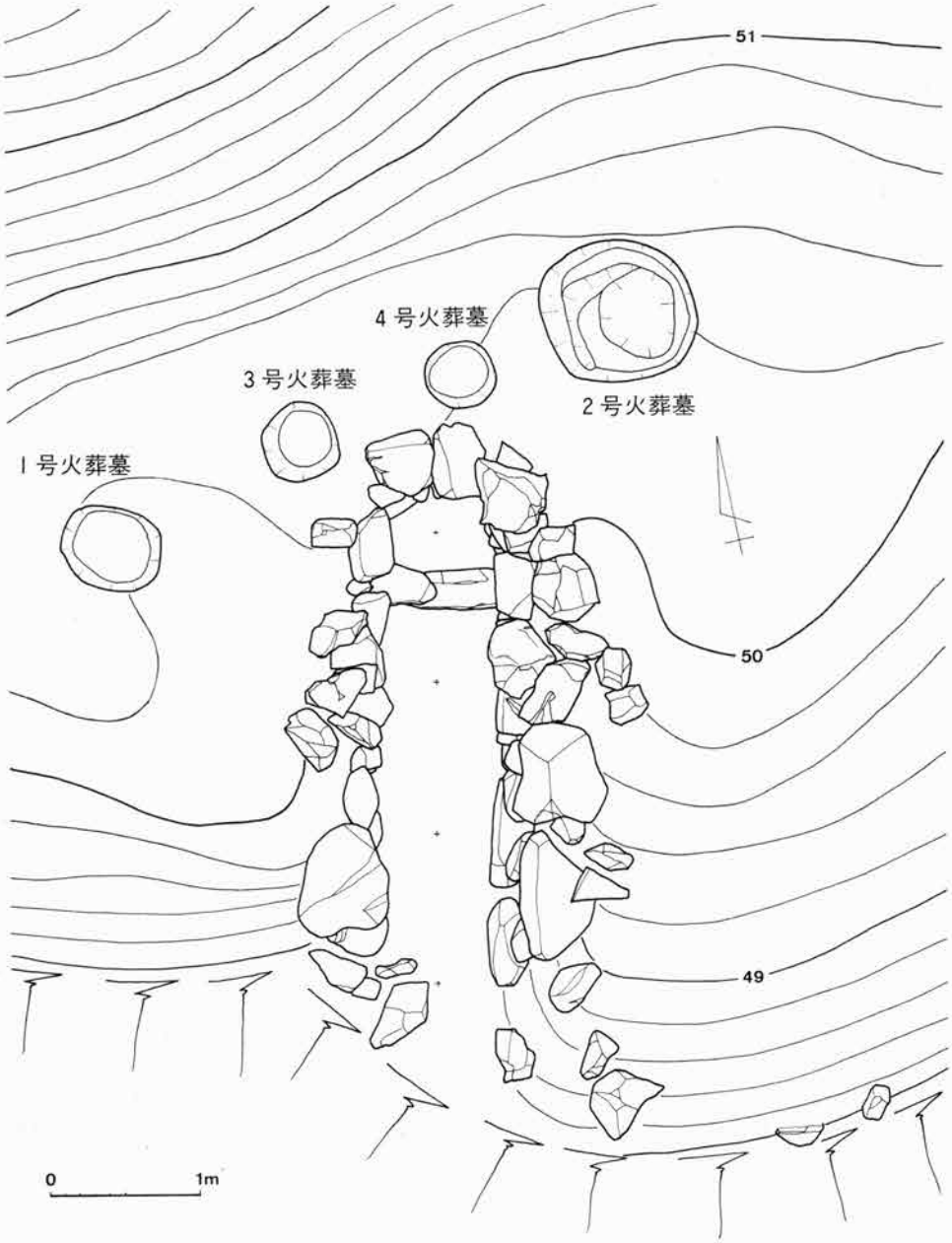
掘削範囲が広大であったため，すべての墳丘の表土を排除したのち，埋葬主体部の検出・掘削作業に入った。掘削の結果，木棺直葬墳7基およびこれに伴う主体部11基と横穴式石室墳1基，火葬墓4基，土器棺墓2基を検出した。実測作業および写真撮影はその都度行い，10月2日にはすべての現地作業を終了した。現地説明会は，9月6日に行っている。

2　調　査　概　要

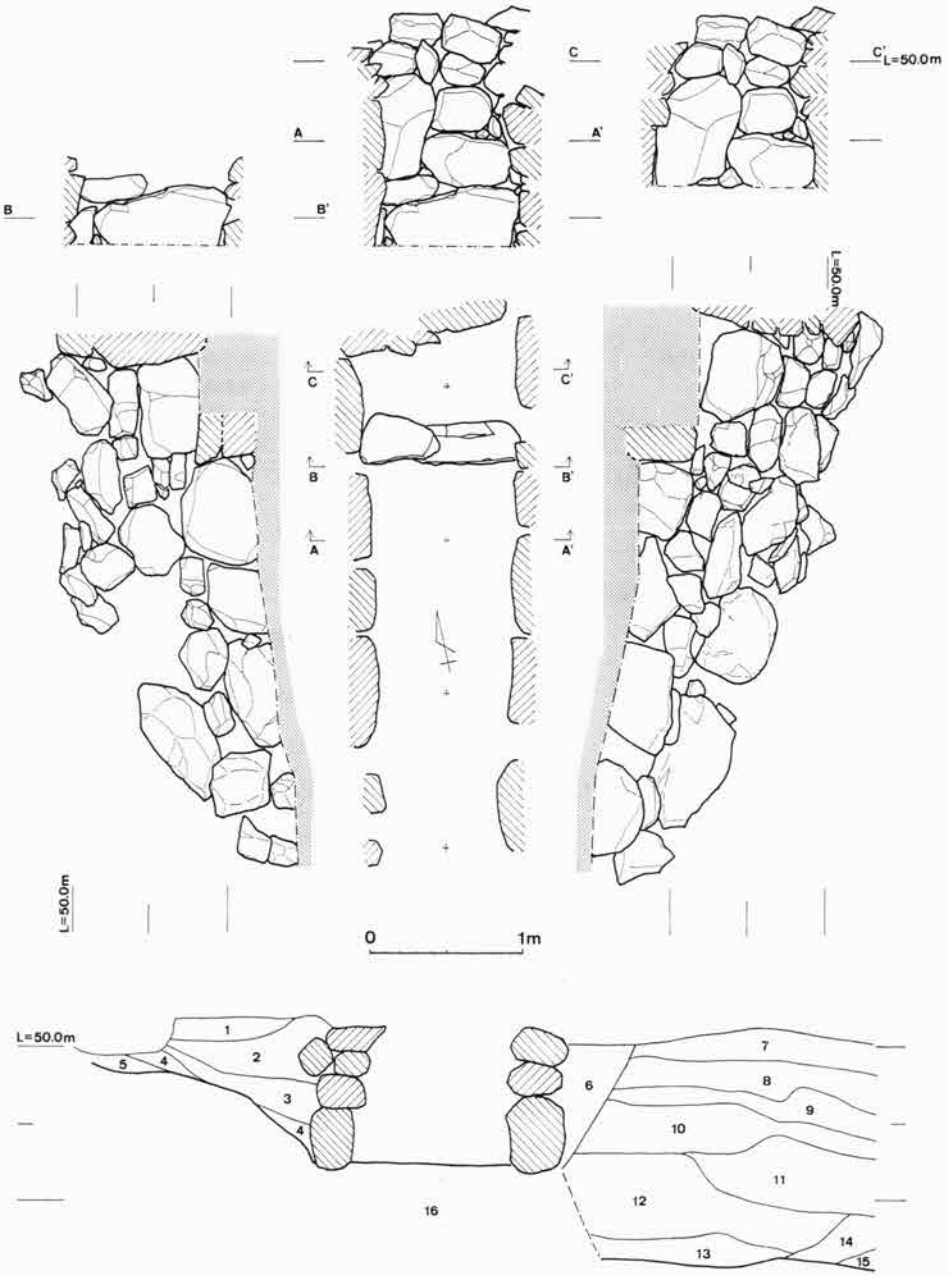
①ゲンギョウの山1号墳(第51～54図)　1号墳(旧称安田古墳)は，丘陵南斜面の中程にあり，標高は約50mを測る。斜面をテラス状に削り出し，古墳を築造したものと思われる。封土は流出しており，半割された天井石2石が露出していた。また，石室の前面は崖となっており，天井石と思われる転石もあった。墳丘の形状は不明である。これらの状況から，羨道部が崩落している可能性も考えられた。しかし，東側壁体の裾部が外側へまわる状態を示していたため，少なくとも東側壁体では，崩落を免がれているものと判断した。

調査は，表土を剝ぎ，元位置を保っていなかった天井石の残欠を除去したのち，石室内を充塡していた土砂や転落石を順次排除していった。

調査の結果，1号墳の内部主体である横穴式石室は，奥壁部を一段せり上げるような形で構築された壇構造をもつことが判明した。石室は，全長4.7m(玄室長3.7m・羨道長1.0m)・玄室幅0.9m程度を測る無袖の横穴式石室で，高さは1.3m程度になるものと考えられる。主軸の方向は，N12°Eである。壇部分は，西側奥行0.7m・東側奥行1.0m・幅約

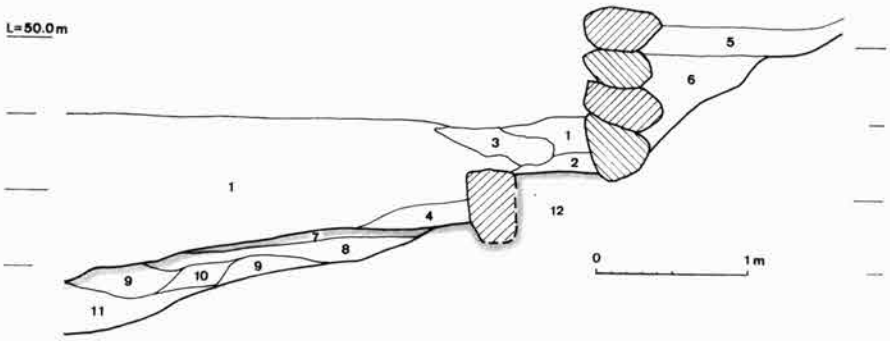


第52図　1号墳横穴式石室平面図



①明濃茶褐色土(砂粒含)
②明濃茶褐色土(黒褐色土含)
③暗濃茶褐色土(灰白色粘質土、黒褐色土含)
④明濃茶褐色土
⑤明濃黄白褐色土(砂粒含)
⑥明淡茶褐色土
⑦明淡茶褐色土(砂粒含)
⑧明濃茶褐色土(砂粒含)
⑨暗濃茶褐色土(黒みが強い)
⑩暗濃茶褐色土
⑪明濃茶褐色土(砂粒含)
⑫⑩よりもやや黒みが強い
⑬灰白色粘質土
⑭⑪よりやや明るい
⑮暗淡茶褐色土
⑯地　山

第 53 図　1 号 墳 横 穴 式 石 室 実 測 図

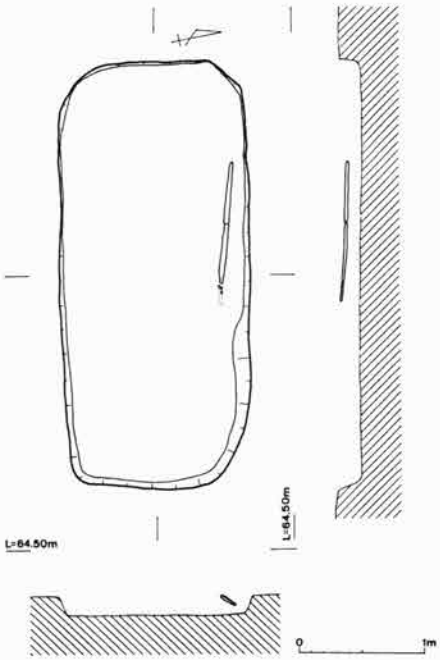


第 54 図　1 号 墳 縦 断 面 図

1.0mを測り，壇の高さは床面から0.4m程度である。壇の上面には，炭化物混りの灰層が5cm程度載っており，灰層上面から刀子1点(第72図8)を検出した。

出土遺物は，壇上から出土した刀子1点および，玄室入口部付近から出土した刀子1点(第72図7)と金環1点(第73図7)の計3点だけであった。横穴式石室の築造および使用時期を示す土器類の出土は皆無であった。

②ゲンギョウの山2号墳(第51・55図)　2号墳は，丘陵の先端部に位置する円墳で，径12m・高さ1.5m程度を測る。北側には残丘状の隆起が存在するため，2号墳の築造方法は，地山整形して基底部を削り出し，0.5m程度の盛土を行ったものと思われる。

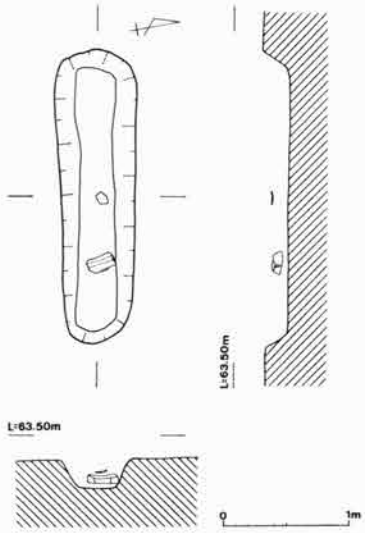


第55図　2号墳主体部実測図

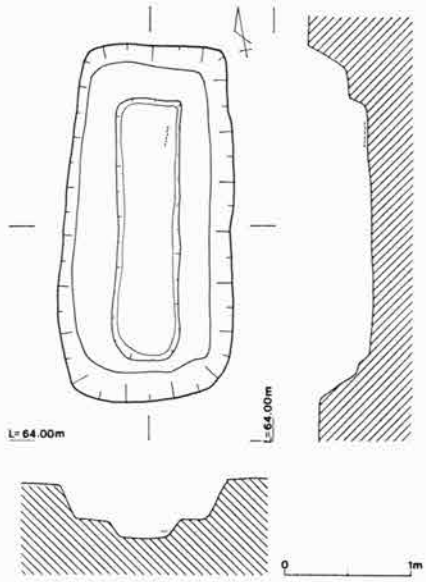
埋葬主体部は，1基を検出した。墓坑は不明瞭で，遺物の出土によってその存在を確認した。墓坑の規模は，長さ3.4m×幅1.5mで，確認できた深さは，0.2mである。主軸の方向は，N80°Wであった。木棺部の痕跡は，検出することができなかった。遺物は，墓坑の北寄りで鉄製の直刀1点(第71図)が出土しているだけである。

③ゲンギョウの山3号墳(第51・56・57図)

3号墳から6号墳までは，階段状地形を呈する古墳群である。このうち，3号墳は，最



第56図　3号墳第1主体部実測図

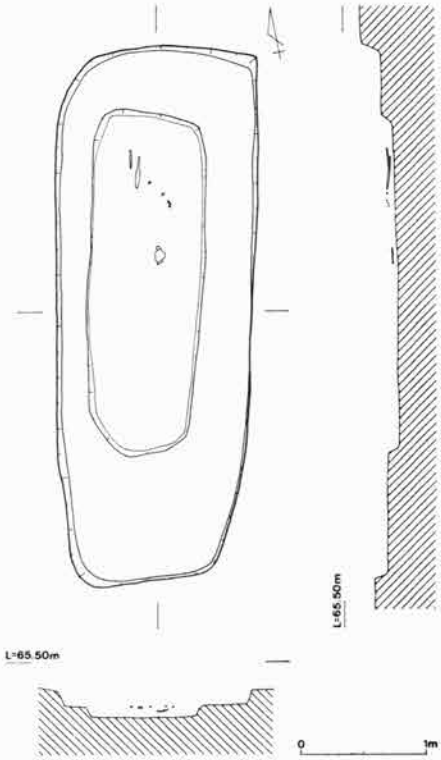


第57図　3号墳第2主体部実測図

下段に位置している。長辺9m×短辺5mの方墳で，高さ0.5mを測る。南側に残丘状の隆起が存在することから，3号墳の築造方法は，地山を削って平坦に整形したものと考えられる。埋葬主体部は，2基を検出した。

南側に位置する第1主体部(第56図)は，長さ2.3m×幅0.6m・深さ0.2mを測る墓坑をもつ。主軸の方向は，N80°Wである。木棺部は，検出できていない。遺物は，砥石1点(第74図1)と土師器片とが出土した。

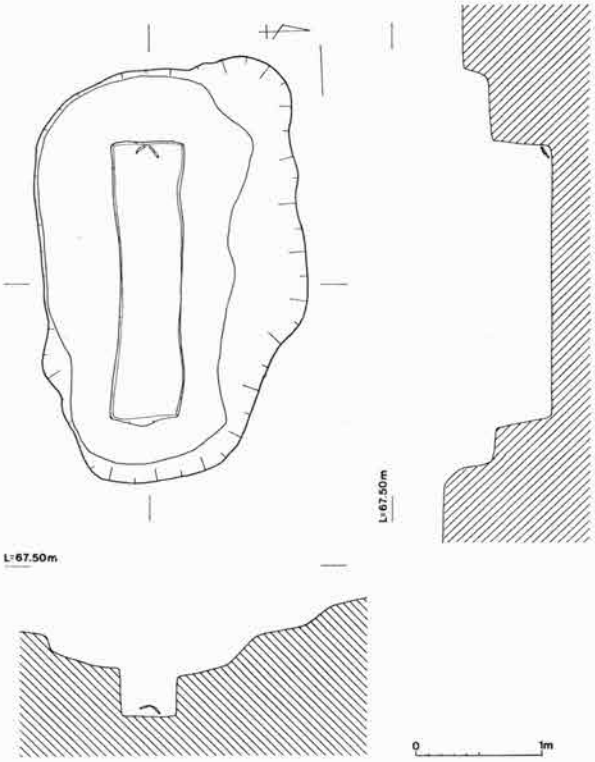
ほぼ中央部を占める第2主体部(第57図)は，長さ2.8m×幅1.3mを測る墓坑をもつ。主軸の方向は，N10°Eである。墓坑検出面より0.3m掘り下げた段階で，木棺部を検出した。木棺部の規模は，長さ2.1m×幅0.5mで，深さは0.15mを測る。遺物は，棺内北東部から管玉6点(第73図1～6)が出土した。また，墓坑上からは，土師器(第67図2・3)の壺と



第58図　4号墳主体部実測図

高杯が出土している。

④ゲンギョウの山4号墳（第51・58図）　4号墳は，一辺8mの方墳で，高さ1.5mを測る。丘陵南斜面をテラス状に削り出し，裾部を若干掘削して，方形に整えたものと思われる。埋葬主体部は，1基を検出した。墓坑は，長さ4.3m×幅1.6mを測る。主軸の方向は，N10°Eであった。木棺部は，墓坑検出面より0.15m掘り下げた段階で検出した。木棺部の規模は，長さ2.7m×幅0.9mで，深さは0.1mを測る。棺内からは，鉄剣1点（第72図2）と鉇1点（第72図9）のほか，土師器の壺（第67図5）が出土している。

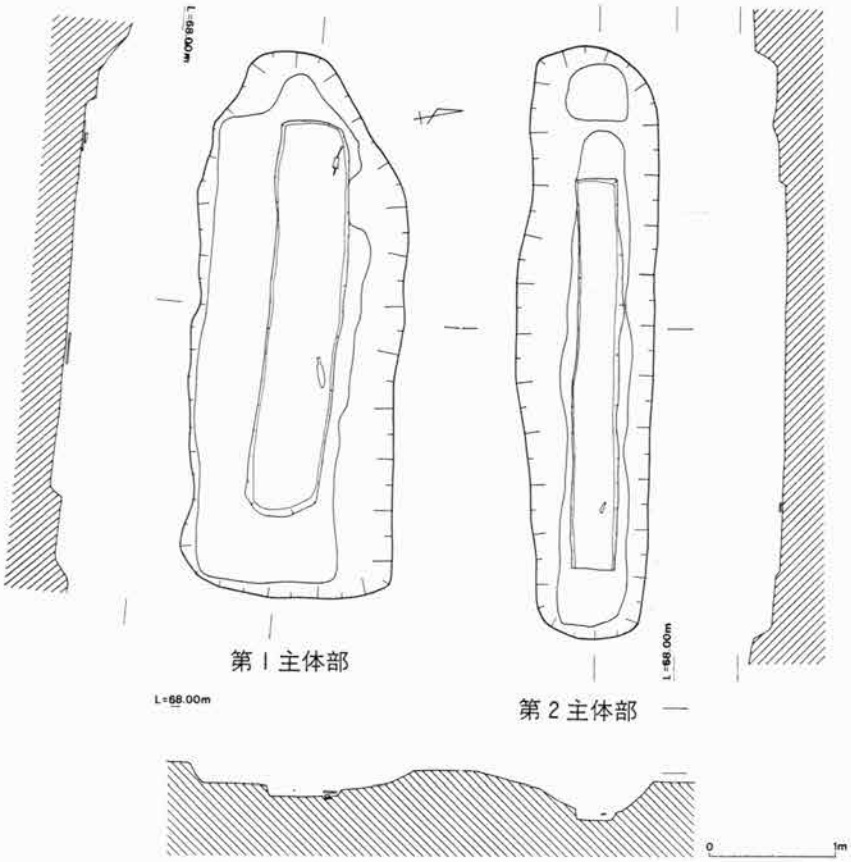


第59図　5号墳主体部実測図

⑤ゲンギョウの山5号墳（第51・59図）　5号墳は，長辺15m×短辺13mの方墳で，高さ1.8mを測る。丘陵の緩斜面をテラス状に削り出し，裾部を若干掘削して，方形に整えたものと考えられる。埋葬主体部は1基で，墓坑は，長さ3.3m×幅1.8mの規模をもつ。主軸の方向は，N90°Wである。墓坑検出面より0.3m掘り下げた段階で，木棺部を検出した。木棺部の規模は，長さ2.4m×幅0.5m・深さ0.5mを測る。棺内西端からは，L字状に折り曲げられた鉄剣1点（第72図3）が出土した。

⑥ゲンギョウの山6号墳（第51・60図）　6号墳は，階段状地形を呈する古墳群のなかでは，最上段を占める古墳である。一辺13mの方墳で，高さ1.8mを測る。北側に残丘状の隆起が認められることから，6号墳の墳丘は，北側を溝によって画し，裾部を掘削して，方形に整えたものと考えられる。埋葬主体部は，2基を検出した。

南側に位置する第1主体部（第60図）は，長さ4.6m×幅2mの墓坑をもつ。主軸の方向は，N75°Wである。墓坑検出面より0.15m掘り下げた段階で，木棺部を検出した。木棺部の規模は，長さ3.1m×幅0.5mで，深さは0.1mを測る。棺内からは，鉄剣1点（第72図1）と鉄斧1点（第72図5）および鉇1点（第72図10）が出土している。



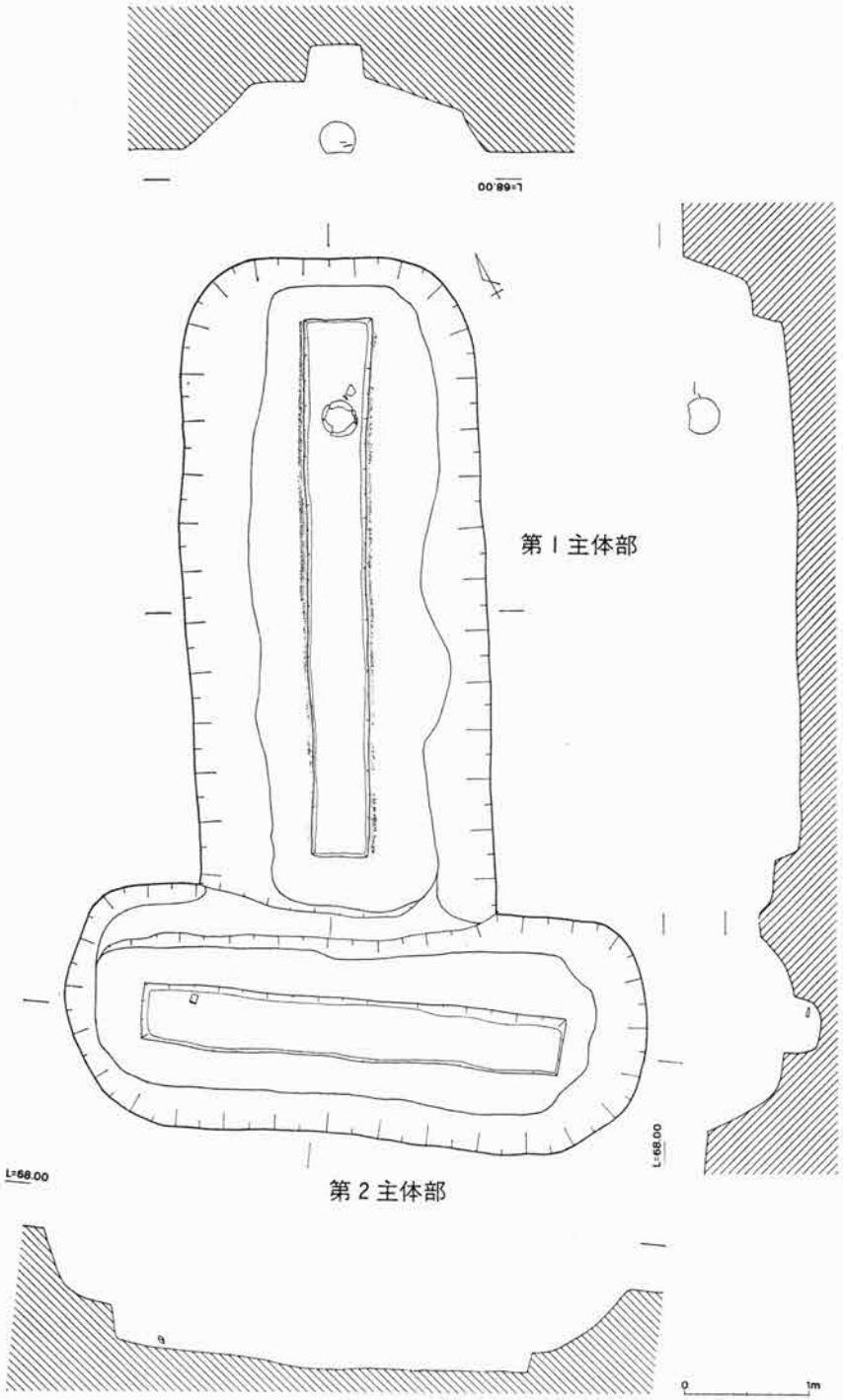
第60図　6号墳第1主体部および第2主体部実測図

北側に位置する第2主体部(第60図)は，長さ4.7m×幅1.1mの墓坑をもつ。主軸の方向は，N80°Wである。墓坑検出面より0.15m掘り下げた段階で，長さ3.1m×幅0.4m・深さ0.05mを測る木棺部を検出した。棺内からは，刀子1点(第72図6)が出土した。

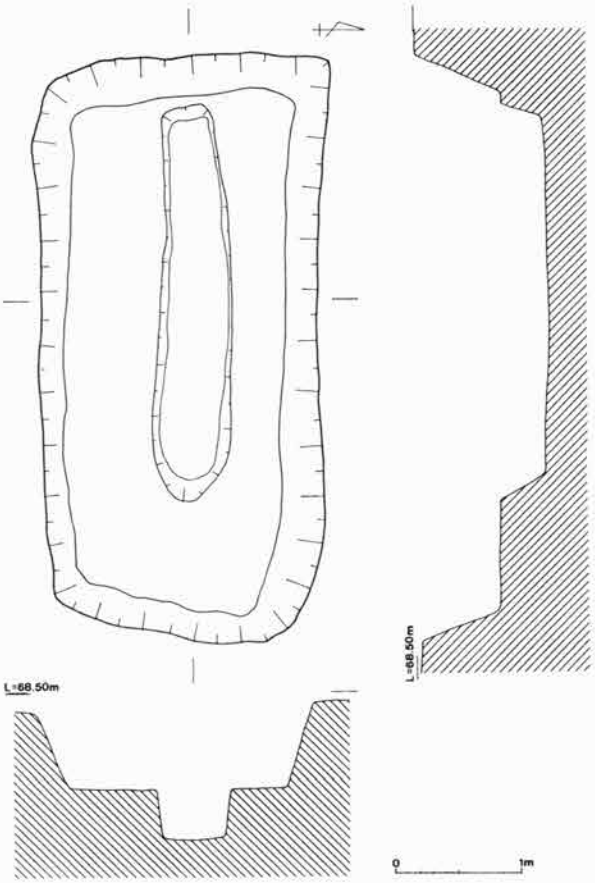
なお，墳頂部からは，土師器の壺や器台・高杯(第67図6～11)などが出土している。

⑦ゲンギョウの山7号墳(第51・61図)　7号墳は，長辺12m×短辺10mの方墳で，高さ1mを測る。両側に残丘状の隆起が存在することから，7号墳の墳丘は，両端を溝によって画し，方形に整えたものと推定できる。埋葬主体部は，2基を検出した。切り合いの関係から，第1主体部が第2主体部に先行する埋葬であることが確認できた。

第1主体部(第61図)は，長さ5.5m×幅2.5mを測る墓坑をもつ。主軸の方向は，N30°Wである。墓坑検出面より0.6m掘り下げた段階で，木棺部を検出した。木棺部の直上からは，土師器の壺(第67図4)1個体が正位の状態で出土している。木棺の規模は，長さ約



第61図　　７号墳第１主体部および第２主体部実測図



第62図　8号墳第1主体部実測図

4.3m×幅0.5mで，深さ0.25mを測る。側板にあたる部分には，白色粘土を薄く帯状に裏込めしていた。棺内では，遺物を検出できなかった。

第2主体部(第61図)は，長さ4.6m×幅2mの墓坑をもつ。主軸の方向は，N55°Wである。墓坑検出面より0.6m掘り下げた段階で，木棺部を検出した。木棺部の規模は，長さ3.4m×幅0.5mで，深さ0.3mを測る。棺内北西隅から鉄斧1点(第72図4)が出土している。

なお，南側の溝付近から砥石1点(第74図2)が出土した。

⑧ゲンギョウの山8号墳(第51・62・63図)　8号墳は，長径19m×短径14mの楕円形の墳丘をもち，高さは1.5mを測る。西側には残丘状の隆起があり，東側は尾根筋の分岐点にあたる。西側と東側とを掘り切って，墳丘を整形したものと考えられる。埋葬主体部は，2基を検出した。

ほぼ中央部を占める第1主体部(第62図)は，長さ4.6m×幅2.2mの墓坑をもつ。主軸の方向は，N90°Eである。墓坑検出面より0.6m掘り下げた段階で，木棺部を検出した。木棺部は，長さ3.1m×幅0.5mで，深さ0.4mを測る。遺物は，検出できていない。

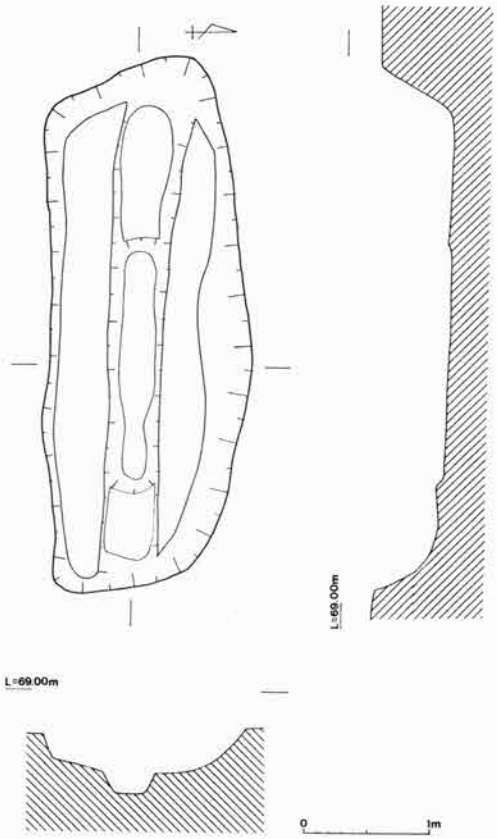
南側に位置する第2主体部(第63図)は，長さ4.1m×幅1.5mの墓坑をもつ。主軸の方向は，N89°Wである。墓坑検出面から0.5m掘り下げた段階で，長さ3.7m×幅0.4m・深さ0.2mを測る木棺部を検出した。遺物は検出できなかった。

⑨火葬墓群(第52・64図)　1号墳の表土排除作業を行った段階で，火葬墓4基を検出した。火葬墓は，いずれも土坑内に火葬骨と灰や炭などを埋納したもので，墓坑上には自然石を配置していた。

1号火葬墓では，径0.7m・深さ0.35mの墓坑を検出した。墓坑上には蓋石を置き，玉石を径0.8m・高さ0.2mに積み上げていた。周囲には，16個の川原石を半円状に配置して1号火葬墓の墓域を区画している。火葬骨のほかに遺物は検出できていない。

2号火葬墓では，径1m・深さ0.4mの墓坑を検出した。墓坑上には，蓋石として五輪塔の地輪石を転用していた。地輪石の受台として，空輪石の破片および板石を用い，擂鉢状の台座を構築していた。墓坑内からは，火葬骨や灰・炭に混って，土師質の皿(第67図1)が1点出土している。

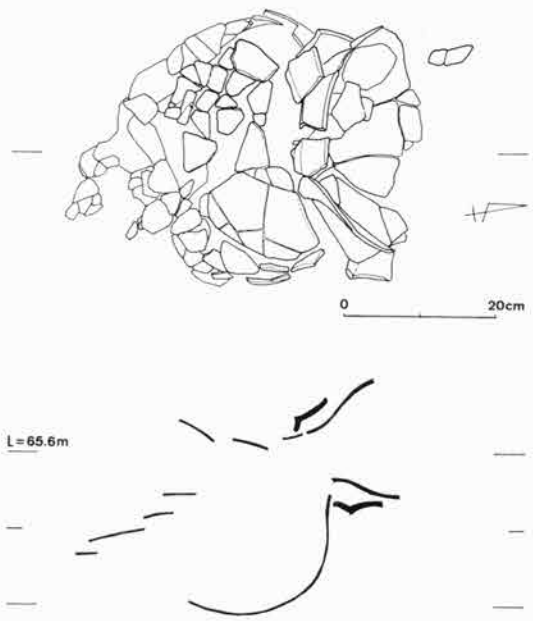
3号火葬墓では，径0.5m・深さ0.15mの墓坑を検出した。蓋石はなく，3号火葬墓に伴うと思われる配石もみられない。火葬骨のほかに，遺物は検出できていない。



第63図　8号墳第2主体部実測図

4号火葬墓では，径0.45m・深さ0.25mの墓坑を検出した。墓坑上には蓋石を置き，周囲には，数個の川原石を乱雑に並べていた。火葬骨のほか，遺物は検出できていない。

第64図　火葬墓群実測図



第65図　1号土器棺墓実測図

⑩土器棺墓(第51・65・66図)　土器棺墓は，2基を検出した。

1号土器棺墓(第65図)は，5号墳の東裾部で，テラス状地形の南端部にあたる地点に位置している。標高は，64.6mを測る。1号土器棺墓は，土師器の甕と壺とを合せ口にして(第69図)，横位の状態で埋納したものである。主容器となる甕の口縁部は，ほぼ北側に向けられていた。蓋として転用されていた壺は，口縁部と胴部下半とを欠くものである。墓坑の掘形は確認できなかった。また，棺内からの出土遺物は検出できなかった。

2号土器棺墓(第66図)は，4号墳の東裾部の斜面に位置している。標高は，64.6mを測る。2号土器棺墓は，土師器の壺(第70図)を主容器とし，蓋には壺の胴部破片を用いていた。主容器となる壺の口縁部は，ほぼ北側に向けられていた。墓坑の掘形は，確認できていない。また，棺内からの出土遺物は検出できなかった。

3　出　土　遺　物

ゲンギョウの山古墳群から出土した遺物には，土師器・鉄製品・金銅製品・石製品などがある。古墳群という遺跡の性格から考えて，いずれも埋葬主体部内の副葬品として，また，墓域内での葬送儀礼に際しての供献品として残されたものと思われる。

土師器(第67～70図)　第67図は，埋葬主体部内もしくは埋葬主体部上から出土した土師器で，埋葬時期を特定できる数少ない資料である。

1は，2号火葬墓内から検出した手捏ねの土師皿である。

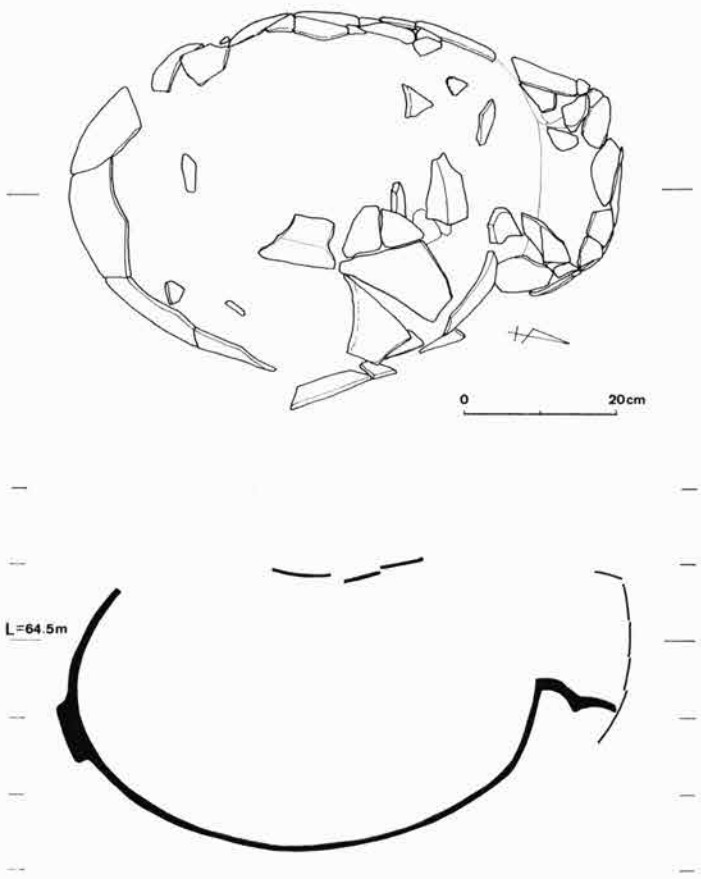
2・3は，3号墳第2主体部の墳頂部から出土した土師器である。2は，高杯で，中実の脚柱部に，外反する口縁部をもつ杯部がのる。

3は直口壺で，球状に近い体部をもち，にぶく屈曲する頸部から口縁部が直線的に外上方へのびている。外面はヘラミガキ，内面の一部にはハケメによる調整が認められる。

4は，7号墳第1主体部内から出土した二重口縁を有する壺である。体部は，ほぼ球状を呈しており，底部には穿孔が認められる。頸部は，短く屈折して外上方へのび，口縁部

へと続く。口縁下部には明瞭な稜をもち，ここから口縁部がほぼ直立して立ち上がる。口縁端部は面をもち，斜めに立ち上がっている。外面の調整は，磨滅のため不明瞭であるが，肩部にいくつかの円形刺突文が認められる。体部内面は，ヘラケズリが行われている。

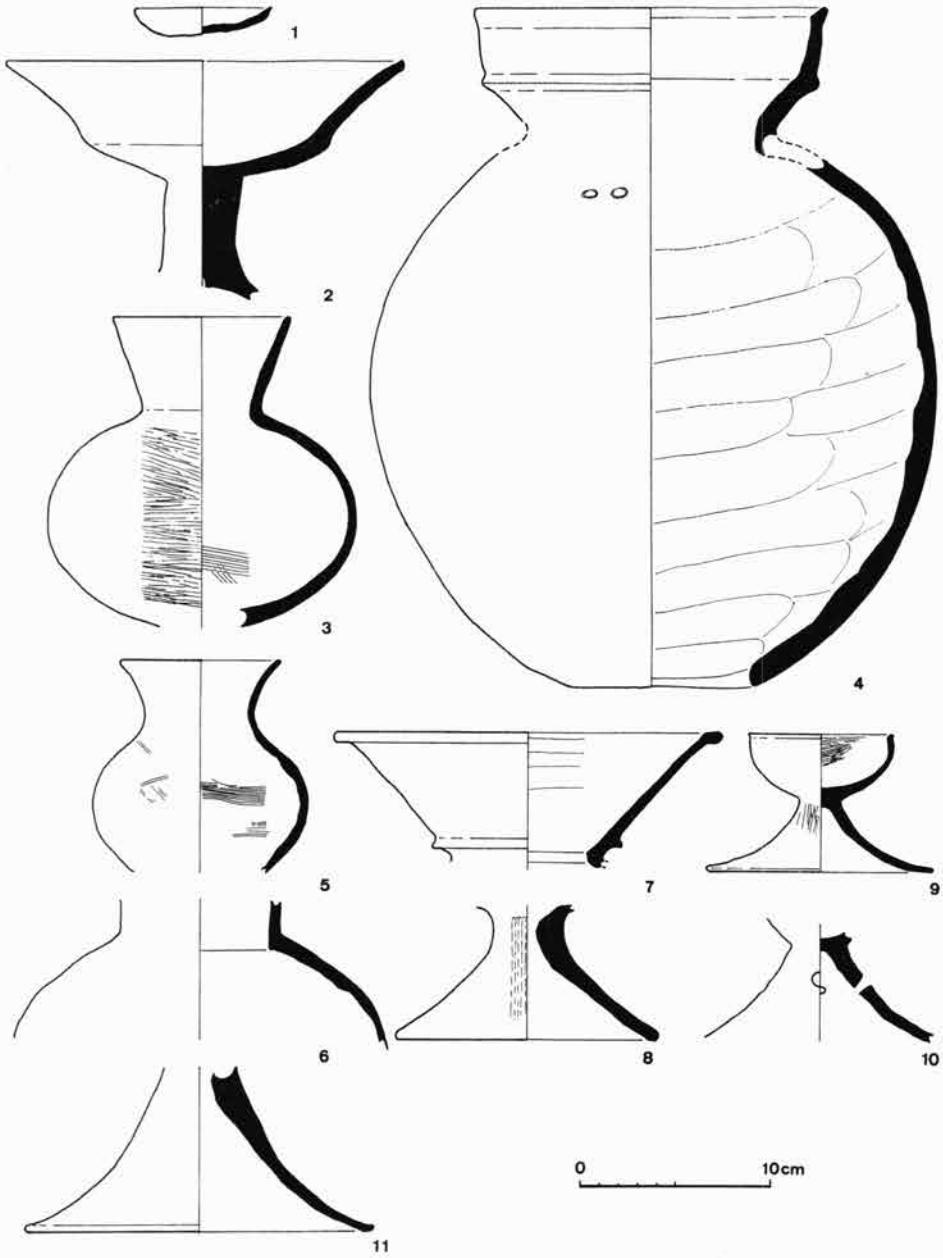
5は，4号墳の埋葬主体部内から破片となって出土した壺である。体部から緩やかに外反する口縁部をもつ。内外面ともにハケメ調整が認められる。



第66図　2号土器棺墓実測図

6～11は，6号墳の墳頂部から出土した土師器である。6は直口壺で，破片のため詳細は不明である。7・8は器台である。7は，いわゆる鼓形器台の口頸部である。頸部はにぶく屈曲し，鋭い稜をなして口縁部に移る。口縁部は外上方に直線的に広がる。口縁部内面には，幅広のヘラミガキが認められる。砂粒をやや多く含む胎土で，赤褐色に焼きあげられた山陰地方に多い土器である。8は脚部で，外下方に直線的に広がる。外面にはヘラミガキが認められる。9・10は小型の高杯である。9は，盌形の杯部をもち，口縁部をややつまみ出している。脚部は，直線的でなしになめらかに広がる。調整はヘラミガキによるもので，透孔はない。10も同様の器形をなすものと思われ，円形の透孔が3か所に認められる。11は，高杯もしくは器台の脚部である。

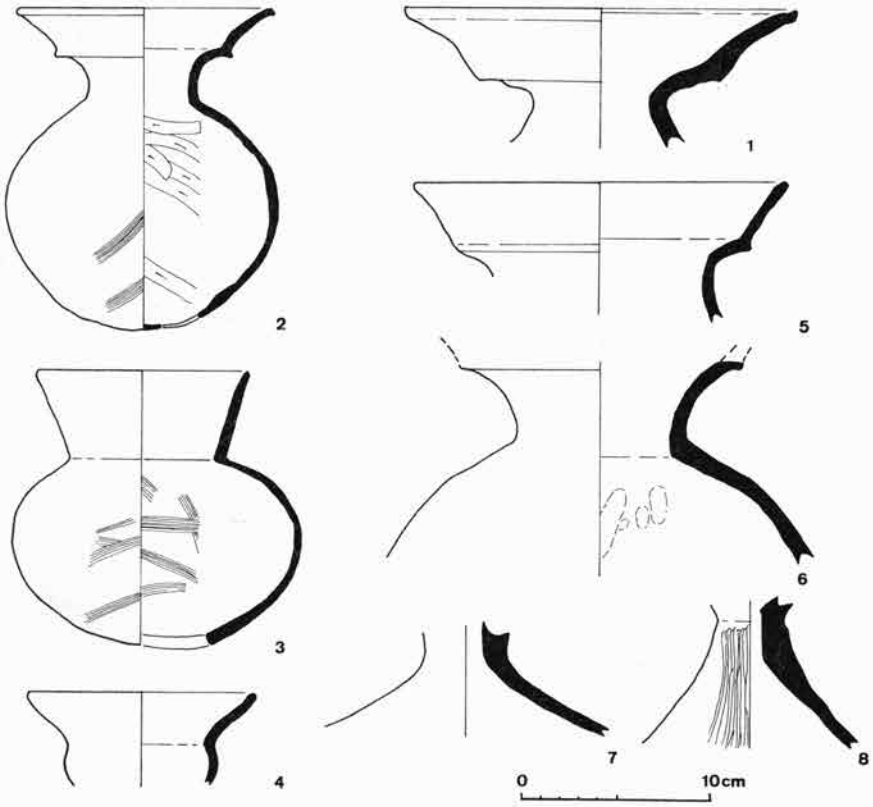
第68図は，3号墳から6号墳にかけての階段状地形を呈する古墳群の墳丘東側裾部から出土した土師器である。



第67図　出土遺物（土師器その1）

1は，3号墳墳丘東側裾部から出土した二重口縁を有する壺の口縁部である。頸部は，内傾してのびたのち，大きく外反して広がる口縁部に至る。口縁下部には明瞭な稜をもつ。

2は，4号墳墳丘東側裾部から出土した二重口縁を有する壺である。球形の体部から頸部が直立し，一度水平に短くのびたのち，外反して大きく広がる口縁部へと続く。口縁下



第68図　出土遺物（土師器その2）

部には明瞭な稜をもつ。体部外面はハケメ，内部はヘラケズリによる調整が施されている。底部には穿孔が認められる。

3・4は，5号墳墳丘南東側裾部から出土した土師器である。3は直口壺で，球形に近い体部から頸部がにぶく屈曲し，直線的に外上方へのびる口縁部へと続く。体部内外面には，ハケメによる調整が施されている。また，底部には穿孔がある。4は，小型丸底壺である。

5・6は，5号墳墳丘東側裾部のテラス状地形から出土した二重口縁を有する壺である。いずれもにぶく屈曲する頸部が外反ぎみに立ち上がり，一旦短く水平にのびたあと，口縁下部に明瞭な稜をもちながら，大きく外反する口縁部へと続くものである。調整については不明な点が多いが，6の体部内面上部には，指頭圧痕が認められる。

7・8は，6号墳墳丘東側裾部から出土した高杯もしくは器台の脚部である。

第69図は，1号土器棺墓に使用されていた土師器である。1は，蓋として転用されていた壺で，胴部下半と口縁部とを欠くため，器形は不明であるが，外反する二重口縁をもつ

壺になるものと思われる。外面にはハケメ，内面にはヘラケズリによる調整が認められるものである。2は，主容器として用いられた二重口縁を有する甕である。頸部は，にぶく屈曲し，稜をなして口縁部に至る。口縁部は，直線的にやや外上方へのび，端部には小さな稜を残す。径26.3cmを測る大型の甕である。

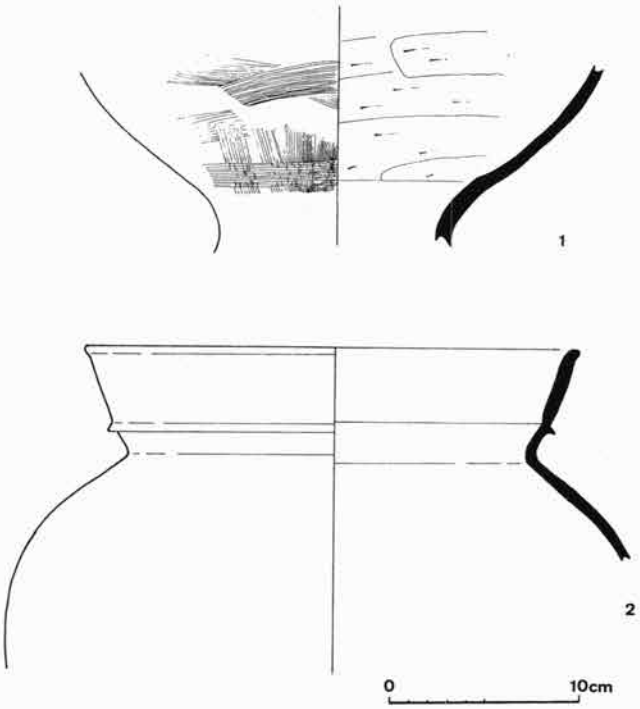
第70図は，2号土器棺墓の主容器として用いられていた二重口縁を有する大型の壺である。倒卵形の体部に，径9cm程度の底部を貼付している。頸部は，にぶく屈曲し，外反して立ち上がったのち，口縁下部に明瞭な稜をもって，大きく外反する口縁部へと続いている。調整は，磨滅のため不明である。蓋として転用されていた壺は，胴部だけの破片のため，図示し得なかったが，底部が丸底であるほかは，主容器と同形になるものと思われる。胴部外面にはハケメ，内面にはヘラケズリによる調整が認められる。

2号火葬墓出土の土師皿を除き，ゲンギョウの山古墳群から出土した土師器には，山陰系の土器群と畿内系の土器群との二系統が認められる。時期的には4世紀末から5世紀前葉を中心とした時期に位置づけられるものと考えられる。

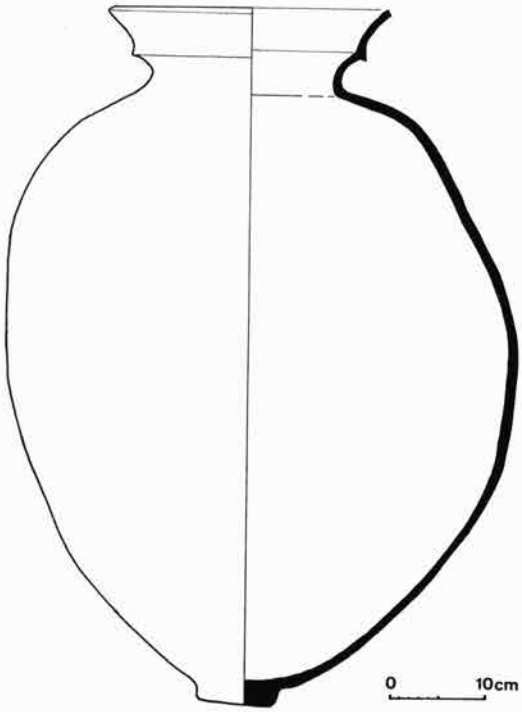
鉄製品(第71・72図)　いずれも埋葬主体部内から検出したもので，直刀・剣・手斧・刀子・鉋などがある。

第71図は，2号墳から出土した直刀で，切先を西側，刃部を南側に向けていた。錆化が進んでいるため，切先および柄部分の様子は不明である。

第72図1～3は剣で，それぞれ形態を異にしている。1は，6号墳第1主体部のもので，剣先を東側に向けて出土した幅広の短剣である。2は，4号墳から出土した細身の短剣で，剣先を南側に向けていた。3は，5号墳から出土した剣で，L字形に変形し，剣先を南納側にして埋したものである。



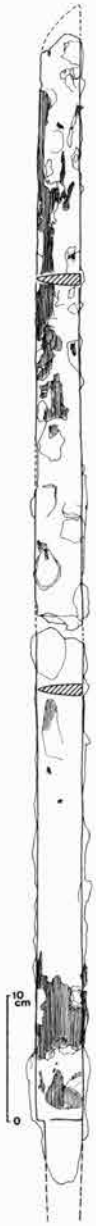
第69図　1号土器棺墓使用土師器



第70図　2号土器棺墓主容器

4・5は手斧で，それぞれ形態差が認められる。4は，7号墳の第2主体部内で，刃部を北側に向けて出土したものである。受部の形態は袋状を呈している。5は，6号墳の第1主体部内に，鉇とともに刃部を東側に向けて重ねられていたものである。受部は，両端を折り曲げただけのものである。

6～8は刀子で，6は6号墳の第2主体部，7・8は1号墳の石室内から出土したものである。



第71図
直刀

9・10は鉇である。9は4号墳から出土したもので，尖端を南側に向けていた。10は，6号墳の第1主体部内から，手斧とともに重ねられて出土したもので，尖端は東側に向けられていた。

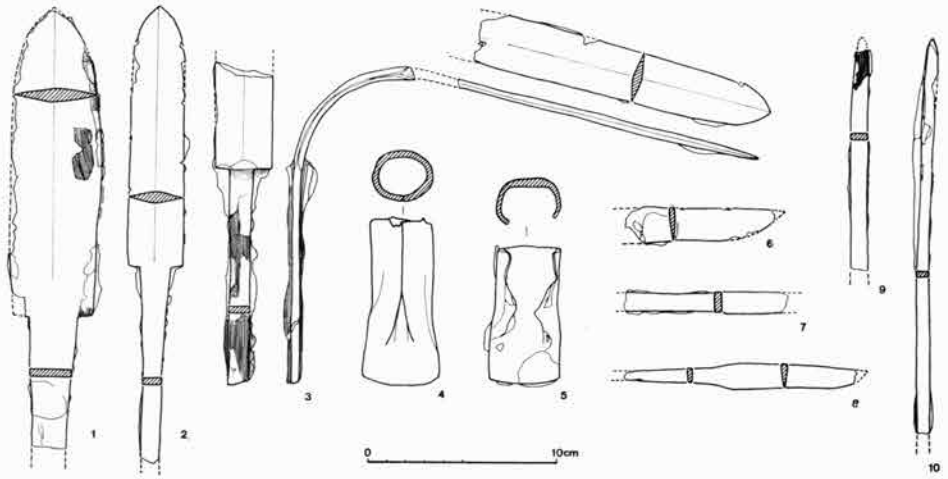
金銅製品(第73図7)　1号墳の石室内から出土したもので，銅環を金薄板でつつんだものである。

管玉(第73図1～6)　3号墳の第2主体部から出土したものである。1は出土した管玉のなかでは唯一の太型である。濃緑色の石材で，碧玉製と思われる。2～6は，細型の管玉である。白緑色の石材で，緑色凝灰岩製と考えられるものである。

砥石(第74図)　1は，3号墳の第1主体部から出土した大型の砥石で，底部と両端部とを除く4面が使用された痕跡をとどめている。2は，7号墳の墳丘南側から出土した小型の砥石である。側面の4面がよく使用されている。

4　ま　と　め

ゲンギョウの山1号墳のような石室構造をもつ横穴式石室墳は，京都府与謝郡野田川町石川の高浪古墳(注24)に類例を求めることができる。高浪古墳の内部主体は，両袖式の横穴式石室で，全長7.8m以上・玄室長4.6m・玄室幅2m



第72図　出土遺物（鉄製品）

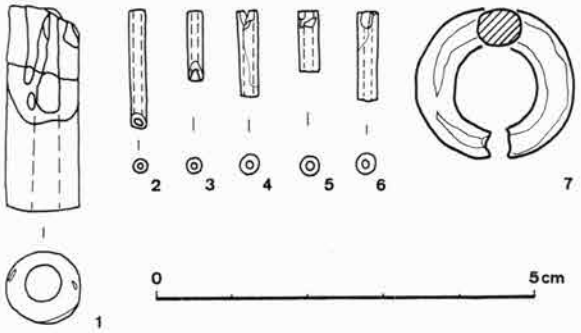
1号墳7・8，4号墳2・9，5号墳3，6号墳第1主体部1・5・10，
6号墳第2主体部6，7号墳第2主体部4

・羨道長3.2m以上を測る。壇部分は，奥行1.1m・幅1.9m程測り，壇の高さは床面から0.9mである。

ゲンギョウの山1号墳の横穴式石室と高浪古墳の横穴式石室とを比較すると，ゲンギョウの山1号墳は，高浪古墳のほぼ半分の規模をもち，小型化が顕著である。しかも，袖部の構造も両袖から無袖へという省力化が図られている。壇部分の構造では，高浪古墳が壇上面にも水平に板石を置き，地山面を被覆しているのに対し，ゲンギョウの山1号墳では，壇上面に板石を置いていないため，地山面が露呈する構造となっている。また，高浪古墳では比較的大型の石材を用いて規則的な壁体を構築し，床面には人頭大の礫を敷きつめている。これに対して，ゲンギョウの山1号墳では，不定形な自然石を用いて壁体を構築しており，床面には石敷を施していない。

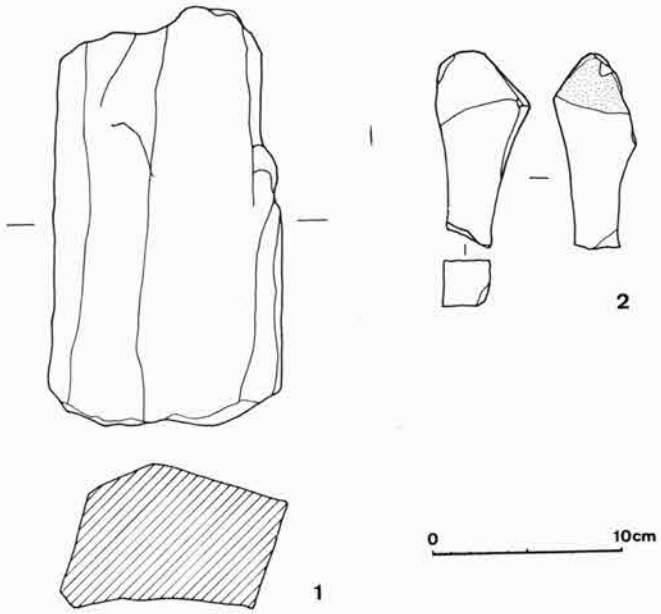
以上の比較を総合すると，ゲンギョウの山1号墳にはかなりの省力化が認められ，6世紀後半期の築造とされる高浪古墳よりも後出的要素が顕著である。

また，ゲンギョウの山1号墳と同程度の規模をもつ横穴式石室墳を京都府北部地域に求める



第73図　出土遺物(玉類・金環)

1～6，3号墳第2主体部　7，1号墳石室内



第74図　出土遺物（砥石）

と，福知山市正明寺に所在した向野西12号墳および向野西15号墳などがあげられる。(注25) 向野西12号墳は，石室全長4.6m・幅0.83mを測る無袖の横穴式石室である。また，向野西15号墳は，石室全長3.9m・幅0.9mを測る無袖の横穴式石室である。いずれも古墳時代終末期に属する古墳である。

以上のような所見から，築造年代を示す出土遺物のなかったゲンギョウの山1号墳の築造時期を推測すると，古墳時代終末期という時期が与えられるものと思われる。

さて，ゲンギョウの山1号墳の横穴式石室については，京都府下では2例目となる壇構造をもつ石室であることが判明した。通常の石棚付石室とは異なる構造をもつ石室であることから，これと区別して雛壇付石室とでも呼ぶべきであろう。壇の用途については，高浪古墳の所見に埋葬施設の棺台という説があげられている。ゲンギョウの山1号墳の例では，壇部分の広さが一辺1mにも満たない広さしかもたないことから，通常の棺台とは考え難い。壇上面にみられた炭化物や灰層，刀子の出土などを考慮した用途を考えるべきであろう。また，ゲンギョウの山1号墳が終末期古墳に属する可能性が高いことから，壇構造が本来の使用目的を喪失し，形骸化された形態になっているということも考えられよう。この場合には，6世紀後半期の築造とされる定形化された雛壇構造をもつ高浪古墳から，形骸化の著しい雛壇構造をもつゲンギョウの山1号墳へと続く系統にのる石室墳が今後何基か発見されてくることも予想される。

雛壇付石室は，地域内には今のところ丹後地域にみられるだけである。両古墳の位置や築造の時期を考慮すれば，この雛壇付石室は，丹後地域を中心として展開されているものと推測される。

丘陵上に展開された木棺直葬墓を中心とする古墳群は，弥生時代から続く台状墓の系統

をひく古墳群である。大宮町小池古墳群[注26]の報告のなかでは，弥生時代の方形台状墓の系統をひく5世紀代の古墳群を「初期群集墳」として位置づけている。この意味においては，ゲンギョウの山古墳群のうち丘陵稜線上に築かれた古墳群も初期群集墳ということができよう。墳丘上に造られた埋葬主体部のあり方も一墳一葬もしくは一墳二葬のものが原則であり，中心主体部以外に，土器棺墓2基を従えている。このような墳丘の周囲に従属的な埋葬施設をもつというあり方は，弥生時代における丹後町大山墳墓群[注27]をはじめ，古墳時代中期の大宮町小池古墳群などにもみられることから，在地的な系譜をひく造墓集団によって築造された古墳群であると思われる。一方ではこの時期に，大型の墳丘をもつ黒部銚子山古墳や網野銚子山古墳などの前方後円墳が造営されており，畿内勢力と結び付いた首長的造墓集団が存在したことを示している。丹後における首長墓的な大型の古墳が今後急激に増加することは考え難い。しかし，在地的な初期群集墳は，墳丘のあり方から考えて，急激に増加してゆく可能性が強い。大型古墳を造営した集団を地域国家の支配者としてとらえるならば，初期群集墳を造営した集団は，これを支えた小地域における部族的な集団であったものといえよう。丹後地域に突如出現する大型古墳の成立を理解するには，これら台状墓から続く初期群集墳のあり方を充分理解しておく必要があるものと思われる。

（三好博喜）

注1　調査参加者（順不同・敬称略）

昭和60年度

調査補助員

森本尚子・栗田富子・中井喜美・山野美奈子・井上みゆき・松本賢二・田中由美・曽根田真智子・鵜島三寿・藤井健介・近藤浩一・平野　通・佐伯英樹・礒永和貴

作　業　員

野場恵美子・井條　務・上田敬一郎・石田当志子・葛原千代・田中みゑ・小倉安枝・高原与作・高原　好・藤原俉郎・藤村平雄・砂井国雄・河端正直・藤村清作・森　勝治・平井武男・藤村忠治・大垣信義・梅田　始・番場隆一・金森竜夫・田中　正・今田孝昭・岩根徳太郎・平井定吉・小枝和枝・奥野不二・永島　勉・橋田長右衛門・藤原利代吉・平井とし子

昭和61年度

調査補助員

中井喜美・井本有二・篠崎賢一・横島勝則・関　利彦・藤井健介・宮崎哲治・佐伯英樹・近藤浩一・稲葉智弘・塩見　学・能勢鈴美・藤原恵子・鵜島三寿・赤川真弘・土田健一・黒羽展久・吉岡英一郎・上田弥一・下垣内英徳・荻野孝之・後藤広亮・河村俊明・新井秀明

作　業　員

井篠　務・田中　正・高原与作・高原　好・平井武男・藤村忠治・中村明治・小倉安枝・田中みゑ・葛原千代・荻野しづか・野場恵美子・山副寅次郎・山副　同・宇野弘一・松村重明・永嶋淳一郎・坪倉勇一・田家　忠・坪倉正一・上田忠志・入江三郎・堀江健治・行待武夫・吉岡　博・吉浪保市・山副武志・林栄三郎・古川ナヲ

注２　杉原和雄ほか『裏陰遺跡発掘調査概報』（大宮町文化財調査報告書第１集　大宮町教育委員会）1979
注３　注２に同じ
注４　鈴木忠司・植山　茂ほか『京都府中郡大宮町小池古墳群』（大宮町文化財調査報告第３集　大宮町教育委員会・(財)古代學協會・平安博物館）1984
注５　岡田晃治・岩月有行・森　　正「帯城墳墓群発掘調査概要Ｉ」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1985)』京都府教育委員会）1985
注６　中村浩ほか『陶邑Ｉ』（大阪府文化財調査報告書第28輯　大阪府教育委員会）1976ほか
注７　楢崎彰一ほか『北丘　北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書』多治見市教育委員会　1981
注８　岡田晃治「国営農地開発事業関係遺跡昭和60年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1986)』京都府教育委員会）1986
注９　平良泰久「丹後地域昭和56年度分布調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1982)』京都府教育委員会）1982
注10　坪倉利正・釋　龍雄・杉原和雄・林　和廣『カジヤ古墳発掘調査報告書』峰山町教育委員会　1972
注11　樋口隆康「峰山桃谷古墳」（『京都府文化財調査報告』第22冊　京都府教育委員会）1961
注12　注６に同じ
注13　中谷雅治・釋　龍雄・杉原和雄・田中光浩・林　和廣『坂野――坂野丘遺跡・坂野４号墳発掘調査報告書』（京都府弥栄町文化財調査報告第２集　弥栄町教育委員会）1979
注14　中谷雅治・林　和廣・佐藤晃一『柿ノ木２号墳発掘調査報告書』（宮津市文化財調査報告１　宮津市教育委員会）1980
注15　注10に同じ
注16　注５に同じ
注17　注11に同じ
注18　釋　龍雄・林　和廣『奈具遺跡発掘調査報告書』（京都府弥栄町文化財調査報告第１集　弥栄町教育委員会）1972
注19　川西宏幸・山田邦和ほか『京都府弥栄町奈具岡遺跡発掘調査報告書』(財)古代學協會　1985
注20　注13に同じ
注21　堤圭三郎「太田古墳発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会）1970
注22　樋口隆康「冑形埴輪の新出土例」（『考古学雑誌』42-1，日本考古学会）1956
注23　注６に同じ
注24　久保哲正・波多野徹『高浪古墳発掘調査概報』（京都府野田川町文化財調査報告第１集　野田川町教育委員会）1985
注25　近藤義行・中川淳美ほか『向野西古墳群発掘調査概要報告書』福知山市教育委員会　1974
注26　注４に同じ
注27　平良泰久・常磐井智行・黒田恭正『丹後大山墳墓群』丹後町教育委員会　1983

付載　京都府大宮町有明横穴群出土の人骨について

池　田　次　郎

京都府中郡大宮町三坂に所在する有明横穴群のうちの3基の横穴が昭和60年，京都府埋蔵文化財調査研究センターにより発掘調査され，1号および3号横穴から人骨が検出された。横穴の築造時期は6世紀末と推定されている。

1号横穴人骨

玄室の奥壁寄りから多数の人骨が発見されたが，埋葬時の位置をとどめているものは皆無である。いずれも著しく破損しており，完全な状態で残っているものはないので，人骨の特徴を明らかにすることは困難である。残存する人骨片から被葬者の最少個体数を推定する。人骨片は成人骨と未成人骨に分けられる。

成人骨

頭蓋骨：明らかに別個体とみられる頭蓋骨が3個ある。そのうちの1つは，骨質が著しく脆く復元できないが，脳頭蓋骨と左上顎骨，1本の遊離歯とからなる。前頭骨の形態，大臼歯の磨耗度から壮年男性と推定される。他の1つは脳頭蓋骨，左の頬骨と上顎骨，左右鼻骨を含み，骨質は比較的堅牢であるが，土圧による変形が著しいため復元不可能である。眉間の隆起が強く乳様突起が大きいので男性と判定され，頭蓋縫合の癒合はほとんど認められないので壮年と推定される。第3の頭蓋は骨質は著しく堅牢で，脳頭蓋は前頭鱗の右側の一部と眼窩上縁を欠くだけで，これに左鼻骨と左頬骨の前頭突起が接続する。これ以外に顔面頭蓋骨として左右上顎骨の口蓋突起と右下顎頭の一部だけを欠く下顎骨がある。全体として弱小であり，主要な頭蓋縫合はほとんど消失もしくは不明瞭で，大臼歯の磨滅が強いことなどから熟年女性骨と推定する。

これら3個体分の頭蓋以外に脳頭蓋の破片が散乱しているが，3個体とは明らかに別個体に属す骨として左の側頭骨の破片が2点検出された。したがって，下顎骨を除く頭蓋骨から推定される成人の最少個体数は5体である。

次に下顎骨であるが，既述の熟年女性の頭蓋骨に属す1例以外に，明らかに別個体の下顎骨が2個あり，1例は壮年女性，他の1つは壮年前半と推定されるが性別不明である。このほか，それぞれ別個体の下顎骨右半分が3例(壮年前半男性，熟年前半男性，壮年前

半)が存在するので，下顎骨から算出される成人の最少個体数は男性２，女性２，性別不明２，計６体となる。

歯：顎骨に釘植している歯，遊離歯のすべてについて同一歯種で歯数が最も多いのは，下顎左右の第一大臼歯でそれぞれ６本ずつあるが，これらの中には遊離歯は含まれていない。したがって歯数からの成人最少個体数は下顎骨と同様，６体である。

胴骨：非常に少なく，椎骨と肋骨破片が僅かに残存する。椎骨の中では頸椎はほとんど認められず胸椎が比較的多いが，これらから最少個体数の推定はできない。

上肢骨：左鎖骨，左右肩甲骨がいずれも２体分で，男女各１体のものとみられる。上腕骨は男性の左右１対と女性の左の２体分，橈骨は右が２本，尺骨は左右各１本残存するので，前腕骨からは２体，うち１体は男性と推定される。手骨で残存するものはない。

下肢骨：寛骨はいずれも破片であるが，同一個体の左右であることが確実なものが男女１体ずつ，それ以外に女性左１，男性右１，性別不明の左が２体分あるので，推定最少個体数は男性２，女性２，性別不明２，計６体である。右大腿骨は男性２，女性１，左大腿骨は男性１，女性２，脛骨は左右とも女性１以外は小破片で，腓骨と同定されたものはない。したがって大腿骨，下腿骨から推定される最少個体数は男女各２，計４体である。足骨としては距骨の左１，右２，踵骨左右各１，右立方骨，第２楔状骨がそれぞれ１つずつ同定できただけである。

以上，残存する骨から推定される成人被葬者の最少個体数は，寛骨，下顎骨，歯からの６体が最高で，頭蓋骨からの５体がこれに次ぐ。その内訳は寛骨，下顎骨のいずれからも男性２体，女性２体，性別不明２体であり，これは他の骨からの推定とも矛盾しない。胴骨は残りが悪く，四肢長骨は個体判別に必要な骨端近くの部位より骨体中央よりの破片が多いため，これらの骨からの推定個体数は低くなっている。６体という推定個体数はもちろん最少個体数であるが，寛骨，下顎骨，歯からの推定値が一致していること，頭蓋骨には５体分以外のものと思われる破片が存在することなどを考慮すると，成人被葬者の実数も６人であった可能性が高い。

頭蓋，四肢長骨の計測値，示数を付表２～５に示す。

未成人骨

未成人骨，とくに幼児，小児の体肢骨で同定できる骨は少なく，大部分は下顎骨，歯から最少個体数を推定した。性別の判定は困難である。

頭蓋骨：６歳以上の幼児骨とみられる右頭頂骨，１歳未満の著しく小さく薄い前頭骨，２体の幼児の左側頭骨以外に幼児の脳頭蓋破片が存在するので４体分以上はあるとみられる。顔面頭蓋骨としては３歳前後の幼児右上顎骨が残っているだけである。下顎骨はそれ

付表 2.　有明1号横穴出土の熟年女性脳頭蓋の計測値，示数

1.	最大長	179	29.	正中矢状前頭弦長	110
3.	グラベラ・ラムダ長	175	30.	正中矢状頭頂弦長	113
5.	基底長	97	31.	正中矢状後頭弦長	68
7.	大後頭孔長	36			
8.	最大幅	145	8/1	長幅示数	81.0
11.	両耳幅	127	17/1	長高示数	72.1
12.	最大後頭幅	113	17/8	幅高示数	89.0
13.	基底幅	98	20/1	長耳ブレグマ高示数	62.6
16.	大後頭孔幅	30	20/8	幅耳ブレグマ高示数	77.2
17.	バジオン・ブレグマ高	129	27/26	矢状前頭頭頂示数	106.5
20.	耳ブレグマ高	112	29/26	矢状前頭示数	88.7
24.	横弧長	308	30/27	矢状頭頂示数	85.6
25.	正中矢状弧長	364	31/28	矢状後頭示数	88.0
26.	正中矢状前頭弧長	124	31(1)/28(1)	矢状上鱗示数	94.4
27.	正中矢状頭頂弧長	132			
28.	正中矢状後頭弧長	108		Vertex Rad.	118
28(1).	正中矢状上鱗弧長	72		Nasion Rad.	90

付表 3.　有明1号横穴出土の下顎骨計測値，示数

			M-1	M-2	M-3	M-4	M-5
			男性	男性	男性	女性	不明
66.	下顎角幅					93	
68.	下顎骨長					71	
69.	オトガイ高		31		28	(28)	
69(3).	下顎体厚		13	14	15	14	13
70.	下顎板高	左				58	
		右					61
70(a).	下顎頭高					15	
70(3).	下顎切痕高	左				12	
		右					15
71.	下顎枝幅	左				35	
		右	34			34	34
71(1).	下顎切痕幅	左				33	
		右					35
79.	下顎枝角					123	
71/70.	下顎枝示数	左				60.3	
		右					55.7
70(3)/71(1).	下顎切痕示数	左				36.4	
		右					42.9

付表 4.　有明1号横穴出土の上肢骨計測値，示数

鎖骨	C-1	C-2
	男性(左)	女性(左)
6. 中央周	37	32

肩甲骨	S-1	S-2
	男性(右)	女性(左)
12. 関節窩長	39	30
13. 関節窩幅	26	21
13/12. 関節窩長幅示数	66.7	70.0

上腕骨	H-1	H-2
	男性(左)	女性(左)
1. 最大長	285	
2. 全長	283	
3. 上端幅	45	
5. 中央最大径	22	18
6. 中央最小径	18	13
7. 最小周*	62	48
7a. 中央周	66	52
8. 頭周	129	
7/2. 長厚示数	21.9	
6/5. 骨体断面示数	81.8	72.2

橈骨	R-1
	男性(右)
3. 最小周	40
4. 骨体横径	15
5. 骨体矢状径	12
5/4. 骨体断面示数	80.0

尺骨	U-1	U-2
	男性(左)	男性(右)
11. 前後径	13	12
12. 横径	16	15
11/12. 骨体断面示数	81.3	80.0

* H-1の右　62mm

付表 5.　有明1号横穴出土の下肢骨計測値，示数

大腿骨	F-1	F-2	F-3	F-4	F-5
	男性(左)	女性(左)	女性(右)	女性(左)	不明(左)
6. 中央矢状径	26	19	21	22	
7. 中央横径	24	26	24	23	
8. 中央周	81	73	73	73	
A. 骨体上最大径	30	32	29		30
B. 骨体上最小径	23	18	19		22
15. 頸垂直径	31	27			
16. 頸矢状径	26	20	21		
17. 頸周	97	85			
6/7. 中央断面示数	108.3	73.1	87.5	95.7	
B/A. 骨体上断面示数	76.7	56.3	65.5		71.3
16/15. 頸断面示数	83.9	74.1			

脛骨	T-1	T-2
	女性(左)	女性(右)
8. 中央最大径	24	26
9. 中央最小径	17	17
10. 骨体周	68	68
10b. 最小周		60
9/8. 中央断面示数	70.8	65.4

に釘植している乳歯の萌出状態，磨耗の程度から６～７歳１，６歳前後１，４歳前後２，２～３歳２，計６体分の存在を確認できる。上下顎骨に釘植している乳歯，遊離乳歯のうち最も多いのは上顎右の第１臼歯および下顎左の第２臼歯のそれぞれ３本であった。

体肢骨：右大腿骨２と左寛骨１が同定できただけで，右大腿骨の１つは６歳前後，他の１つはそれ以下の幼児骨とみられる。

以上，未成人被葬者の最少個体数は６歳前後，４歳前後，３～２歳それぞれ２，計６体である。したがって，１号横穴に埋葬された遺体は，壮年前半男性，熟年前半男性，熟年女性，壮年女性各１体，性不明の壮年前半者２体，幼児６体以上，計12体以上と推定されるが，成人の６体は実際の被葬者数とみてよかろう。

３号横穴人骨

玄室の奥壁寄りから発見された脳頭蓋骨の破片である。前頭骨，左右の頭頂骨，右側頭骨錐体，後頭骨の一部が遺存するが，骨質が著しく脆いため接合することはできない。骨壁は著しく厚く，後頭骨の内・外後頭隆起間の距離は21mm を超えるので男性骨と判定される。矢状縫合，冠状縫合，人字縫合はすべて分離しているので，被葬者の死亡時年齢は壮年前半と推定される。

2. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡 昭和61年度発掘調査概要

はじめに

昭和54年度に開始した近畿自動車道舞鶴線関係遺跡の発掘調査は，昭和60年度に第７次区間分を終え，昭和61年度からは綾部市を中心とする第８次区間の調査に移った。この区間には，昭和58年度に行われた遺跡分布調査によって17遺跡が確認され，その後４遺跡が追加された。

昭和61年度には，延長22.7kmに及ぶこの区間の東端部に近い，綾部市七百石町のかじや谷古墓・平山谷城館跡・中城館跡，及び高槻町の野崎遺跡の４遺跡の発掘調査を行った。これらの遺跡は，その後の文献からのあるいは発掘調査によって，遺跡名をそれぞれ「カジヤ谷古墓」「平山城館跡」「平山東城館跡」「野崎古墳群」と改称しており，この概要報告においてもこの改称後の遺跡名を使用する。改称理由については，それぞれの項を参照されたい。

これらのうち，平山城館跡と野崎古墳群は諸般の事情により調査開始が遅れ，かつ１～３月の降雪・降雨によって調査がとどこおりがちであったことにより，本概要作成時までに充分に成果をまとめきれていない。平山城館跡については昭和62年度に調査を継続することでもあり，これらの遺跡のより詳細な成果報告と，今回報告ができないカジヤ谷古墓の報告については，次の機会に譲る。

現地調査は，当調査研究センター調査課主任調査員小山雅人，同調査員藤原敏晃・細川康晴・鍋田　勇が担当した。また，調査に関しては，日本道路公団大阪建設局福知山工事事務所・綾部市教育委員会・綾部史談会・京都府教育委員会・京都府中丹教育局等の諸機関の協力を得た。また，七百石町村上重一氏，高槻町新川　滋氏，豊里町上田雅好氏の各町区の近舞線対策委員長の諸氏には，現地作業員や整理事務所の整理員の手配・調整・連絡等に格別の御援助をいただいた。また七百石町・高槻町およびその周辺の多くの方々には作業員として多大な御協力をいただいた。(注1) 調査補助員・整理員として調査に参加された方々にも色々と手を煩わせた。(注2) 更に，多忙の中，現地まで直接足をお運びいただき，貴重な御助言・御指導を賜わった綾部史談会会長梅原三郎氏・福知山高校教諭川端二三三郎氏・綾部市教育委員会中村孝行氏等の方々にもここに記して感謝の意を表したい。

（小山雅人）

位置と環境(注3)

野崎遺跡は，綾部市高槻町に所在し，国鉄舞鶴線梅迫駅の北1.2kmの丘陵端に位置する。これまでに縄文時代のものと思われる石器の剝片が採集されている。平山城館・平山東城館は同市七百石町に所在し，梅迫駅の西方に聳える高城山（298.7m）の北麓の平山地区に位置する。綾部市は丹波山地の北部に位置し，なだらかな準平原状の山々が連なり，西に低く，南東に高くなっている。その間を縫うように由良川が流れ，市域の東半分を占める上林地区を流域とする上林川と合流し，河谷平野を構造線に沿って東西に形成する。戸奈瀬町あたりでは河岸段丘が発達している。綾部盆地の中では，支流の八田川・安場川・犀川・荒倉川が南北方向に流れ，谷平野が広がっている。

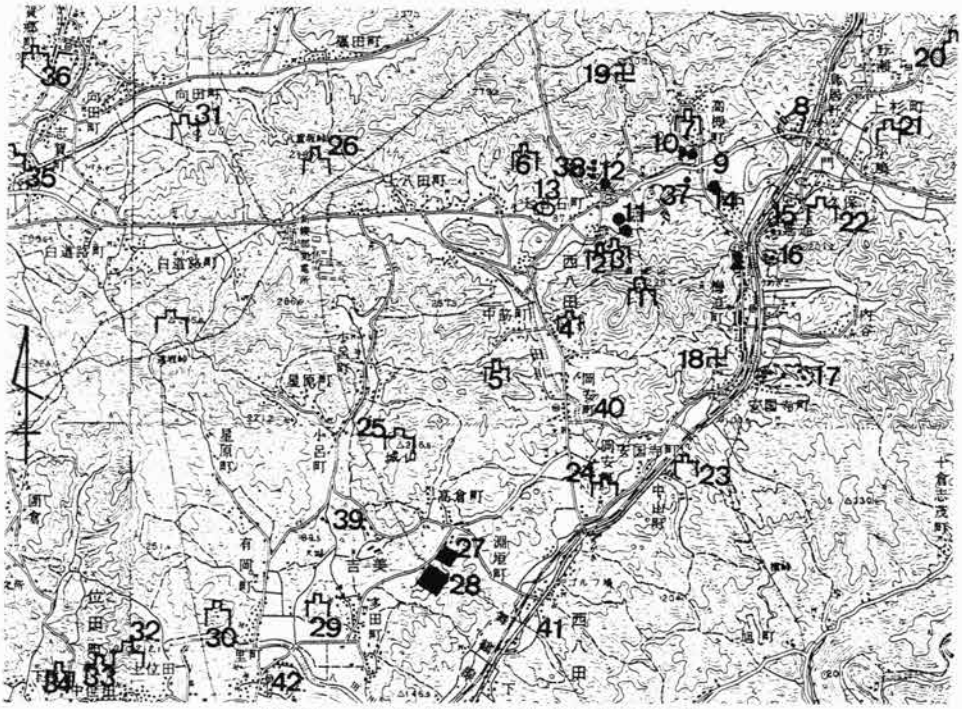
この地方には古くから人々の生活が営まれ，以久田野や西原町からは旧石器時代の遺物が発見されている。上杉町の旗投遺跡は今回調査の野崎遺跡の東1kmに位置する。縄文時代にもひきつづき人々の生活が見られ，市内8か所の遺跡からは石製品が見つかっている。

弥生時代に入ると谷平野の各地で稲作が開始され，市内では館遺跡や青野遺跡が代表的な遺跡である。青野遺跡は由良川の自然堤防の微高地上に営まれた集落跡で，弥生時代後期から古墳時代前期にかけて連続して人々が居住し，一時空白の時代を経て古墳時代後期にも生活が営まれていたことを示す。これらの集落は，館遺跡と以久田野古墳群や高谷古墳群など，古墳と集落の関係を考える上でも重要である。このほか近舞線関係の調査予定地である興遺跡や観音寺遺跡も弥生時代から古墳時代にかけての集落跡と考えられている。

この地方の古墳時代は4世紀の犀川下流域の成山古墳群の方墳築造で開始される。次いで八田川流域の久田山C２・３号墳等全域に散見できるようになる。5世紀前半には段築，葺石，埴輪，および周濠という畿内からの造墓技術の導入をうかがわせる菖蒲塚古墳，聖塚古墳(多田古墳群)が築造される。この両墳は立地，規模，副葬品，外表施設において今までと大きく異なっており，広い地域の政治的統合とその首長の出現をうかがわせる。

七百石町の政次１・２号墳もこのころに位置づけられる40m近い円墳である。5世紀後半には前方後円墳沢３号墳が以久田野に出現している。5世紀後半以降6世紀を中心に数多くの前方後円墳が造られる。前方後円墳はほぼ全域に拡散しており，八田川上流域(上杉１号墳，茶臼山古墳)，同下流域（久田山Ｆ１・Ｆ３号墳)，犀川上流域（岫山古墳，須波伎東古墳，稲荷山古墳)，同下流域(以久田野沢１号墳，同殿山１号墳，同78号墳，同15号墳，同16号墳)である。6世紀になって造墓の中心は群集墳になる。木棺直葬の古墳では犀川中流域の三宅古墳群は屯倉のあった所で，古墳群は6世紀中頃にかけてつづく。小呂の田坂野古墳群は同様の時期から7世紀初頭までつづく。横穴式石室を内部主体とする

古墳は6世紀前半から築造されはじめ，唐部の名の残る今田町の高谷古墳群が造られる。七百石町では6世紀後半の塚廻り3号墳が調査されている。以久田野古墳群は石室の実態が摑めていないが，6世紀中頃には大型円墳80号墳を盟主として大古墳群が形成される。このほか市内の古墳には須波伎物部氏との関係が考えられる物部の石塚古墳群などがある。横穴式石室は6世紀後半に盛期をむかえ，7世紀の前半には終末をむかえる。この後，郡司クラスの有力豪族の関心は，綾中廃寺のような寺院建築に向けられる。漢部，私部(きさいちべ)，八田部など部民制によって成立した村々はやがて郷となり，平安時代の『倭名類聚抄』には十六郷が記されている。平安時代末(12世紀後半)の何鹿郡では在地領主が中央の権門勢家に所領を寄進して，荘官として在地に勢力を根づかせていく。鎌倉幕府から地頭に任命される者もあり，物部の上原氏が知られている。また鎌倉幕府の有力御家人上杉氏は上杉荘を所領としていた。上杉荘には光福寺があって足利尊氏の母上杉清子の信



第75図　周辺遺跡分布図 (1/70,000)

1. 高城城　2. 平山城館　3. 平山東城館　4. 嶋万城山館　5. 姫城
6. 木坂城　7. 高槻城　8. 旗投遺跡　9. 野崎遺跡　10. 茶臼山古墳
11. 政次古墳群　12. 塚廻り3号墳　13. 七百石遺跡　14. 狐塚古墳　15. 中島古墳群
16. 石子古墳群　17. 宮ノ越(丸山)古墳群　18. 安国寺　19. 岩王寺　20・22・23. 城跡
21. 八田城　24. 中山城　25. 高倉城　26. 八重坂城　27. 菖蒲塚古墳
28. 聖塚古墳　29・30. 城跡　31. 松原城　32. 位田城高城　33. 位田城低城
34. 位田城　35. 浅根山城　36. 天王山城　37. 白田古墳　38. 八幡宮古墳群
39. 栗ケ丘古墳群　40. 杉ケ本古墳　41. 淵垣古墳群　42. 久田山C古墳群

仰厚く，室町時代には安国寺となって多くの寺領を誇った。また八田郷では岩王寺があり，大きな勢力を持った。

南北朝内乱期に入ると綾部周辺では栗村合戦(1337年)が起こっている。栗村荘に当たる地域には一尾(栗村)城の他，福垣，館，今田，大畠に城跡が存在している。位田には「高城」・「低城」が存在し，延徳元(1489)年から翌年にかけて位田の乱の舞台となった。位田の乱は地頭・守護代である上原氏の支配に対して土豪の荻野氏や大槻氏が反抗し，その勢力争いである。犀川上流域では物部城，天王山城を中心として浅根山城，北野城などや，伝承の城として高浪山や八重坂峠，館と見られる松原城がある。

高城山は東西八田の中央の山塊の最高所にあり，尾根に沿って下ると西南には嶋萬の館や城山，北西には平山の城がある。大槻氏は清和源氏赤井氏流で，芦田，荻野，上林等と同族である。『丹波史年表』では「永正2(1505)年大槻筑後守西八田村高城山に住む」と記している。高槻城，木坂城等には高城の大槻氏との同族間の対立が伝えられている。落城の物語についても類型化されている。高城の南方東西八田の分岐点にある中山城も大槻氏であり，古い時期の築城法である。八津合町の上林城(生貫山城)は発掘調査の行われた数少ない山城である。上林氏の繁栄や城の盛衰を裏付ける資料が出土した。また本丸部分からは鍛冶工房と見られる跡や半地下式の建物跡が検出された。

今回調査の城館に関係あると思われる戦乱は1507年の細川政元の丹後一色氏攻め，1510年代の細川澄元，高国の京や丹波を舞台にした争い，1520年代の赤井の乱，1530～1560年代にかけての波多野(赤井)対内藤の勢力争い，1560年代には若狭から逸見駿河守や織田方の高田豊後守が攻め込む等の争いがあり，1570年代の明智光秀の丹波平定により終結する。

江戸時代明和年中(1760年代)に成立した『丹波志』には平山治部少輔の名が見える(旧栖の部，上八田平山村大槻氏旧栖「高城本丸ニ秋葉権現アリ　後平山治部少輔ト云」)ことから，今回調査の城館との関係が考えられる。淵垣の館は高城の分地で兄弟討果との記述がある(旧栖の部)。西八田村史によれば高城へ向かう大門や七間登り道，また陣屋跡や千人隠れなどの城に関係ある名称が見られる。　(大和田淳司)

(1) 平山東城館跡

1. はじめに

平山東城館跡は，綾部市七百石町に所在する。当地は，南側に八田盆地を2分する山塊がそびえ，そこから北へ派生した丘陵上に位置する。この山塊の最高所には，高城城跡が知られている(注4)。この山城は，山頂が西南の尾根に沿って幾段もの郭に築かれている。平山

東城館跡の谷を挟んだ西側には，この山塊から北へ派生する同じような丘陵上に，平山城館(中城)跡がある。この城館のさらに西側には馬城と呼ばれる台地がある。(注5) これらの位置関係は高城城跡を中心に北へ広がった形をなす。また，高城城跡と平山城館跡はどちらも大槻備中守との関係が指摘されている。(注6) さらに，高城(タカシロ)，中城(ナカジロ)，馬城(ウマシロ)という呼称は，これらの位置関係とうまく合い，同様な呼称の仕方である。以上のことから，これらが城館に関連した一群のものと推定してもよいと考えられる。

平山東城館跡は，これらの山城とは異なり，近畿自動車道舞鶴線建設に伴い，第8次工事区間における事前の踏査による調査によりはじめて確認された城館跡である。この城館も高城城跡を背にした他のものと同様な立地である。

なお，この遺跡は調査の開始時点では中城館跡として届け出されていたが，平山城館(中城)跡との混同が生じるとの指摘を受けて(注7)平山東城館跡と称することとした。

2. 調査の経過

調査は，まず地形測量から行うために，調査地の4m方眼の地区割りから始めた。当地は，自動車道建設に伴う事前の調査地であったので，工事に先立って日本道路公団によって打たれた測量杭の成果を利用して，国土座標に沿った形の地区割りをした。0ラインがX＝－72,032.00，AラインがY＝－63,614.00であり，それぞれ南と東へ数字とアルファベットを順次付した。4m方眼の地区の名称は，その方眼南東のライン交点の記号名で称することとした。

それから，この地区割りによる測量杭を基準に調査地の地形測量を行った後に，9ラインとKラインに沿って土層，遺構，遺物観察のためのトレンチを設定した。このトレンチの観察によって，暗茶灰褐色土を一層除去した後は地山となっており，この地山面に遺構が切り込んでいることが判明した。そこでこの暗茶灰褐色土を調査出来る限りの範囲において除去し，この調査範囲全面にわたって遺構の検出に努めた。その結果，多数のピットや土坑を検出した。また，土塁や土塁の外側にめぐっていた空堀などの遺構も合わせて掘削した。以下，地形測量，発掘調査で明らかになったことの概要を述べる。

3. 調査の概要

地形測量の成果によると，郭部は南北約45m・東西は谷側で約21m・山側で約30mを測る台形状を呈した，単郭のものである。この郭部は，背後は土塁と空堀が築かれており，東西は急な崖で切り立っている。これらに比べ谷側の東側は，やや蹴り込まれた状態になっており，これは今も下の道に通じる。以上のことから，谷側のやや蹴り込まれたか所が，

虎口であった可能性が考えられる。

土塁は，郭部南方の山側に築かれている。平面形は，東西に広がる土塁の左右が屈曲して若干北側に延びるもので，「] 」の字形を呈する。土塁の上部幅は約2m・下部幅約9mを測る。郭部から土塁の上部までの高さは約４mである。土塁の斜面の角度は０度である。北に延びる土塁の長さは，西の長いもので約６mであり，これは東西に土塁を築いたものではなく，背後の山側だけを意識したものといえる。なお，郭側の土塁裾は一旦段をなして郭部に続いているが，この段部の平坦地は，後世，郭部の南東隅にあった稲荷に参る道として土塁を削平したものと思われ，西側の屈曲した土塁の中央部が破られているのも，これに伴って破壊されたものと推定される。したがって，土塁の下部は現状より広かったと推定され，下部の幅も段の端までとした。

空堀は，土塁の外側に，土塁同様に「] 」の字形に掘削されていたと推定されるが，東側は削平されており不明である。空堀の上部幅は約５mであり，底部幅は約2.5mである。肩部から底部まで深さは約1.5mであり，土塁の上部から底部までの高さは約５mである。この空堀の特徴として，空堀の掘削が郭部の中心ラインから左右に何段か段をもって行われていることである。これは，工法的問題なのか，戦略的なものなのかは不明であるが，ここでは，戦略的なものが特に想定できないので，工法的な問題の結果として捉えておきたい。空堀の断面形は，「∪」の字形を呈する。

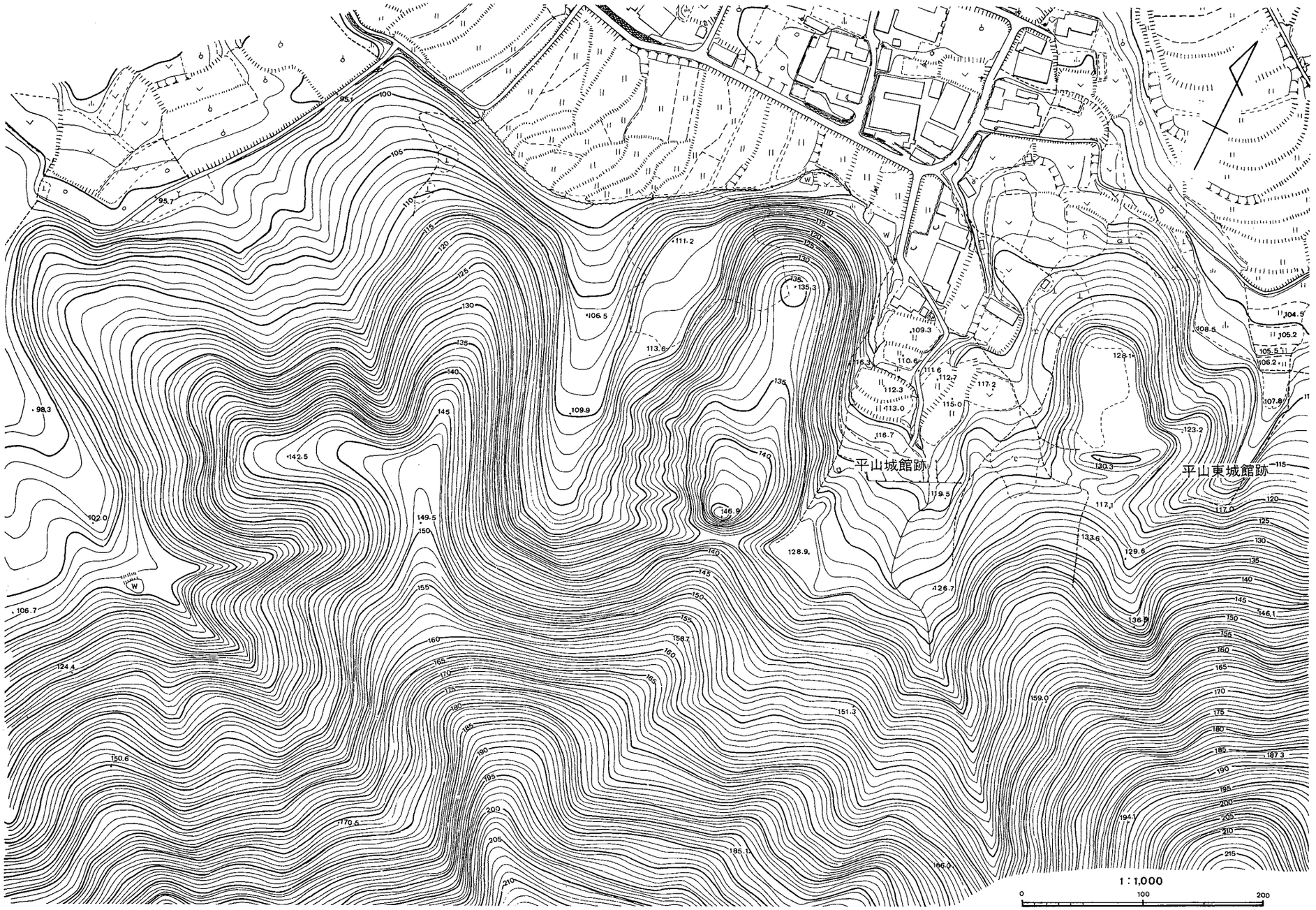
郭部で検出した主な遺構には，掘立柱建物２棟・土坑・多数の柱穴状ピットがある。

掘立柱建物跡(SB01)

この調査地では，多数の柱穴状のピットを検出したが，建物などの遺構としてまとまったものは少なく，今後の検討が要される。このSB01は，郭部の中央に位置する。東西に３間で柱間は約２mの規模を持つ総柱の建物跡と推定される。南北は，これより北に１間は確認したが，その先は調査範囲外のため不明である。南北の柱穴を結んだラインは，座標北より約20度西へふれる。柱穴は２段に掘り込まれており，外側の直径が50～60cm・深さは0.6～１mを測り，他の柱穴状ピットと比べて一回り大きいものである。西側の柱穴内からは，土師器の細片が出土した。これは土師器の皿になるものと推定される。

掘立柱建物跡(SB02)

郭部の南側中央部に位置し，東西２間×南北３間の規模をもつ総柱建物跡と推定される。柱間は東西南北とも２m前後である。南北の柱穴を結んだラインは，SB01同様に座標北より約20度西へふれる。柱穴の直径は30～40cm・深さは20～30cmを測る。



第76図　平山城館跡・平山東城館跡周辺地形測量図

第77図　平山東城館跡地形測量平面実測図

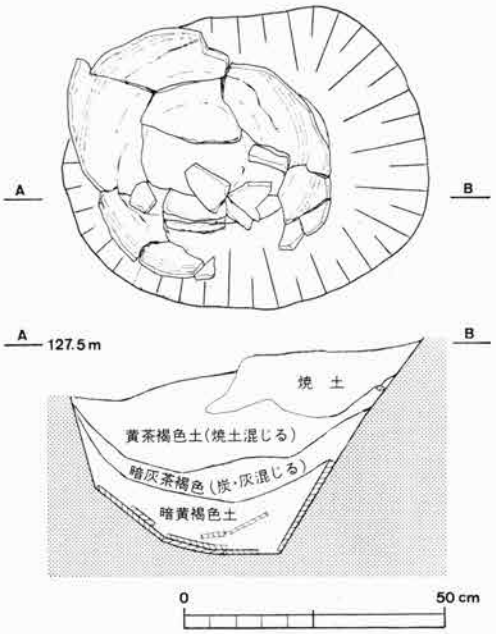
土坑(SK01)

調査した郭部の中央やや西よりで検出した土坑状遺構である。長径1.8m・短径1.5mを測る。断面形は長方形である。土坑内部には多量の石が入っていた。この石は，人頭大の石を下に上層になると小さくなって拳大の大きさになる。中を埋める土は，２層であり，石

の大きさが変化するのに伴うように土色が変化する。この土坑状遺構からは，備前系の大甕の口縁部・体部や美濃焼と思われる天目茶椀，染付けの破片が出土した。

土坑(SK09)

郭部の南西隅で検出したもので，長径70cm・短径55cm・深さ40cm程の楕円形をした土坑である。越前系の大甕の胴部以下の下半部が，この土坑内に据えられていた(第78図)。この大甕の内部は土のみが堆積していた。この土坑の土は，大甕に堆積していた暗黄褐色土が最下層にあり，その上に炭・灰・焼土を含む暗灰茶褐色土，焼土塊が混じる黄茶褐色土が堆積していた。この大甕は胴部以下のみであるが，調査地掘削中に越前系の大甕の口縁部が所々で出土しており，同一のものの可能性がある。



第78図　土坑 SK09 実測図

この他，土坑状遺構，集石，柱穴状遺構などの遺構を検出したが，性格等今後の検討が要される。

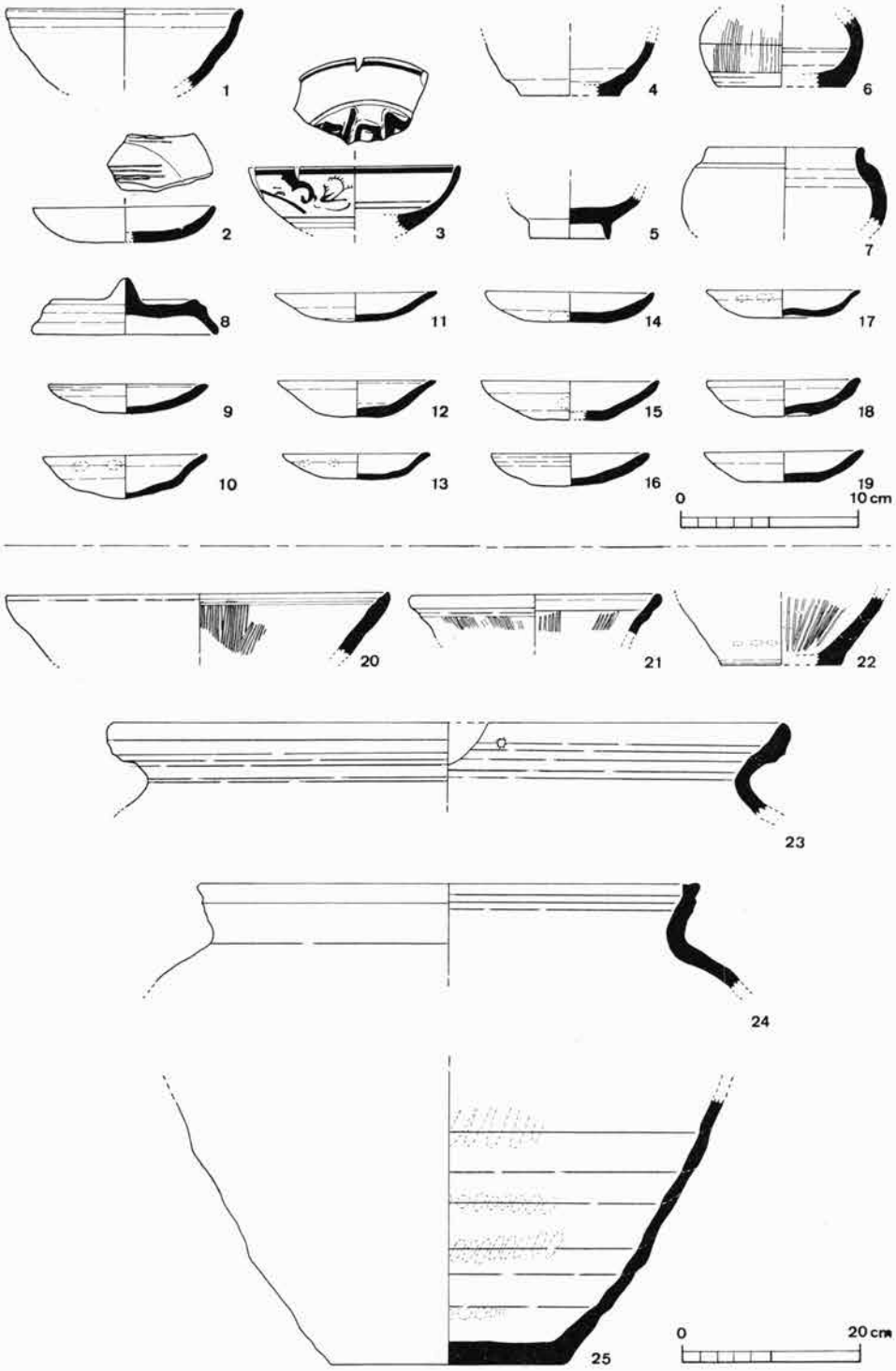
4. 出土遺物(第79図)

今回の調査で出土した土器は，土師器・須恵器・陶磁器・銅銭の他，弥生時代のものと考えられる石鏃や叩き石，江戸時代以降の遺物がある。

1は，土坑(SK01)の埋め土内より出土し，口径13.4cmを測る。茶褐色の釉がかかる天目茶椀である。美濃系のもので，16世紀に属すると考えられる。

2は，口径10.2cm・器高1.9cmを測る，灰釉陶器と考えられるおろし目皿である。内面底部に平行に溝が走り，底面から体部が立ち上がる境界にも円形に溝を刻む。色調は淡褐色を呈する。

3は，口径12cmを測る。青花皿である。器壁は，口縁部から体部にかけてうすいものが底部になると急に厚くなる。底部は破損しており不明であるが，おそらく碁笥底をなすものと推定される。このタイプは，16世紀前葉～1537年に属するとされる一乗谷朝倉館跡にみられるものと類似すると思われる。



第79図　平山東城館跡出土遺物実測図

4は，灰釉陶器の底部である。内外面釉がかかる。底径5.6cmを測る。

5は，青磁の高台部である。高台の直径は5.6cmを測る。

6・7は，壺と考えられる。6は平底の底部から湾曲する体部が立ち上がるものである。底径は7cmを測る。7は，湾曲する体部から段をなして口縁部が上方に立ち上がるものである。口径は，8.6cmを測る。6は淡灰褐色を呈し，7は淡赤褐色を呈する。

8は土師器の蓋形土器で，口径10.4cm・器高3.2cmを測る。内外面ナデ仕上げである。

9～19は，土師器の皿である。底部がやや尖り気味のものであるものとか，平底，窪む，といった分類が可能とも考えるが，出土した数が少量であるので今回は分類はしない。口径は8～9cmである。

20～22は，すり鉢である。20は口径21.8cmを測る。斜め上方に直線的に口縁部が延びる。端部は尖り気味に終わり，内面に凹線を有する。すり目は櫛歯で描いたような目である。21は口径28cmを測る。口縁端部はまるくおさめられ，内外面はナデ仕上げである。体部外面はハケ調整である。すり目は2.5cmに6本描かれている。22は，底径13.6cmを測る。すり目はヘラ状のもので描かれている。

23は，備前系の大甕の口縁部である。口径は75.6cmを測る。口縁部がくの字に外反したのち口縁端部が段をなして面を持つものである。16世紀後半に属すると考えられる。土坑SK01，空堀下層等かなり散らばって出土したが，量的には土坑内が多い。

24・25は，越前系の大甕の口縁部と底部であると考えられる。24は，口径56.4cmを測る。25は，底径26.5cmを測る。断面を観察すると接合痕が見え，粘土紐を巻き上げたものと考えられる。25は，土坑SK09に収まっていたものであるが，口縁部は，包含層の遺物である。口縁部と底部の中間部分がなく同一のものとは断定できないが，ともに越前系と考えられ，また他に越前系と考えられる遺物が目につかないことから同一のものと推定される。この他，丹波系と考えられる甕の口縁部もある。

銅銭は開元通宝である。この他，後世の稲荷社等に関係するとみられる寛永通宝がある。

須恵器は，あるいは古墳時代に属するものと考えられる甕の破片等がある。(注8)

5. ま　と　め

今回の調査の概要は以上の通りである。まだ調査を終えたばかりであり，今後訂正していかなければならないものもあるが，今回は要点をまとめるにとどめたい。

平山東城館跡は，今回の調査で初めて明らかになったものである。これまで当地では，高城城跡を中心に尾根を南西に下った嶋万や大安の地区に館跡が想定されていたが，後述する平山城館跡(中城)と当地の発掘調査により，高城城跡を中心としてこの2か所の遺跡

が館の機能を有していたと考えられる。その理由は，「1. はじめに」で述べたように西隣の平山城館跡と同様に高城城跡北隣の位置をしめ，そこから建物跡が検出されたこと，また，平山城館跡と同時代と考えられる遺物が出土したからである。更に，高城城跡は広い平坦地が確認されていないことを考え合わせると見張りの機能を持つ郭と推定されるためである。「1. はじめに」で述べた馬城という地名の残る所を含めるこれら一群のものは，かなり広範囲の城館跡が関連しあっていることが具体的に知られ，山城を探る上でも示唆に富む遺跡群である。

また，この遺跡で検出された建物跡は，互いの建物が同時に存在したとすると，今後比較検討する中で，それぞれの郭の役割を知る手掛りになるものと考えられる。

これらの城館跡は，遺物の出土量は多いとはいえないが，輸入陶磁器をはじめ，備前系，越前系，丹波系の陶器類など交易を含めた物流について知る貴重な資料になるといえる。加えて，弥生時代・古墳時代に属すると考えられる遺物が出土しているが，弥生時代については，高地性集落と山城が並存することはよく説かれるところである。また，古墳時代についていえば，この遺跡のすぐ北東側の政次古墳群が知られ，谷を隔てた北側の丘陵には塚廻り古墳群を始めとする古墳群が点在し，当地も古墳が存在した可能性も考えられる。

綾部市は上林城跡の発掘調査を始めとして，これまで山城跡に関する調査が精力的に行われてきた所である。特に，分布調査，文献史料による山城の解析など貴重な成果がある。しかし発掘調査によるものは少なく，今回の調査は更に貴重な成果が加わったといえよう。(注9)

（藤原敏晃）

(2) 平 山 城 館 跡

1. は じ め に

平山城館跡は，綾部市七百石町にある。平山東城館跡西側の高城城跡がある丘陵から延びる尾根上に位置する。この城館は，調査開始当初は平山谷城館跡と称していたが，『日本城郭大系』では平山城として，綾部市の報告(注10)では中城と報告されているものと同じである。そのため混乱を招く恐れがあるので，平山城館跡と改称することになった。『日本城郭大系』(注11) 11では，「腰郭の8m高く三の丸・二の丸，それより8m高く本丸ありとされ，高城城跡の支城」と記述されるものである。その高城城跡は，同じく『日本城郭大系』11では「確認されているのはおよそ東西30m×南北20mほどの一郭のみであるが，山中に分散して郭が造られていたとも考えられるものであり，綾部市内の城の城主には大槻姓が多く，大槻氏の一円支配的本貫地である」とある。

2. 調査の概要

平山城館跡の調査は平山東城館跡と併行して始めたが，様々の要因で掘削に取りかかったのは12月に入ってからであり，現在も調査継続中である。従って，今の段階は精査途中であり，整理もほとんど出来ていない状況ではあるが，現時点での調査の概要を述べてみたい。

調査地は，城郭大系にあるように３段の平坦地があるといえる。しかし，地形測量の成果や後に述べる試掘トレンチの結果によると，郭といえるものは三の丸・二の丸とされた下の広い２段である。本丸とされた最上段は，郭とするには平坦地が狭小であり，土を盛り上げて造成していることから郭とはし難い。さらに，平山東城館跡では，背後に尾根を切断する形で空堀と堀切が設けられ，続いて土塁が築かれている構造であるが，平山城館跡の本丸を土塁的な性格とみなし，堀切りに続くという構造を考えてみると，平山東城館跡と同様のものと推定可能と考えられる。但し，この頂部は西八田の平野が見渡せる眺望のよい場所であり，見張り等の機能を果たす簡単な設備の存在は予想できる。以上のことを踏まえて，これから便宜的に最も広い一番下の三の丸を第一郭，２段目の二の丸を第二郭とし，本丸は郭ではないものと考えて述べていきたい。

地形測量図によると第一郭の南北は約70m・東西は北側で約20m・南側で約35mを測る。この郭と下の水田面との比高差は約30mである。第二郭は，東西約40m・南北約10mで，第一郭と第二郭との比高差は約８mである。本丸とされていた部分と第二郭との比高差は約10mであり，南側に尾根を切断して作られた堀切の深さは約12mである。なお，第一郭と第二郭および第二郭と本丸とされていた所の境の斜面には，調査前に破壊された道が作られているが，破壊前には道らしきものは存在しなかった。第二郭を東に下がった所には幅約４mの平坦地が郭に沿って走るが，これが腰曲輪と考えられる。しかし，ここも調査前に掘削機械が侵入しており正確な広さ等は不明である。この腰曲輪の下の斜面には畝状に竪堀が巡っている。特に，堀切に続く所は遺存状況がよく，現況で約１m以上の深さがある。さらに竪堀は，地形の観察から西側の斜面の大部分に巡っていたものと推定される。

調査は始めに，調査地を平山東城館跡と同じく，国土座標に沿った形の４m方眼の地区割りを実施した。座標値は10ラインがX＝－72,086.00，Ａラインが Y＝－63,752.00である。続いて，17ラインとＨラインに沿ってトレンチを設定して土層，遺構，遺物の有無の確認をした。土層断面の観察により，暗茶灰褐色土層１層が包含層で，この層の下暗黄褐色土に遺構が切り込んでいることを確認した。そこでこの暗茶灰褐色土を機械力によって除去し，全面的な精査に移った。その結果，第一郭において建物３棟，土坑状遺構，溝状

第80図　平山城館跡地形測量図（空撮図化図の稿正前図よりトレースした）

遺構，多数の柱穴状遺構等を検出した。第二郭は現在精査中であり，今後の成果により新たな事実が明らかになるものと考えられる。

3. 検 出 遺 構

第一郭において検出した建物遺構は３棟を数える。南側のものを住居１（SB01），西側のものを住居２(SB02)，東側のものを住居３(SB03)と称して述べる。

建物１は，第一郭の南側の中央やや西よりに位置する礎石建物跡である。これは，柱が立っていたと推定されるすべての場所で礎石を検出したものではなく，掘立柱建物のように柱穴を検出したか所もある。建物規模は東西５間×南北４間のもので，柱間は約２ｍを測る。礎石はたいてい平坦な面を持つ自然石を用いる。建物の南北軸は座標北より西へ約５度ふれる。建物の北辺中央部には焼土，炭，灰を埋土とする土坑状遺構がある。建物に係わるものであるかどうかは不明であるが，出土遺物は同様の時代のものといえ，貯蔵穴など建物に伴う遺構である可能性がある。また，この建物跡範囲内には大変硬いか所があり，特に北西部は粘土が叩き締められたと考えられる所があり，土間であった部分かもしれない。この建物跡から東側にかけては，炭を含む焼土が建物幅ぐらいに広がっており，この建物が焼失した可能性の高いことが推測される。この焼土の広がりからは多量の遺物が出土しており，建物が焼失したものとするならば，これらの遺物が実際にこの建物で使用されていたものとも考えられる。

建物２は，調査地の中央西寄りにあり，建物１の北側に位置する。長方形を呈するもので，柱間も他のものに比べ不規則であるが，礎石を含む建物遺構と推定した。東西約4.5ｍ・南北約11ｍの規模である。柱間数は，東西１間×南北４間と考えられる。この建物跡でも粘土を叩き締めたか所があり，建物１と同様土間と考えられる。建物の南北軸は，座標北にほぼ平行である。

建物３は，建物２と反対の調査地中央東側に位置する。東西４間×南北４間の掘立柱建物跡である。礎石は残っていないが，総ての柱穴を検出したわけではなく，建物１・２と同じく礎石が用いられていた可能性もある。この柱穴の一部には，埋土に炭を含む焼土をもつものがあり，建物１同様焼土も広がっており焼失した可能性がある。柱間は約２ｍを測る。建物の南北軸は，建物２と同じく座標北にほぼ平行である。

これらの建物は，柱穴内から遺物が出土しており今後整理を進めるなかで時代等も明らかになると考えられるが，建物の向きもほぼ同方向であることから，現段階では大きく時代が異なるものではないといえ，建物も同時に存在したものと推定される。

溝状遺構は，郭の南端に場所をたがえて平行に走るものと，建物２(SB02)と切り合う

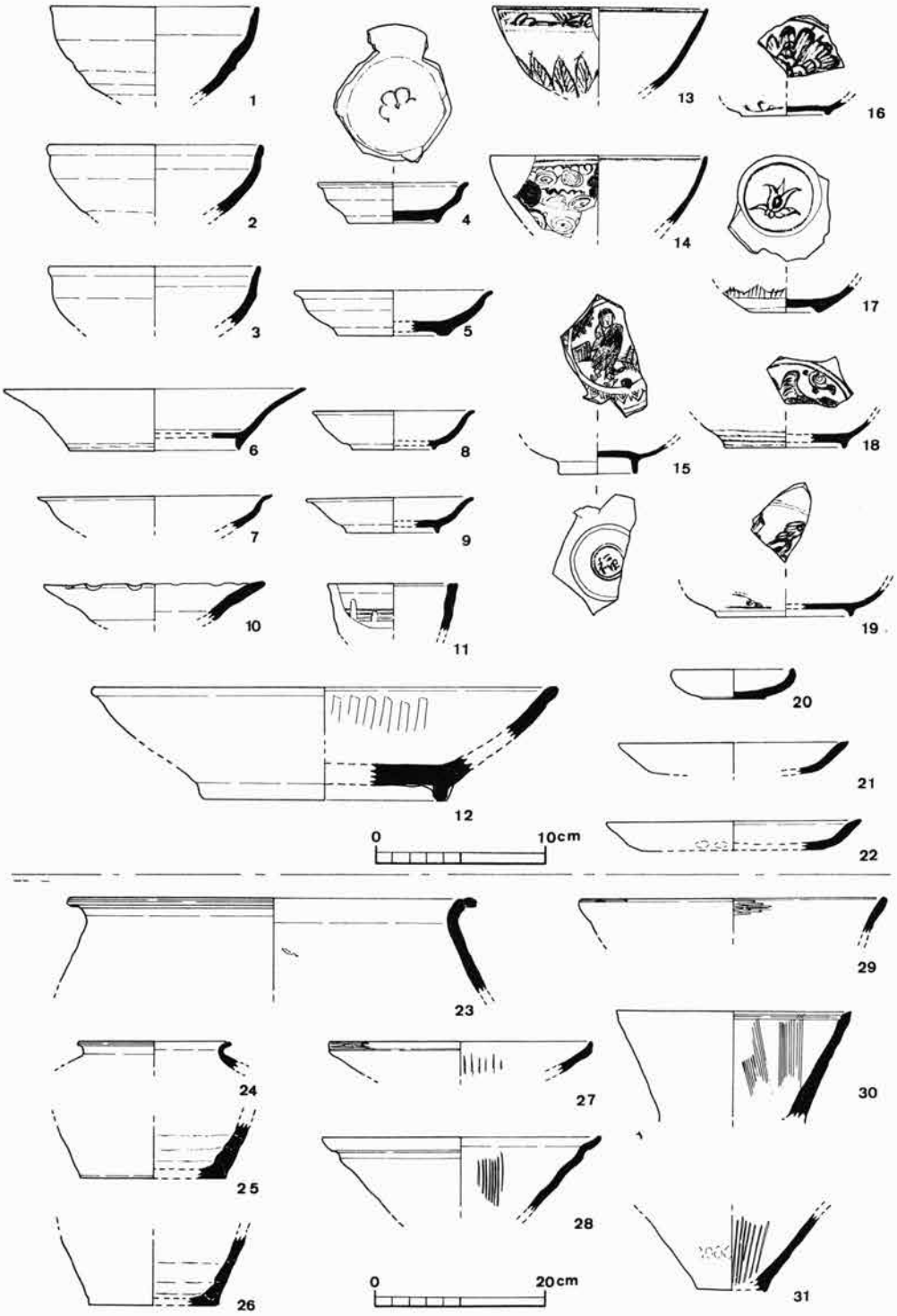
第81図　平山城館跡検出遺構平面図

形のものがある。前者は，第二郭から流れ落ちる水を防ぐとともに排水の機能を有した溝と考えられる。後者については性格は不明である。

この他，土坑状遺構，柱穴状遺構と今後検討が要される。

4. 出土遺物

この調査は本執筆中も継続中であるため十分な整理が行えておらず，今後検討を加えて



第82図　平山城館跡出土遺物実測図

いかなければならない。出土遺物は，陶器，磁器，土師皿，金属製品等多種多様であるが，以下これらの遺物の一部の概観を簡単に述べてみたい。

1～3は，美濃・瀬戸系の天目茶椀である。1は，口径12.2cmを測る。内外面は黒褐色の釉がかかっていたと考えられるが，淡灰茶褐色を呈しており，後に火を受けて変色したとも考えられる。椀の腰から下はヘラ削りされて面をなしており，濁茶褐色を呈した鉄釉をかけて化粧を施す。2は，口径12.6cmで内外面黒褐色を呈する。3は，口径12.4cmを測り，内外面は茶褐色に黒褐色が流れたような色調を呈する。

4・5は，瀬戸系の灰釉皿である。4は，口径8.8cm・底径5.4cm・器高2.4cmを測る。断面形が三角形の付高台から体部が斜め上方に立ち上がった後に口縁部が外反するもので，いわゆる「端反皿」である。内底面には印花文が押印されている。5は，口径11.6cm・底径6.4cm・器高2.6cmを測る。断面形が低い方形の付高台から緩やかに体部が立ち上がり，口縁部を外反させるものである。

6～9は白磁である。6は碁笥底の杯である。口径17.8cm・底径10cm・器高3.6cmを測る。体部は外反気味に立ち上がる。釉はやや灰色を帯びた白色を呈し，畳付き部は露胎である。7は口径13.8cmを測る。いわゆる「端反皿」である。8は口径9.4cm・底径4.8cm・器高2.3cm，9は口径9.6cm・底径5.4cm・器高2.1cmである。これらは，ともに断面三角形の高台を持つ「端反皿」である。釉は白色である。

10～12は青磁である。10は，口縁部に刻み目の入ったいわゆる菊皿で，口径13cmを測る。全面淡緑色を呈する釉がかかる。器壁には，内外面に貫入が見られ，気泡もあり質が悪いといえる。11は，口縁部の破片であるが香炉と考えられる。口径7.6cmを測る。口縁部の直下には2本の凹線がめぐり，たて位置にも口縁直下から凹線がはしる。これは窪んだ点を経てまた凹線がはしるというパターンで全面にめぐっていたとも推定される。口縁端部をつまみ出し外反させる。釉は淡緑色を呈するが，凹線部は青味を増す。12は，青磁の盤である。口縁部と高台部は破片であり接合できないが，胎土・釉等非常に似ており同一のものと見なす。口径は27cmを測り，底径は14.2cmである。内面には，幅約5mmの蓮弁文が施されている。高台は断面方形を呈する。内外面とも緑色を呈する釉が厚くかかる。但し，外底面中央は露胎である。

13～19は染付けである。13～15は，染付けの椀である。体部は広く開くもので，13は体部に芭蕉葉文が，14は渦巻き文が施される。15は椀の高台部である。見込みが高台内に凹むものである。見込みには人物が描かれ，高台内には「福」の字が書かれている。口径は13が12.6cm，14が12.8cm，15の底径は4cmを測る。16～19は染付け皿の底部である。16・17は碁笥底であり，18・19は高台を持つものである。底径は16は5cm，17は4cm，18は7cm

を測る。見込みには花等が描かれている。

20～22は土師器の皿である。20は口径7cm・器高1.6cmを測る。平底の底部は糸切り跡が残る。21は口径13.6cm，22は口径15.2cmを測る。

23～26は丹波系と考えられるものである。23は，口径47.6cmを測る甕である。口縁部が「く」の字に外反し口縁端部を横に引き出すように接合するものである。接合部の内外面には，沈線がめぐる。24は口径18.2cmを測る壺である。「く」の字に外反する口縁部を呈する。25・26は，これらのような丹波系の壺・甕の底部と考えられるが，どのような上半部を呈するかは不明である。

27～31は，擂鉢である。27は，口径27.2cmを測る。口縁端部をつまむように上に立ち上げる。刷り目はヘラ状工具で一本一本引いたものである。29は，口径27.2cmを測る。口縁端部を上方につまみ上げるもので，端部内面には沈線がめぐる。刷り目は歯の数が11本の櫛状工具で引いてある。

今回図示した遺物はごく一部であり，このほか備前系，越前系のものをはじめ碁石や硯などの石製品等多くの遺物が出土している。今後の整理検討が要される。(注12)

5. ま　と　め

この調査は現在継続中であり，今後も大きな成果が期待される。従って今回は，簡単なまとめとして終わりたい。

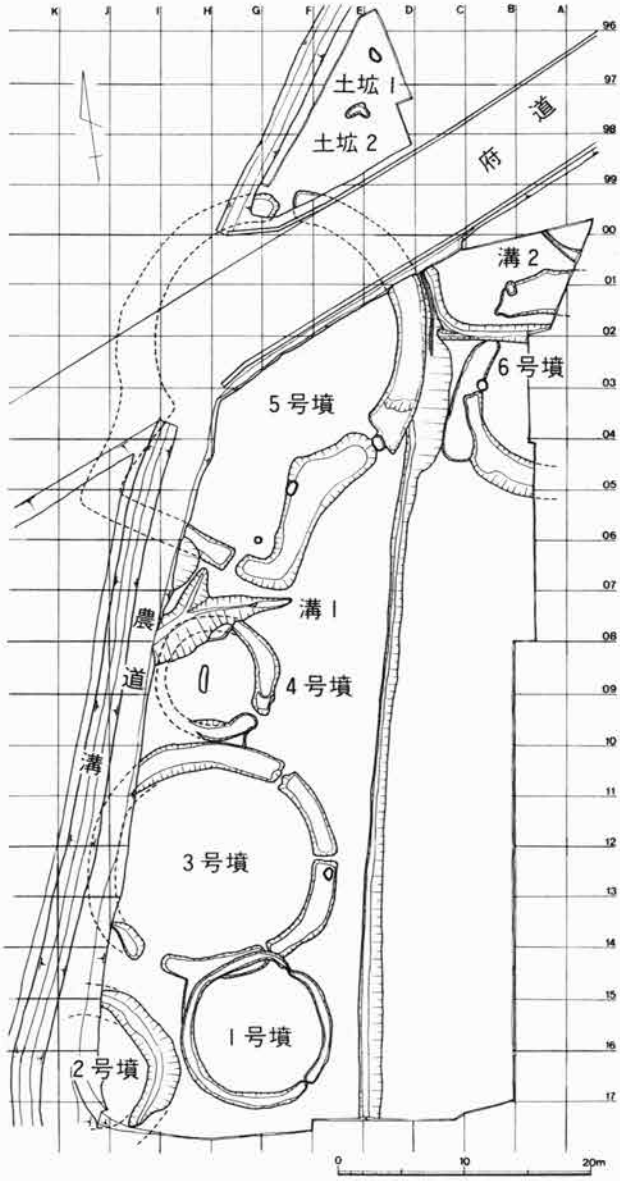
この城館跡は，これまで高城城跡の支城とされてきた。今回の調査で検出された建物跡や豊富な遺物は相当な実力者の存在を予想させる。また，ある程度はここで生活した場所でもあることがわかる。逆に高城城跡で大きな郭が見つかっていないことを考えると，高城城跡は戦闘時等の緊急時のみに必要な最後の郭であり，見張り場的な機能のみを有した城跡であったとも推測が可能である。これまで，綾部市の山城の城主は大槻姓が多く伝えられ，高城城跡はこの大槻氏の本貫地とされている有力な城であったと考えられ，先述のような推測が可能ならば，この城館の東側に存在する平山城館跡を含めて，高城，中城(平山城館跡)，馬城といった一群が高城城であったともいえないであろうか。

ともあれ，今回の調査は，これまで綾部市においては数少ない山城跡の調査であり，2つの城館を同時にまた広範囲に発掘調査したものであり，貴重な成果が加わったことになる。今後の調査整理を加えて，後日を期したい。　(藤原敏晃)

(3) 野崎古墳群

1. 遺跡の立地

本遺跡は，綾部市高槻町野崎にあり，由良川に注ぐ支流のひとつ八田川上流域の旧東八田村(古代の八田郷東半部)に属する。綾部市街地からは約8km北東に位置する。北から伸びる丘陵の先端の低平な畑地であり，この平坦部の南北250m・東西180mが縄文時代から中近世に至る遺物散布地として周知されている。(注13) 周囲の水田との比高差は5m前後に過ぎない。自動車道の建設予定地には，この遺跡の西端にあたる幅32m・延長175mが入っており，この部分の5,600m²が調査対象地である。谷を挟んだ対岸の高槻茶臼山古墳は，100mの至近距離にある由良川流域最大の(全長54m)前方後円墳であり，それに次ぐ規模の前方後円墳上杉1号墳も南約800mにある。また西方800mには市内でも数少ない旧石器の散布地旗投遺跡がある。



第83図　野崎古墳群実測図

2. 調査の概要

調査は昭和61年11月28日に開始したが，1月から3月上旬にかけての数回に及ぶ積雪と

3月の天候不順によって，調査が遅延し，終了したのは3月24日であった。従って，以下の報告は，非常に短期間でまとめざるを得ず，あらましを報告するにとどめ，より詳細な成果報告は次の機会に譲りたい。

また，後述するように，今回の調査では，縄文時代以降の散布地としての「野崎遺跡」の遺構は検出されず，遺物も石器剥片数点にとどまったのに対して，予想もせぬ古墳跡を6基検出し，周濠等から遺物もかなり出土したので，これを「野崎古墳群」と命名し，今回の報告の表題もこれを使用した。

調査地は，大きく3地区に分けられる。北地区は，ほぼ平坦な台地で，「野崎古墳群」を検出した。中央地区は低湿地であり，耕作土の下層に中・近世の遺物包含層を1層確認した。南地区は，再び台地状を呈するが，遺構・遺物は全く検出されなかった。掘削面積は，北地区1,928m²，中央地区268m²，南地区176m²である。以下，遺構・遺物が最も顕著であった北地区について概要を報告する。

北地区の約2,000m²については，4m方眼のグリッドを設定し，トレンチによる調査から始めたが，最終的には全面を発掘した。厚さ20～30cmの耕作土の直ぐ下に橙褐色粘質土～淡黄色粘土の地山が広がる。遺構は，この地山を掘り込んでおり，褐色ないし暗茶褐色の粘質土で埋まっている。検出した遺構は，幅1～3m・深さ5～50cmの溝6条と，他に土坑・ピット等がある。6条の溝は，後世の削平や攪乱を受けていない限り，完結した円，あるいは前方後円形を呈し，また溝の埋土からは，古墳時代中・後期の須恵器・土師器，それに埴輪片が出土したので，これらを古墳の周濠と判断し，墳丘部分は後世の削平によって完全に失われたものと考えた。事実，主体部はただ1か所において，その底部のみを検出したに過ぎない。古墳の名称については，小字名「野崎」を採り，尾根の先端(南)から野崎1～6号墳と命名した。以下この名称で報告する。なお，古墳の規模を示す場合，径や全長等は，いずれも周濠の検出面での内径である。

野崎1号墳　周濠の全周が検出された唯一の古墳である。東西・南北とも10.0mの径を測る円墳である。周濠の幅は1m前後(0.6～1.5m)・深さ5～33cmを測る。東側が狭く浅く，西側が広く深い。周濠の北東と南東に内外両側から突出して向い合う半陸橋状の掘り残し部分がある。周濠の北側・西側・南側には埴輪片が散乱しており，特に南側では，約7mの間に5か所に1個体ずつ倒れ込んだ様相を呈している。遺物には，埴輪の他に周濠北側で出土した須恵器の半完形の小型短頸壺がある。

野崎2号墳　西半部と南側が大きく削平されている古墳で，1号墳の西に接する。周濠の一部が残っていたのみなので，復原し難いが，径9m前後の円墳であろう。周濠からは，少量の須恵器・土師器片とともに埴輪片が多少出土したが，この古墳のものかは今後検討

したい。

野崎３号墳　南側の周濠の一部が１号墳のそれに切られた古墳で，西側の一部を２号墳と同様に削平されている。径は南北14.8m・東西15.8mを測り，この古墳群では大型の円墳である。周濠は，幅1.5～2.0m・深さ10～26cmを測るが，北西側では50cmを越える。周濠の北・北東・南東・南の４か所に陸橋部がある。周濠からは北東部で須恵器・土師器片とともに「土製模造品」と呼ばれる馬・不明獣・鏡・鉢の形の４点の土製品が出土した。

野崎４号墳　３号墳の北に接する小型の円墳である。西側が攪乱を受けており，北側も溝１によって削られているので，復原は難しいが，径7.5m前後であろう。周濠の東南側に半陸橋状の掘り残し部分がある。墳丘中央部に南北に軸を有する主体部の底が，かろうじて残っていた。残存の長さ2.1m・幅0.6mで，検出面から３～４cmの深さのみが残る。墓坑の中央やや南寄りから鉄鏃３点が出土した。

４号墳の北を楔形に切り込む溝１は，上層に黄色混り黒色土，中層に暗褐色土，下層に暗茶褐色土のそれぞれ粘質土が埋まっていたが，上層の土は，本来４号墳の墳丘を形成していた土と考えられ，中層から出土した須恵器短頸壺と埴輪片は，この４号墳に伴っていた遺物と思われる。

野崎５号墳　調査地の最北に位置する前方後円墳である。前方部西半部を２号墳・３号墳と同様に農道で削られ，後円部も大半が現在の府道によって失われている。全長26m・後円部径19m・前方部幅13m・くびれ部幅10mと復原できる。前方部の長さが8.4mとやや短いのが特徴的である。周濠は幅２～３m(くびれ部では4.5m)を測り，深さは36～55cmを測るが，府道北に位置する後円部北側では20cm程度しか残っていなかった。周濠の残存部に限らざるを得ないが，後円部の北と南東，前方部の南辺東の３か所に陸橋部がある。周濠からの出土遺物には，細片が多いが，須恵器短脚高杯・土師器小型甕等がある。

野崎６号墳　５号墳の東に位置する古墳で，東半部が調査地外にある。円墳とすれば，径約12mである。周濠は，幅３m前後で，深さ20～35cmを測る。北西側に陸橋部がある。周濠からの出土遺物は少ないが，須恵器短脚高杯片等がある。

3. ま　と　め

以上，概略報告したように，従来石器等の出土から縄文時代前後の遺跡と考えられていた野崎遺跡において，予想だにしなかった古墳群の検出という成果を挙げた訳であるが，チャートの剥片等を今回の調査でも得ており，野崎遺跡としては今回は散布の稀薄な部分であったと考えられる。以下，今回新たに存在が知られた野崎古墳群の特徴と問題点を不充分ながら，個条書きにまとめ，今後の課題としたい。

（1）　野崎古墳群は，地形や古墳の配置から見ておそらく6基からなる古墳群と思われるが，年代と築造順序に関しては，現在のところ以下のように考えられる。

主体部ではなく周濠から出土したという弱点はあるが，須恵器から見ると，5号墳・6号墳のそれが陶邑Ⅰ型式の第4～第5段階に属する市内では最古の須恵器の一群に属する。また，3号墳の(高杯)杯身はⅡ型式の第2段階前後に位置づけられる。一方，周濠の切り合い関係によって，4号墳→3号墳→1号墳，及び2号墳→1号墳の新古関係が得られる。そして，6号墳を円墳と仮定し，前方後円墳の5号墳を盟主墳として，これを端緒に古墳群が形成されたと想定するならば，5号墳→6号墳・4号墳の順で先ず北半部に3基が築造されたのが5世紀後半から末頃であり，続いて3号墳→2号墳→1号墳の順で，6世紀初頭から中頃にかけて南半の3基が営まれたと考えられる。

（2）　野崎古墳群は，小規模とは言え，前方後円墳を1基擁する点が特筆される。綾部市内では14基の前方後円墳(他に2基の帆立貝式)が知られているが，野崎5号墳は15例目になる。八田川上流地域に限れば3基目である。

（3）　また，埴輪を持つ古墳として野崎1号墳(4号墳と2号墳はまだ断定できない)は，綾部市では10例目であるが，発掘調査によって出土し，まとまった量と比較的良好な保存状態を考えれば，先年調査された菖蒲塚と聖塚の資料に次ぐもので，特に中丹地域では貴重な資料となろう。なお，埴輪は詳細な検討を行っていないが，川西編年のⅤ期(およそ6世紀)のものである。

（4）　野崎古墳群の特徴として，いずれも周濠をもつ点が挙げられる。逆に言えば，周濠があったからこそ，古墳跡として検出できたのであるが，周濠を持つ古墳は，調査例が少ないとは言え，中丹地方では決して多くはない。同時に，周濠の数か所に陸橋ないし半陸橋状の掘り残し部分を持つという共通したクセも興味深い。

（5）　3号墳周濠から出土した鏡形等の土製模造品も看過できない。従来，北九州や関東に多いが，近畿には少なく，京都府では初の出土例である。(注14)

（6）　七百石町・高槻町・上杉町を中心として八田川上流地域は，綾部市内でも，散在的とは言え，比較的古墳が多く，特に由良川流域では最大級の高槻茶臼山・上杉1号墳の2大前方後円墳が存在する地域として知られていたが，今回，前方後円墳1基を含む6基が新たに確認された訳である。この地域の首長系列墳として，政次古墳群→高槻茶臼山古墳→上杉1号墳が考えられるが，野崎古墳群は，後二者にほぼ併行している。今回の調査は，綾部市の古墳時代を考える新たな視点を提供すると同時に，全く痕跡のなかった平坦地で6基もの古墳を検出したことは，踏査の難しさを教えており，集落等の遺跡のみならず古墳ですら非顕在でありうることを示しているのである。　　(小山雅人)

注1　(平山東城館跡・平山城館跡)吉田秀一・浪江芳計・吉田健治・磯井竹男・沢田博次・藤田武・吉岡勇治・神田昭一・塩尻福太郎・渡辺又市・塩尻信治・塩尻治作・西村武次・木下一郎・古澤幹雄・氷室キクエ・村上芳子・梅垣文枝・藤田トラ・引原和子・塩尻アサノ・塩尻梅代・白波瀬クニエ・塩尻やゑ・三和てる・相根あいの・塩尻とみ子・福井和子・福井多美子・沖ヨシエ・村木信子・谷口ツヤ子，(野崎古墳群)稲葉逸郎・上羽　章・大槻種三郎・岡安茂一郎・相根三郎・坂本　毅・塩尻　武・新川　滋・新川三代三郎・渡辺武雄・渡辺　保・渡辺三千夫・上羽紀代・大槻末子・大槻伸子・大槻フサ枝・岡安年子・相根寿美子・相根八重子・坂本トシ子・新川幸子・新川志津子・高根末野・波多野かずの・波多野君枝・牧かずゑ・松本婦佐子・山上一枝・山室トク・山室よし枝・渡辺かのえ・渡辺君枝・渡辺千代子・渡辺久子・渡辺ふみ代・渡辺美代子・林　鈴代・大槻かの・立藤　聡・福田尚弘・牧　克敏・丸岡冨江・河野美行。

注2　大和田淳司・永野和史・四方富男・山室明美・塩尻あつ子・山口陽一郎，以上補助員。
家元恵子・伊勢田恵美子・丸岡一實・岩崎恭子・四方純子，以上整理員。

注3　以下の記述は，『綾部市史』(1976)，『丹波の古墳Ⅰ』山城考古学研究会(1983)，藤井善布『城 綾部地方の中世城郭』関西城郭研究会，No. 99，『丹波史年表』，『丹波史』，『西八田村史』等の文献に依った。

注4　綾部市教育委員会「上林城跡・塚廻り古墳群」(『綾部市文化財調査報告』第7集)，1980；『日本城郭大系』11，新人物往来社，1980

注5　福知山高校教諭川端二三三郎氏の御教示による。

注6　注4に同じ。

注7　注5に同じ。

注8　福知山市文化振興係の大槻　伸氏には，丹波焼をはじめ，遺物について多くの貴重な御教示を得た。

注9　全体を通して綾部市教育委員会の中村孝行氏には，非常にお世話になった。謝意を表したい。

注10　注4に同じ。

注11　注4に同じ。

注12　注8に同じ。

注13　中村孝行「塚廻り古墳群」『綾部市文化財調査報告』第7集，1980，3頁。

注14　亀井正道「浜松市坂上遺跡の土製模造品」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集，1985，154頁。

3. 京奈バイパス関係遺跡 昭和61年度発掘調査概要

はじめに

京奈バイパス関係遺跡の試掘および発掘調査は，日本道路公団の依頼を受け，昭和59年度から毎年行ってきた。南山城地方の城陽市から精華町に至る総延長19.6kmの路線帯に含まれる遺跡の調査で，これらには古墳・集落・城館跡などがある。具体的な調査成果をみると，昭和59年度の奥山田池遺跡では興戸廃寺出土の軒平瓦と同じ文様をもつものが出土し，周辺に瓦窯跡の存在する可能性を示唆した。あわせて土師器・須恵器などの遺物もまとまって出土した。(注1) 昭和60年度には，古墳3基・古墳状隆起2か所・遺物の散布地3か所を調査した。なかでも田辺町大住薪地区の郷士塚4号墳，畑山2・3号墳の調査は，従来から知られていた両古墳群の内容の一端を明らかにし得た点で意義がある。(注2) 郷士塚4号墳は，周濠をもつ径約16mの円墳である。主体部は無袖式の横穴式石室で，玄室床面には河原石が敷きつめられていた。出土遺物は6世紀後半の須恵器類や土師器，耳環などの他に，珍しい鉄鉗などの鉄製品も含まれ，鉄生産に携わっていた集団との関係を窺わせた。畑山2号墳は，形状・規模は明らかにし得なかったが，主体部の残りは良好であった。無袖式の横穴式石室で，中央部に蓋石が丁寧に被せられた石組みの排水溝が設けられ，6世紀後半から7世紀初頭の須恵器などの遺物とともに，家形石棺の縄掛け突起と思われる凝灰岩片を出土した。このように石室内に排水溝をもつ古墳は，田辺町内では大御堂裏山古墳が知られる。(注3) 畑山3号墳は，墳丘および主体部はほとんど全壊状態であったが，ここからは須恵器類(6世紀後半～7世紀初頭)の他に銅椀が1点出土した。薄手の精緻なつくりで残りもよく，南山城地方では非常に珍しい逸品である。田辺町大住地区では，扇状地内の低湿地に立地する野上遺跡の調査を行った。(注4) 中世の包含層である黒褐色粘質土層を確認し，ここから瓦器椀などの遺物が出土した。

以上のように，調査成果としてはいささか地味なものであるが，いずれも周辺の遺跡の有無を判断したり，周知の遺跡を再評価したりする上から貴重なデータとなろう。

今年度は，精華町南稲八妻に所在し室町時代の連郭式山城とされる南稲八妻城と，田辺町大住字久保田の低湿地の遺跡である久保田遺跡の試掘調査，そして田辺町三山木地区の西平川原館跡の踏査を実施した。

現地調査は，調査課主任調査員辻本和美と同調査員石井清司・黒坪一樹が担当し，調査

に際しては日本道路公団大阪建設局京奈バイパス工事事務所，京都府教育委員会，田辺町教育委員会，精華町教育委員会の協力を得た。また学生諸氏や地元の方々からも，有形無形の援助を受けた。衷心より感謝の意を表する次第である。(注5)

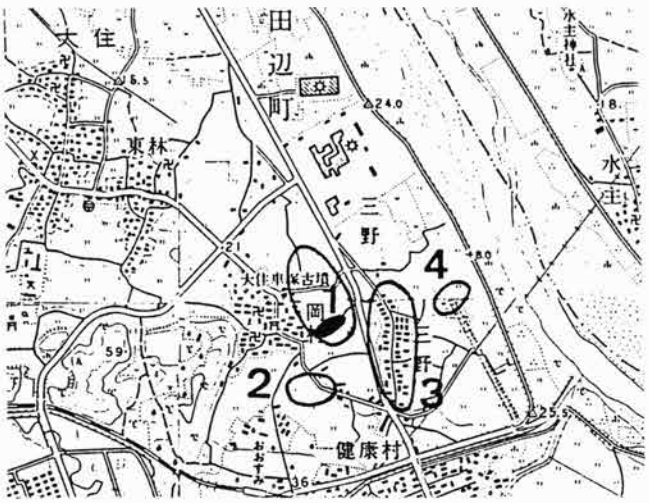
1.　久保田遺跡の調査

久保田遺跡は，前述したように昭和60年度に調査した野上遺跡の北東に広がる遺跡である(第84図)。八幡市美濃山丘陵から連続する丘陵地が当遺跡の西側に低く連なっているのであるが，遺跡は丘陵から完全に平坦地に移り変わった扇状地に立地する。周辺には野上・三野・志保遺跡など，低湿地性の遺物散布地が点在している。今回の調査では，細長いトレンチを中心に約400m²を掘削した。調査期間は昭和61年11月７日から昭和62年２月６日までである。

(1)調査の経過

久保田遺跡の調査地は，標高17m程の田畑である。農業用道路を中央に挟み，これに沿う形で細長いトレンチ３本と長方形のトレンチ１か所を設定し，A～Dトレンチと呼称した(第86図)。掘削はAからDトレンチの順にすべて人力で行った。排土は持ち出さずにすべてトレンチの両側に盛り上げた。Aトレンチは２m×37mの広さである。東から掘り進めた結果，厚さ約40cmを測る田畑の耕土・床土を除去した段階で，黄褐色細砂礫面が露見された。この面を全体に追求した結果，トレンチ東端において濃黒灰色粘土の広がりを検出した。これは後になってBトレンチ東側に広がっていた沼地(SX01)の東岸部であることがわかった。濃黒灰色粘土を除くと，なだらかに西にいくに従って深くなっているのが観察された。ここでの出土遺物は平瓦片１点のみであった。

全体に広がる黄褐色細砂礫は二次堆積で，この付近一帯の扇状地はこの層によって形成されている。最終的にこの黄褐色細砂礫を除去した。この層は幾重にも縞状に堆積し，厚さは3.3



第84図　調査地周辺遺跡分布図 (1/25,000)
1. 久保田遺跡　2. 野上遺跡　3. 三野遺跡　4. 志保遺跡

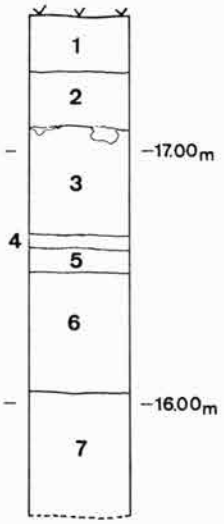
mもあった。最深部近くで須恵器甕の胴部片が数点出土したが，その他の遺物はなかった。

黄褐色細砂礫の下層に暗褐色粘土の面が表われ，この面にて一条の素掘り溝を検出した。屈曲したラインをもつ溝であり，ここからの出土遺物はない。

Bトレンチは，約183m^{2}の広さである。今回最も多くの遺物を出土したトレンチである。まずトレンチ東側では赤褐色砂礫(攪乱)の下から濃黒灰色粘土の広がりを，西側では中世の遺物包含層である暗茶褐色粘質土を，中央部では幅広い流路跡の存在をそれぞれ捉えた。東側の暗茶褐色粘土の広がりは，Aトレンチ西端で検出された沼地の続きで，濃黒灰色粘土は埋土である。Aトレンチの東側ラインに対応する沼の西側ラインは北東から南西方向に形成される。埋土を掘り進めると南西隅から面取り加工を施した木材が多数埋没しているのが観察された。遺物としては，奈良時代から近・現代のものが出土している。西側にみられる複数の包含層からは，平安～室町時代初期にかけての遺物が出土した。中央部の流路内からはほとんど遺物の出土はみられなかった。壁面直下を断ち割り，青灰色砂礫層を確認した上で写真撮影・土層断面実測を行い，あわせて加工木材の出土状況を実測した。

Cトレンチは，Bトレンチ南西に隣接した7m×4.5mの小トレンチで，基本的にBトレンチ西側と同じ状況である。

さらにDトレンチは，道路を挟んで北側のトレンチで，約137m^{2}の広さである。ここでは畑の耕土が厚さ10～15cmで堆積し，これより下層は黄褐色砂礫層が2.5m以上の厚さで続いていた。黄褐色砂礫層は堅くしまった層で，おそらく地山を形成する層であろう。この地山面からは畑作の畦溝を検出した。深さ10cmくらいの浅い溝で，近・現代の遺物に混じって，須恵器片なども出土した。以上4トレンチ全体の写真撮影・実測等を行った後に埋め戻し，作業を終了した。



第85図　土層断面柱状図（Bトレンチ北壁西端）
1. 暗褐色有機質土　2. 淡赤褐色土　3. 濃褐色粘質土　4. 淡灰褐色極細砂　5. 暗茶褐色粘質土　6. 淡青灰色細砂　7. 青灰色砂礫

(2) 層　序

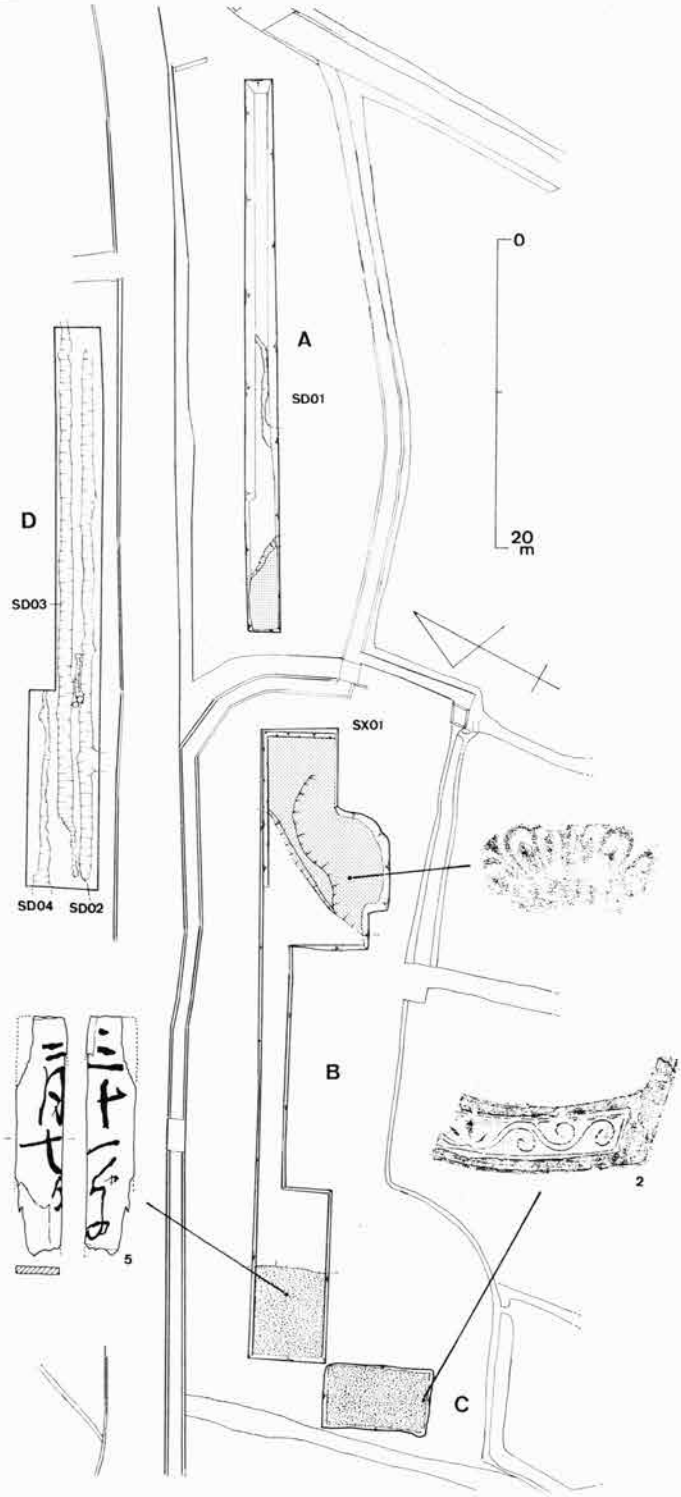
ここでは本遺跡の性格の一端をよく示しているBトレンチの北壁断面西端を例にとり，基本的な層序を述べる。層名を上層から列記すると，第1層暗褐色有機質土，第2層淡赤褐色土，第3層濃褐色粘質土，第4層淡灰褐色極細砂，第5層暗茶褐色粘質土，第6層淡青灰色細砂，第7層青灰色砂礫となる(第85図)。第1・2層は田畑の耕土・床土である。第3層は約40cmの厚さで，直上部に淡赤褐色砂質土の詰った足

痕状の凹みが点々と認められた。古墳時代から室町時代までの遺物を包含しており，東にいっても均一な厚さで残っている。第４層は薄く，無遺物層である。厚さは約5cm。第５層は平安～鎌倉時代の遺物を含む層である。厚さは約15cmである。水分が多く，粘性が強い。また松・桃の種子など，自然遺物も散見される。第６・７層は砂礫質でともに青灰色粘土を筋状に挟む無遺物層である。湧水が多く，ポンプアップを必要とした。第６層の厚さは約45cmを測り，均一な厚さをもつ。

（３）遺構と遺物

検出した遺構は，Ａトレンチでの溝状遺構（ＳＤ01）・Ｄトレンチの畑地状畦溝（ＳＤ02～04）及び，遺構ではないがＡ～Ｂトレンチに広がる沼（ＳＸ01）がある（第86図）。

ＳＤ01は，幅約10～



第86図　遺構検出状況
（実測図の木札は1/2，他は1/4，遺物右下の数字は出土層位を示す）

20cm・深さ約10cmで，約８m分検出した。折曲した溝で，出土遺物もなく性格・時期については不明である。ＳＤ02～04は畦溝と思われ，いずれも幅約20～40cm・深さ５～10cmの規模で，埋土は暗灰色細砂質土であった。出土遺物は陶磁器片・須恵器甕片・平瓦片などがある。溝の時期としては近・現代の所産とみるのが妥当である。

沼地（ＳＸ01）は，濃黒灰色粘土の埋土をもち，Ｂトレンチ東側の南端で最深の1.1mを測る。出土遺物は，陶磁器片・須恵器甕片・白鳳時代の軒丸瓦（第86図）・桟瓦・寛永通宝などを出土した。さらに面取り・角釘穴・擦痕などをもつ残りの非常にいい加工木材が多数埋没していた。これらは唐犁をはじめとする大型農機具の部分材とみられる。一般に，唐犁は昭和30～40年代初めくらいまで使われていた。これらの遺物および土層の観察からみる限り，沼地は近代以降に形成されたものと言える。

その他の遺物としては，Ｂ・Ｃトレンチにおける包含層（第３・５層）中から出土したものがある。第３層中からは，円筒埴輪片・須恵器の甕と杯片・瓦器椀・土師質皿・室町時代初期の軒平瓦（第86図）などが出土している。軒平瓦は半割しているが，中心飾りから三転式の唐草文で，側面部に上方へそり上がる「水返し」をもつ珍しい形態のものである。(注6) これと組み合う軒丸瓦の形態についても考えなければならないが，軒丸瓦の出土はない。

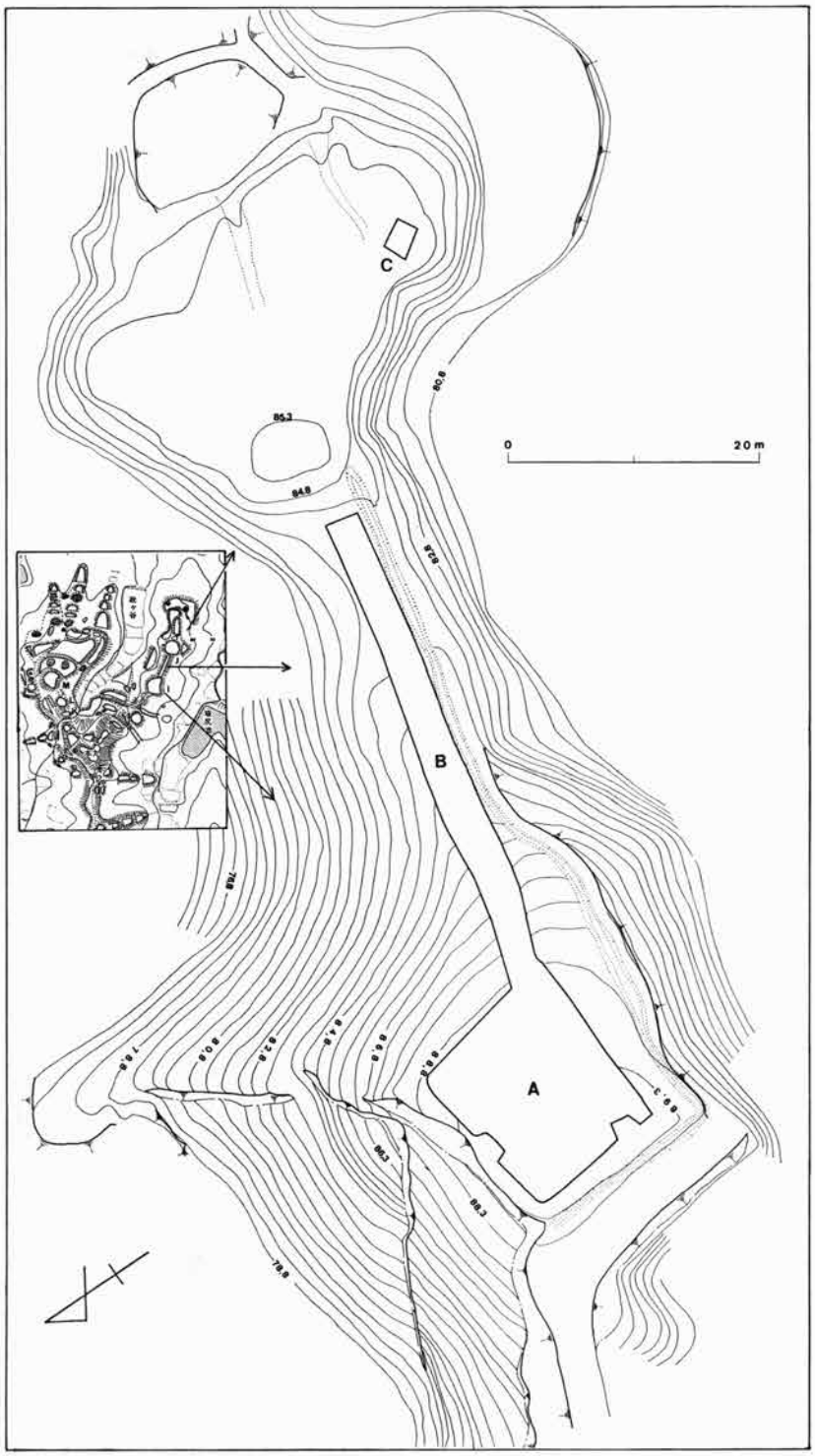
第５層中からは，皇宋通宝（1039年初鋳）・墨書木札（第86図）・瓦器椀・土師器片・須恵器の甕と杯などが出土している。墨書木札は「三十一受」・「二月七日」と判読され，同一人物の筆とみられる。(注7) 中世の荷札と思われ，当地域が物品消費地の１つであったことを窺わせる好資料であろう。

2. 南稲八妻城の調査

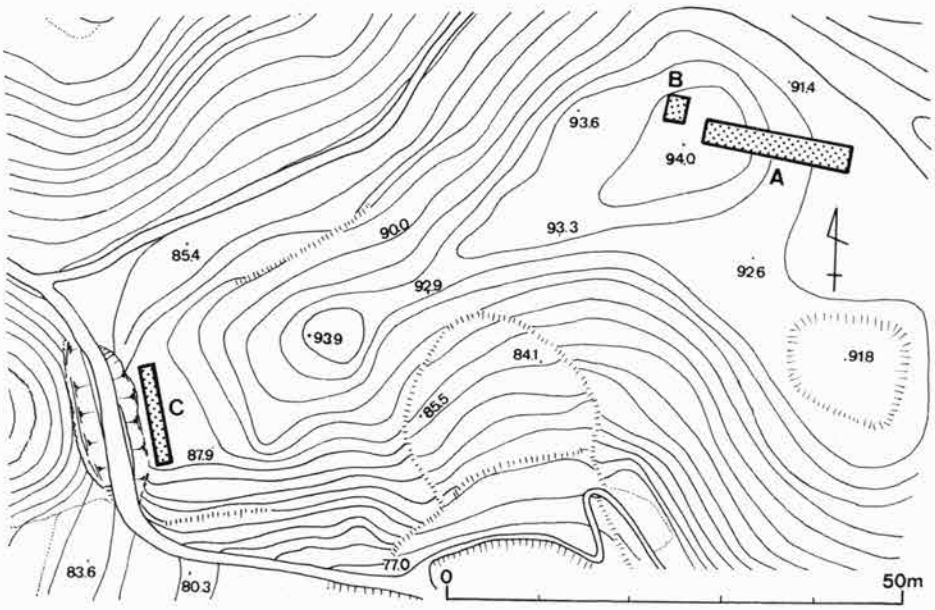
（1） はじめに

南稲八妻城は，南稲八妻集落の西方丘陵上（第87図）に所在する戦国時代の連郭式山城である。その範囲は東西600m・南北360mにもおよび，『蔭涼軒日録』に山城国一揆最後の合戦場として史実に残っている。稲八妻城の位置には諸説があり，未だ確定的ではないが，南稲八妻に位置する今回の調査地は，地元の歴史家奥田裕之氏によって発見されたもので，極めて大規模な城跡と言える。(注8) 標高80～95mを測る丘陵稜線上

第87図　調査地位置図（1/5,000）



第88図　　A地点トレンチ配置図（左中の地図は奥田裕之氏作成のもの）



第89図　B地点トレンチ配置図（原図は日本道路公団作成）

の平坦地で，バイパス道路の路線帯にかかるI・J郭(A地点)，M・L・K郭(B地点)を対象として山城の痕跡を追求した。(郭のアルファベット名は奥田氏の論考に依拠した。)調査期間はA地点が昭和61年の8月2日から同年9月25日まで，B地点が昭和62年2月25日から同年3月19日までである。掘削面積はA・B地点あわせて約350m²である。

(2)調査概要

第88・89図のとおり，それぞれの郭に当っている所にトレンチを入れ，遺構・遺物の検出に努めた。掘削はすべて人力で行った。A地点ではいずれのトレンチにおいても，地表下25cm前後で黄褐色粘土の地山となり，遺構・遺物の存在はまったくなかった。詳細に地形測量と土層断面観察・写真撮影を行い，調査を終了した。

B地点では，M郭に当る平坦地から東側の裾部に設定したAトレンチにおいて，南北方向の溝状遺構を一条検出した。幅約2m・深さ約30cmを測る。出土遺物はなく，山城に関係するものであるかどうかは不明である。Bトレンチでは，約10～15cmの畑作耕土直下で黄褐色砂質の地山面を検出し，遺構・遺物は皆無であった。今回最も標高の低いCトレンチでは竹林痕の激しい凹凸面が認められたが，山城の痕跡を捉えることはできなかった。

B地点もAトレンチと同様，写真撮影・土層断面図の作成を行った後，埋め戻し，いったん作業を終了した。

3.　西平川原館跡の踏査

(1)　はじめに

西平川原館跡は，普賢寺谷を北側に見下ろす丘陵頂部に位置し，その範囲は東西100m・南北200mにおよぶ(第90図)。以前この範囲から軒平瓦・平瓦が採取されている。当初，試掘トレンチを入れるつもりであったが，路線帯に入る本調査地があまりに狭いやせ尾根にあたり，なおかつ両側は急峻な崖部であるため，トレンチ掘りを断念し，崖面の土層観察と周辺部の遺物採集を中心とする踏査に切りかえた(第91図)。期間は昭和61年6月25日から同年7月7日まで行った。

(2)　踏査の経過

調査地内で基準点のある丘陵頂部北側は，砂礫層が風化して削られ，崖面となっていた。この崖断面内において，上からの転落で中間部にはまり込んだと見られる羽釜の口縁部片を1点採取した(第92図)。胎土は良好で，焼成も堅くしっかりしている。時期は中世のものである。崖断面をよく観察しながら周辺部での遺物採取に努めたが，その他の遺物はなかった。崖断面の写真撮影と実測を終え，頂からの景観を写真に収めた。このように遺物の散布状況は，今回のごく短期間の踏査ながら極めて稀薄で，館跡の存在を裏付ける多くの資料を得ることはできなかった。地理的には北側の普賢寺谷や東側の木津川さらにその対岸の飯岡丘陵までも臨むことのできる所ではあるが，当調査地はやせ尾根の連続で平坦面の広がりに乏しく，発掘調査が甚だ困難な立地条件であった。

第90図　　調査地位置図 (1/25,000)

4.　ま　と　め

今年度は，久保田遺跡・南稲八妻城の試掘調査，西平川原館跡の踏査を行った。

久保田遺跡では，A～Bトレンチにわたって広がる沼地

第91図　踏 査 中 風 景

(ＳＸ01)，Ａトレンチの溝状遺構(ＳＤ01)，Ｄトレンチからの畑地状畦溝(ＳＤ02～04)を検出した。ＳＸ01からは白鳳時代の軒丸瓦をはじめ多種多様な土器類や大型農機具の部分材とみられる木材が出土した。ＳＤ02～04はほぼ道路に平行して走る浅い溝で，中からは近・現代の遺物とともに須恵器・瓦片なども出土した。

さらにＢ・Ｃトレンチの包含層中からは，円筒埴輪片に代表される古墳時代中期から室町時代に至る多種多様な遺物を得ている。わけても第５層中から出土した墨書木札は，下半部を欠損するが，「三十一受」・「二月七日」と判読し得るもので極めて貴重なものと言える。荘園関係の文書や手習いのように文章を写し取ったもの，さらに荷札として，その性格はさまざまであるが，本例は荷札と考えてよいであろう。何らかの物品が当地(消費地)に運ばれ，付けられていた荷札が外され，当地に捨てられたものであろう。当地の歴史をみていく上で，ささやかながらも貴重な資料である。

南稲八妻城については，Ｂ地点Ａトレンチから溝状遺構を一条検出したのみで，南稲八妻を積極的に稲八妻城と判断し得る根拠は得られなかった。

第92図　羽釜片出土状況（北崖断面）

来年度もひき続いて確認のための発掘調査を実施することになるが，これに当っては今回の試掘調査とこれまでの測量調査の結果をつき合わせ，効果的にトレンチを設定していくことが望まれる。そして検出された遺構について，歴史地理学と考古学の両面から無理のない検討を重ねていってこそ，南稲八妻城を正しく捉えることができよう。

南稲八妻と同様に顕著な成果の得られなかった西平川原館跡については，中世の山岳信仰の場として捉えつつ，頂部付近のみならず斜面地や裾部を含めた広い範囲の分布調査が今後とも必要である。　（黒坪一樹）

注1　増田孝彦「奥山田池遺跡昭和59年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第16冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1985

注2　石井清司・黒坪一樹「京奈バイパス関係遺跡昭和60年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第20冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1986

注3　森　浩一・辰巳和弘・横山卓雄他『下司古墳群』（『同志社大学校地学術調査委員会調査資料№19』）　1985

注4　注2と同じ

注5　調査補助員　石田雅晃，石村光綸，上東克彦，佐藤正之，平野仁佳子
整　理　員　穎娃ちか子，白川つる子，地上松一，畑　京子，柳本喜美恵

注6　松井忠春「第1部　押小路殿第2次調査（昭和52年）」（『平安京跡研究報告』第12輯　財団法人　古代學協會）1984　本文中の軒平瓦の項に，本軒平瓦の1点類例が報告されている。「水返し」の用語も同書に依拠した。

注7　墨書木札の鑑定・判読は向日市文化資料館の清水みき氏に御面倒をおかけした。

注8　奥田裕之「山城国稲八妻城と守護所について―京都府相楽郡精華町南稲八妻の山城跡の検討―」（『桃山歴史・地理』18　京都教育大学史学会）　1981・4

4. 西小田古墳群発掘調査概要

1. はじめに

今回の発掘調査は，一般地方道大宮・間人線道路改良工事に伴い，京都府土木建築部の依頼を受けて，財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施したものである。

一般地方道大宮・間人線では，昨今の交通量の増加に伴い，道路改良工事が進められている。今回の工事区間内には，5基からなる西小田古墳群が含まれていたため，京都府土木建築部と京都府教育委員会との間で協議が行われた。この結果，工事にかかる4号墳および5号墳の2基の発掘調査を当調査研究センターが実施することになったのである。

5基からなる古墳群のうち，丘陵の最先端に位置した1号墳は，土取りによってすでに消滅しており，その際には遺物の出土もみたという。2号墳は，径12m程度・高さ約0.6mの円墳で，遺存状態は良好である。3号墳は，径約15m・高さ1.5m程度の円墳で，大きく攪乱されている。この攪乱は，石材の抜き取り痕と考えられるもので，横穴式石室を内部主体とする古墳であったものと推測される。今回調査の対象となった4号墳・5号墳は，1号墳と2号墳との間に位置している。いずれも墳丘の存在は顕著ではなかった。

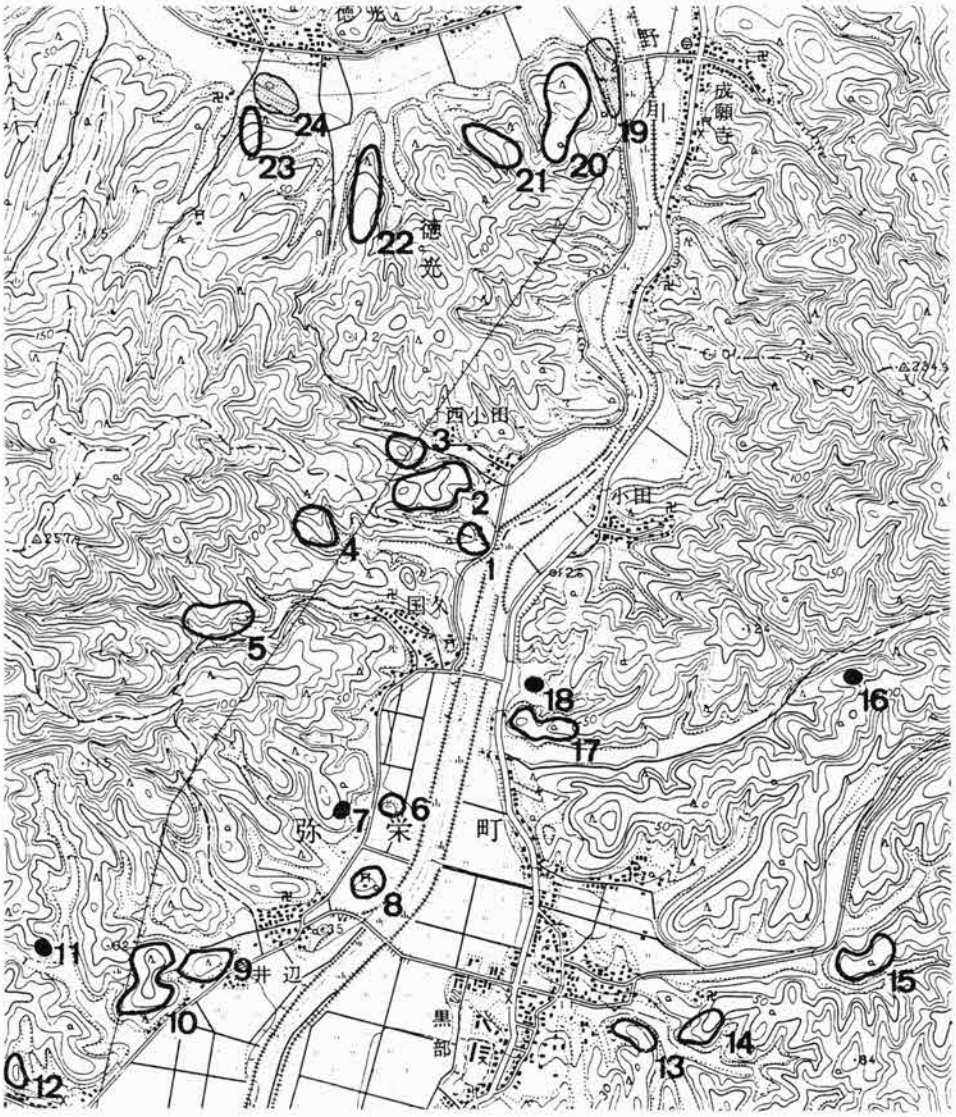
調査は，昭和61年11月20日から昭和62年1月22日までの期間で行い，現地調査を当調査研究センター調査課主任調査員小山雅人・同調査員三好博喜が担当した。

調査期間中，地元有志の方々や学生諸氏(注1)には，作業員および補助員として作業に従事していただいた。また，調査全般にわたり，弥栄町教育委員会ならびに丹後町教育委員会をはじめとする関係諸機関の御協力を得ることができ，現地調査においても多くの方々の御協力と御指導とを賜わった。改めて感謝の意を表わしたい。

2. 位置と環境

今回調査を行った西小田4号墳・5号墳は，京都府竹野郡弥栄町国久291および丹後町西小田913に所在する。古墳群は，尾坂山から東へ延びた尾根の末端部で，竹野川を真下に望む標高約25mの低位丘陵上に位置している。竹野川との比高は，20m程度である。

西小田古墳群は，竹野川が織りなす沖積地のうち，弥栄町地域の沖積地の北端を限る丘陵上にある。この北端部地域には，西小田古墳群をはじめとして，竹野川左岸に鳥越古墳群・愛宕山古墳群・穂曽長古墳群など数基からなる古墳群が点在している。比較的まとまりをもつ古墳群としては，塚田古墳群が知られている。塚田古墳群は，16基程度の古墳か

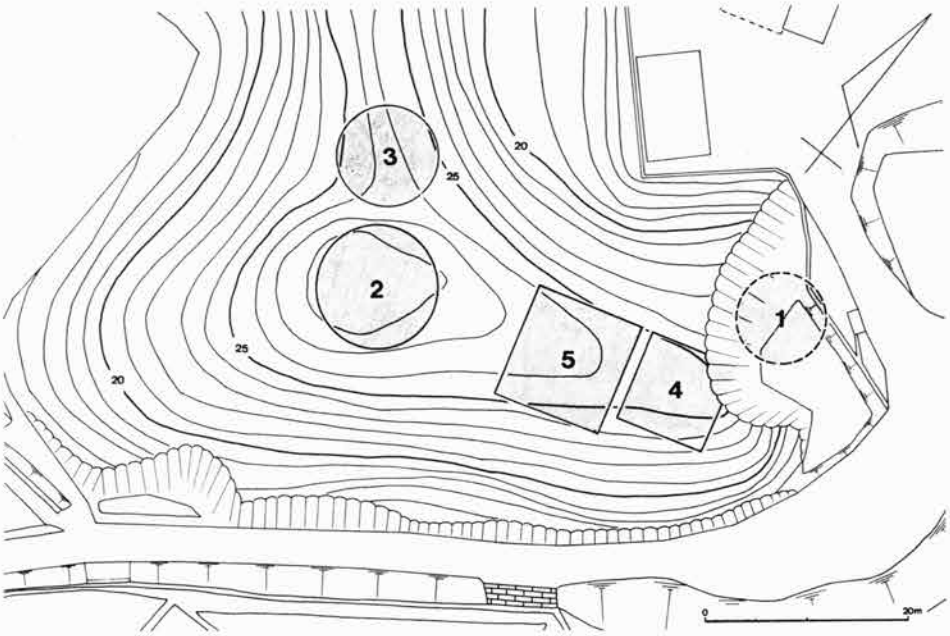


第93図　周辺遺跡分布図

1. 西小田古墳群　2. 愛宕山古墳群　3. 鳥越古墳群　4. 岡田古墳群　5. 塚田古墳群
6. 国原古墳群　7. 稲荷古墳　8. 穂曽長古墳群　9. 小宮谷古墳群　10. 桑田古墳群
11. 黒奥古墳群　12. 大将軍古墳群　13. 大内古墳群　14. 小坂古墳群　15. 金谷古墳群
16. 福谷古墳　17. 弓木古墳群　18. 黒部銚子山古墳　19. 川向遺跡　20. 七ツ塚古墳群
21. 小行地古墳群　22. 取越古墳群　23. 奥山古墳群　24. 長田遺跡

らなる古墳群で，ほとんどが横穴式石室を内部主体としている。竹野川右岸の丘陵では，黒部銚子山古墳と弓木古墳群とが知られている。黒部銚子山古墳(注2)は，丹後地域では4番目の全長105mという規模を誇る前方後円墳である。弓木古墳群は，全長約60mの前方後円墳と径15mの円墳とからなる古墳群である。

北端部地域にみられる主な古墳群は以上のとおりであり，この地域は比較的古墳数の少



第94図　西小田古墳群構成図

ない地域であるといえよう。これに対して，沖積地の広がる中央以南の地域では，坂野丘遺跡(注3)・奈具遺跡(注4)・奈具岡遺跡(注5)などのような弥生時代および古墳時代の集落を背景にしたと考えられる古墳群が数多くみられるのである。

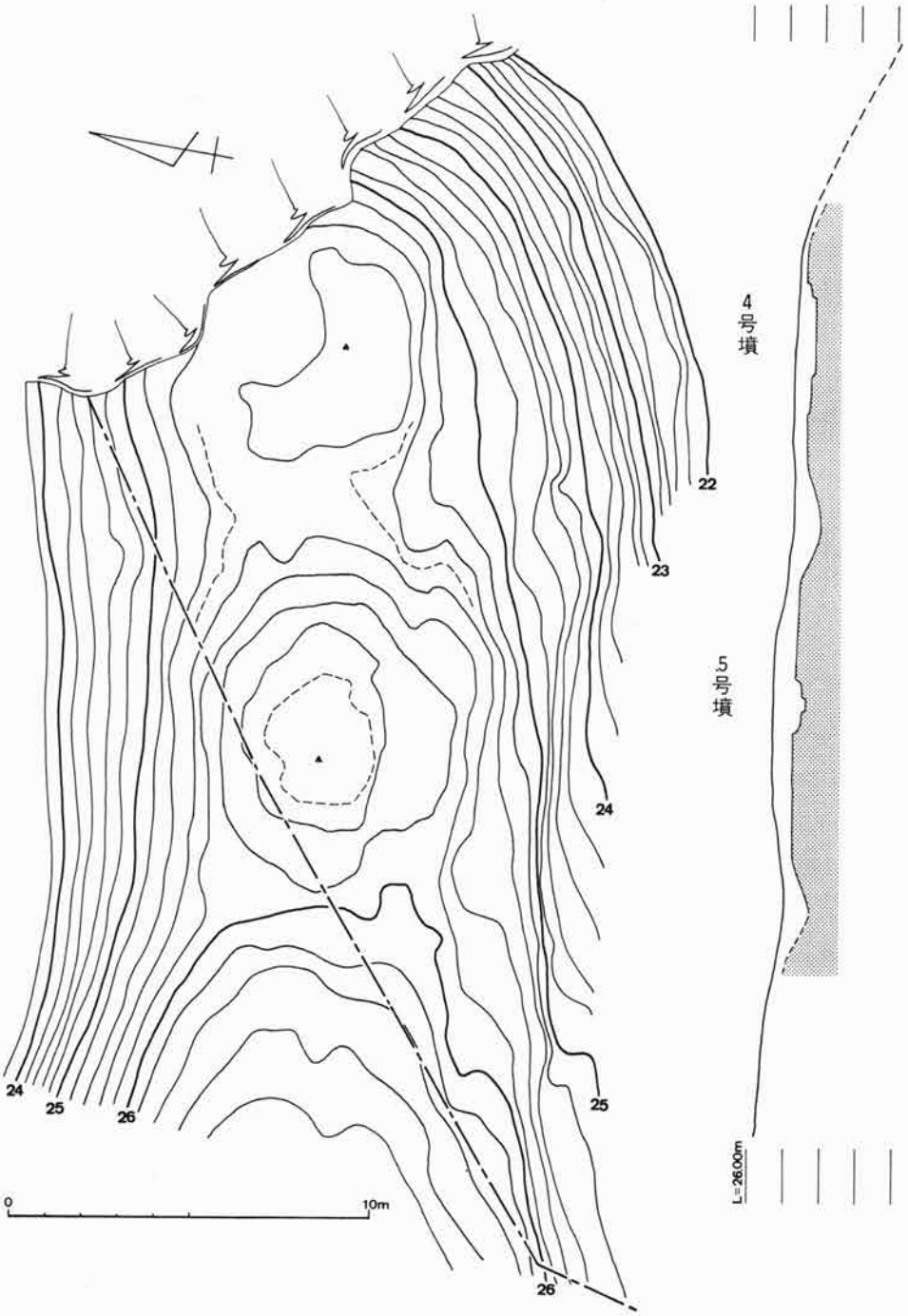
西小田古墳群の位置する弥栄町沖積地の北端部地域では，古墳数も少なく，発掘調査も行われていない。一方では，黒部銚子山古墳という比較的大型の前方後円墳が営まれた地域でもあり，この地域の歴史的位置は重要であるものと考えられる。今回の西小田古墳群の調査成果は，この地域の古墳文化を理解する上での貴重な資料を提供したといえよう。

3. 調査経過

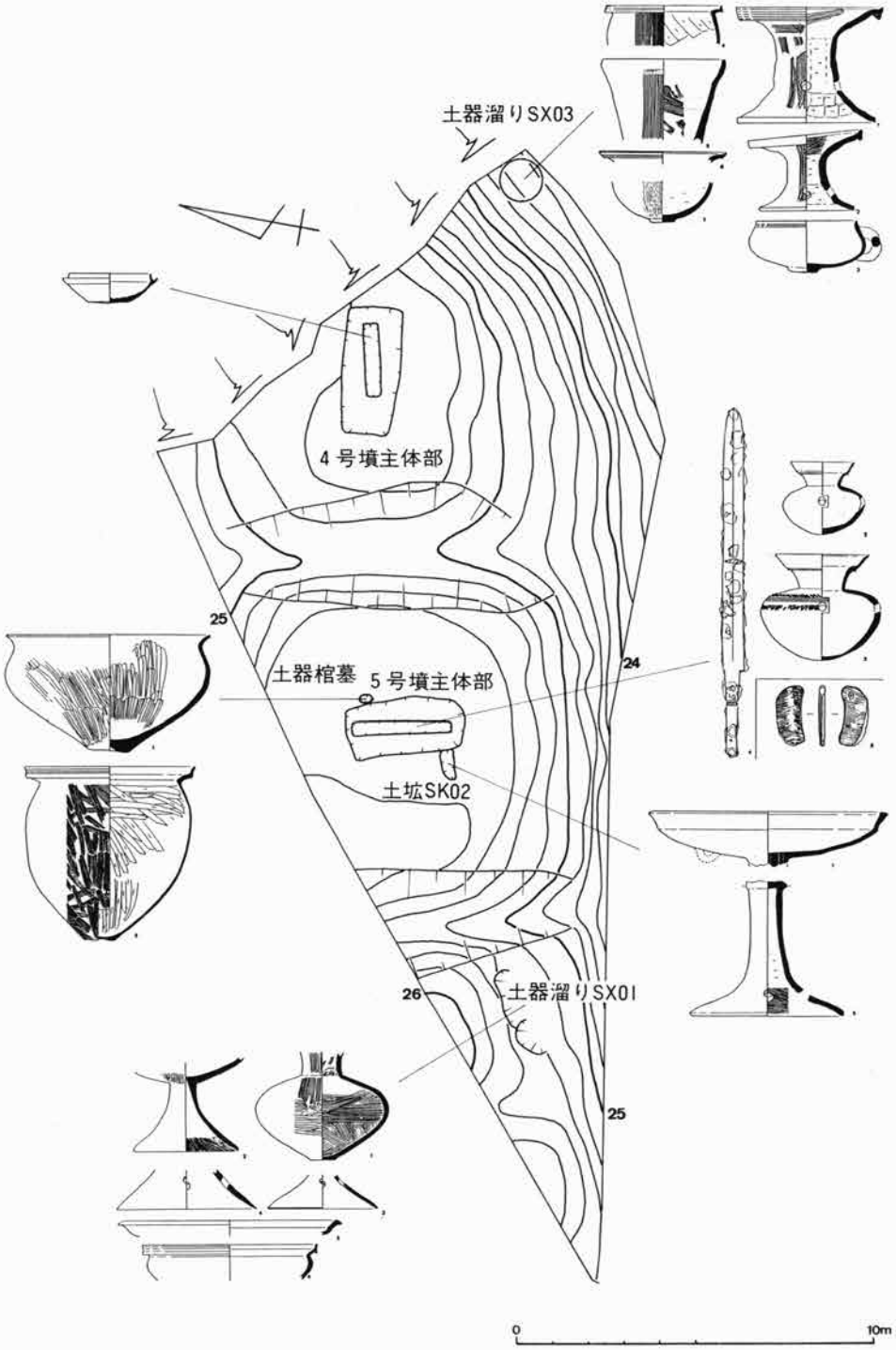
調査は，2基の古墳の埋葬主体部を検出することとともに，周辺遺構の有無を確認することや，古墳の築造方法を探ることを主な目的とし，調査対象地の全面を掘削することとした。このため，掘削面積は200m²に及ぶ。

現地調査は，昭和61年11月20日から22日までの期間で，地形測量を行うことから着手した。地形測量は，開放トラバースによる測点からの平板測量である。水準は，府道改良工事に伴う測量値を用いた。コンターラインは20cm間隔で，必要に応じて10cm間隔とした。原図の縮尺は1/50である。この地形測量により，2基の墳丘の存在が明らかとなった。

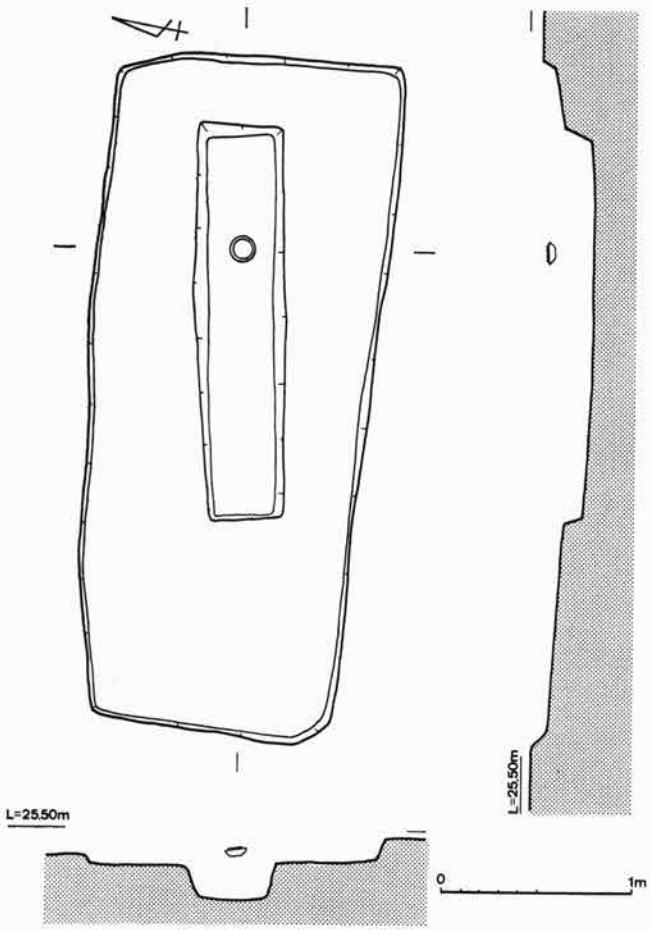
掘削作業は，11月21日に資材の搬入を行い，掘削を開始した。墳丘の掘削によって，4



第95図　4・5号墳地形図


土器溜りSX03
4号墳主体部
25
24
土器棺墓
5号墳主体部
土坑SK02
26
土器溜りSX01
25
0
10m

第96図　遺構配置図



第97図　4号墳主体部実測図

号墳・5号墳は，尾根に直交する溝によって成形された方墳であることが判明した。埋葬形態は，いずれも木棺直葬であった。4号墳の主体部は1基で，主体部内からは，須恵器の杯身1点が出土している。5号墳でも主体部は一基であった。主体部内からは，須恵器の甕2点・滑石製勾玉1点・鉄製剣1点などが出土している。また，調査地内からは，弥生土器の出土も多く，特に5号墳の墳頂部には，合せ口の土器棺墓が存在した。ほかに土器溜りSX01・SX03，土坑SK02を検出している。

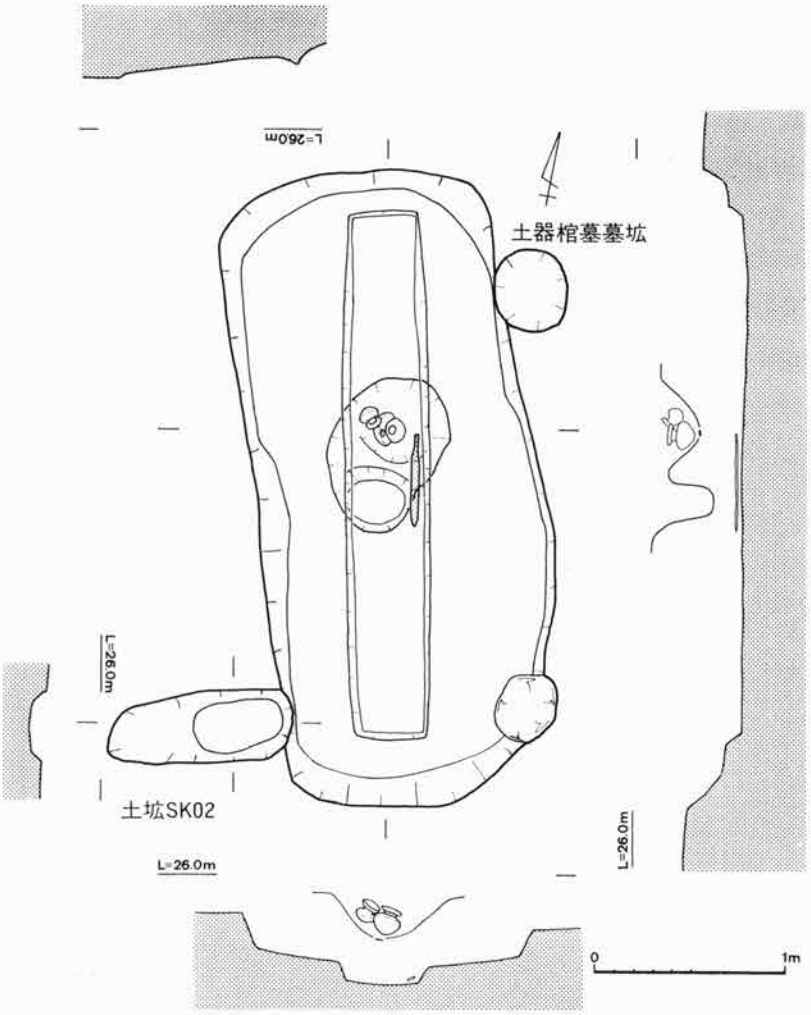
作図および写真撮影は，その都度行い，昭和62年1月22日にはすべての現地作業を終了した。

なお，関係者説明会は，1月14日に弥栄町中央公民館にて行った。

4. 検出遺構

(1) 西小田4号墳（第95～97図）　4号墳は，墳丘の東側が削除されており，その全容を知り得ることはできなかった。西側は，尾根に直交する溝によって，5号墳と画されている。盛土は，ほとんど認められなかった。これらの状況から，4号墳の墳丘の成形方法は，東西を溝によって区画し，南北の裾部を削って，墳丘を方形に整形したものと考えられる。したがって，4号墳は，一辺9m・高さ1mの規模を有する方墳になるものと考えられる。

埋葬主体部は，1基を検出した。墓坑は表土を排除し，精査した段階で，土色の変化によって確認できた。墓坑の規模は，長さ3.6m×幅1.6mで，主軸の方向は，尾根線と平行



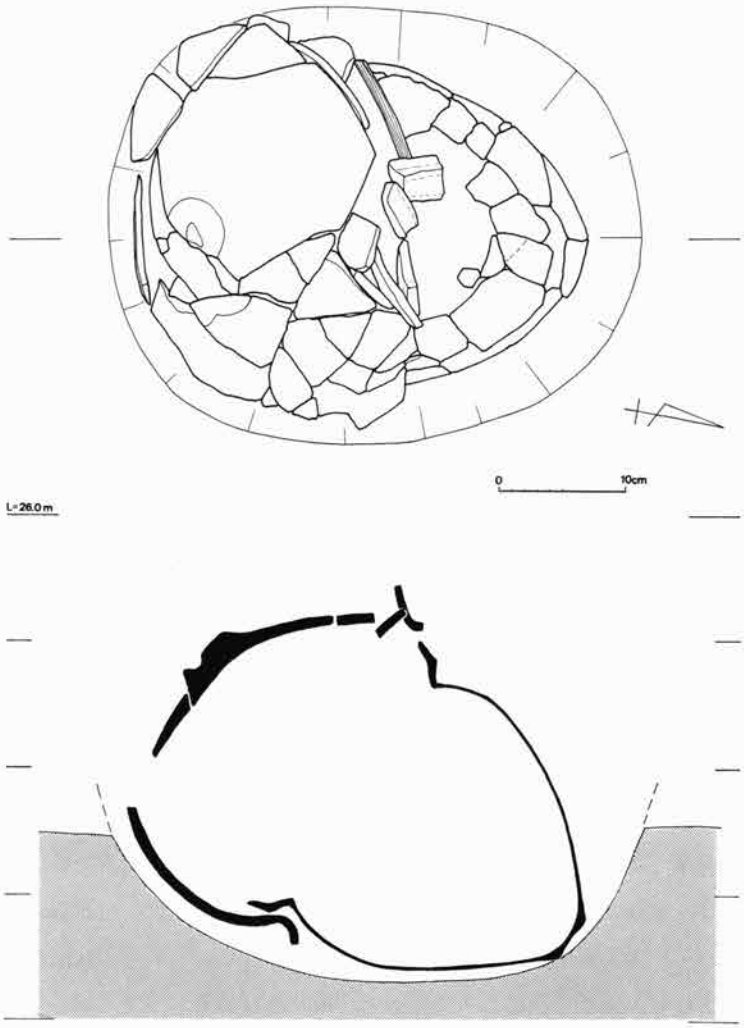
第98図　5号墳主体部および周辺遺構実測図

する東西方向(N78°E)であった。墓坑検出面より0.2m掘り下げた段階で，木棺部を検出した。木棺部の直上からは，須恵器の杯身1点(第100図1)が正位の状態で出土している。木棺部の規模は，長さ2m×幅0.4mで，深さは0.15mを測る。木棺部内では，遺物を確認することができなかった。

(2) 西小田5号墳（第95・96・98図）　5号墳は，墳丘の北西部が調査対象地外であったため，墳丘全体を掘削することはできなかった。西側および東側は，尾根線に直交する溝によって画されている。盛土は，ほとんど認められなかった。これらの状況から，5号墳の墳丘の成形方法は，東西を溝によって区画し，南北の裾部を削って，墳丘を方形に整形したものと考えられる。したがって，5号墳は，一辺11m・高さ1.5mの規模をもつ方墳

になるものと考えられる。

埋葬主体部は，１基を検出した。墓坑は表土を排除し，精査した段階で，土色の変化によって確認できた。墓坑の規模は，長さ3.5m×幅1.5mで，主軸の方向は，尾根線と直交する南北方向(N11°W)であった。墓坑検出面では，ほぼ中央から須恵器の瑳(第100図２・３)が大小セットで出土した。この瑳のセットは，径0.5m・深さ0.2mの土坑内に，正位の状態で併置されていた。墓坑検出面より0.2m程度掘り下げた段階で，木棺部を検出した。墓坑掘削中には，瑳の出土地点直下から滑石製勾玉１点(第100図５)が出土している。木棺部の規模は，長さ2.8m×幅0.6mで，深さ0.1mを測る。木棺部内では，東寄り中央付近で鉄製剣１点(第100図４)が出土した。



第99図　土器棺墓実測図

(3) 土器棺墓（第96・98・99図） 5号墳の表土排除後の埋葬主体部の検出作業中に，土器棺墓1基を検出した。径0.42m×0.35mの土坑内に，甕と鉢とを合せ口にし，横位の状態で埋納したものである。主容器となる甕の口縁部は南向き(S10°E)である。土坑は，5号墳の埋葬主体部に切り込まれる状態にあった。主容器となる甕(第102図2)は，口径24.0cm・高さ24.3cmで，口縁部には擬凹線をめぐらしている。蓋となる鉢(第102図1)は，口径27.8cm・高さ16.3cmを測るものである。土器の時期から，この土器棺墓は，弥生時代畿内第V様式併行期に，埋納が行われたものと考えられる。

(4) 土器溜りSX01（第96図） 5号墳の西側には，2号墳までの間に10m程度の距離があった。このため，周辺埋葬施設など何らかの遺構が存在する可能性もあり，非常に限られた範囲ではあったが，掘削を行った。掘削の結果，埋葬施設と断定できる遺構は検出できなかったものの，土器溜りSX01を検出した。

土器溜りSX01は，5号墳と2号墳との間にある切り残し状の隆起の南西部に存在した。この隆起の斜面の一部が小さなテラス状に変化しており，淡黒褐色土によって充填されていた。淡黒褐色土中からは，高杯・壺などの弥生土器が数個体(第101図)出土した。特に高杯(2)の脚部は，現形を保ち，正位の状態で出土した。この出土状態から，これらの土器の一群は，テラス状の地形に据えられていたものと考えられ，何らかの意図をもって置かれたものと推測される。

(5) 土坑SX02（第96・98図） 5号墳の墳頂部南西側で確認した。長さ1m×幅0.4m程度で，深さ0.1mを測る。東側は，5号墳の埋葬主体部によって切り込まれている。土坑の埋土は，淡黒褐色土であった。土坑内からは，高杯(第103図)などが出土した。弥生時代畿内第V様式併行期の時期と考えられる。

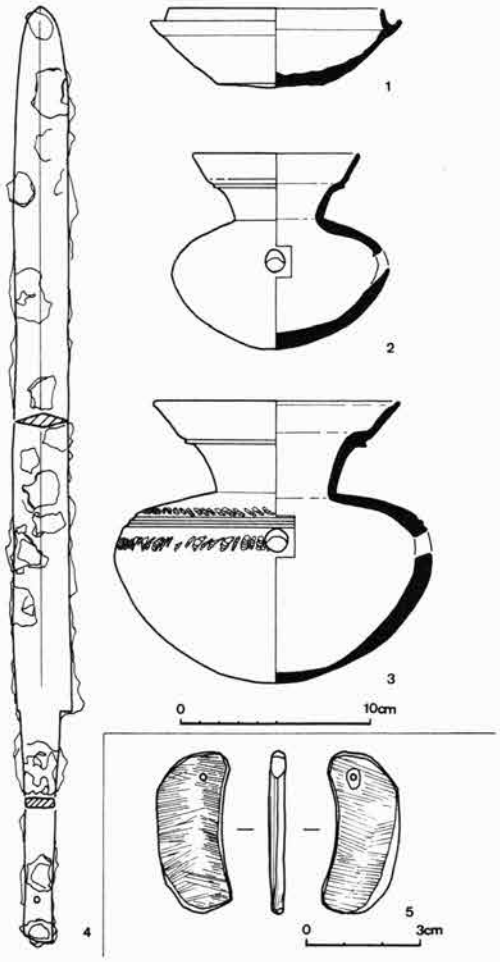
(6) 土器溜りSX03(第96図) 4号墳南西裾部を掘削中，数個体の弥生土器(第104図)を検出した。4号墳の墳頂部より，約2.5m低い標高23m付近で，特別な施設は認められなかった。器種としては，把手付鉢・器台・壺・甕などがみられる。完形品が多く存在することから，上方からの転落遺物とは考えにくく，この地点に置かれていたものと推測される。

5. 出 土 遺 物

今回の調査によって出土した遺物には，弥生土器・土師器・須恵器・鉄製品・石製品がある。弥生土器は，土器棺をはじめとして，土器溜りSX01・SX03，土坑SK02などから出土した。土師器の出土は，数量的には非常に少ない。須恵器は，4号墳および5号墳の埋葬主体部内から出土したもので，杯身1点と瑞2点とがある。鉄製品は剣，石製品は滑石製の勾玉で，いずれも5号墳の埋葬主体部内から1点ずつ出土したものであった。

(1) 西小田4号墳埋葬主体部内出土遺物（第100図1）　墓坑内の木棺部の直上から須恵器の杯身が1点出土した。口径11.3cm・器高4.2cmを測る小型化の進んだ杯身である。立ち上がりは内傾し，短い。受部も短く，丸みをおびている。全体にヨコナデ調整が行われ，ヘラケズリ痕は認め難い。底部の切り離しは，ヘラ切りである。中村浩氏の陶邑編年[注6]Ⅱ型式第6段階に比定できるものと考えられる。

(2) 西小田5号墳埋葬主体部内出土遺物（第100図2～5）　瓹（2・3）　墓坑上の土坑内から須恵器の瓹が2点出土した。3は大型瓹で，口径13cm・器高14.7cmを測る完存品である。口頸部は，外反してから段をつくって外上方へのびる。頸部と口縁部との境界には鋭い凸帯がめぐる。体部は肩が張り，底部が丸みをおびている。体部の最大径は肩部にあり，円孔はここに穿たれている。文様は，円孔上方に2条の凹線がめぐり，その上下に櫛歯による刺突文が施されている。口頸部および肩部外面はヨコナデ，体部下半から底部の外面は，ヘラケズリののちナデ調整している。また，口縁部から肩部にかけては，自然釉が付着している。2は小型瓹で，口縁部の一部を欠くものの，ほぼ完存品である。口径8.9cm・器高10.2cmを測る。口頸部の形態は，大型瓹とほぼ同形である。体部は，算盤玉状を呈している。体部の最大径は胴部にあり，円孔はここに穿たれている。文様はない。調整は，口頸部および体部上半の外面まではヨコナデ，体部下半から底部の外面は，ヘラケズリののちナデ仕上げを行っている。なお，口縁部から肩部にかけては，自然釉が付着している。



第100図　4・5号墳主体部内出土遺物
1：4号墳（須恵器杯身）　2～5：5号墳（2・3：須恵器瓹　4：鉄剣　5：滑石製勾玉）

この2点は，出土状況および形態的特徴・手法的特徴などからみて，ほぼ同時期に作成されたものと考えられる。陶邑編年のⅠ型式第3段階[注7]に比定できるものと考えられる。

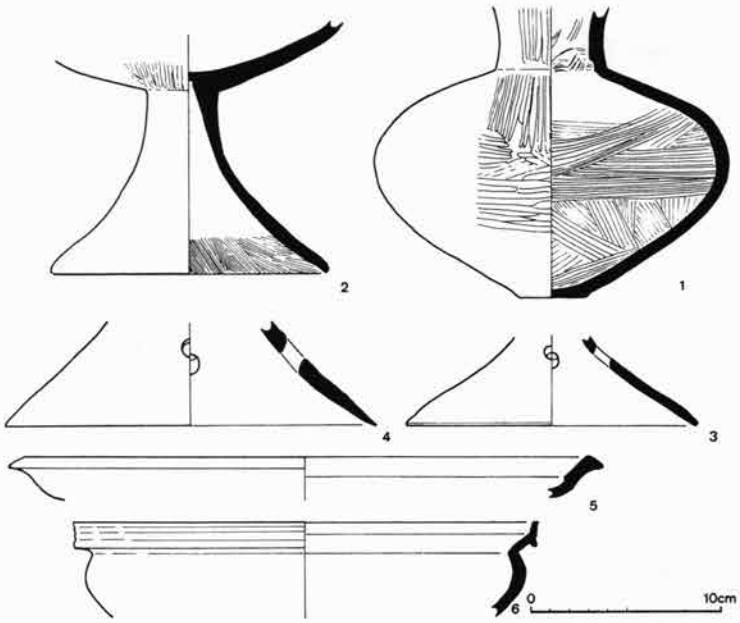
滑石製勾玉（第100図５） 墓坑内，木棺部の直上から出土した。全長4.1cm・幅2.0cmで，厚さは0.4cmを測る。極端なC字状は呈していない扁平な勾玉である。穿孔は，１か所で，径0.2cmを測る。

鉄製剣（第100図４） 木棺部内の東寄り中央付近で，棺底部に近い位置から剣先を南側に向けて出土した。全長49.4cm（刃部長37cm・柄長12.4cm）・刃部幅3.0cm・柄幅1.7cmを測る。関は，片側には明確に認められるものの，他の側は不明瞭な形状になっている。目釘穴は，径0.2cm程度のものを１か所で確認した。

(3) 土器溜りSX01出土遺物（第101図） 土器溜りSX01から出土した土器は，小破片となっているものが多い。個体として認識できにくいものが多いが，少なくとも細頸壺１点，高杯４点，鉢１点が存在する。

細頸壺（第101図１） 口縁部を欠くものの，ほぼ全容を知り得る細頸壺である。体部最大径は胴部にあり，算盤玉状の体部を呈している。体部下半内面は，縦方向のハケメ，胴部内面は，横方向のハケメが認められ，頸部接合部付近は，指押さえによる調整が施されている。外面はヘラミガキで，胴部付近が横方向のほかは，縦方向で調整されている。

高杯（第101図２～５） ２は，土器溜りSX01内に据えられていたものである。杯部は多くを欠損しているものの，外面にはヘラミガキが認められる。脚部は，漏斗状に開くもので，裾部径14.8cmを測る。調整は，磨滅が著しく，不明な点が多いが，裾部内面にはハケメが認められる。透孔はみられない。３・４は円形透孔をもつ裾部の破片である。５は杯部で，径31cmを測る。口縁部は，段をもって外上方へ立ち上がるもので，口唇部に面をなす。脚は，柱状になるものである。調整は，磨滅が著しいため不明である。

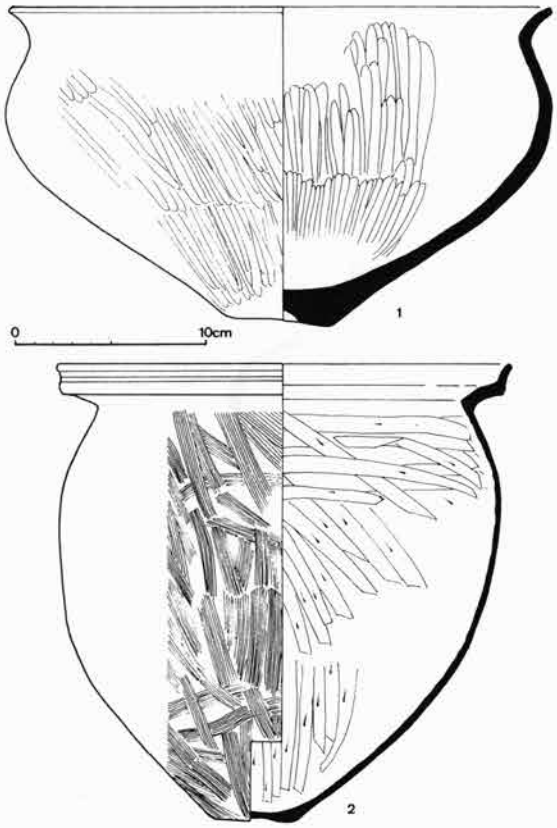


第101図　土器溜りSX01出土遺物　1：細頸壺　2～5：高杯　6：鉢

鉢（第101図６）　口縁部付近のみの破片であり，高杯の杯部の可能性もある。胴部立ち上がりは内彎し，頸部で「く」の字状に外反して口縁部へと続く。口縁部は，端部を上下に肥厚させて面をつくり，擬凹線３条を施している。ほかにも，底部破片が数点ある。

(4) 土器棺使用土器（第102図）　土器棺は，２の甕を主容器とし，１の鉢を蓋として用いていたものである。

甕は，口径24.0cm・器高24.3cmを測る。底部は，径4cm程度で，若干の窪みをもつ。胴部最大径は，上半部にあり，頸部を大きく外反させて，口縁部を短く立ち上げている。口縁部外面には３条の擬凹線をめぐらしている。体部の調整は，外面が縦方向のハケメ・内面が頸部にまで及ぶヘラケズリ調整である。鉢は，口径27.8cm・器高16.3cmを測る。底部は，径5.5cmのドーナツ状の円盤を貼付したものと思われる。器形は，扁球状の体部に短く外反する口縁部をもつ。調整は，体部内外面がヘラミガキ調整によるもので，口縁部は，ナデ仕上げしている。



第102図　土器棺使用土器
1：鉢（蓋転用）　2：甕（主容器）

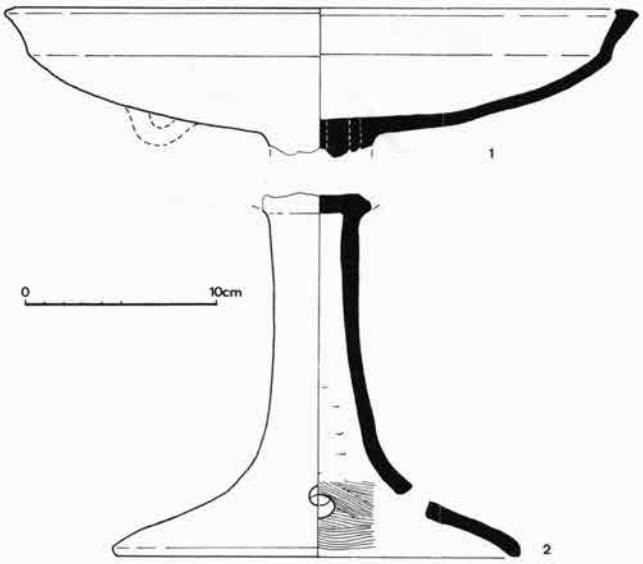
土器棺に用いられた土器のセットの時期は，甕の特徴から，弥生時代畿内第Ⅴ様式併行期と考えられる。

(5) 土坑SK02出土遺物（第103図）　土坑SK02内からは，高杯２点などが出土している。1は杯部で，径32.3cmを測る。口縁部は，段をもって外上方へ立ち上がるもので，口唇部共に面をなす。把手をもつものと思われる。調整は，著しく磨滅しているため，不明である。２はラッパ状に開く脚部で，裾部径20.8cmを測る。柱状部は径４～5cmで，10cm程度のびてから裾部へと続く。調整は，磨滅が著しいため，不明な点が多いが，裾部内面には，粗いハケメが認められる。円形の透孔は４か所である。このほかには，鉢の底部と思われる破片などがある。

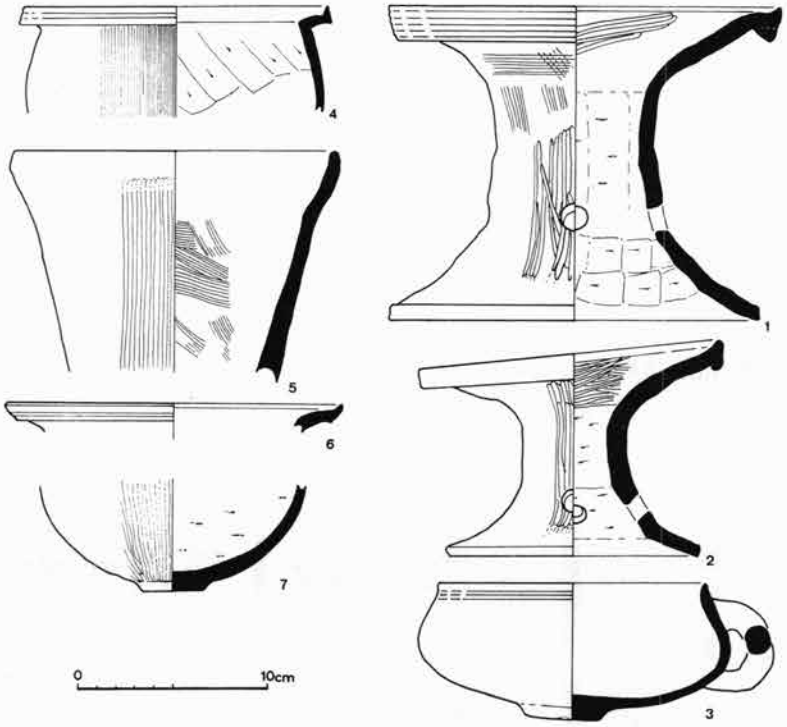
(6) 土器溜りSX03出土遺物（第104

図）　土器溜りSX03からは，把手付鉢１点・器台２点・甕１点・壺３点などが出土している。

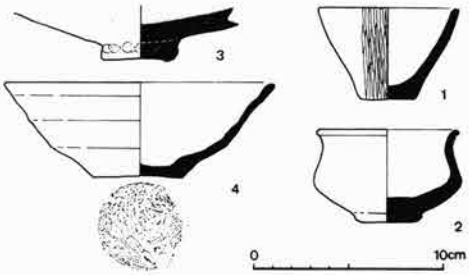
器台（１・２）　大小のセットで出土した。１は大型の器台で，口縁部径 20. 6cm・器高16. 2cm・裾部径19. 4cmを測る。口縁端部は，粘土紐を貼り付けて肥厚させ，４本の擬凹線をめぐらしている。調整は，口縁部内面をヘラミガキ，外面を粗いハケメによって調整している。体部内外面



第103図　土 坑 SK02 出 土 遺 物
1･2: 高　杯



第104図　土 器 溜 り SX03 出 土 遺 物
1･2: 器台　3: 把手付鉢　4: 甕　5〜7: 壺



第105図　調査地内出土遺物（その１）
1：５号墳墳丘東側　2～4：４号墳墳丘南側
（1～3：弥生土器　4：土師器）

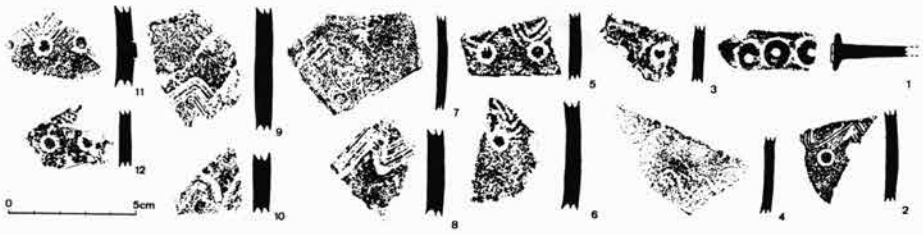
は，ヘラケズリによって調整され，外面にはさらにヘラミガキ調整を施す。裾部との境には，円形の透孔が４か所に穿たれている。裾部は，内外面ともにヘラケズリによって調整され，外面はヘラミガキによって仕上げられている。また，内面の一部には，ハケメ調整が認められる。２は小型の器台で，口縁部径16.2cm・器高11.3cm・裾部径13.4cmを測る。口縁端部を肥厚させているものの，文様はみられない。外面の調整は，ヘラミガキによるものである。内面は，口縁部がヘラミガキで仕上げられ，体部はヘラケズリ調整，裾部は不明である。透孔は円形で，４か所に穿たれている。

把手付鉢（３）　口径14.5cm・器高7.3cmを測る。極端な扁球状を呈する体部に，径５cmの底部が付く。口縁部は，やや外反ぎみに若干立ち上げているだけである。口縁部外面には３条の擬凹線がめぐる。調整は，磨滅のため不明である。

甕（４）　口径15.9cmを測る口頸部破片である。内彎ぎみの体部上半から頸部を大きく外反させて，口縁部を短く立ち上げている。口縁部外面には擬凹線２条をめぐらしている。調整は，外面が縦方向のハケメ，内面がヘラケズリによるものである。

壺（５～７）　５は長頸壺の口縁部である。口径部17.7cmを測る。内面はハケメ，外面はヘラミガキ，口縁部付近はナデによって仕上げられている。６は口縁部で，口径17.8cmを測るものである。７は体部下半が残るもので，径４cm程度の底部が付く。内面はヘラケズリ，外面はヘラミガキによって仕上げられている。

(7) 調査地内出土遺物（第105・106図）　第105図は１・５号墳の墳丘から出土したミニチュア土器である。口径7.6cm・器高4.8cmを測る。内面はナデ，外面はヘラミガキによって仕上げられている。第105図２～４は，４号墳の南側斜面から出土したものである。２は，



第106図　調査地内出土遺物（その２）
1･2：５号墳主体部埋土内　3～8：５号墳墳丘表土　9～12：土器溜りSX01付近表土

口径7.1cm・器高4.9cmを測るミニチュア土器で，全体にナデ仕上げされている。3は鉢の底部と思われる。底部には径4cm・厚さ1cm程度の円盤を貼り付けている。これらは，弥生土器と思われる。4は土師器の杯で，口径14.2cm・器高5.0cmを測る。ロクロ成形されたもので，底部には回転糸切り痕が残る。

第106図は，調査地内の各所から出土したものである。櫛描きによる波状文と円形刺突文とをもつものである。1は口縁端部に円形浮文が貼付されている。これらの小破片は，弥生時代畿内第Ⅴ様式から庄内式の時期に併行するものと考えられる。

6. ま　と　め

調査の結果，木棺直葬墳2基とこれに伴う埋葬主体部2基および土器棺墓1基，土坑1基，土器溜り2か所を検出することができた。木棺直葬墳2基が古墳時代の遺構であり，これ以外のものは，弥生時代後期の遺構であった。

5号墳は，須恵器の時期から，5世紀末の築造と考えられる。墳丘の築造技術は，4号墳とともに方形台状墓の系統をひくものである。埋葬主体部上から出土した甕のセットは，丹後地域出土の須恵器としては，古い形式に属するものといえる。(注8) 丹後地域周辺では，この時期の須恵器窯跡は確認されておらず，おそらく畿内から搬入されたものと考えられる。また，滑石製の勾玉については，祭祀遺跡出土のものに通有の形態であり，丹後地域では，中郡大宮町大宮売神社境内から出土した例がある。(注9) これらのことから想像するに，この古墳に葬られた人物は，祭祀権を握った在地の有力者のひとりであり，畿内の勢力とも何らかの繋がりをもっていた首長であったといえよう。

4号墳は，須恵器の時期から7世紀前葉の築造と考えられる。墳丘の築造技法は，弥生時代の方形台状墓の築造技法をひくもので，埋葬主体部も従来の木棺直葬である。副葬品の内容は，非常に貧弱になっているものの，この時期としては，きわめて旧態依然とした古墳であるといえよう。丹後地域では，7世紀の埋葬施設の形態として，木棺直葬や横穴式石室・横穴などの形態が認められる。これらのうち，木棺直葬は，従前から普遍的にみられた埋葬形態である。横穴式石室は，6世紀中葉以後この地域に導入された埋葬形態であり，畿内勢力との関係が考えられる。埋葬形態に現われた横穴式石室と木棺直葬という葬法の差は，階層の差というよりも，畿内勢力との関係により一早く横穴式石室を導入し得た集団と，でき得なかった集団の差という関係でとらえるべきであろう。なお，丹後地域の横穴については，漸くまとまった調査が行われるようになったところであり，(注10) 具体的な意義づけについては，その報告を待ちたい。

埋葬形態の差の問題に関して，西小田古墳群の群構成を考えると，多少考慮すべき様相

がみられる。西小田古墳群を構成する古墳のうち，すでに消滅した1号墳を除くと，盛土をもつ2号墳・3号墳と，盛土をもたない4号墳・5号墳とに大別できる。特に3号墳は，横穴式石室墳と考えられる。古墳群の形成が盛土を持たない5号墳・4号墳から盛土を行う2号墳・3号墳へという様相でとらえられれば容易であるが，実際には5号墳と4号墳との間には100年余りの時期差が認められる。古墳群の形成が継続的に行われているものとすれば，1号墳や2号墳・3号墳が5号墳と4号墳との間を埋める可能性も考えられ，墳丘の築造技法や副葬品の優劣から被葬者の性格を直接的に評価してよいものかという疑問を生じる。いずれにせよ，今回調査を行った4号墳および5号墳に対して，墳丘および内部主体部に構造の差が認められる2号墳および3号墳がどのような時期に位置づけられるのかは，興味深い問題である。

古墳の調査に伴って検出された弥生時代の遺構や出土した土器から，この尾根は弥生時代にも墓域あるいは祭祀の場として利用されていたことが知られた。弥生時代と古墳時代の墓域が重複する例は，竹野郡丹後町大山墳墓群(注11)・中郡大宮町小池古墳群(注12)・大谷古墳(注13)などでも認められる。調査例の増加に伴い，両者の関係が明確にされてゆくものと思われる。

西小田古墳群の調査は，小範囲の調査ではあったが，当地域の弥生時代から古墳時代にかけての墓制を考える上では，示唆に富んだ多くの資料を提供したものといえる。

（三好　博喜）

注1　調査参加者(敬称略・順不同)
調査補助員　横島勝則・新井秀明
作　業　員　田中　正・山副　同・入江三郎・吉岡　博・松村重明・田家　忠・坪倉勇一・山副武志・井篠美好・中村芳夫・田中愛子・片西美恵子・大江みや子・片西弘子

注2　梅原末治「黒部ノ銚子山古墳」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第7冊　京都府)　1926

注3　釋　龍雄・杉原和雄・田中光浩・林　和廣・中谷雅治『坂野一坂野丘遺跡・坂野4号墳発掘調査報告書一』(京都府弥栄町文化財調査報告第2集　弥栄町教育委員会)　1979

注4　釋　龍雄・林　和廣『奈具岡遺跡発掘調査報告書』(京都府弥栄町文化財調査報告第1集 弥栄町教育委員会)　1972

注5　川西宏幸・山田邦和ほか『京都府弥栄町奈具岡遺跡発掘調査報告書』財団法人古代學協會　1985

注6　中村　浩ほか『陶邑Ⅰ』(大阪府文化財調査報告書第28輯　大阪府教育委員会)　1976ほか

注7　注6に同じ

注8　山田邦和「近畿地方北部の古式須恵器一奈具岡遺跡出土須恵器の検討を通じて一」(『京都府弥栄町奈具岡遺跡発掘調査報告書』(財)古代學協會)　1985

注9　梅原末治「大宮賣神社」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第5冊　京都府)　1923

注10　丹後国営農地開発事業に伴い，中郡大宮町大田鼻横穴群が京都府教育委員会により昭和60・61年度，同町有明横穴群が(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターにより昭和60年度にそれぞれ発掘調査が行われている。

注11　平良泰久・常盤井智行・黒田恭正『丹後大山墳墓群』丹後町教育委員会　1983

注12　鈴木忠司・植山茂ほか『京都府中郡大宮町小池古墳群』(大宮町文化財調査報告第3集 大宮町教育委員会・(財)古代學協會・平安博物館)　1984

注13　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター第39回研修会資料による。

図　　版

図版第１　　有明古墳群・横穴群

(1)　有明古墳群・横穴群調査前全景（西から）

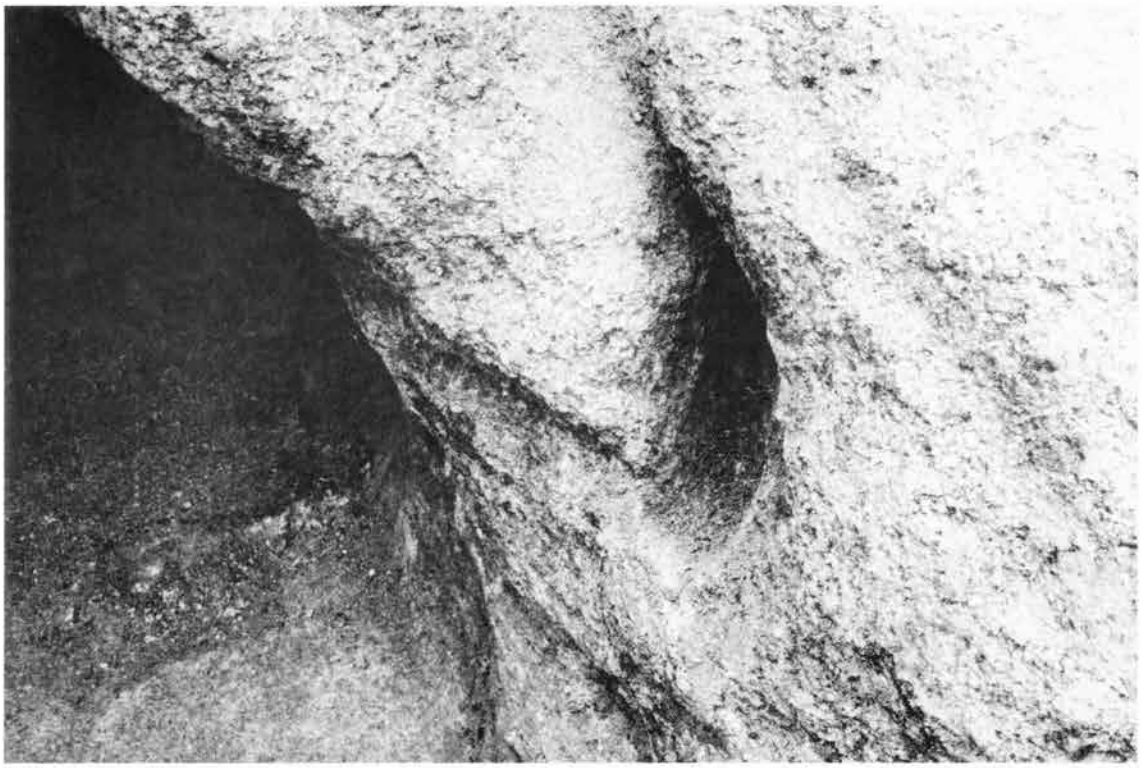
(2)　３号墳主体部全景（北西から）

図版第２　　有明古墳群・横穴群

(1)　横穴群全景（南東から）

(2)　１号横穴人骨出土状況（南東から）

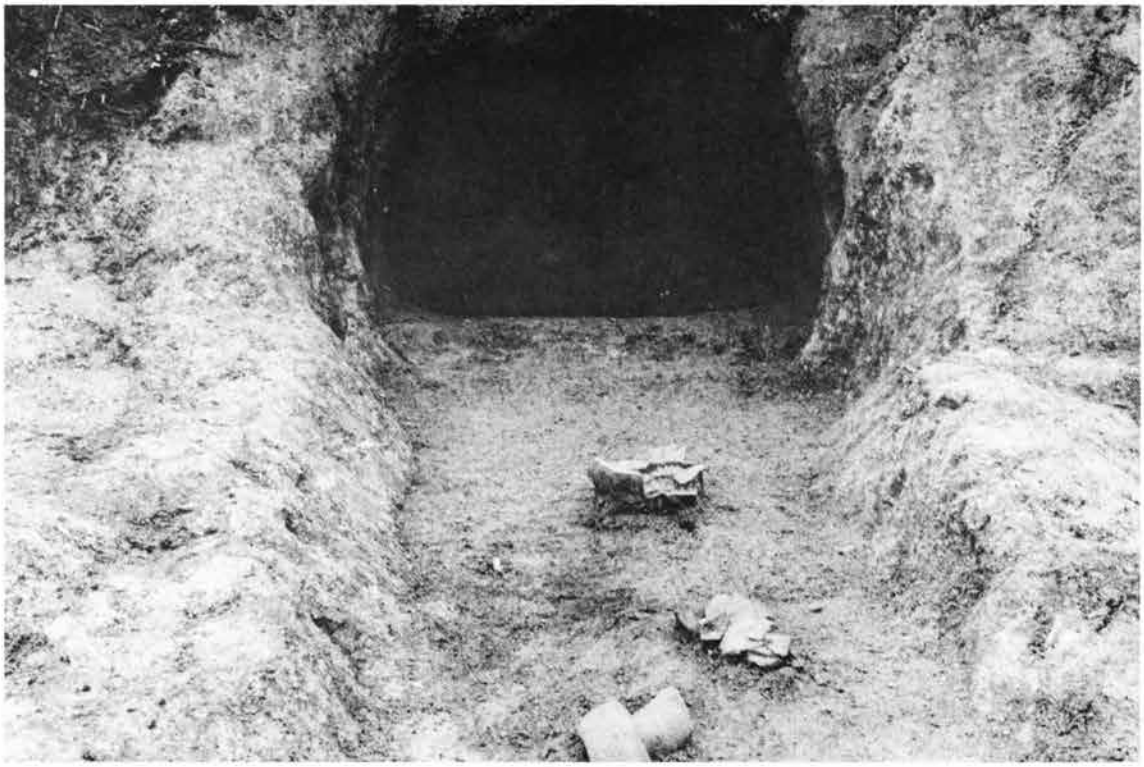
図版第３　　有明古墳群・横穴群



(1)　１号横穴部分（南から）

(2)　２号横穴部分（南東から）

図版第４　　有明古墳群・横穴群



(1)　３号横穴全景（南東から）

(2)　横穴斜面全景（南から）

1

2

3

4

5

6

7

8

9

出土遺物(1)

10

11

12

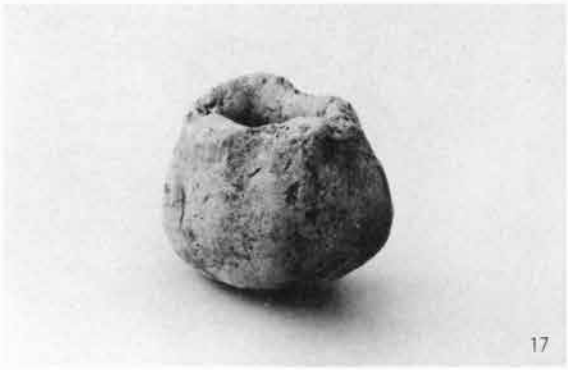
13

14

15

16

出土遺物(2)


17

18

19

20

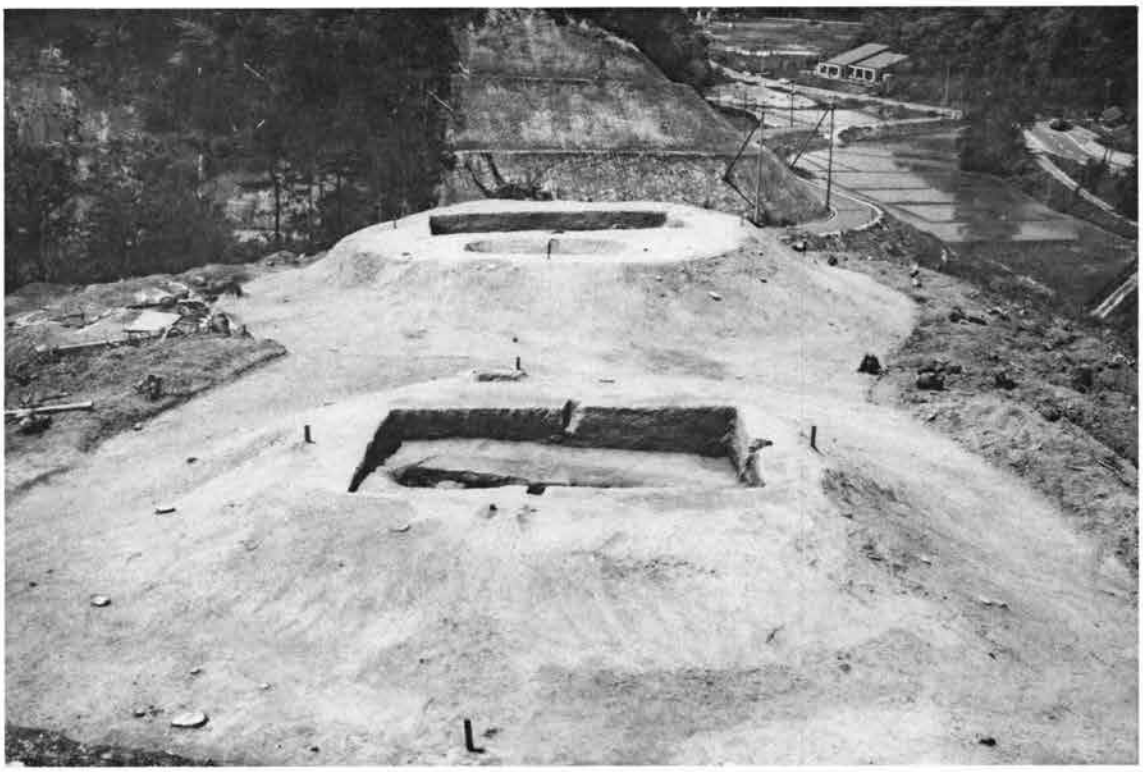
21

22

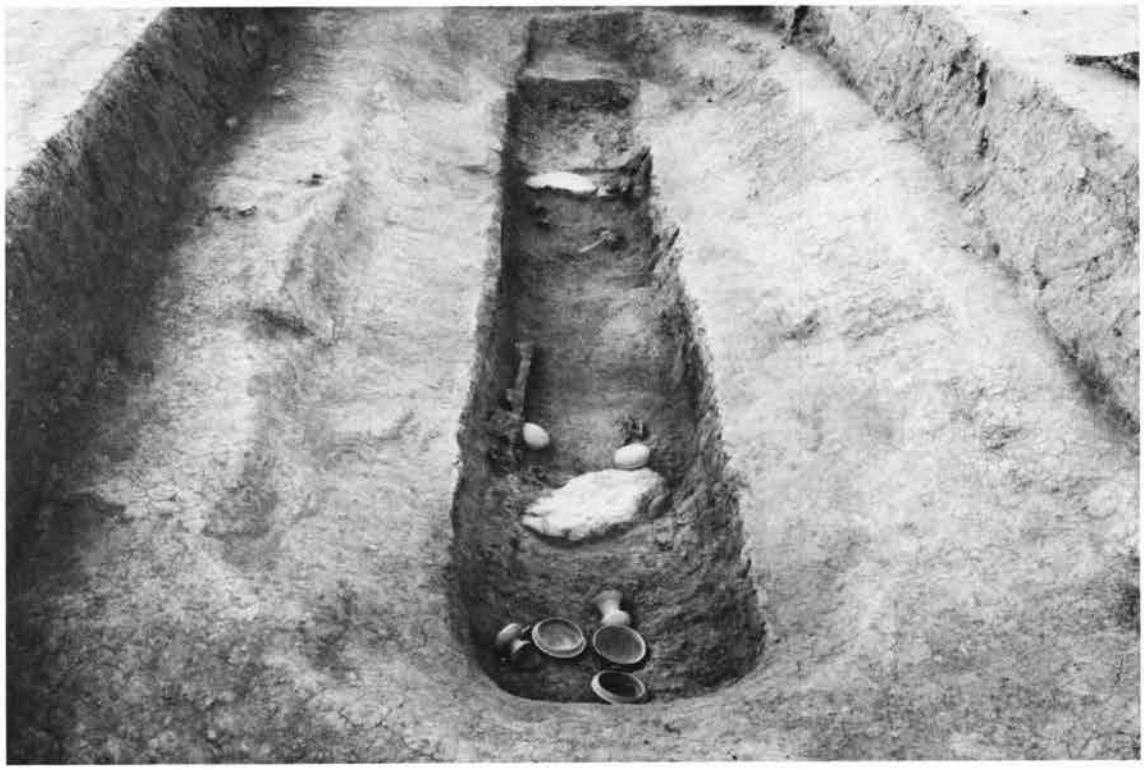
23

出土遺物(3)

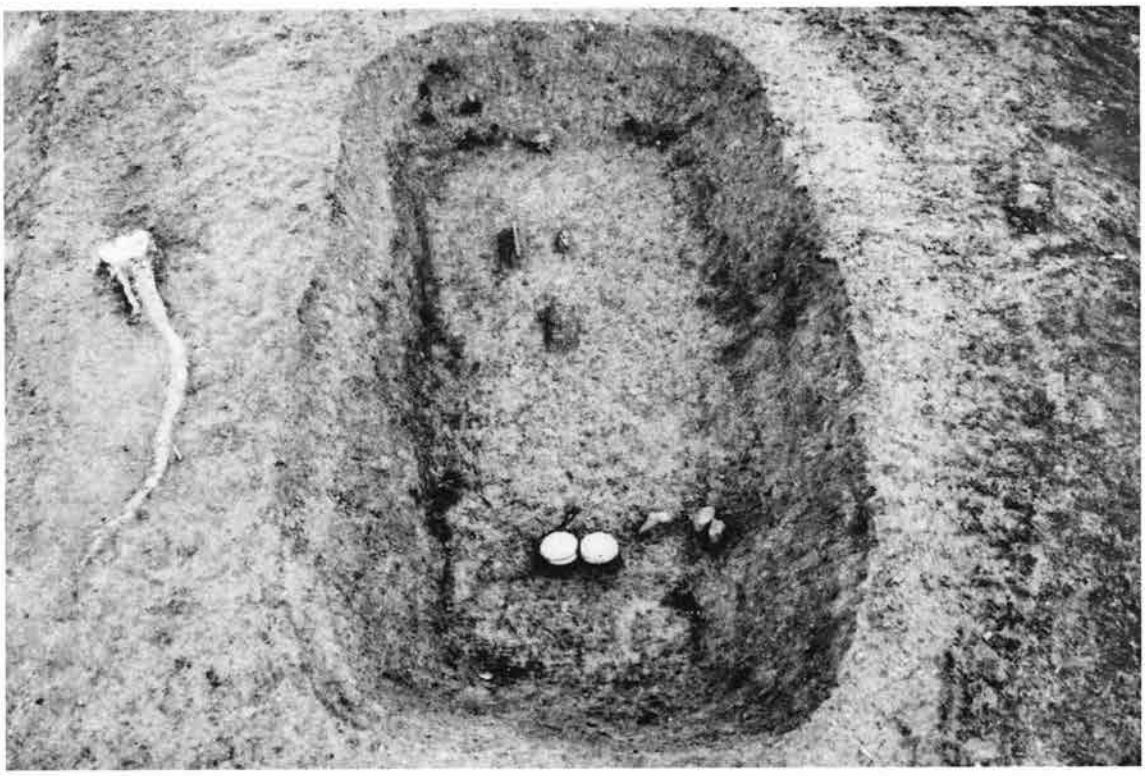
図版第8　桃山古墳群



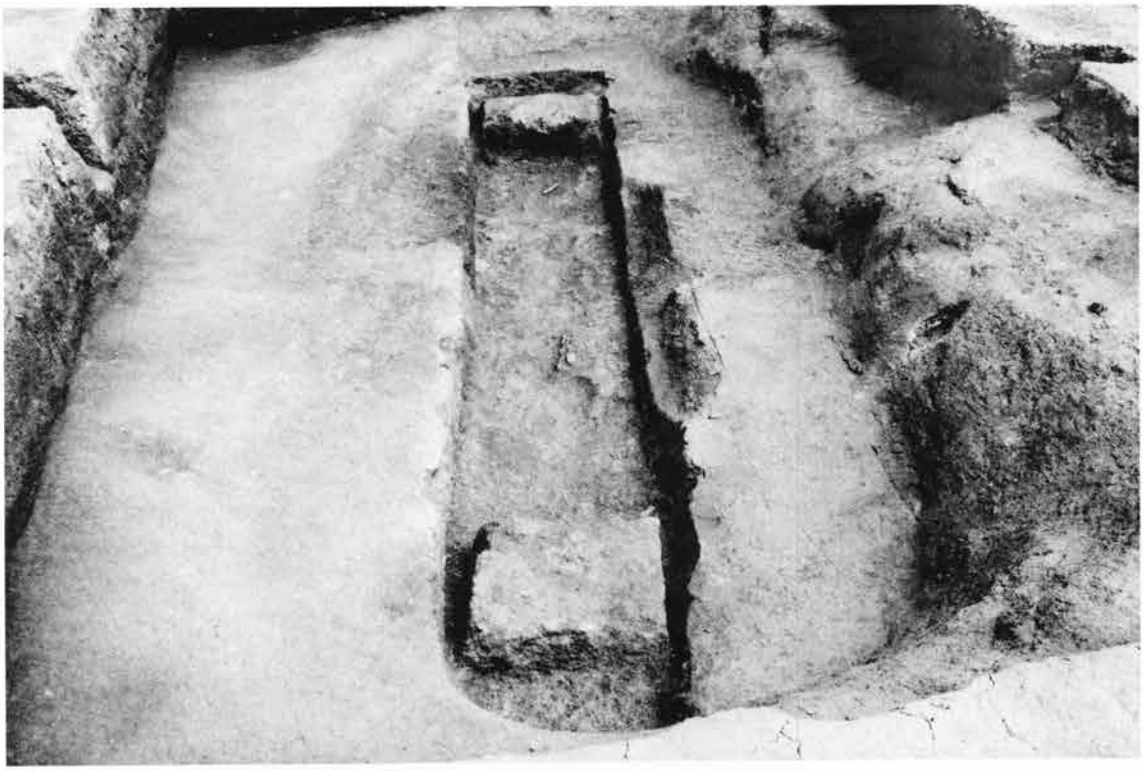
(1)　調査地全景（東から）



(2)　1号墳第1主体部（南から）

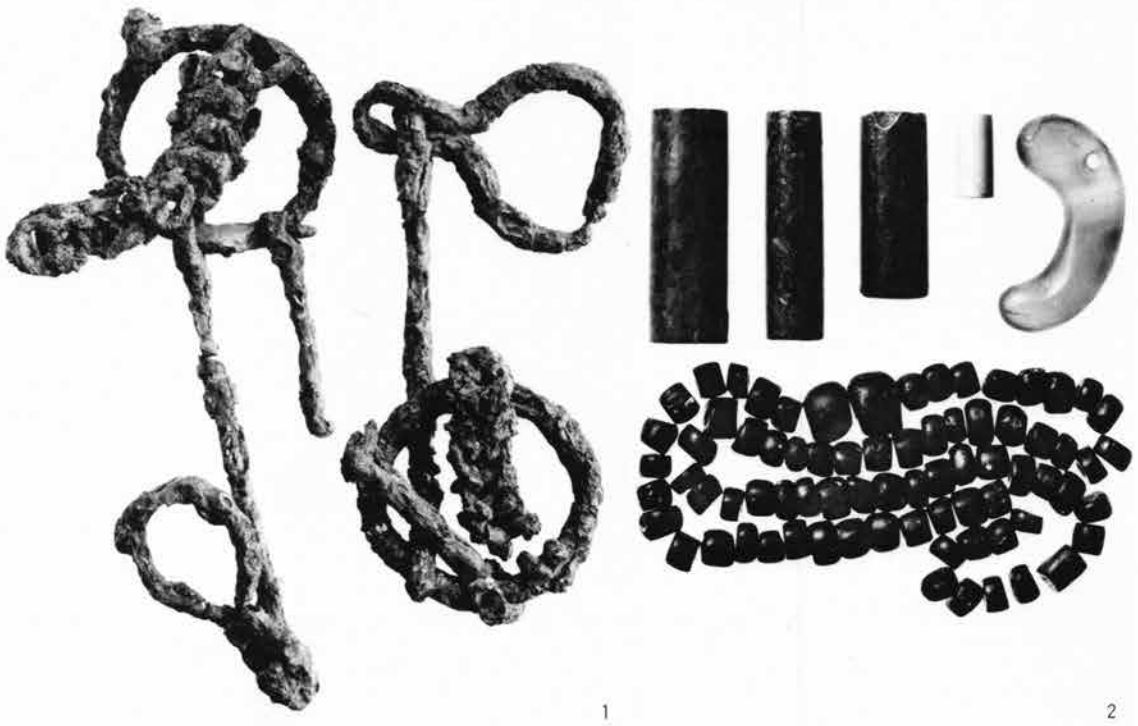


(1)　1号墳第2主体部（南から）



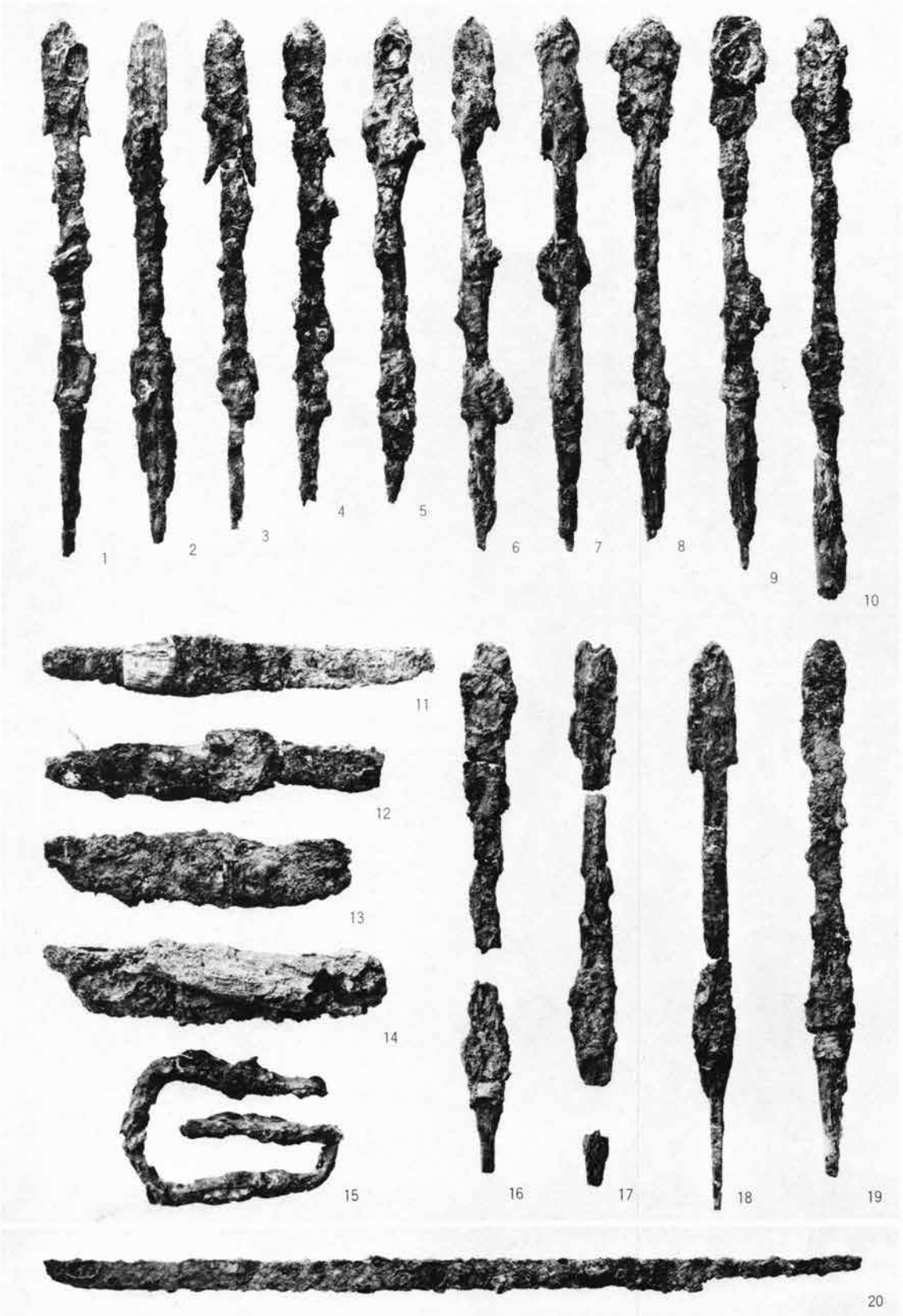
(2)　2号墳主体部（南から）

(1) 調査地遠景（西から）



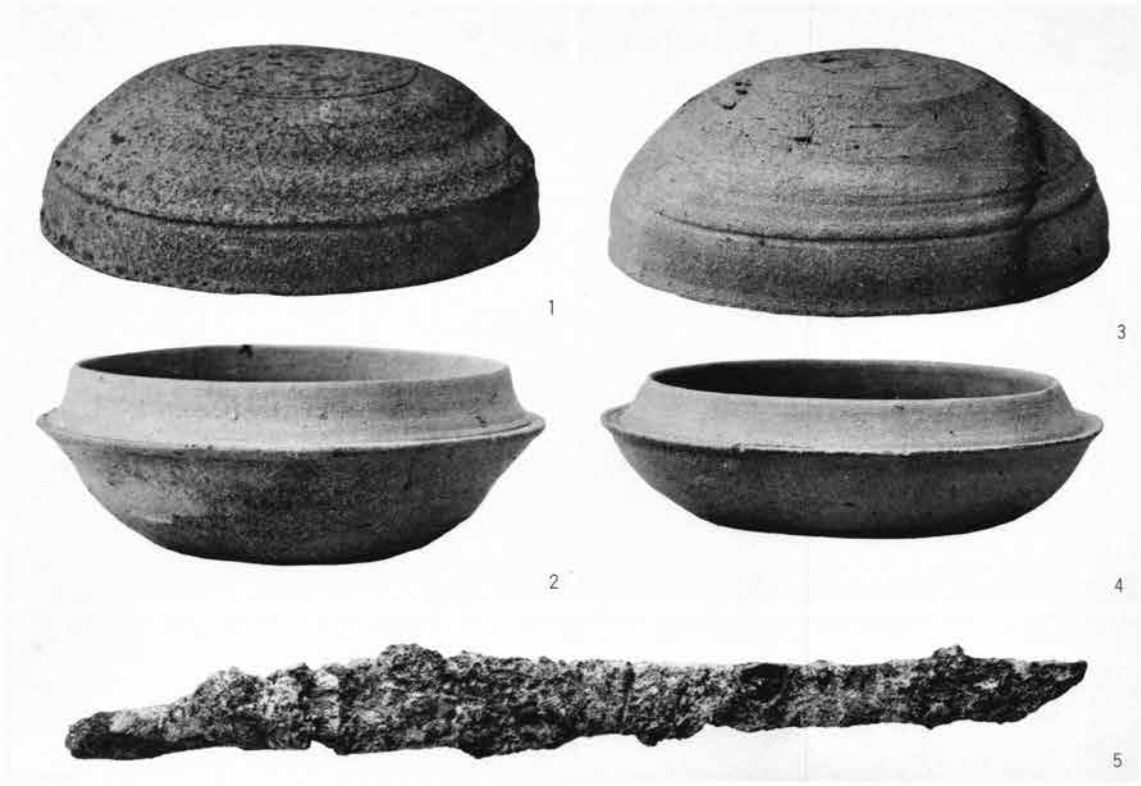
(2) 1号墳第1主体部出土遺物（轡・玉類）

1号墳第1主体部内出土遺物（須恵器）



1号墳第1主体部内出土遺物（鉄製品）

図版第13　桃山古墳群



(1)　1号墳第2主体部内出土遺物

(2)　1号墳第2主体部および2号墳主体部内出土遺物

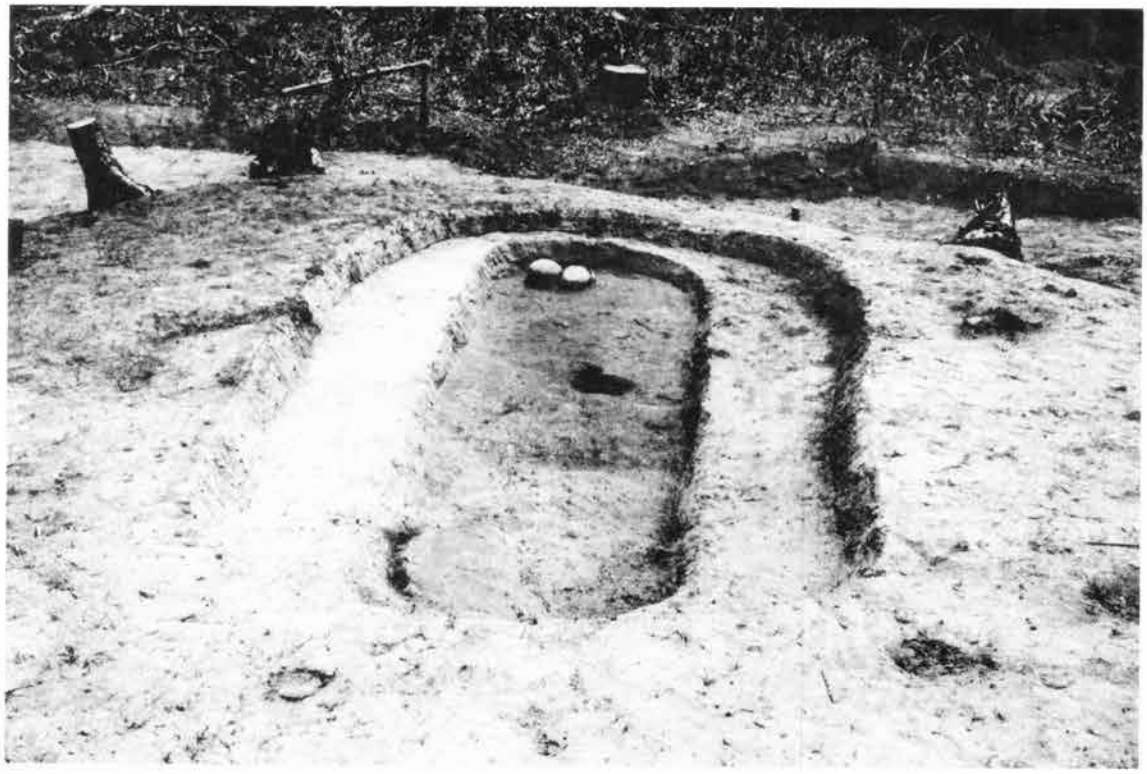
1号墳墳丘出土遺物

図版第15　宮の森古墳群

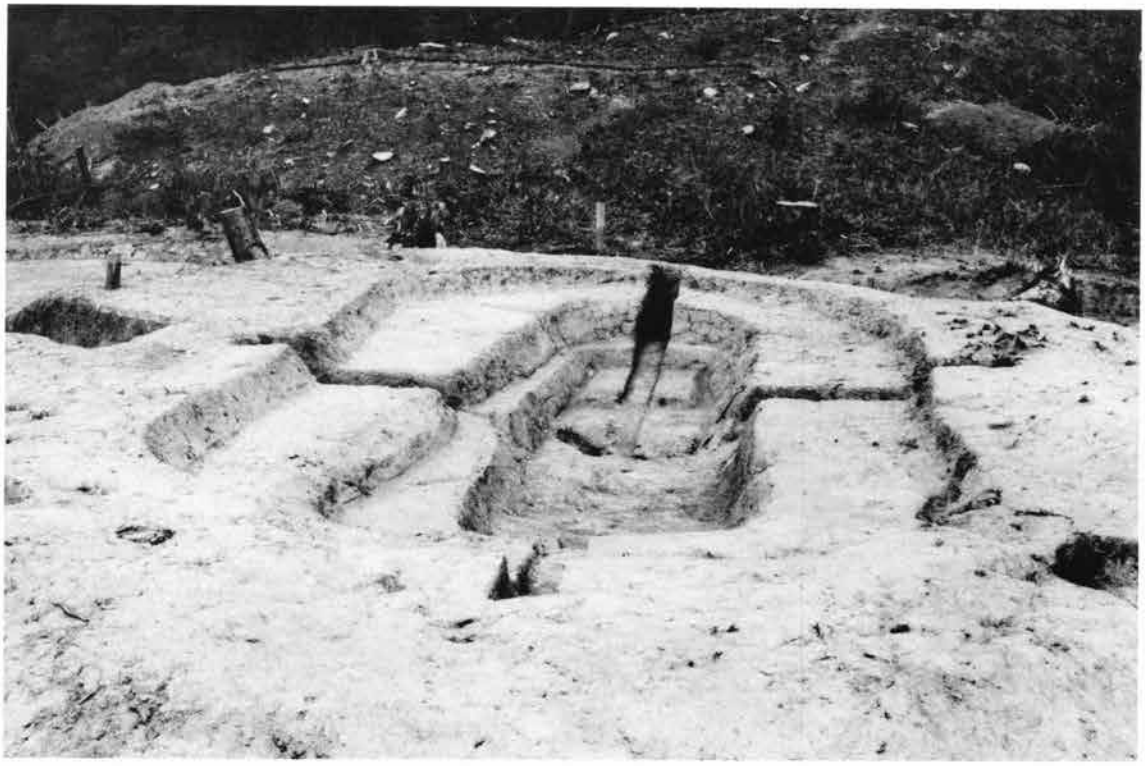
(1)　1・2号墳調査前全景（西から）

(2)　1・2号墳主体部全景（南西から）

図版第16　宮の森古墳群



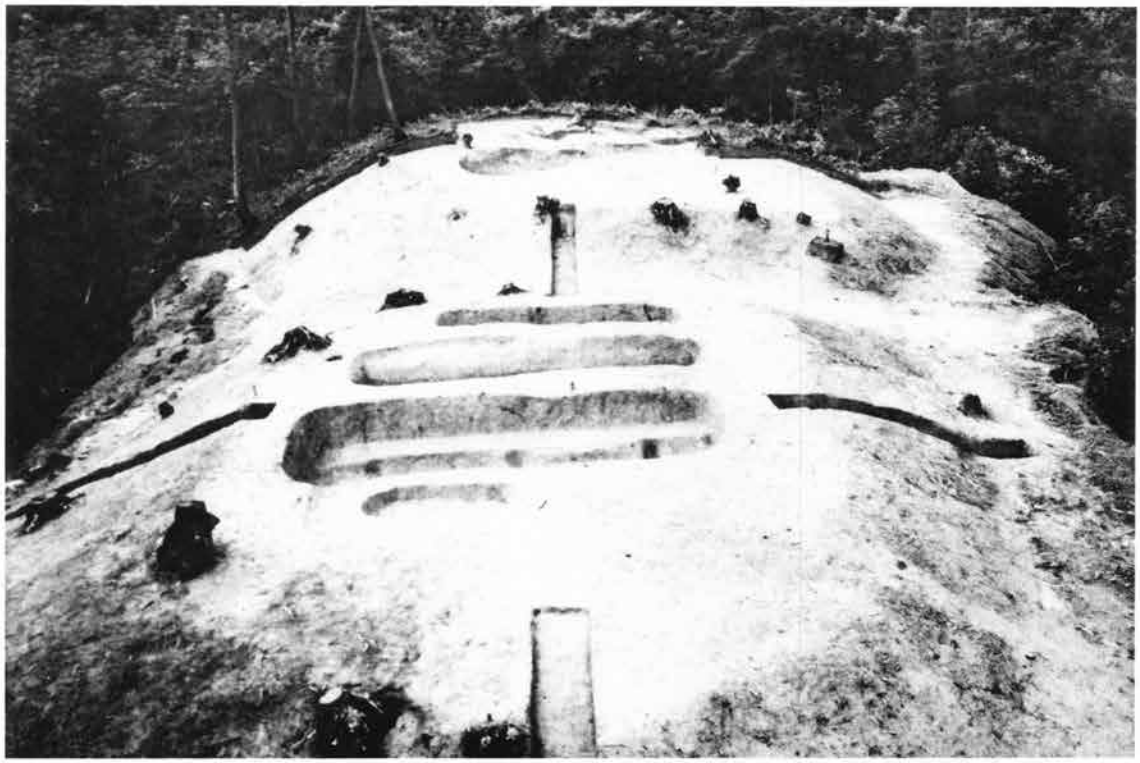
(1)　2号墳第1主体部全景（北西から）



(2)　2号墳第2主体部全景（北西から）

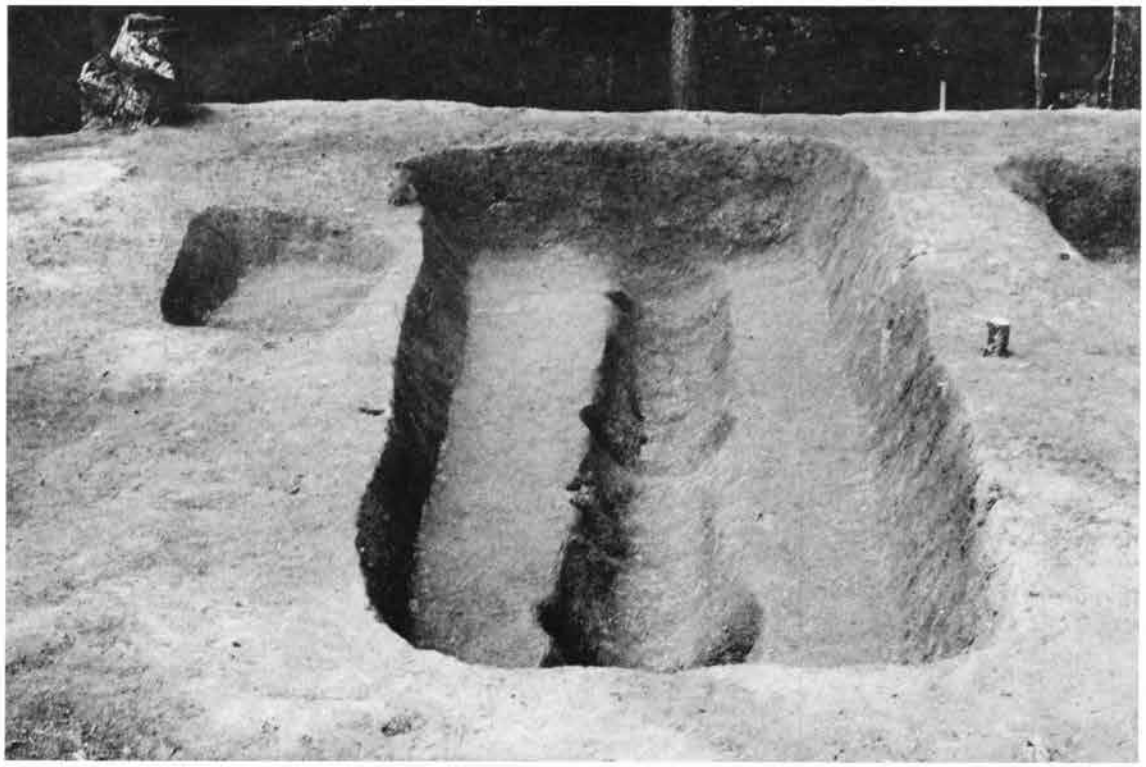
図版第17　宮の森古墳群

(1)　3・4号墳調査前全景（西から）



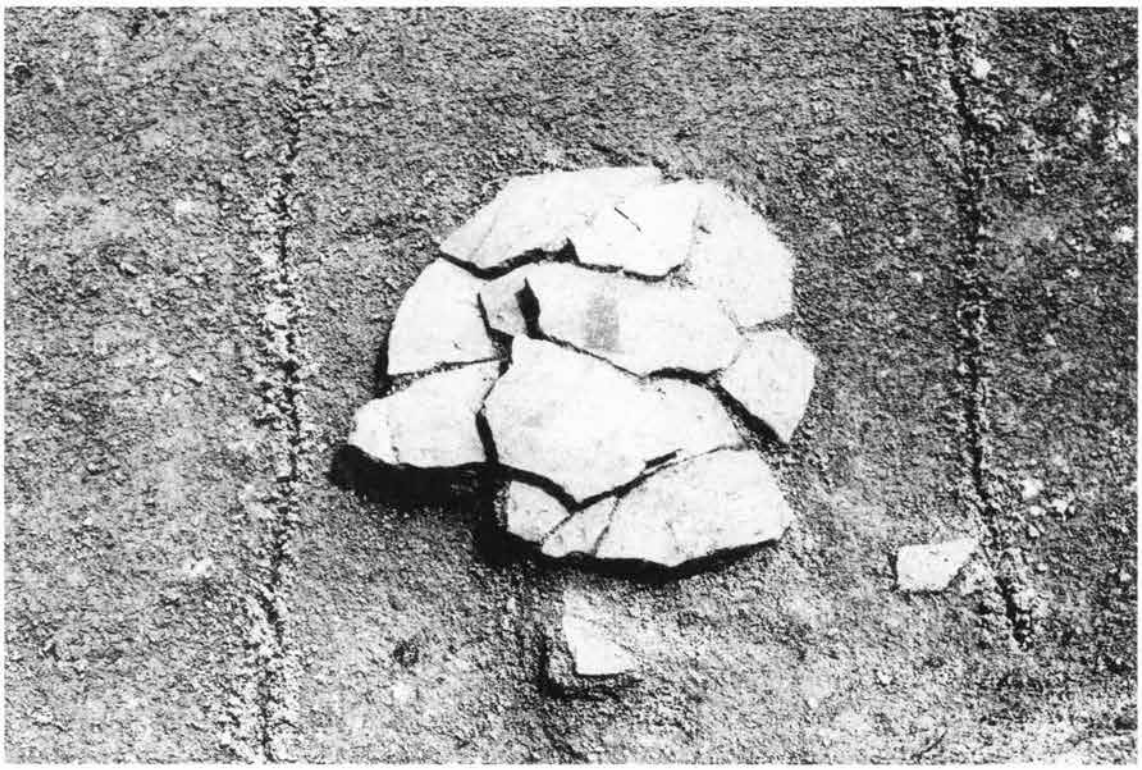
(2)　3・4号墳主体部全景（北西から）

図版第18　宮の森古墳群

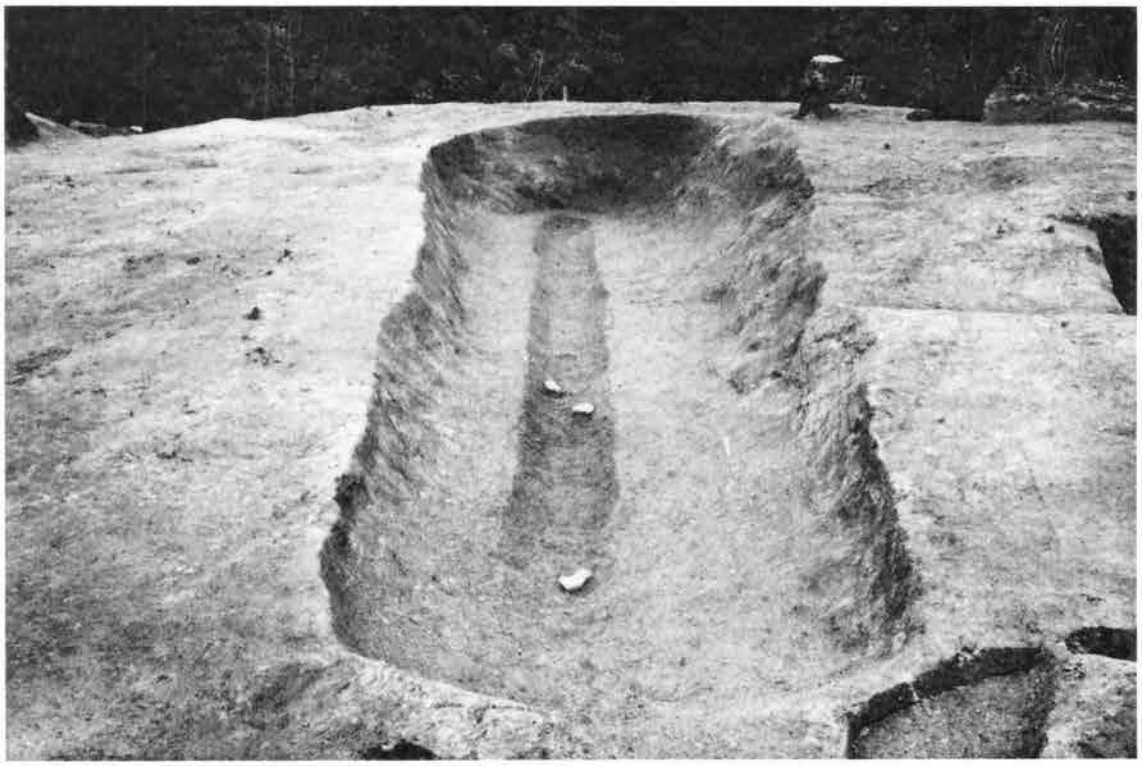


(1)　3号墳第1・2主体部全景（南西から）

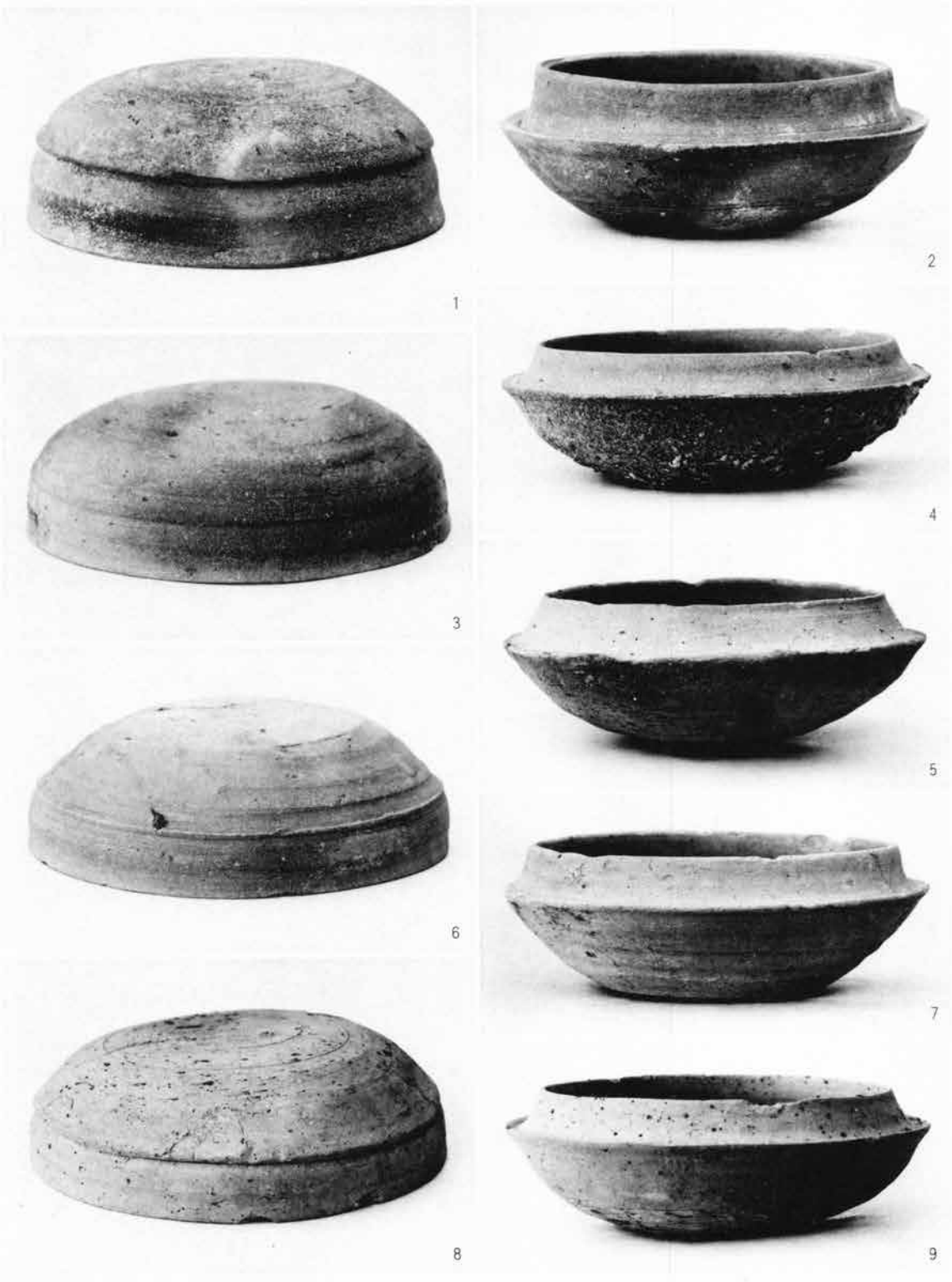
(2)　3号墳第3・4主体部全景（南西から）



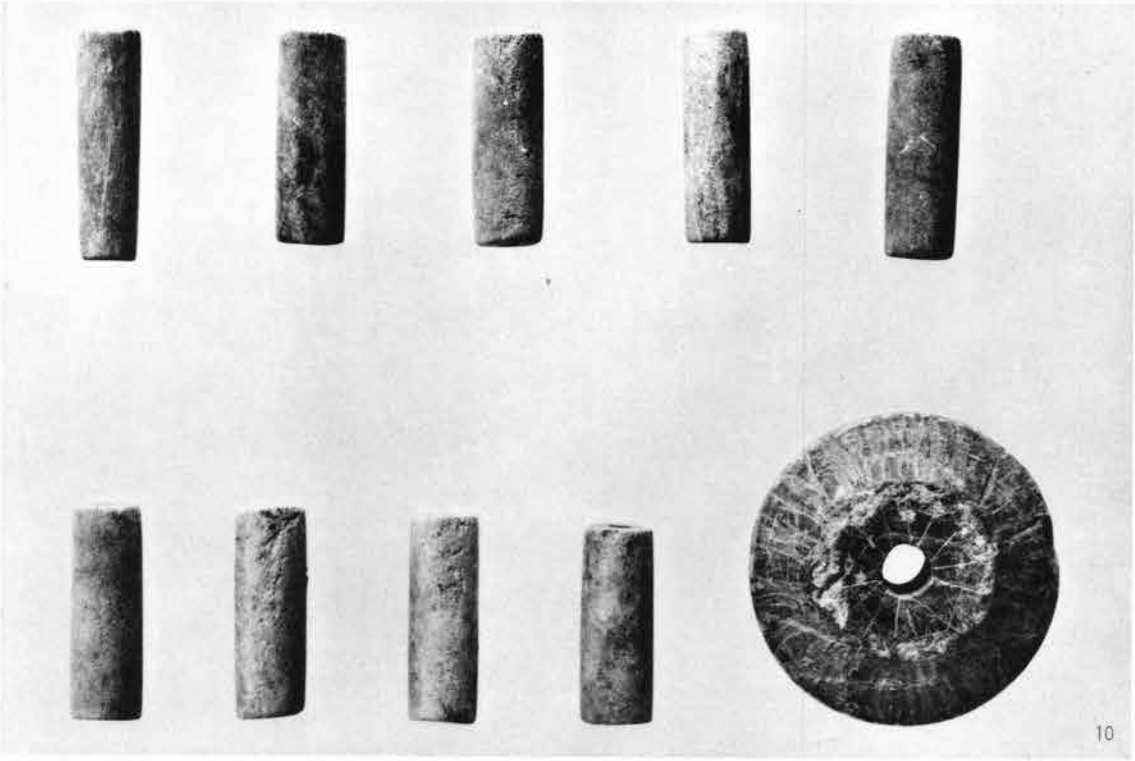
(1)　4号墳主体部遺物出土状況（南から）



(2)　4号墳主体部全景（南から）



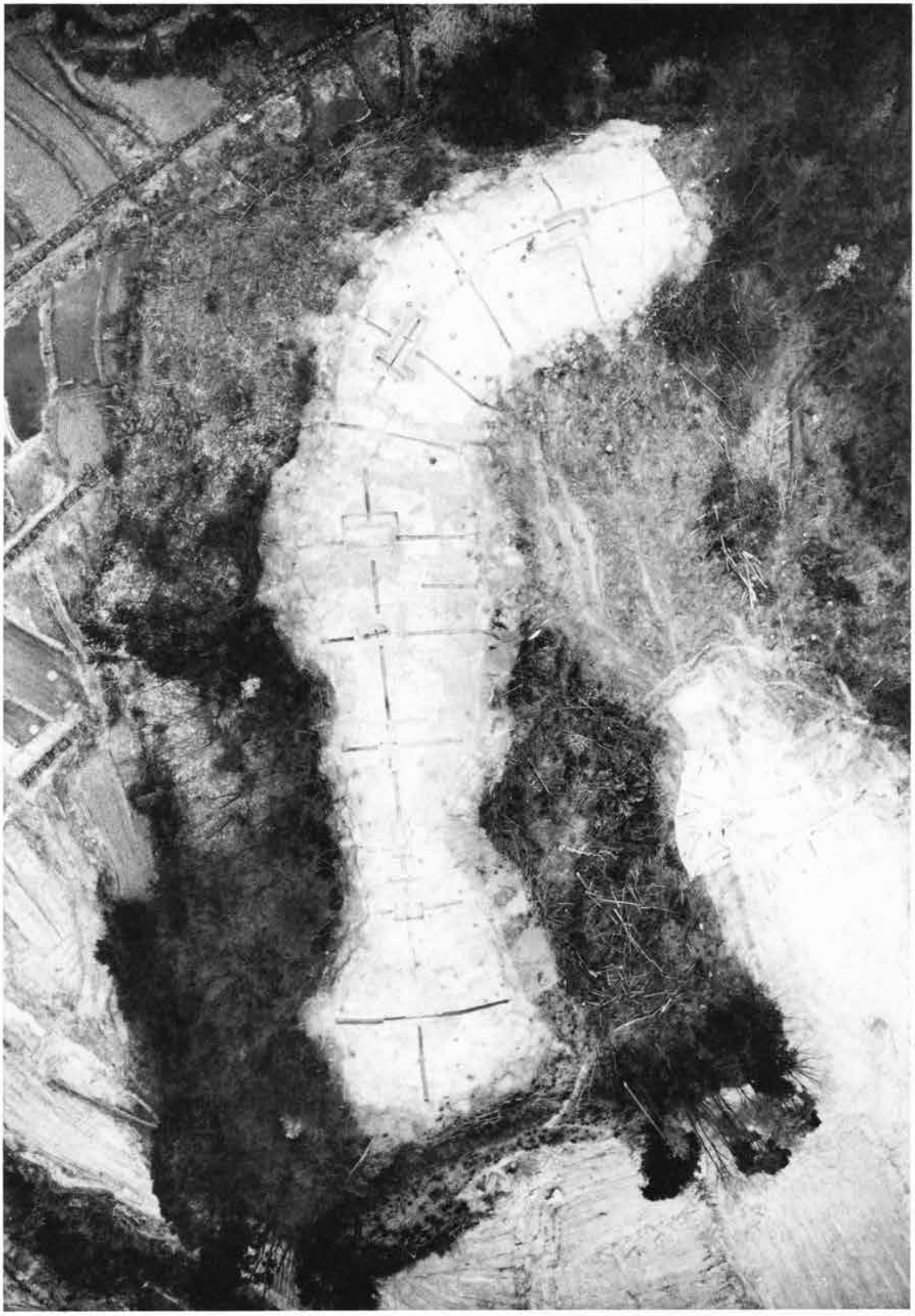
出土遺物(1)



出土遺物(2)

出土遺物(3)

図版第23　ゲンギョウの山古墳群



調査地全景

図版第24　ゲンギョウの山古墳群

(1) 調査地全景（南から）

(2) 1号墳石室全景（南から）

図版第25　ゲンギョウの山古墳群

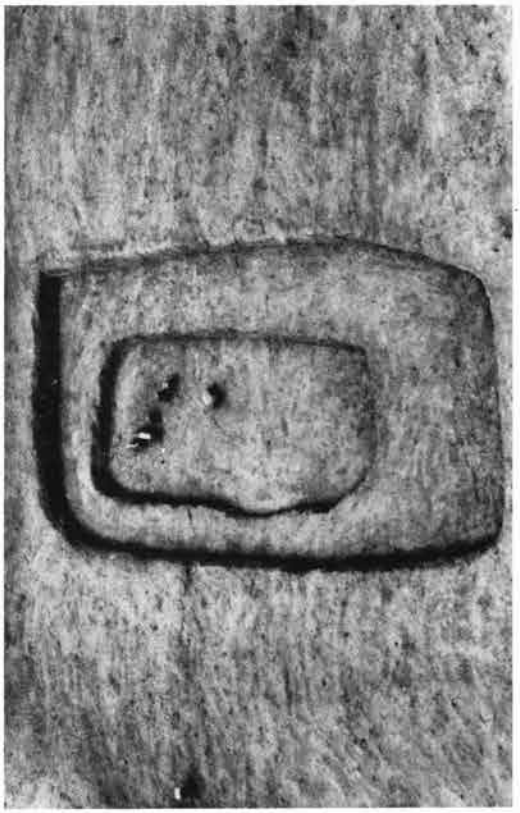
(1)　火葬墓群（北から）

(2)　2号墳主体部（東から）

(3)　3号墳第1主体部（西から）

(4)　3号墳第2主体部（北から）

図版第26　ゲンギョウの山古墳群



(1)　4号墳主体部（南から）

(2)　5号墳主体部（東から）

(3)　6号墳第1・2主体部（東から）

(4)　7号墳第1・2主体部（南から）

図版第27　ゲンギョウの山古墳群

(1)　8号墳第1主体部（東から）

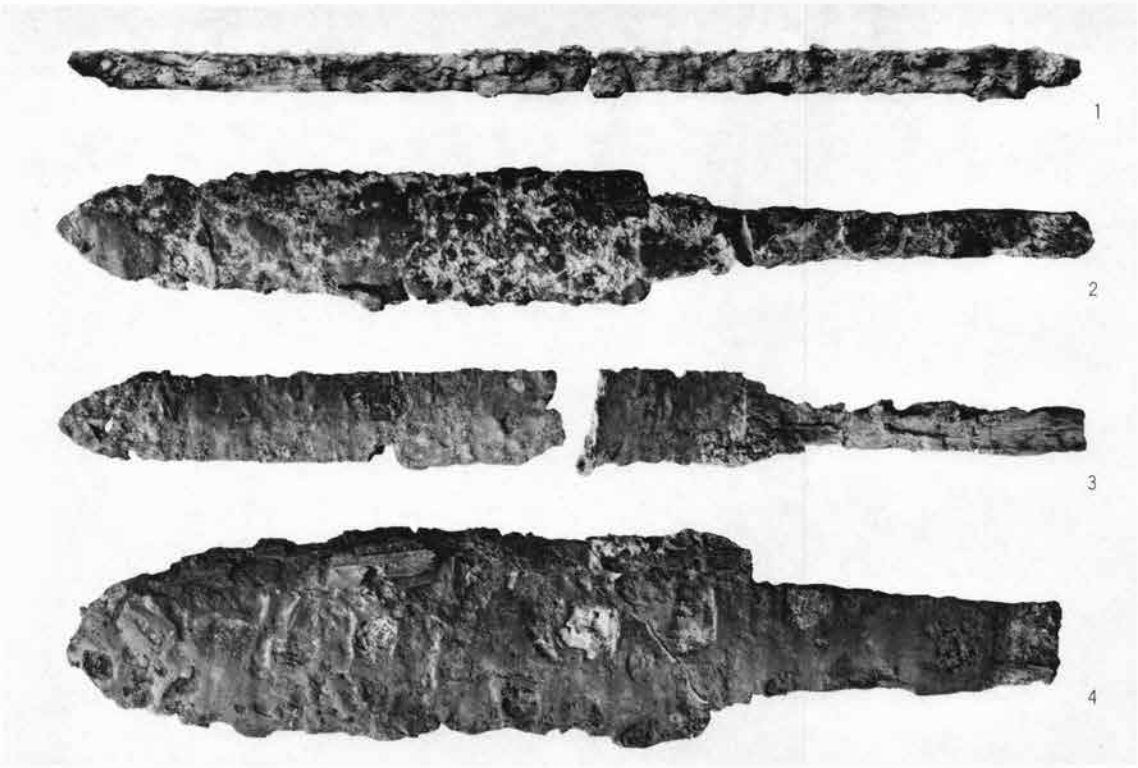
(2)　8号墳第2主体部（東から）

(3)　1号土器棺墓

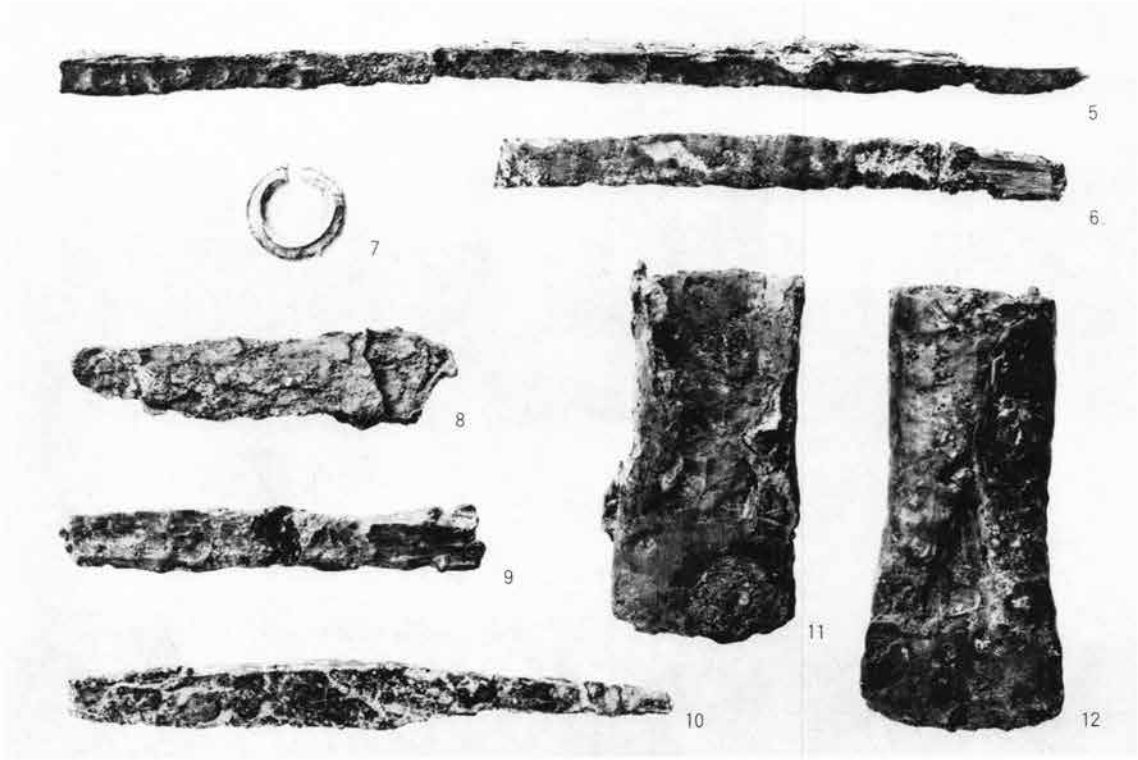
(4)　2号土器棺墓

出土遺物（土師器）

図版第29　ゲンギョウの山古墳群

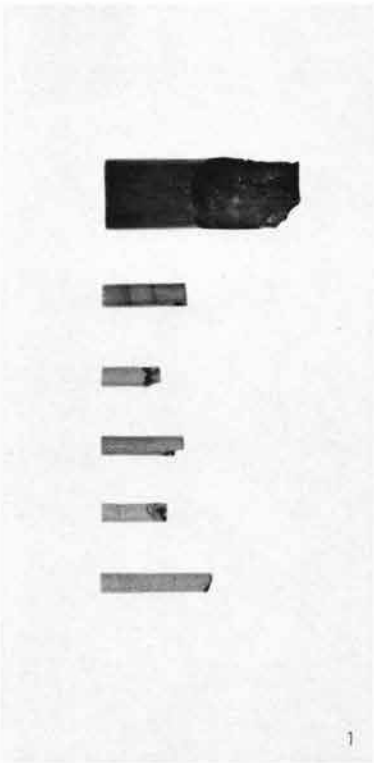


(1)　主体部内出土遺物（鉄製品）



(2)　主体部内出土遺物（鉄製品ほか）

図版第30　ゲンギョウの山古墳群



(1)　出土遺物（玉類・砥石）

(2)　1号土器棺

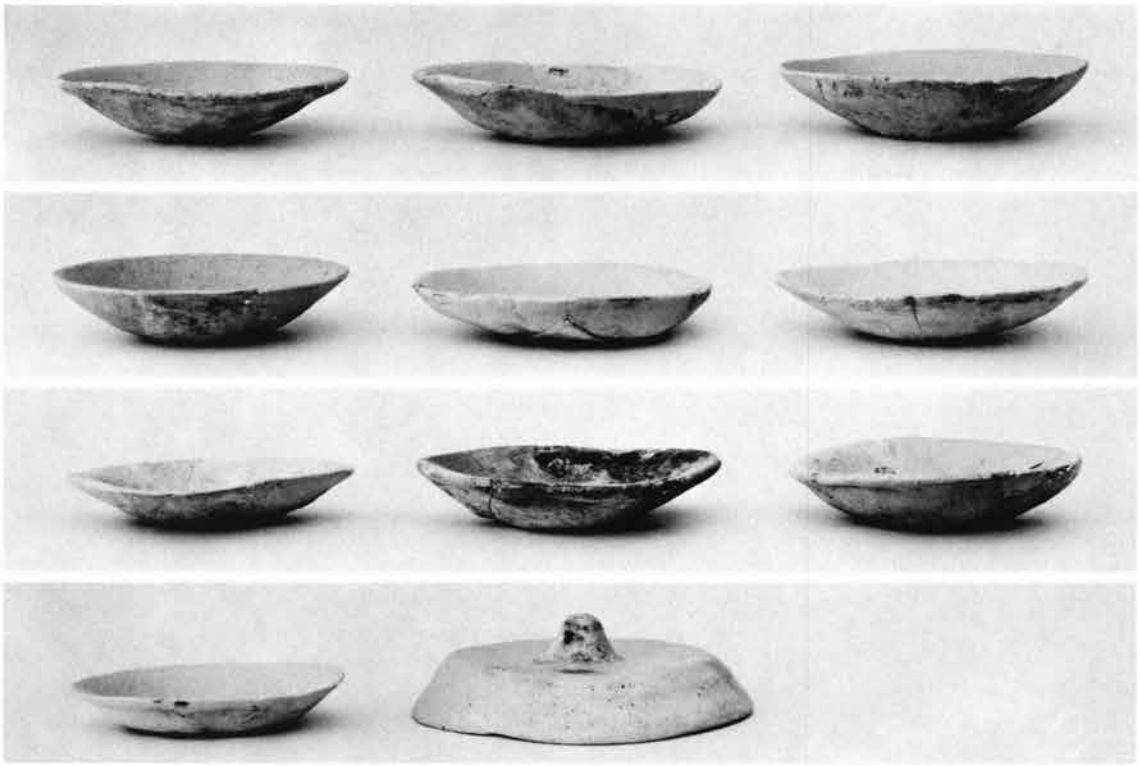
(3)　2号土器棺

図版第31　平山東城館跡

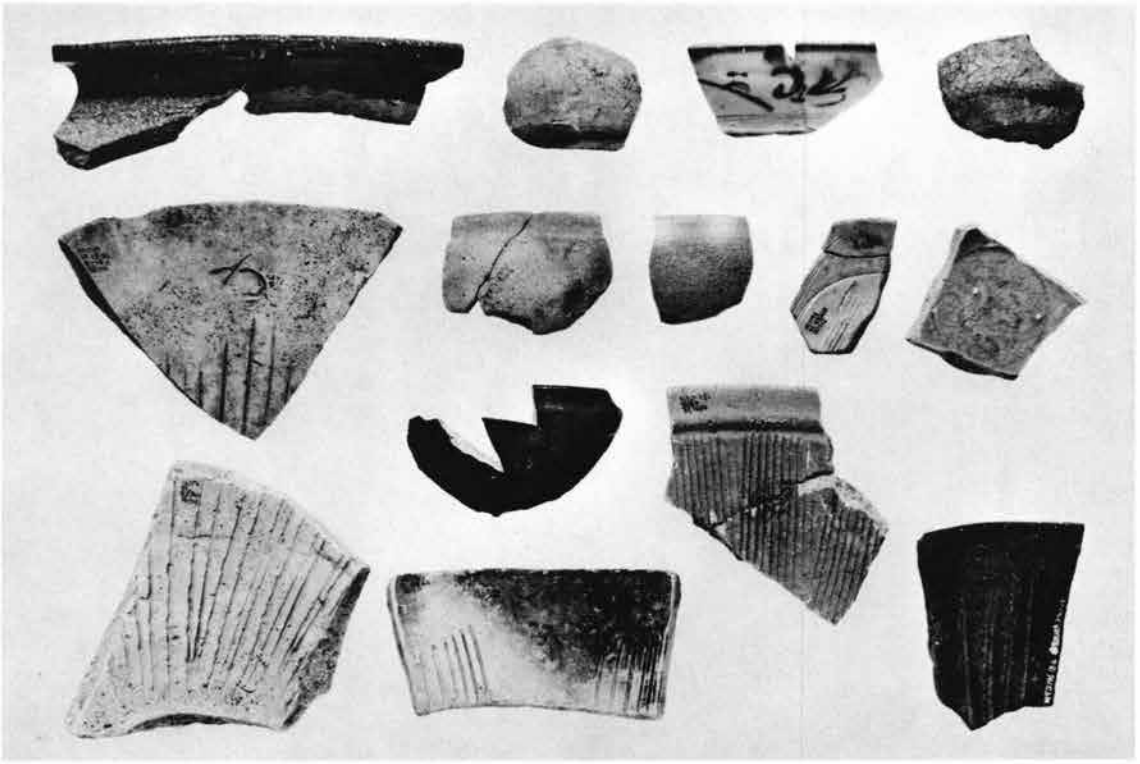
(1) 調査前風景（南から）

(2) 調査地全景（西から）

図版第32　平山東城館跡

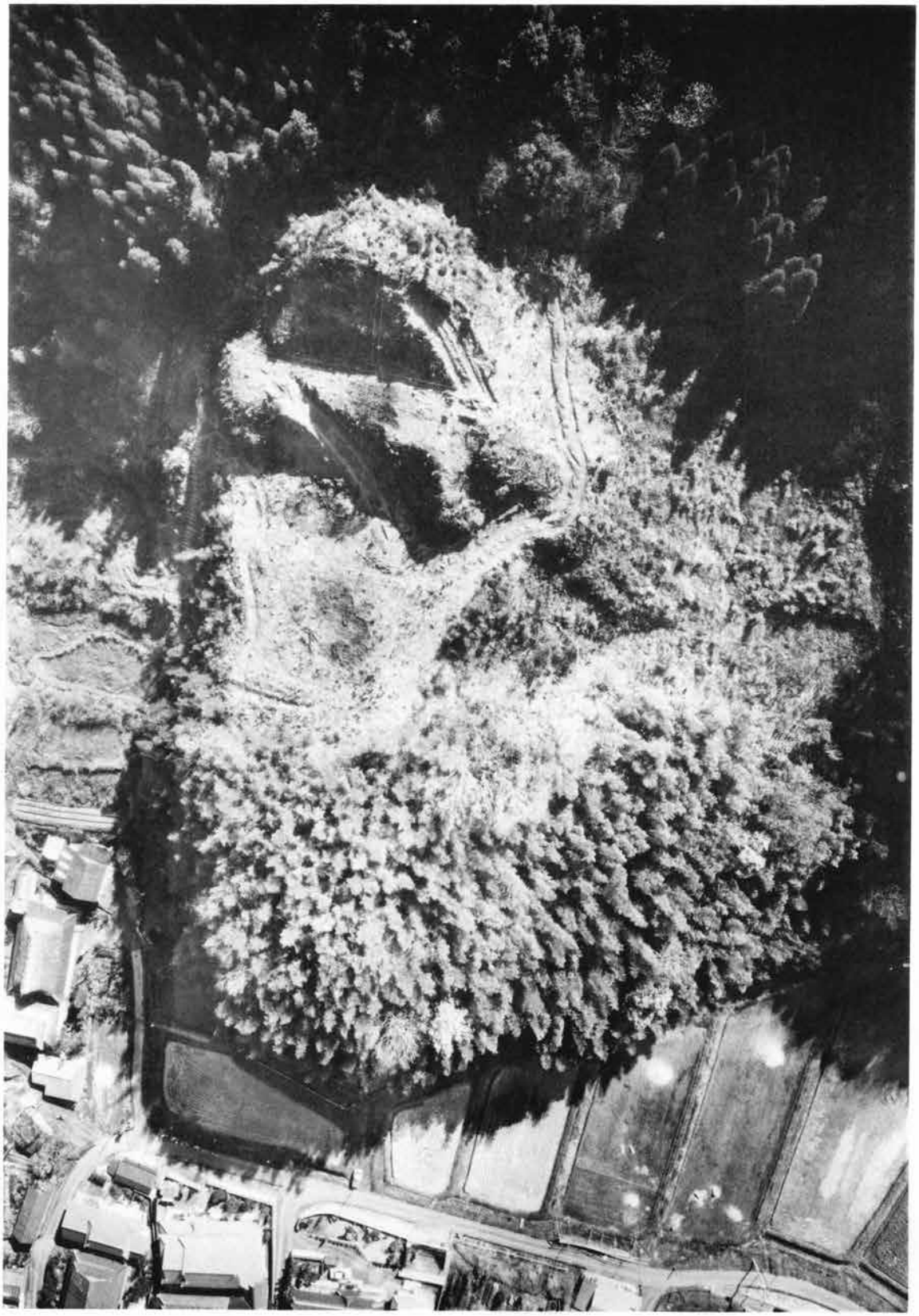


(1) 出土遺物（土師器）



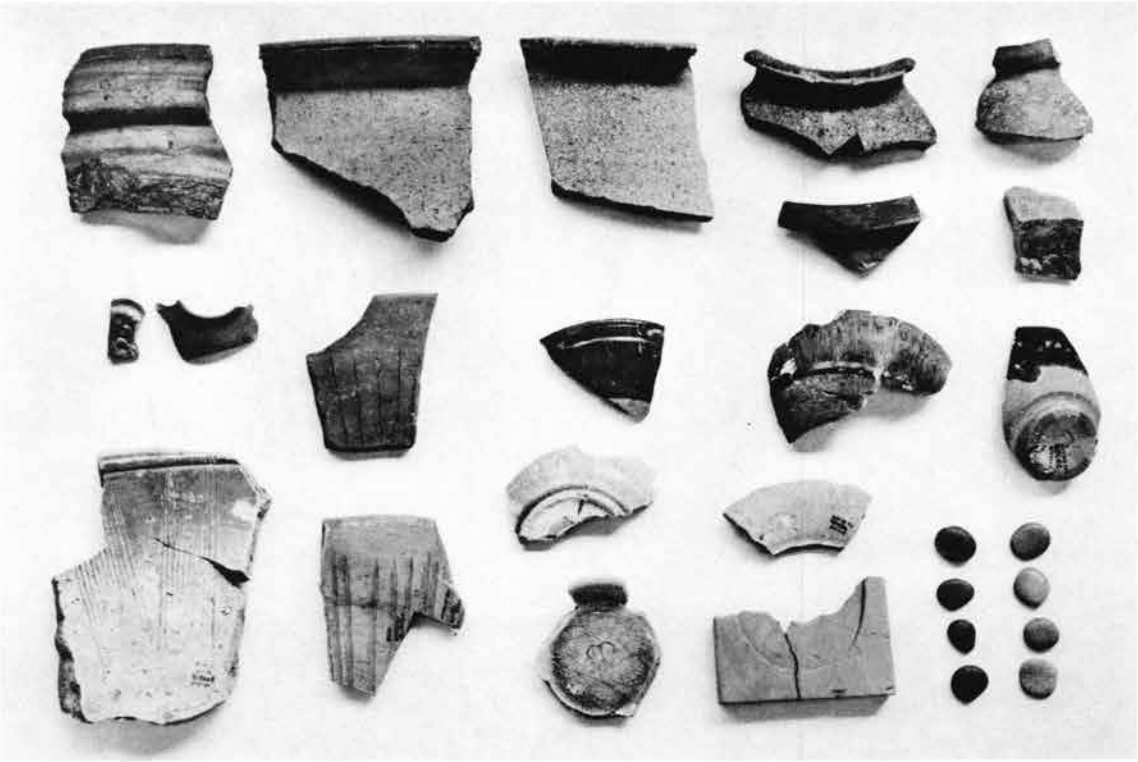
(2) 出土遺物（陶器・磁器等）

図版第33　平山城館跡



調査地全景（航空写真）

(1) 出土遺物（磁器類）

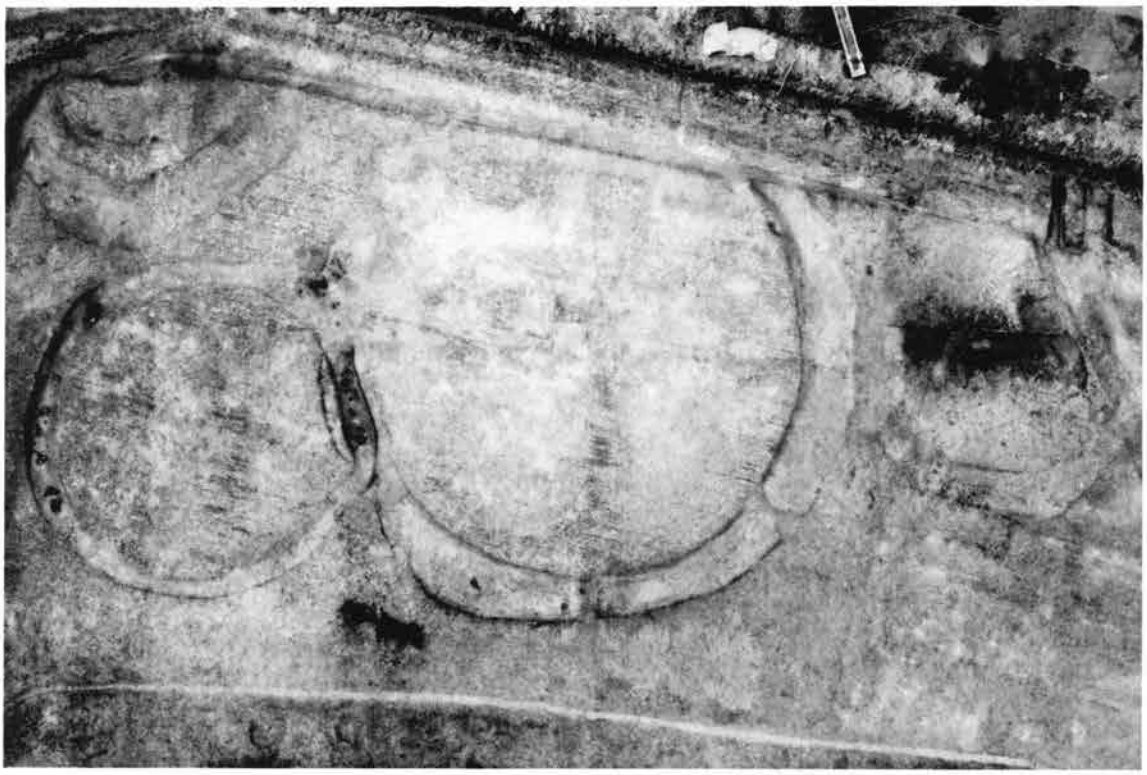


(2) 出土遺物（陶器・石製品等）

図版第35　野崎遺跡

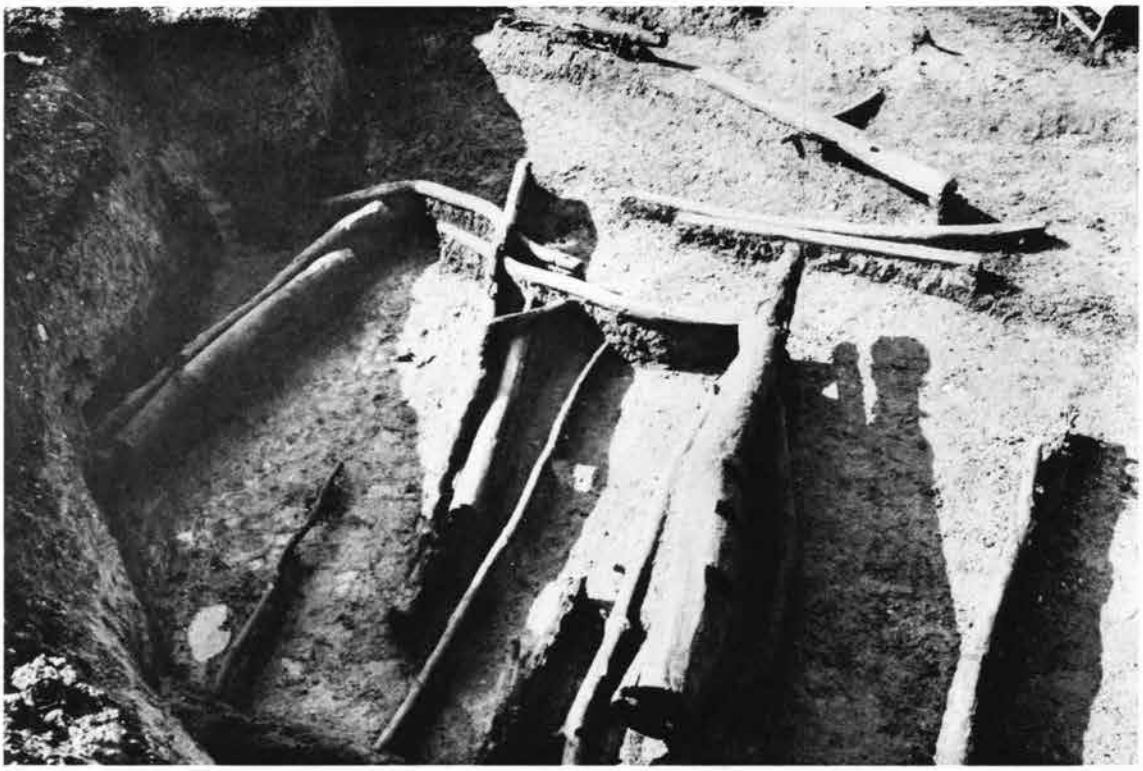
野崎古墳群 航空写真（上が北）

図版第36　野崎遺跡



(1) 野崎1～4号墳（右が北）

(2) 野崎5～6号墳（右が北）



(1) 加工木材検出状況（Bトレンチ）

(2) 軒平瓦検出状況（Cトレンチ）

(1) 久保田遺跡全景（東から）

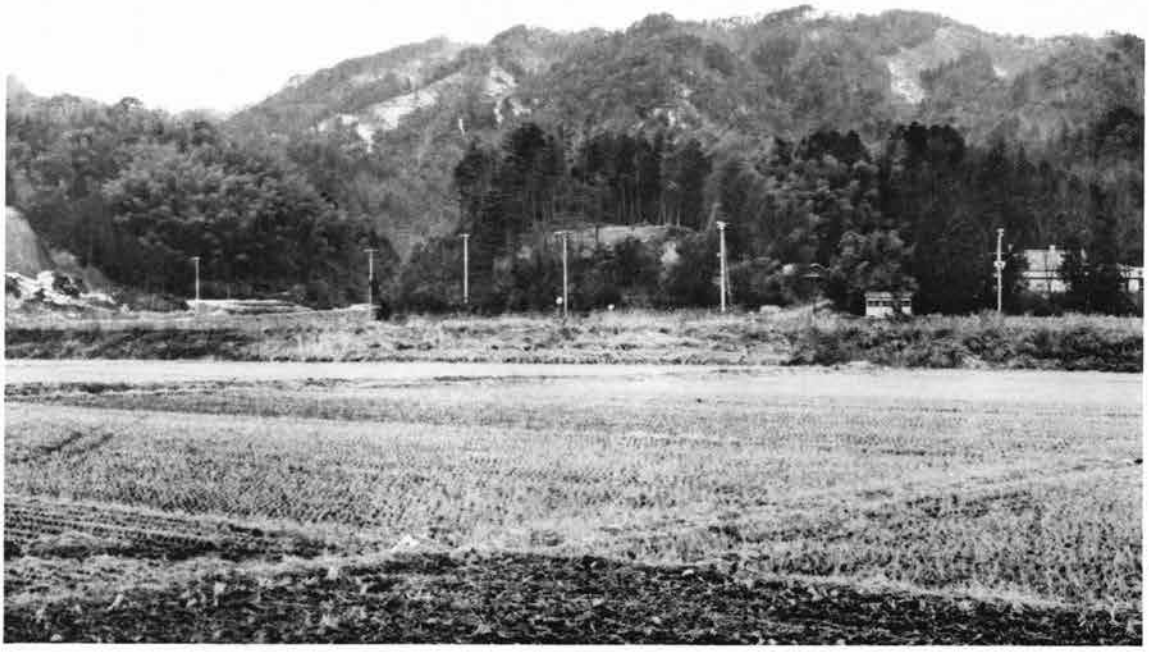
(2) 溝状遺構検出状況（B地点，西から）

図版第39　南稲八妻城跡

(1) Aトレンチ掘削風景（A地点，南から）

(2) Bトレンチ掘削風景（A地点，東から）

(1) 調査地遠景（南東から）



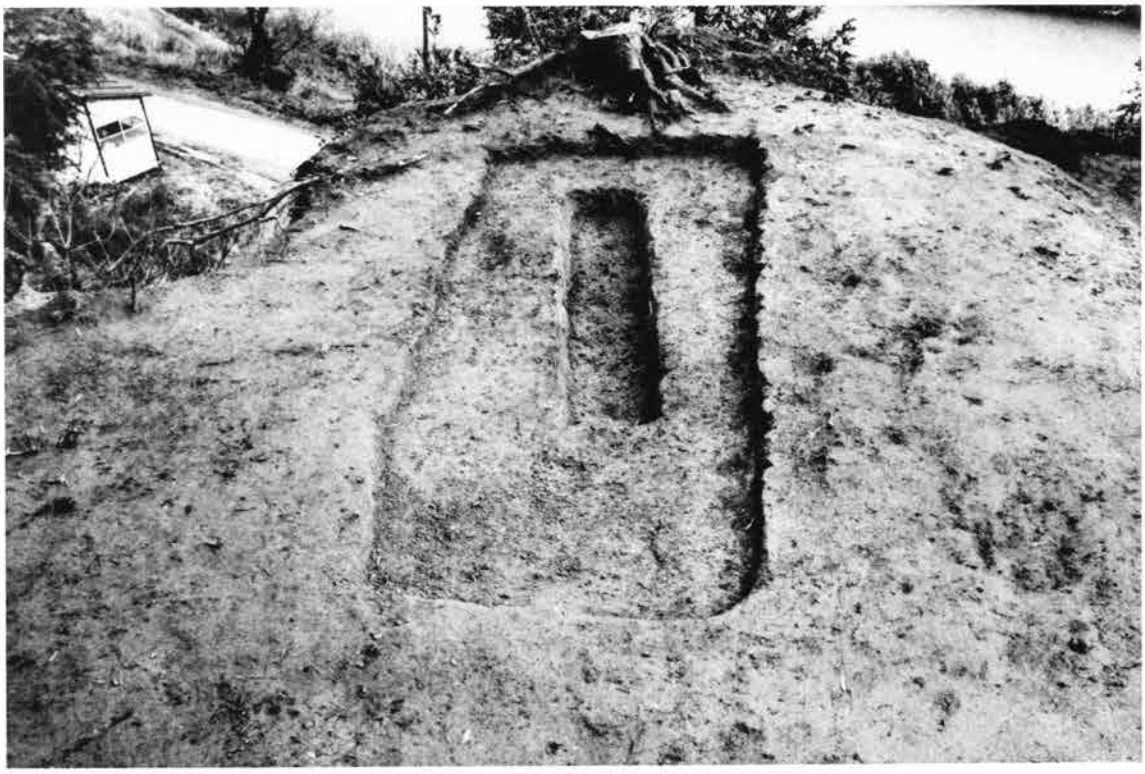
(2) 調査地遠景（東から）

図版第41　西小田古墳群

(1) 調査前全景（西から）

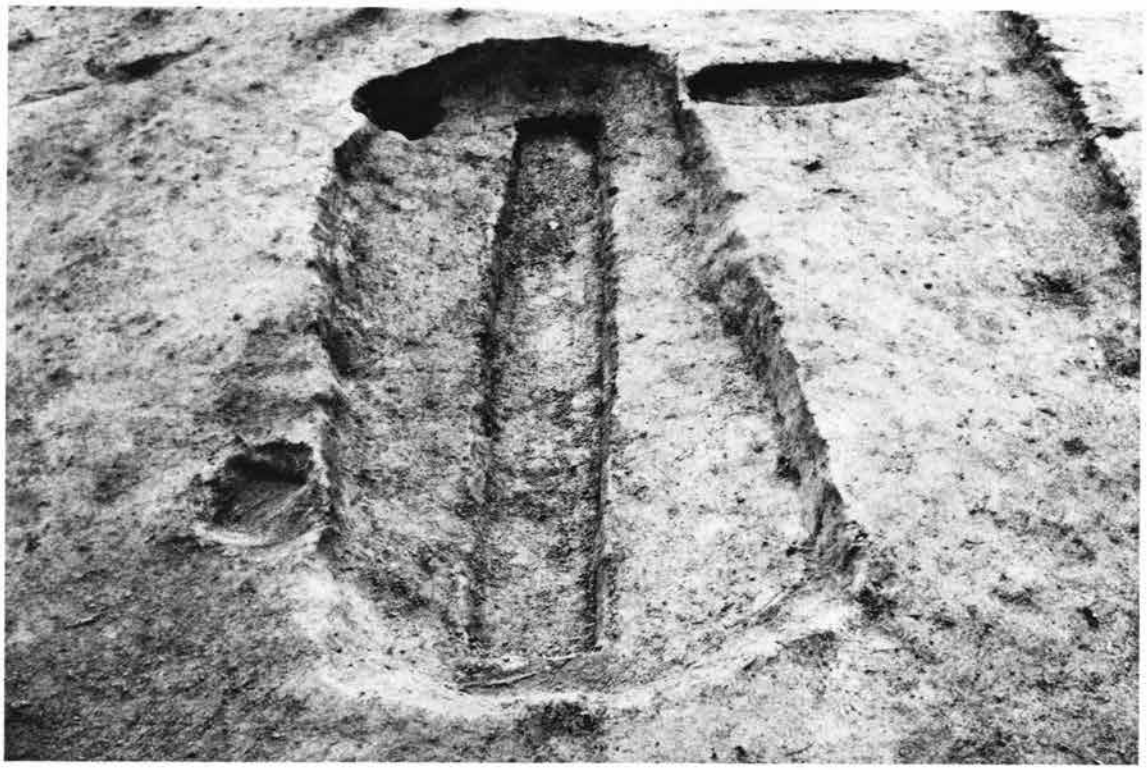
(2) 調査後全景（西から）

(1)　4号墳主体部検出状況（西から）



(2)　4号墳主体部（西から）

(1)　5号墳主体部および周辺遺構検出状況（北から）



(2)　5号墳主体部および周辺遺構（北から）

(1) 瑯出土状況（西から）

(2) 土器棺墓（東から）

(1)　2号墳全景（東から）

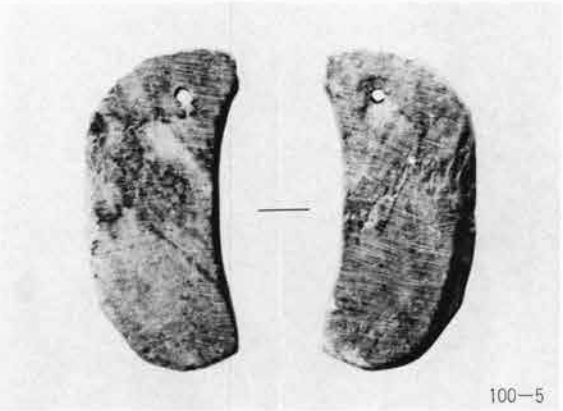
(2)　土器溜りＳＸ01付近（東から）

100—4

100—3

100—2

102—1


100—5

102—2

100—1

105—4

出土遺物（その1）

104−2

104−1

101−1

104−3

101−2

103−2

105−2

105−1

京都府遺跡調査概報 第24冊

昭和62年3月25日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
TEL (075)933-3877（代）

印刷　中西印刷株式会社
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155（代）